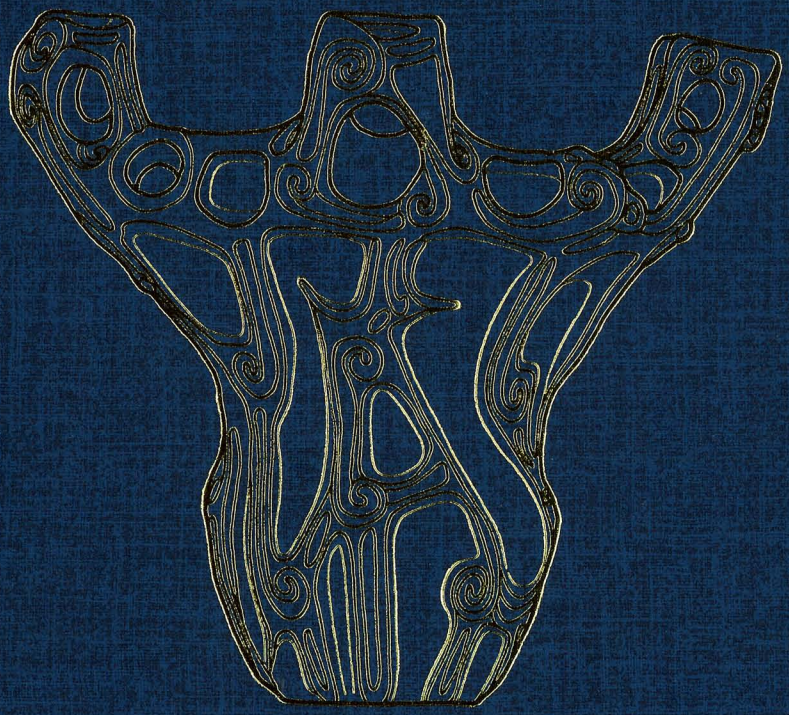
仙台市文化財調査報告書第190集

高柳遺跡

高柳遺跡調査報告書

本文・写真図版編



1995年3月

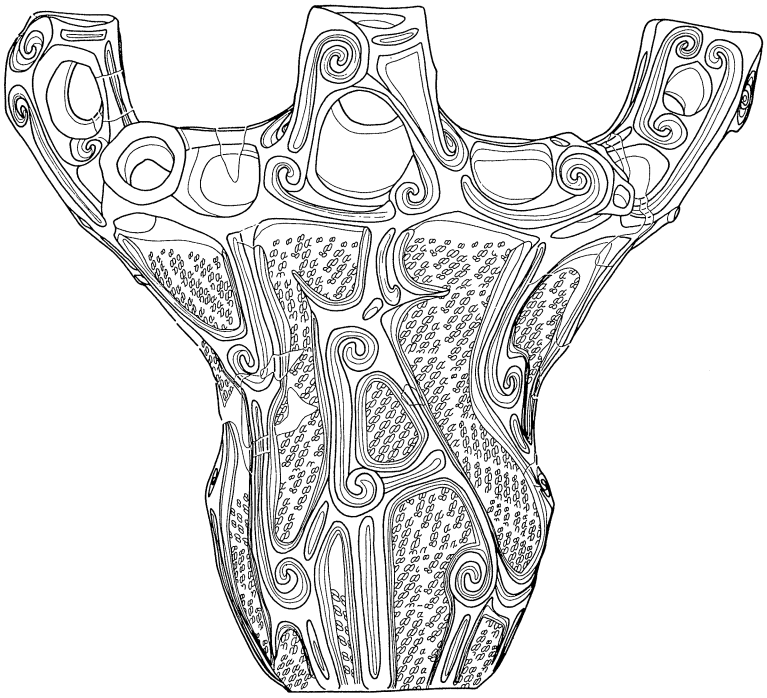
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第190集

高柳遺跡

——高柳遺跡調査報告書——

本文・写真図版編



1995年3月

仙台市教育委員会

序　文

私達の生活している仙台市には、祖先の残した多くの文化財があります。これらの文化財は豊かな自然環境と長い歴史の中で、私達の祖先が創造し育んできたものであり、これを愛護し活用するとともに、後世の子孫に伝えていくことは、私達の重要な責務です。

現在仙台市では、地域経済の発展・交通体系の整備・住宅問題への対応のため各種の事業計画が具体的に進展しています。こうした問題に、広域的に対応できる行政体制の整備として、昭和63年には政令都市となりました。また、こうした体制整備に呼応して各種の地域開発も活発になってまいりました。

仙台市教育委員会は、文化財保護のため、開発にあたっては関係機関と充分な協議を行い調整を図っていますが、やむなく現状のまま保存することができない場合、記録保存のための発掘調査を実施しております。

当高柳遺跡も、縄文時代の遺跡として知られていましたが、高速鉄道の延伸に伴う建設予定地となったため、関係機関と協議の結果、発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、縄文時代中期の人々が使った大量の土器や石器等が発見されました。土器の中には高さが70 cmもある大型の深鉢のものや、小型の浅鉢に台が付くものなど大きさも形も様々なものが出土しています。さらに土器に付けられた文様や突起などはダイナミックで、当時の人々の土器作りに対する情熱とエネルギーが感じられ圧倒される思いがします。また石器も大小様々のものが多量に出土していますが、これもまた緻密で繊細な技術に驚かされます。当時のままで出土した土笛の音色を聞くと、自然と調和しながら生きていた縄文時代の人々の姿が目の前に浮かんできます。このように、高柳遺跡から出土した大量の遺物からこの周辺には大きな集落があったことが想像できます。

今日、市街地においては様々な開発の進展に伴い、年々往時の景観を見ることができなくなりつつあります。こうした状況の中で、本書が私ども祖先の生活の一端を振り返る貴重な資料となることを期待するとともに、多くの方々に活用され、また、文化財に対する愛護精神の高揚に資することができますれば、望外の喜びとするところです。

最後になりましたが、調査の主旨をよくご理解いただき、献身的に発掘調査や整理作業にご協力いただいた多くの方々、ならびに本報告書刊行にあたり、ご指導・ご助言をいただきました方々に対し、心より感謝申し上げます。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教育長　坪　山　　茂

例　言

1．本報告書は、仙台市高速鉄道（仙台市営地下鉄）延伸建設に伴う高柳遺跡（県登録番号19049）の発掘調査報告書であり、既に公表された現地説明会資料等に優先するものである。

2．出土遺物・図面等の整理は、佐藤好一・工藤信一郎が担当し、本報告書の編集及び執筆は佐藤好一が担当した。

3．発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々から指導・助言を賜った。（敬称略）
藤原妃敏・森　幸彦（福島県立博物館）、阿部　明彦（山形県埋蔵文化財センター）、千田　和文（盛岡市教育委員会）

4．縄文土器・剥片石器の実測用写真撮影は、「シン技術コンサル株式会社」に委託した。

5．図版用遺物写真の撮影は、「㈲写真館ともの」の友野　武氏に委託した。

6．花粉分析は、東北大学理学部の守田益宗氏に委託し、付編に収めた。

7．土壌に残存する脂肪の分析は、「株式会社　ズコーシャ総合科学研究所」に委託し、付編に収めた。

8．石器の石材鑑定は東北大学理学部蟹澤聰史氏にお願いした。

9．陶器・磁器については、文化財課　佐藤　洋の教示によった。

10．本調査に関わる遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

凡　例

1．本報告書中の土色は、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

2．遺構等の断面図中の水糸レベルは海抜高を示す。

3．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の2.5万分の１地形図「仙台東北部」・「仙台西北部」である。

4．遺構の略語として便宜的に以下の記号を使用した。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土壙、ＳＩ：竪穴、ＳＮ：配石、ＳＭ：墓壙、ＳＸ：風倒木痕

5．本書における実測図の縮尺は、遺構実測図は1/60、遺構全体図は1/200、遺物実測図のうち、土器・礫石器は1/3、土製品・磨製石器・石製品は1/2、剥片石器は2/3である。

調　査　要　項

1．遺　跡　名　　高柳（たかやなぎ）遺跡（県登録番号19049）

2．遺跡所在地　　仙台市泉区七北田字高柳

3．調査期間　　野外調査　　平成１年５月１日～平成１年10月７日

　　室内調査　　平成２年９月８日～平成７年３月24日

4．調査対象面積　1,211 m²

5．調査面積　　1,600 m²

6．調査主体者　　仙台市教育委員会

7．調査担当　　野外調査　仙台市教育局社会教育部文化財課　　課長　早坂　春一

　　調査第２係　係長　加藤　正範

　　〃　教諭　佐藤　好一

　　〃　主事　工藤信一郎

　　〃　主事　篠原　信彦

　　〃　主事　吉岡　恭平

　　〃　主事　荒井　　格

　　〃　教諭　高倉　祐一

　　〃　主事　渡部　　紀

　　室内調査　仙台市教育局社会教育部文化財課　　課長　早坂　春一（２～３年度）

　　〃　白鳥　良一（４～６年度）

　　調査第１係　係長　佐藤　　隆（　２　年度）

　　〃　〃　加藤　正範（３～４年度）

　　〃　〃　田中　則和（５～６年度）

　　〃　教諭　佐藤　好一（２～６年度）

　　〃　主事　工藤信一郎（２～４年度）

8．野外調査参加者

（調査補助員） 斎藤　彰裕

永野次郎・遠藤栄治・本間春美・高橋喜子・相沢美佐子・加藤久・佐々木匡・熊谷きぬ子・斎藤喜恵子・進藤まき子・高橋照江・高橋明美・小泉幸子・盤井由美子・熊谷友治・橋野恭子・津田則子・山村よし子・熊谷京子・熊谷清・横田正治・奈須野とよみ・佐藤よし子・後藤幸子・浅野千賀・名古圭子・熊谷キミ子・松浦せい子・山本美代子・伊藤礼子・高橋弘子・若生洋子・斎藤慶子・鈴木京子・関内久子・平照子・堀篭幸子・村本茂子・佐藤和夫・渡辺まき子・青木よし子・佐藤啓子・筒井尚美・小野妙子・佐藤　久・菅原玲子・昆イヨ・佐藤悦子・村田りつ子・大友とし子・須藤敬子・柴田啓子・小坂千里・金沢君代・砂金よしえ・田中つや子・村山よし子・石川かつ子・白鳥たか子・菊地房江・塩野礼子・服部珠枝・阿部多津子・須佐文恵・石井多賀子・大平いちみ・萱場せい子・西東雅子・千葉きよ子・阿部聡子・中島いく子・湯浅ます枝・吉川隅子・東海林智子・岩崎由美子・佐々木昇子・近藤裕子

（学生） 水沢教子・日下和寿・近藤悟・古澤勝子・石井浩一・高橋裕之・遠藤千穂・鈴木和佳子・佐藤裕美・須藤真紀子・板橋美佳・鈴木正道・山浦文彦・高杉禅・斎藤康博・村上光哉・相馬和男・大森統子・阿部健太郎・森康子・大槻純子・小林恵理子・工藤幹生・日野範彦・早坂清和・佐々木淳・黒田真治

9．室内調査参加者

（調査補助員）森　剛男

本間春美・高橋喜子・相沢美佐子・熊谷きぬ子・斎藤喜恵子・小泉幸子・山村よし子・奈須野とよみ・佐藤よし子・熊谷キミ子・松浦せい子・高橋弘子・若生洋子・斎藤慶子・堀篭幸子・村本茂子・渡辺まき子・筒井尚美・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・田中つや子・村山よし子・石川かつ子・塩野礼子・東海林智子・澤田敏子・丸屋浪子・田中世津子・南部節子・坂本千坂・大内節子・佐藤紀子・及川のり子・大友とし子・佐藤優子・鈴木広子・菅原さち子・嶋田和子・千田祐美恵・佐々木昇子・菊地銀子・名古圭子・逆瀬尚子・高橋明美・津田則子・結城次郎・熊谷友治・佐々木匡・加藤久・横田正治・佐藤和夫・佐藤久・高橋照江・阿部聡子・白鳥たか子・進藤まき子

（学生）日下和寿・近藤悟・幡野寛治・佐々木淳・遠藤千穂・須藤真紀子・須藤佳代子・三塚里香・阿部健太郎・荒川悦子・和山敦子・西塚真衣子・岡真里子・高橋牧・佐藤浩樹・山口雅子・竹田真帆・大羽美香・菅原操・中西千晶・土屋陽子・寺島学・栗田昌幸・藤原泰弘・古田匠・工藤伸枝・島本香織・管野英幸・薮山田夏江

10．室内調査作業分担

（遺物写真）

友野武（委託）

（遺構図トレース）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子

（縄文土器断面観察）

森　剛男

（縄文土器接合・復元）

森剛男・熊谷きぬ子・奈須野とよみ・佐藤よし子・熊谷キミ子・斎藤慶子・村山よし子・熊谷きぬ子・斎藤喜恵子・石川かつ子・村本茂子・堀篭幸子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・嶋田和子

（縄文土器展開図用拓本・縄文土器拓本）

森剛男・熊谷きぬ子・奈須野とよみ・佐藤よし子・熊谷キミ子・斎藤慶子・村山よし子・熊谷きぬ子・斎藤喜恵子

（縄文土器展開図作成）

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

（縄文土器実測用写真撮影）

シン技術コンサル株式会社（委託）

（縄文土器実測図作成）

本間春美・石川かつ子・村本茂子・堀篭幸子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・嶋田和子

（縄文土器トレース）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・相沢美佐子・松浦せい子・澤田敏子・佐藤紀子・佐藤優子・菅原さち子・嶋田和子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

（縄文土器観察表作成）

石川かつ子・村本茂子・堀篭幸子

（剝片石器実測用写真撮影）

シン技術コンサル株式会社（委託）

（剝片石器実測図作成）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子・鈴木広子・千田祐美恵

（剝片石器トレース）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・鈴木広子・高橋喜子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子

（礫石器実測図作成）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子・山村よし子・筒井尚美・田中つや子・塩野礼子・田中世津子・大内節子

（礫石器トレース）

本間春美・若生洋子・高橋弘子・東海林智子・小泉幸子・坂本千枝・及川のり子・昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子・山村よし子・筒井尚美・田中つや子・塩野礼子・田中世津子・大内節子・鈴木広子・千田祐美恵

（土・石製品実測）

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

（土・石製品トレース）

昆イヨ・佐藤悦子・須藤敬子・南部節子・渡辺まき子

本　文　目　次

序文・例言・凡例・調査要項

第Ⅰ章　調査に至る経過……1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　地理的位置と自然環境……3
　第２節　歴史的環境……6
　　1　旧石器時代……6
　　2　縄文時代……6
　　3　弥生時代……7
　　4　古墳～奈良・平安時代……7
　　5　中世……8
　　6　近世……10

第Ⅲ章　調査の経過と方法……13
　第１節　野外調査の経過と方法……13
　　1　野外調査の経過……13
　　2　野外調査の方法……14
　　A　調査区の設定
　　B　調査の方法
　第２節　室内調査の経過と方法……16
　　1　室内調査の計画と経過……16
　　2　室内調査の方法……16
　　A　遺物の洗浄
　　B　遺物の記名
　　C　遺物の接合
　　D　遺物の登録
　　E　遺物の実測
　　F　遺物のトレース
　　G　遺物の計測
　　H　遺物の重量計測
　　I　石材の鑑定

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物……29
　第１節　基本層位……29

第２節　配石遺構（ＳＮ）……30
第３節　土壙（ＳＫ）……30
第４節　遺物包含層……39
1　遺物出土状況……39
2　包含層出土の遺物……40
A　縄文土器……40
（1）第Ⅰ群土器……40
（2）第Ⅱ群土器……40
［土器の観察］……40
1．成形技法
2．文様
3．文様帯の構成
4．口縁部文様帯
5．胴部文様帯
6．口縁部文様帯と胴部文様帯との関係
7．器種
8．器形
［土器の分類］……61
B　土製品……113
（1）土　偶
（2）土　笛
（3）土製腕輪
（4）土製耳飾
（5）土製垂飾品
（6）三角擣形土製品
（7）男根形土製品
（8）三角形土製品
（9）パイプ形土製品
(10) 靴形土製品
(11) 不明土製品
(12) 円盤状土製品
C　剥片石器……124
（1）石　鏃
（2）石　匙
（3）石　錐
（4）石　篦
（5）尖頭器
（6）不定形石器
（7）楔形石器

（8）石　核
D　磨製石器……138
（1）磨製石斧
（2）石棒
（3）石刀
E　石製品……145
（1）岩偶
（2）有孔石製品
（3）舟形状石製品
（4）石斧状有孔垂飾品
（5）軽石状石製品
（6）砥石状石製品
（7）箆状石製品
（8）棒状石製品
F　礫石器……146

第Ⅴ章　古代以降の遺構と遺物……149
第1節　古代の遺構と遺物……149
1　竪穴遺構（SI）……149
2　溝（SD）……149
第2節　近世の遺構と遺物……151
1　墓壙（SM）……151
2　井戸（SE）……170
3　掘立柱建物跡（SB）……170
4　1・2層出土遺物……170

第Ⅵ章　考　察……175
第1節　第Ⅱ群土器の編年的位置……175
1　県内出土土器群との比較……175
2　編年的位置……192
第2節　その他の遺物の年代……193
引用・参考文献
付編1　「高柳遺跡の花粉分析」……東北大学理学部生物学教室
守田益宗
付編2　「高柳遺跡の脂肪酸分析」……㈱ズコーシャ総合科学研究所
帯広畜産大学生物資源化学科

挿　図　目　次

第１図　仙台市高速鉄道北部路線図……1
第２図　七北田川中流域地形区分図……2
第３図　泉区七北田周辺遺跡分布図……4
第４図　室内調査行程フローチャート図……17・18
第５図　遺物計測基準……27
第６図　基本層位図……29
第７図　配石遺構(1)……30
第8a図　配石遺構(2)……31
第8b図　Ⅰ区土壙断面図……32
第９図　Ⅰ区土壙平面図……33・34
第10a図　調査区全体図……35・36
第10b図　第Ⅰ群土器集成図……41
第11図　口縁部粘土紐積み上げ法……43
第12図　胴部粘土紐積み上げ法……44
第13図　口縁部と胴部の接合方法……45
第14図　底部底面の痕跡……46
第15図　底部と胴部の接合方法……47
第16図　単位文様(1)……50
第17図　単位文様(2)……51
第18図　土器文様帯分類……53
第19図　深鉢形土器口縁部文様帯分類(1)……54
第20図　深鉢形土器口縁部文様帯分類(2)……55
第21図　深鉢形土器胴部文様帯分類(1)……58
第22図　深鉢形土器胴部文様帯分類(2)……59
第23図　深鉢形土器胴部文様帯分類(3)……60
第24図　深鉢形土器口縁部形態分類……64
第25図　深鉢形土器突起分類……65
第26図　深鉢形土器器形分類……66
第27図　樽形土器器形分類……66
第28図　鉢形土器器形分類……66
第29図　浅鉢形土器器形分類……66
第30図　台付浅鉢形土器器形分類……66
第31図　深鉢形土器器形・文様帯分類(1)……67
第32図　深鉢形土器器形・文様帯分類(2)……68
第33図　深鉢形土器器形・文様帯分類(3)……69
第34図　深鉢形土器器形・文様帯分類(4)……70
第35図　深鉢形土器器形・文様帯分類(5)……71
第36図　樽形土器分類……77
第37図　鉢形土器分類(1)……78
第38a図　鉢形土器分類(2)……79
第38b図　台付浅鉢分類……79
第39図　浅鉢形土器分類……80
第40図　深鉢形土器Ａ群(1)……81
第41図　深鉢形土器Ａ群(2)……82
第42図　深鉢形土器Ａ群(3)……83
第43図　深鉢形土器Ｂ群(1)……84
第44図　深鉢形土器Ｂ群(2)……85
第45図　深鉢形土器Ｂ群(3)……86
第46図　深鉢形土器Ｂ群(4)……87
第47図　深鉢形土器Ｂ群(5)……88
第48図　深鉢形土器Ｂ群(6)……89
第49図　深鉢形土器Ｄ群(1)……90
第50図　深鉢形土器Ｃ群・Ｄ群(2)……91
第51図　深鉢形土器Ｄ群(3)・Ｅ群(1)……92
第52図　深鉢形土器Ｅ群(2)……93
第53図　深鉢形土器Ｅ群(3)……94
第54図　深鉢形土器Ｅ群(4)……95
第55図　深鉢形土器Ｅ群(5)・Ｆ群(1)……96
第56図　深鉢形土器Ｆ群(2)……97
第57図　深鉢形土器Ｆ群(3)……98
第58図　深鉢形土器Ｇ群(1)……99
第59図　深鉢形土器Ｇ群(2)・Ⅰ群(1)……100
第60図　深鉢形土器Ⅰ群(2)……101
第61図　深鉢形土器Ｊ群(1)……102
第62図　深鉢形土器Ｊ群(2)……103
第63a図　深鉢形土器Ｊ群(3)・Ｋ群(1)……104
第63b図　深鉢形土器Ｋ群(2)……105
第64図　樽形土器ＡⅠ～Ⅲ・ＢⅠ類……106
第65a図　鉢形土器ＡⅠ～Ⅴ・ＢⅠ類……107
第65b図　鉢形土器ＢⅡ・ＣⅠ～Ⅲ・Ｄ
浅鉢形土器ＡⅠ類……108
第65c図　浅鉢形土器ＡⅠ～Ⅲ・ＢⅠ類……109

第66a図　浅鉢形土器ＢⅠ類……110
第66b図　浅鉢形土器ＢⅡ・ＣⅠ～Ⅳ類……111
第66c図　注口・有孔・壺・台付浅鉢形土器
　　ＡⅠ～ＢⅡ類……112
第67図　石鏃分類……126
第68図　石匙分類……128
第69図　石錐分類……130
第70図　尖頭器分類……130
第71図　石篦分類……132
第72図　不定形石器分類(1)……134
第73図　不定形石器分類(2)……135
第74図　石核分類……137
第75図　楔形石器分類……137
第76図　竪穴遺構平面図……150
第77図　墓壙群平面図……157・158
第78図　墓壙群断面図……159・160
第79図　墓壙群出土遺物(1)……161
第80図　墓壙群出土遺物(2)……162
第81図　墓壙群出土遺物(3)……163
第82図　墓壙群出土遺物(4)……164
第83図　墓壙群出土遺物(5)……165
第84図　墓壙群出土遺物(6)……166
第85図　墓壙群出土遺物(7)……167
第86図　墓壙群出土遺物(8)……168
第87図　墓壙群出土遺物(9)……169
第88図　井戸跡平・断面図……170
第89図　Ⅲ区ピット群……171
第90図　１・２層出土遺物(1)……172
第91図　１・２層出土遺物(2)……173
第92図　青島貝塚出土土器群……177
第93図　長者原貝塚出土土器群……179
第94図　上野遺跡出土土器群(1)……181
第95図　上野遺跡(2)・大木囲貝塚・大松沢貝塚(1)
　　出土土器群……182
第96図　大松沢貝塚出土土器群(2)……183
第97図　勝負沢遺跡出土土器群(1)……186
第98図　勝負沢遺跡出土土器群(2)……187
第99図　中ノ内Ｂ遺跡出土土器群……191

付編２　挿図目次

図１　土壌試料採取地点……204
図２　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成……205
図３　試料に残存する脂肪のステロール組成……205
図４　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状
　　構造図……205

挿　表　目　次

第１表　泉区七北田周辺遺跡地名表……５
第２表　遺物トレース基準……24
第３表　礫石器計測値検証資料……25
第４表　深鉢形土器の出土状況(1)……37
第５表　深鉢形土器の出土状況(2)……38
第６表　深鉢形土器の出土状況(3)……39
第７表　深鉢形土器の口縁部文様帯
　　胴部文様帯相関表(1)……62
第８表　深鉢形土器の口縁部文様帯
　　胴部文様帯相関表(2)……63
第９表　深鉢形土器の口縁部文様帯
　　胴部文様帯相関表(3)……57
第10表　深鉢形土器の器形・文様帯構成
　　口胴部文様相関……72
第11表　深鉢形土器の器形・文様帯構成
　　口胴部文様分類(1)……73
第12表　深鉢形土器の器形・文様帯構成
　　口胴部文様分類(2)……74
第13表　土偶残存部位・分類一覧表……116
第14表　磨製石斧残存部位・分類一覧表……141
第15表　礫石器素材形態分類……148
第16表　礫石器分類……148
第17表　墓壙集成……155

写真図版目次

図版１　高柳遺跡航空写真……207
図版２　調査風景……208
図版３　航空写真・基本層位・配石遺構(1)……209
図版４　配石遺構(2)……210
図版５　配石遺構(3)……211
図版６　土壙(1)……212
図版７　土壙(2)……213
図版８　土壙(3)……214
図版９　土壙(4)……215
図版10　土壙(5)……216
図版11　土壙(6)……217
図版12　土壙(7)……218
図版13　遺物出土状況(1)……219
図版14　遺物出土状況(2)……220
図版15　遺物出土状況(3)……221
図版16　遺物出土状況(4)……222
図版17　遺物出土状況(5)……223
図版18　遺物出土状況(6)……224
図版19　遺物出土状況(7)……225
図版20　遺物出土状況(8)……226
図版21　遺物出土状況(9)……227
図版22　遺物出土状況(10)……228
図版23　遺物出土状況(11)……229
図版24　竪穴遺構・掘立柱建物跡(1)……230
図版25　掘立柱建物跡(2)・井戸跡(1)……231
図版26　井戸跡(2)・墓壙群(1)……232
図版27　墓壙群(2)……233
図版28　墓壙群(3)……234
図版29　墓壙群(4)……235
図版30　墓壙群(5)……236
図版31　墓壙群(6)……237
図版32　墓壙群(7)……238
図版33　４～14区１～５層出土土器（土－１）……239
図版34　13・14区２～５層出土土器（土－２）……240
図版35　14区４・５層出土土器(土－３）……241
図版36　14区４層出土土器(土－４）……242
図版37　10・14区３～５層出土土器（土－５）……243
図版38　14～33区２～５層出土土器（土－６）……244
図版39　15区５層出土土器（土－７）……245
図版40　15区５層出土土器（土－８）……246
図版41　15区５層出土土器（土－９）……247
図版42　15区４・５層出土土器（土－10）……248
図版43　15区４層出土土器（土－11）……249
図版44　15区４層出土土器（土－12）……250
図版45　15区４層出土土器（土－13）……251
図版46　15区４層出土土器（土－14）……252
図版47　15・16区４・５層出土土器（土－15）……253
図版48　15区１～５層出土土器（土－16）……254
図版49　15・16区１～５層出土土器（土－17）……255
図版50　16区５層出土土器（土－18）……256
図版51　16区５層出土土器（土－19）……257
図版52　16区４・５層出土土器（土－20）……258
図版53　16区４・５層出土土器（土－21）……259
図版54　16区４層出土土器（土－22）……260
図版55　16区４層出土土器（土－23）……261
図版56　16区４層出土土器（土－24）……262
図版57　16区４層出土土器（土－25）……263
図版58　16区４層出土土器（土－26）……264
図版59　16区４層出土土器（土－27）……265
図版60　16区４層出土土器（土－28）……266
図版61　16区２・４層出土土器（土－29）……267
図版62　16区４層出土土器（土－30）……268
図版63　16区４層出土土器（土－31）……269
図版64　16区４層出土土器（土－32）……270
図版65　16区４層出土土器（土－33）……271
図版66　16区３・４層出土土器（土－34）……272
図版67　16区３層出土土器（土－35）……273
図版68　16区３・５層出土土器（土－36）……274
図版69　16区２・３層出土土器（土－37）……275
図版70　16区１・２層出土土器（土－38）……276

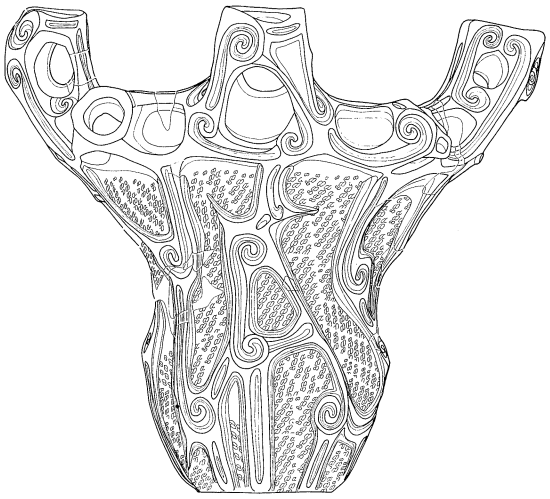
図版71　17区５層出土土器（土－39）……277
図版72　17区５層出土土器（土－40）……278
図版73　17区５層出土土器（土－41）……279
図版74　17区５層出土土器（土－42）……280
図版75　17区５層出土土器（土－43）……281
図版76　17区５層出土土器（土－44）……282
図版77　17区５層出土土器（土－45）……283
図版78　17区４・５層出土土器（土－46）……284
図版79　17区４・５層出土土器（土－47）……285
図版80　17区４層出土土器（土－48）……286
図版81　17区４層出土土器（土－49）……287
図版82　17区４層出土土器（土－50）……288
図版83　17区４層出土土器（土－51）……289
図版84　17区４層出土土器（土－52）……290
図版85　17区３・４層出土土器（土－53）……291
図版86　17区４層出土土器（土－54）……292
図版87　17区４層出土土器（土－55）……293
図版88　17区４層出土土器（土－56）……294
図版89　17区３・４層出土土器（土－57）……295
図版90　17区３層出土土器（土－58）……296
図版91　17区３層出土土器（土－59）……297
図版92　17区２～４層出土土器（土－60）……298
図版93　17区２～５層出土土器（土－61）……299
図版94　17区１～４層出土土器（土－62）……300
図版95　18区５層出土土器（土－63）……301
図版96　18区４・５層出土土器（土－64）……302
図版97　18区４・５層出土土器（土－65）……303
図版98　18区４層出土土器（土－66）……304
図版99　18区４層出土土器（土－67）……305
図版100　18区４・５層出土土器（土－68）……306
図版101　18区４層出土土器（土－69）……307
図版102　18区４層出土土器（土－70）……308
図版103　18区４層出土土器（土－71）……309
図版104　18区３・４層出土土器（土－72）……310
図版105　18区３・４層出土土器（土－73a）……311
図版106　18区３層出土土器（土－73b）……312
図版107　18区３層出土土器（土－73c）……313
図版108　18区３層出土土器（土－74）……314
図版109　18区３層出土土器（土－75）……315
図版110　18区２・３層出土土器（土－76）……316
図版111　18区３層出土土器（土－77）……317
図版112　18区１・２層出土土器（土－78）……318
図版113　19・20区４～６層出土土器（土－79）……319
図版114　19区４・５層出土土器（土－80）……320
図版115　19区４層出土土器（土－81）……321
図版116　19区４層出土土器（土－82）……322
図版117　19区４層出土土器（土－83）……323
図版118　19区４層出土土器（土－84）……324
図版119　19区４・６層出土土器（土－85）……325
図版120　19区３層出土土器（土－86）……326
図版121　19区４層出土土器（土－87）……327
図版122　19区３層出土土器（土－88）……328
図版123　19区３層出土土器（土－89）……329
図版124　19区２層出土土器（土－90a）……330
図版125　19区２層出土土器（土－90b）……331
図版126　19区２・３層出土土器（土－91）……332
図版127　19区１～３層出土土器（土－92）……333
図版128　19区１～４層出土土器（土－93）……334
図版129　20区５層出土土器（土－94）……335
図版130　20区３～５層出土土器（土－95）……336
図版131　20区４層出土土器（土－96）……337
図版132　20区４・５層出土土器（土－97）……338
図版133　20区３・４層出土土器（土－98）……339
図版134　20区３・４層出土土器（土－99）……340
図版135　20区３・４層出土土器（土－100）……341
図版136　20区３層出土土器（土－101）……342
図版137　20区３層出土土器（土－102）……343
図版138　20区３層出土土器（土－103）……344
図版139　20区２・３層出土土器（土－104）……345
図版140　20区１～３層出土土器（土－105）……346
図版141　21区３～５層出土土器（土－106）……347
図版142　21区１～５層出土土器（土－107）……348
図版143　21区４層出土土器（土－108）……349
図版144　21区４・５層出土土器（土－109）……350
図版145　21区２～４層出土土器（土－110）……351
図版146　21区１～４層出土土器（土－111）……352
図版147　21区２～４層出土土器（土－112）……353
図版148　17・21区２～４層出土土器（土－113）…354

図版149　22区４層出土土器（土－114）　……355
図版150　22区４層出土土器（土－115）　……356
図版151　22区４層出土土器（土－116）　……357
図版152　22区４層出土土器（土－117）　……358
図版153　22区４層出土土器（土－118）　……359
図版154　22・23区２～４層出土土器（土－119）　…360
図版155　22区１～４層出土土器（土－120）　……361
図版156　23区４層出土土器（土－121）　……362
図版157　23区４層出土土器（土－122）　……363
図版158　23区４層出土土器（土－123）　……364
図版159　23区４層出土土器（土－124）　……365
図版160　23区４層出土土器（土－125）　……366
図版161　23区３・４層出土土器（土－126）　……367
図版162　23区１～４層出土土器（土－127）　……368
図版163　23・24区１～４層出土土器（土－128）　…369
図版164　24区４層出土土器（土－129）　……370
図版165　24区４層出土土器（土－130）　……371
図版166　24区４層出土土器（土－131）　……372
図版167　24区４層出土土器（土－132）　……373
図版168　24区４層出土土器（土－133）　……374
図版169　24区１～３層出土土器（土－134）　……375
図版170　24区１～３層出土土器（土－135）　……376
図版171　25区４層出土土器（土－136）　……377
図版172　25区４層出土土器（土－137）　……378
図版173　25区４層出土土器（土－138）　……379
図版174　25区４層出土土器（土－139）　……380
図版175　25区３・４層出土土器（土－140）　……381
図版176　25区３・４層出土土器（土－141）　……382
図版177　25区４層出土土器（土－142）　……383
図版178　25区４層出土土器（土－143）　……384
図版179　25区５層出土土器（土－144）　……385
図版180　25区３・４層出土土器（土－145）　……386
図版181　26区２～４層出土土器（土－146）　……387
図版182　26区４層出土土器（土－147）　……388
図版183　26区４・５層出土土器（土－148）　……389
図版184　26区４層出土土器（土－149）　……390
図版185　26区３・４層出土土器（土－150）　……391
図版186　26区４層出土土器（土－151）　……392
図版187　26区２～４層出土土器（土－152）　……393
図版188　26区４層出土土器（土－153）　……394
図版189　26区４層出土土器（土－154）　……395
図版190　27区４・５層出土土器（土－155）　……396
図版191　27区４層出土土器（土－156）　……397
図版192　27区４層出土土器（土－157）　……398
図版193　27区４層出土土器（土－158）　……399
図版194　27区４層出土土器（土－159）　……400
図版195　27区４層出土土器（土－160）　……401
図版196　27区４層出土土器（土－161）　……402
図版197　27区４層出土土器（土－162）　……403
図版198　27区４層出土土器（土－163）　……404
図版199　27区４層出土土器（土－164）　……405
図版200　27区３・４層出土土器（土－165）　……406
図版201　27区４層出土土器（土－166）　……407
図版202　27区４層出土土器（土－167）　……408
図版203　27区４層出土土器（土－168）　……409
図版204　27区４層出土土器（土－169）　……410
図版205　27区３・４層出土土器（土－170）　……411
図版206　27区１～４層出土土器（土－171）　……412
図版207　27区２層出土土器（土－172）　……413
図版208　28区４・５層出土土器（土－173）　……414
図版209　28区４・５層出土土器（土－174）　……415
図版210　28区４層出土土器（土－175）　……416
図版211　28区４層出土土器（土－176）　……417
図版212　28区４層出土土器（土－177）　……418
図版213　28区４層出土土器（土－178）　……419
図版214　28区４層出土土器（土－179）　……420
図版215　28区４層出土土器（土－180）　……421
図版216　28区４層出土土器（土－181）　……422
図版217　28区４層出土土器（土－182）　……423
図版218　28区４・５層出土土器（土－183）　……424
図版219　28区４層出土土器（土－184）　……425
図版220　28区４層出土土器（土－185）　……426
図版221　28区４層出土土器（土－186）　……427
図版222　28区４層出土土器（土－187）　……428
図版223　28区３・４層出土土器（土－188）　……429
図版224　28・29区４層出土土器（土－189）　……430
図版225　28区４層出土土器（土－190）　……431
図版226　28区１～４層出土土器（土－191）　……432

図版227　28区２～４層出土土器（土－192）　……433
図版228　28・29区１～５層出土土器（土－193）　…434
図版229　29区４・５層出土土器（土－194）　……435
図版230　29区３・４層出土土器（土－195）　……436
図版231　29区３・４層出土土器（土－196）　……437
図版232　29区２・３層出土土器（土－197）　……438
図版233　30区４・５層出土土器（土－198）　……439
図版234　30区４層出土土器（土－199）　……440
図版235　30・31区３・４層出土土器（土－200）　…441
図版236　31区４層出土土器（土－201）　……442
図版237　31区４層出土土器（土－202）　……443
図版238　31・32区３・４層出土土器（土－203）　…444
図版239　30～32区１～４層出土土器（土－204）　…445
図版240　32区４層出土土器（土－205）　……446
図版241　32区４層出土土器（土－206）　……447
図版242　32区４層出土土器（土－207）　……448
図版243　26・32区４層出土土器（土－208）　……449
図版244　32・33区２～４層出土土器（土－209）　…450
図版245　33区４層出土土器（土－210）　……451
図版246　33区４層出土土器（土－211）　……452
図版247　33～35区３・４層出土土器（土－212）　…453
図版248　34・35区４層出土土器（土－213）　……454
図版249　33～35区４層出土土器（土－214）　……455
図版250　２～15区遺構出土土器（土－215）　……456
図版251　表採・遺構出土土器（土－216）　……457
図版252　土偶（偶－１）……458
図版253　土偶（偶－２）……459
図版254　土偶（偶－３）……460
図版255　土偶（偶－４）……461
図版256　土偶（偶－５）……462
図版257　土偶（偶－６）……463
図版258　土偶（偶－７）……464
図版259　土偶（偶－８）……465
図版260　土製品（土－１）……466
図版261　土製品（土－２）……467
図版262　土製品（土－３）……468
図版263　土製品（土－４）……469
図版264　土製品（土－５）……470
図版265　土製品（土－６）……471
図版266　土製品（土－７）……472
図版267　土製品（土－８）……473
図版268　円盤状土製品（円－１）……474
図版269　円盤状土製品（円－２）・石製品（石－１）
……475
図版270　石製品（石－２）……476
図版271　石製品（石－３）……477
図版272　石製品（石－４）……478
図版273　石鏃（鏃－１）……479
図版274　石鏃（鏃－２）・石匙（匙－１）……480
図版275　石匙（匙－２）……481
図版276　石匙（匙－３）……482
図版277　石匙（匙－４）……483
図版278　石匙（匙－５）……484
図版279　石匙（匙－６）……485
図版280　石匙（匙－７）……486
図版281　石錐（錐－１）……487
図版282　尖頭器（尖－１）……488
図版283　石篦（篦－１）……489
図版284　石篦（篦－２）……490
図版285　石篦（篦－３）・石核（核－１）……491
図版286　石核（核－２）……492
図版287　石核（核－３）……493
図版288　石核（核－４）……494
図版289　楔形石器（楔－１）……495
図版290　不定形石器（不－１）……496
図版291　不定形石器（不－２）……497
図版292　不定形石器（不－３）……498
図版293　不定形石器（不－４）……499
図版294　不定形石器（不－５）……500
図版295　不定形石器（不－６）……501
図版296　不定形石器（不－７）……502
図版297　不定形石器（不－８）……503
図版298　不定形石器（不－９）……504
図版299　不定形石器（不－10）……505
図版300　不定形石器（不－11）……506
図版301　不定形石器（不－12）……507
図版302　不定形石器（不－13）……508
図版303　不定形石器（不－14）・磨製石斧（斧－１）

……509
図版304　磨製石斧（斧－２）……510
図版305　磨製石斧（斧－３）……511
図版306　礫石器（礫－１）……512
図版307　礫石器（礫－２）……513
図版308　礫石器（礫－３）……514
図版309　礫石器（礫－４）……515
図版310　礫石器（礫－５）……516
図版311　礫石器（礫－６）……517
図版312　礫石器（礫－７）……518
図版313　礫石器（礫－８）……519
図版314　礫石器（礫－９）……520
図版315　礫石器（礫－10）……521
図版316　礫石器（礫－11）……522
図版317　礫石器（礫－12）……523
図版318　礫石器（礫－13）……524
図版319　礫石器（礫－14）……525
図版320　礫石器（礫－15）……526
図版321　礫石器（礫－16）……527
図版322　礫石器（礫－17）……528
図版323　礫石器（礫－18）……529
図版324　礫石器（礫－19）……530
図版325　礫石器（礫－20）……531
図版326　礫石器（礫－21）……532
図版327　礫石器（礫－22）……533
図版328　礫石器（礫－23）……534
図版329　礫石器（礫－24）……535
図版330　礫石器（礫－25）……536
図版331　礫石器（礫－26）……537
図版332　礫石器（礫－27）……538
図版333　礫石器（礫－28）……539
図版334　礫石器（礫－29）……540
図版335　礫石器（礫－30）……541
図版336　礫石器（礫－31）……542
図版337　礫石器（礫－32）……543
図版338　礫石器（礫－33）……544
図版339　礫石器（礫－34）……545
図版340　礫石器（礫－35）……546
図版341　礫石器（礫－36）……547
図版342　墓壙群出土遺物(1)……548
図版343　墓壙群出土遺物(2)……549
図版344　墓壙群，１・２層出土遺物(3)……550

第Ⅰ章　調査に至る経過
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境



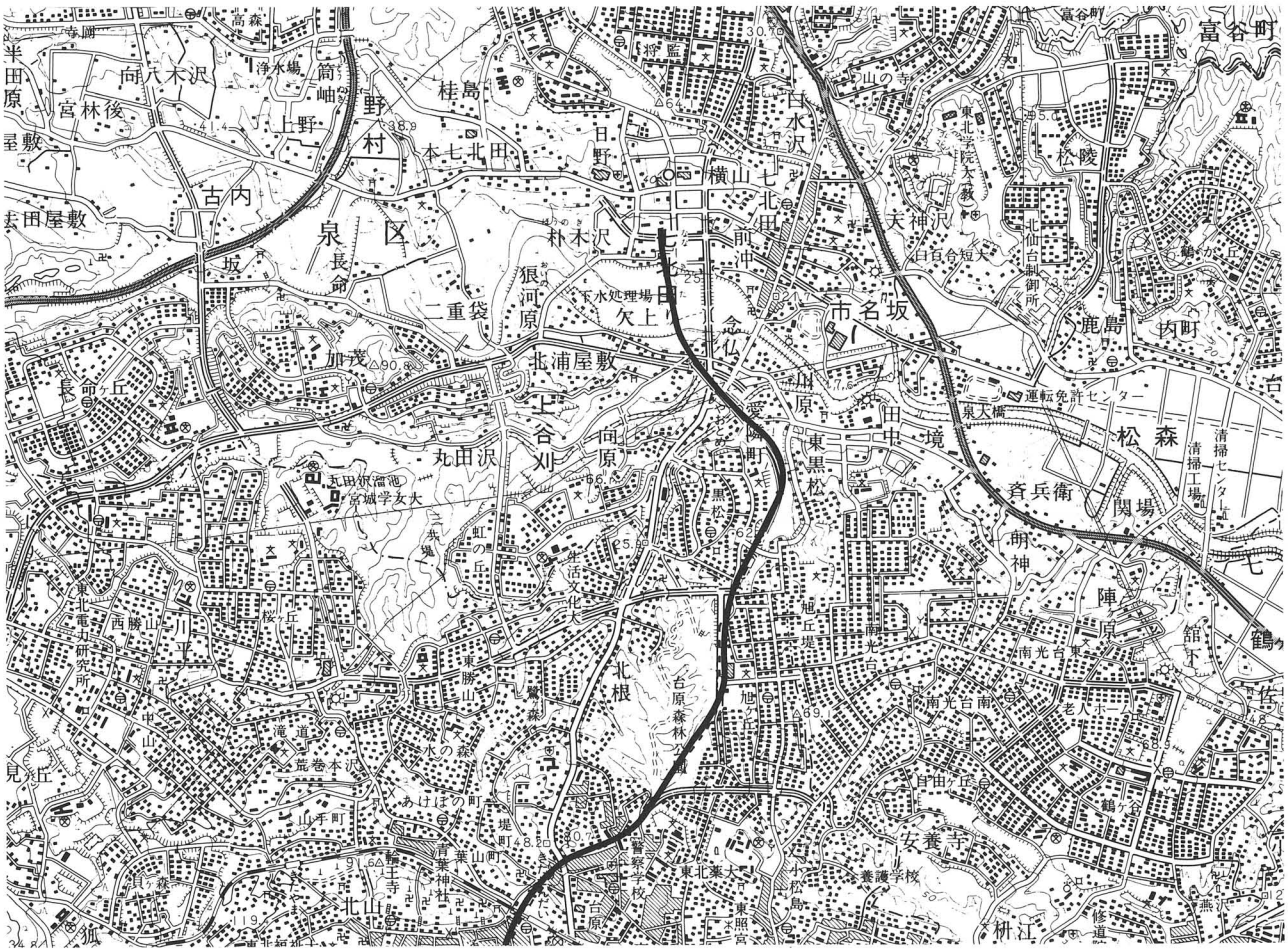
第Ⅰ章　調査に至る経過

仙台市は、宮城県の中心都市として多くの都市機能が集中し、人口の増加とともに都市としての機能は市域を越えて成長し続け、現在では東北地方の中心都市としての機能を持つに至っている。しかし、人口の増加に伴う市街地の拡大は、交通量の増加による交通渋滞等快適な都市生活を送る上で大きな障害となってきた。

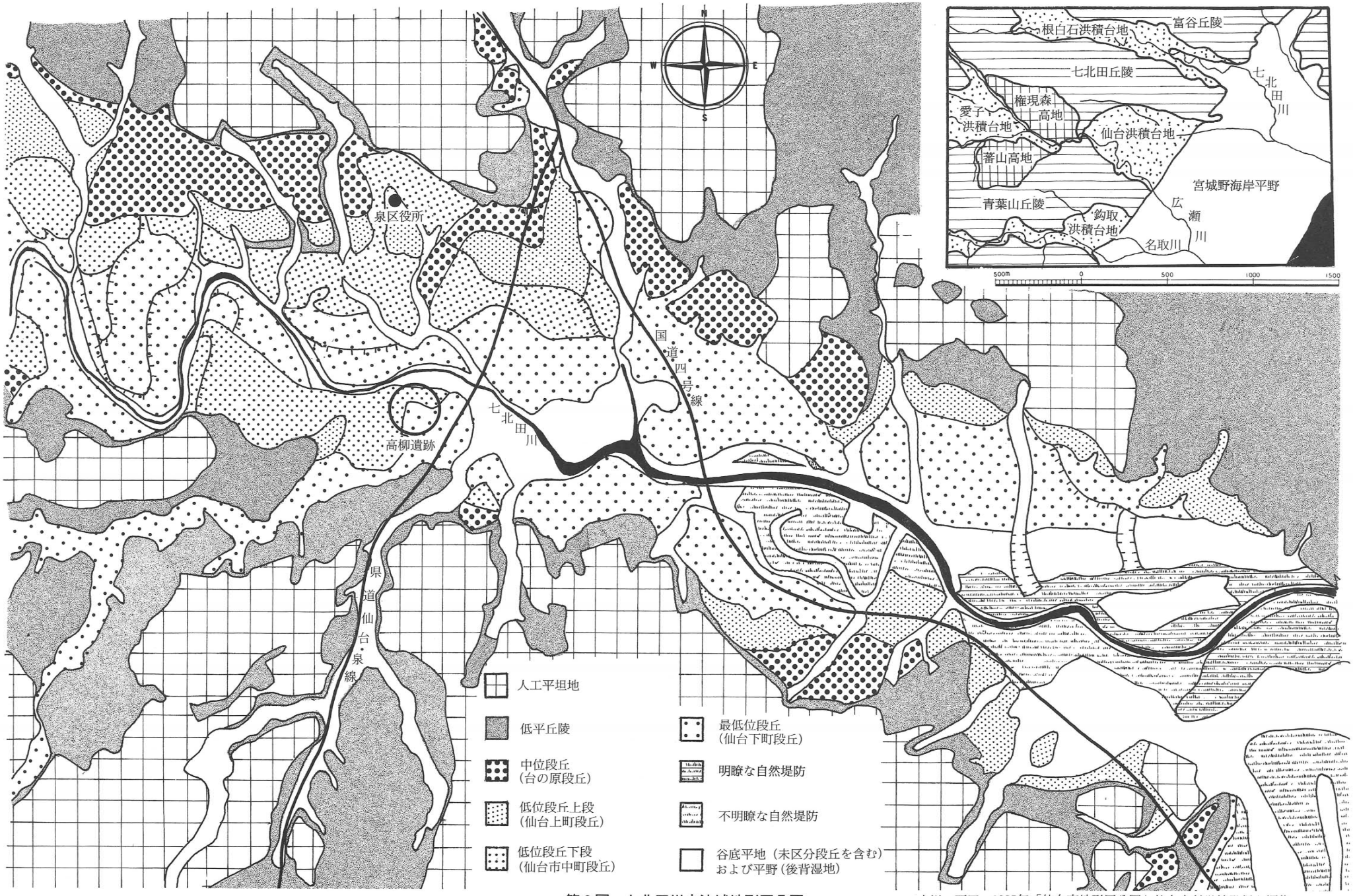
このような状況の中で、仙台都市圏の基幹交通として登場して来たのが仙台市高速鉄道南北線である。21世紀に向けて躍進する仙台の原動力として大きな期待と役割を担って、昭和63年７月富沢～八乙女間が運行を開始した。

仙台市教育委員会は、高速鉄道建設に先立ち、路線内及びその周辺の分布調査を行った。その結果、南部の富沢・大野田地区に多くの遺跡が分布することが判明した。このため、路線にかかる遺跡の発掘調査を、昭和56年４月から開始し、昭和61年12月の調査をもって完了した。

その後、八乙女～泉中央間の延伸が計画され、計画路線上に泉区七北田字高柳に所在する高柳遺跡がかかることが判明した。平成元年３月10日付けで仙台市交通局から、高柳遺跡の発掘通知が提出された。計画によると遺跡の中心部をほぼ南北に高架橋を建設するものであった。仙台市教育委員会は、事前に仙台市交通局と協議を重ねた結果、記録保存を前提とした発掘調査を実施する運びとなり、平成元年５月１日から発掘調査を開始した。調査の結果遺物を大量に包含する遺物包含層が発見されたため、調査期間を当初の８月末から２ケ月延長し、10月21日に野外調査の一切を完了した。出土遺物はテンバコで約1,000箱という極めて多量なものであった。室内調査は平成２年９月から着手し、７年３月で完了し報告書を刊行するという運びとなった。



第１図　仙台市高速鉄道北部路線図



第２図　七北田川中流域地形区分図

中川・石田　1985年「仙台市地形区分図」仙台市科学館発行を編集

第II章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的位置と自然環境

１．地理的位置

宮城県仙台市は、東北地方中部太平洋岸に位置する人口958,705人、面積788.05 km²(1994年10月１日現在)の都市である。1889年（明治22年）４月、市町村制が施行され県内初の市として誕生した。その間、周辺市町村との編入・合併を繰り返し1987年、隣接する宮城町と、1988年には泉市・秋保町と合併し、1989年に政令指定都市に移行し現在にいたっている。東西50.4 km、南北31.2 kmの市域は地勢の面でも変化に富み、西部は急峻な奥羽山脈を中心とした山岳地帯、中央部はなだらかな丘陵地帯および台地、そして東部には低平な沖積平野が広がり、海岸線の長大な砂浜をもって太平洋に面している。気候は温帯湿潤気候下にあり、太平洋岸型気候区に属している。仙台管区気象台の観測による年平均気温の平年値は11.9°C、年降水量は1,200 mmである。

高柳遺跡は、仙台市北部にある泉区の七北田字高柳地内に所在する。当地は泉区市役所から南西0.8 kmの地点にあり、北緯38°18'40"、東経140°52'35"に位置している。

２．自然環境

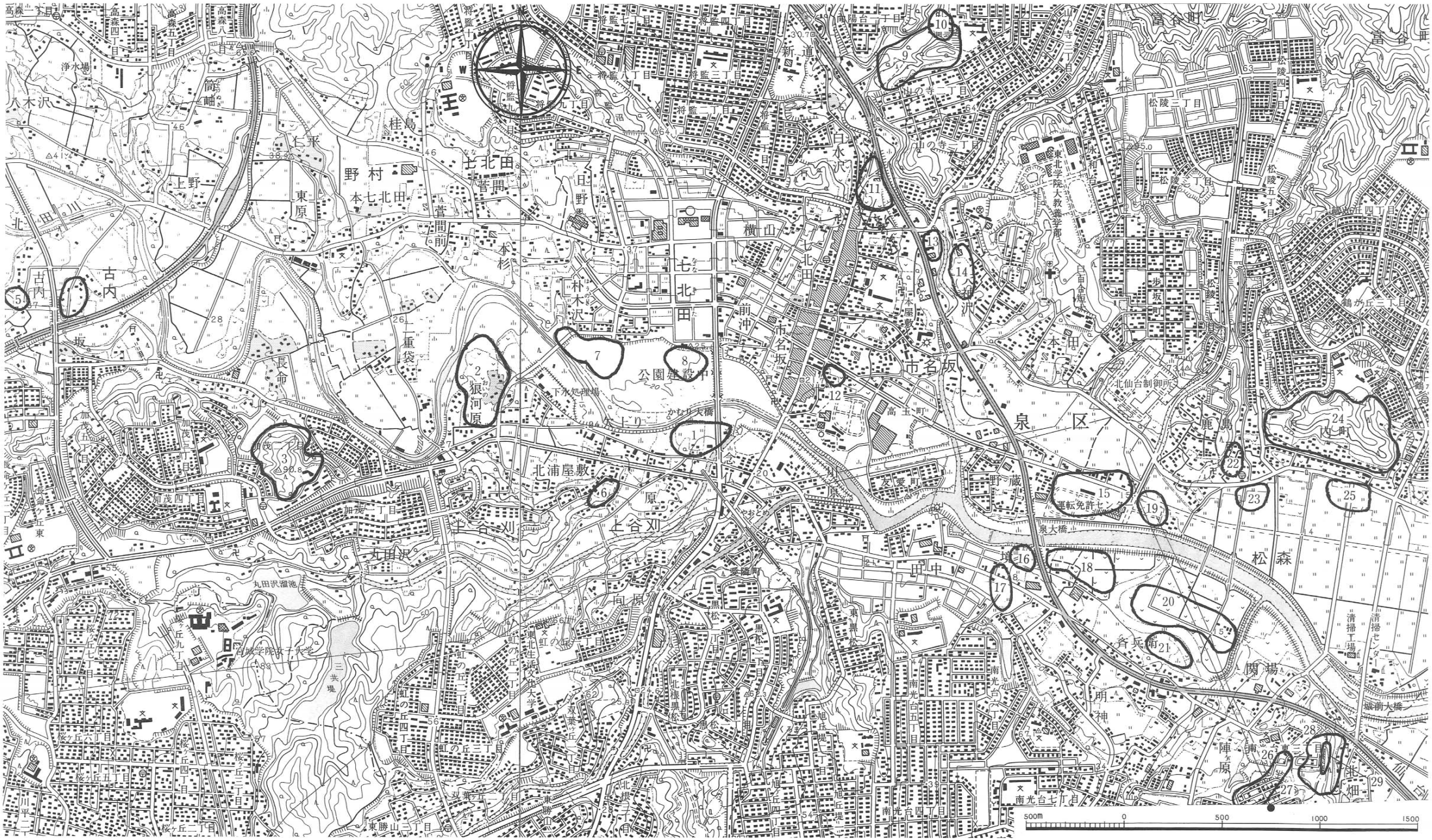
本遺跡が所在する仙台市と、その北部に位置する泉区の地形と地質を概観してみる。

仙台市は地学的に東北日本孤外帯に位置し、仙台市域とその周辺の地形は、西から東にかけて山地・丘陵地・低地のおおむね３つに大別できる。山地は、東北地方を南北に縦走する奥羽脊梁山脈の一部をなしており、新第三紀後期以降第四紀にかけての隆起帯で、第四紀火山を頂部にのせている。この山地は北西部を占める船形連峰とこれに連なる二口連峰とからなり、七北田川・名取川・広瀬川はここに源を発し仙台湾に注いでいる。これらの河川やその支流は山地内で深く谷を刻んでいるため、険峻な地形を呈している。

山地と低地の中間に位置する丘陵地は、起伏が比較的ゆるやかで、稜線の高度も良く揃っている。この丘陵地は西から東にかけて緩やかに高度が低くなり、丘陵地を刻む谷も西部から東部にかけて浅くなり、谷底面や河岸段丘面がより広く発達する傾向にある。丘陵地は６つに区分することができるが、泉区に分布する七北田丘陵と富谷丘陵をみてみる。富谷丘陵は七北田川左岸、仙台市と黒川郡の境界付近に位置し、主として新第三紀上部の堆積岩類・火砕岩類で構成されている。分水界が南に偏っているため丘陵を開析する小河川の多くは黒川郡の吉田川に注いでいる。七北田丘陵は、七北田川右岸部の東西に連なる丘陵である。主な地質は東部が仙台層群、西部が秋保層群からなっている。丘陵はかなり開析され、七北田川と広瀬川の分水界が著しく南側に位置することから小河川の多くは七北田川の支流となっている。七北田川は上流部では南流するが、実沢付近で流路を東にかえ泉区の中央部を蛇行しながら流下し、蒲生付近で太平洋に注ぐ。

七北田川の流域には、第四紀中期更新世以降に形成された河岸段丘面が発達している。中流域では河岸段丘が中位（台ノ原段丘）・低位上段（仙台上町段丘）・低位下段（仙台中町段丘）・最低位（仙台下町段丘）の４段が認められる。高柳遺跡はこの七北田川中流右岸の低位段丘（仙台中町段丘）上に立地している。

＊本節は仙台市史編さん委員会（1994）：「仙台市史　特別編　１　自然」を多く参照した。



第３図　泉区七北田周辺遺跡分布図

第１表　泉区七北田周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	高柳遺跡	泉区七北田字高柳	段丘	包含地	縄文・近世
2	沼遺跡	泉区上谷刈字沼・遠世堂・塚	段丘	集落跡	縄文中期・近世
3	長命館跡	泉区賀茂二丁目	丘陵	城館跡	中世
4	宮下遺跡	泉区古内字宮下	沖積地	集落跡	奈良・平安
5	関の上遺跡	泉区古内字関の内	段丘	散布地	縄文
6	貴富祢遺跡	泉区上谷刈字貴富祢	丘陵	散布地	縄文・平安
7	赤生津遺跡	泉区七北田字赤生津	段丘	包含地水田跡	縄文晩期・弥生・平安
8	柳遺跡	泉区七北田字柳・欠下	沖積地	散布地	古代
9	洞雲寺遺跡	泉区山の寺二丁目	丘陵	散布地	縄文晩期
10	山の寺廃寺跡	泉区山の寺二丁目	丘陵斜面	寺院跡	中・近世
11	新道遺跡	泉区市名坂字新道	段丘	散布地	縄文
12	石止遺跡	泉区市名坂字石止	段丘	散布地	平安
13	鳥居原遺跡	泉区市名坂字鳥居原	段丘	散布地	縄文
14	天神沢遺跡	泉区市名坂字天神沢	段丘	散布地	縄文
15	鹿島遺跡	泉区市名坂字鹿島	自然堤防	集落跡	平安
16	境Ａ遺跡	泉区七北田字境	沖積地	散布地	古代
17	境Ｂ遺跡	泉区七北田字境	段丘	散布地	縄文中期
18	上河原遺跡	泉区松森字上河原	沖積地	散布地	古代
19	竹之内遺跡	泉区市名坂字竹之内	自然堤防	集落跡	奈良・平安
20	館遺跡	泉区松森字館	沖積地	散布地	古代・中世
21	新庄遺跡	泉区松森字新庄	沖積地	散布地	平安
22	本町遺跡	泉区市名坂字本町	段丘	散布地	縄文
23	岡本前遺跡	泉区松森字岡本	沖積地	散布地	縄文・古代
24	松森城跡	泉区松森字内町	丘陵	城館跡	中世
25	城前遺跡	泉区松森字城前	沖積地	散布地	古代
26	長岫遺跡	泉区松森字長岫・南光台東三丁目	丘陵	集落跡	旧石器・縄文・弥生・古代
27	松森焔硝蔵跡	泉区南光台東二丁目	丘陵	蔵跡・散布地	縄文・古代・近世
28	住吉遺跡	泉区南光台東三丁目	段丘	包含地	旧石器・縄文早期・近世
29	住吉塚群	泉区南光台東三丁目	段丘	塚	不明

第２節　歴史的環境

高柳遺跡の所在する泉区を中心とした七北田川中流域の歴史的環境を、主に遺跡のあり方から概観することとする。

１．旧石器時代

現在のところ泉区最古の遺跡は、松森地区の住吉遺跡（第３図28）である。昭和60年泉市教育委員会が実施した調査（泉市教委：1987）で、21点の旧石器時代前期の石器と晩期･後期の石器約200点が出土している。表土下の褐色火山灰層上から円形スクレイパー・尖頭器・石刃等の晩期旧石器が出土し、下層の灰白色火山灰の下位からは後期旧石器が出土している。さらに下層の水成堆積層の上部からは前期旧石器が出土した(仙台市)。住吉遺跡に隣接する長岫遺跡（第３図26）の調査（泉市教委：1985）では、後期旧石器時代と考えられる５点の尖頭器と１点の細石刃核が出土している。他に局部磨製石斧が１点出土している。福岡地区の西上野原遺跡でも石刃が発見されている（大塚・竹内：1987)。旧石器時代の遺跡は、他に３ケ所知られているが詳細は明らかでない。

２．縄文時代

縄文時代になると、七北田川流域の河岸段丘上には多くの遺跡が営まれるようになる。調査が行われた遺跡には上流から上鳥井原遺跡・柴山遺跡・沼遺跡・高柳遺跡・赤生津遺跡・長岫遺跡がある。

上鳥井原遺跡では、中期の竪穴住居跡が４軒発見されているが詳細は不明である。

柴山遺跡の調査（柴山遺跡発掘調査団：1977）では、早期～前期の土器や石器とともに３棟の竪穴住居跡と５基の集石遺構が検出されている。竪穴住居跡は保存状態が悪いため規模や炉、柱穴など不明であるが、３棟とも円形の平面形とおもわれる。集石遺構は比較的大型の河原石を円形に配置したものであるが、下部の遺構などは不明である。

沼遺跡（第３図２）の調査（仙台市教委：1992）では、中期末の大木10式期の竪穴住居跡が８棟と中期前半・末頃の遺物包含層・土坑40基が発見されている。これら竪穴住居跡の平面形は円形のものが多いが、ややつぶれた楕円形のものや、隅丸方形のものもある。床の面積は最小が9.5 m²、最大が19.6 m²で平均すると14 m²程である。中心となる柱の数は、４本柱のもの、３本柱のもの、２本柱のものの３種類があり、それぞれ数本の補助柱がつく。これら竪穴住居跡の炉はいずれも、土器埋設石組部・敷石石組部・掘り込み部とからなる複式炉である。土器埋設部は炉の長軸上の頂点にあり、土器を正立した状態で埋設し、土器のまわりを偏平な小さい河原石で一・二重に囲んでいる。敷石石組部は、平面形が長方形で、断面形は逆台形状になっている。床面からの深さは20～30 cmである。偏平でほぼおなじ大きさの河原石を用いているが、埋設土器に接する奥壁には大きな一枚石を据えている。掘り込み部は住居の壁に接して作られ、平面形は正方形で深さが敷石石組部より浅い。炉全体の長軸は1.9～2.7 mと長大で竪穴住居跡のほぼ半径に相当する。

高柳遺跡の対岸にある赤生津遺跡（第３図７）の調査（仙台市教委：1990）では、遺跡西端部で遺物包含層と土壙６基･焼土遺構６基が発見されている。遺物包含層は、第３層と第４層に分層された。第４層からは、早期末～前期初頭、中期の大木７・９・10式、後期の宝ケ峯式が出土している。第３層からは晩期最終末の大洞A'式期の土器が比較的まとまって出土しており、この時期の土器編年を考える上で良好な資料となっている。

長岫遺跡（第３図26）の調査（泉市教委：1985）では、晩期末の竪穴住居跡１棟、早期末～前期初頭の竪穴遺構１基、土壙９基が発見されている。竪穴住居跡は東半分を欠くが円形を基調とした平面形で、地床炉がある。竪穴遺構は東半分を欠くが不整方形の平面形であった。土壙の平面形には、円形基調のものと方形基調のものが認めら

れている。うち１基から大洞Ａ～Ａ′の深鉢形土器が出土している。他に滑石製で、平面が円形の玦状耳飾が１点出土している。形態から前期のものと推定されている。

洞雲寺遺跡（第３図９）からは、長軸 180 cm・短軸 35 cm・深さ 56～70 cm の落とし穴が発見されている。

３．弥生時代

現在、弥生時代の遺跡としては赤生津遺跡と長岫遺跡だけである。

長岫遺跡（第３図26）の調査（泉市教委：1985）では弥生時代中・後期の土器とともに太型蛤刃石斧が出土しているが、遺構は検出されていない。

赤生津遺跡（第３図７）の調査（仙台市教委：1990）では、弥生時代後期の天王山式期の土壙１基と焼土遺構１基を検出している。土壙は長軸 176 cm、短軸 54 cm 以上で深さ 16 cm あり、隅丸の長方形を基調とした平面形である。遺物は出土していないが、確認面の層位から天王山式期と考えられる。焼土遺構は残存長34×26 cm の焼面で、中央部がやや凹み周辺に炭化物が分布していた。この周辺から４点の石器や剝片が出土した。土壙同様確認面の層位から天王山式期のものと考えられる。他に弥生時代後期と考えられる河川跡も発見されている。

４．古墳～奈良・平安時代

Ａ　集落跡

古墳時代～奈良・平安時代の遺跡は、七北田川流域の自然堤防上を中心として分布している。昭和57・58年に宮城県教育委員会が発掘調査（宮城県教委：1984）を実施した鹿島（第３図15）・竹之内遺跡（第３図19）からは、平安時代の竪穴住居跡が３棟・掘立柱建物跡が２棟、柱列跡が２基、溝跡７基、土壙が５基発見されている。これらの遺構は、出土遺物から９世紀中葉から10世紀前葉の時期と11世紀前半の２つの時期があるようである。遺構の堆積土からは土師器・須恵器の外に鉄鏃が３点、刀子が４点、穂摘み具と考えられる半月形鉄製品が１点出土している。両遺跡は連続する自然堤防上に立地しており、恐らく周辺の低地は水田として利用されていたものと考えられる。

当遺跡の西方 2.5 km にある宮下遺跡（第３図４）からも、昭和48年の調査（宮城県教委：1980）で、平安時代の竪穴住居跡が１棟と年代不明の焼土遺構１基が発見された。竪穴住居跡の床面上からは、側面形が「く」の字形を呈し鋲が２～３個つく、へら状の鉄製品が２点出土している。鞍金具の一部と考えられている。住居内のピットからは刀子が１点出土している。また、住居内の貯蔵穴からは「林」の墨書のある土師器が６点、須恵器が１点出土している。「林」名の名字・地名には「林連廣山（常陸国司）」・甲斐国山梨郡の「林部」・「林戸」がみられ、これらの地との関わりを考えると興味深いものがある。

長岫遺跡（第３図26）の調査（泉市教委：1985）では奈良・平安時代の竪穴住居跡５棟と焼土遺構15基が検出されている。平面形はいずれも方形を基調とした隅丸のもので、カマドをもっており、この時期の一般的集落と考えられる。

Ｂ　水田跡

七北田川中流左岸の最低位段丘（仙台下町段丘相当）上に立地している赤生津遺跡（第３図７）の調査（仙台市教委：1990）では、10世紀前半に降下した灰白色火山灰におおわれた水田跡が発見された。約 16000 m²の調査面積中、3,400 m²以上におよぶ水田跡を検出した。畦畔によって区画された38区画の水田跡が検出されているが、平面形は方形基調・三角形・台形・不定形と規則性に欠けバラエティに富んでいる。面積も最小の 59.9 m²から最大の 495.8 m²のものまで様々である。一方、畦畔の配列をみると、南北方向の畦畔は真北から０°～10°の範囲で西にずれるだけで規則性があるのに対し、これに取りつく東西方向の畦畔は地形の傾斜に沿って作られている。従って、南北方向

の畦畔は磁北方向を十分意識した規則性のある条里型の地割りと考えられる。

灰白色火山灰層の最も厚く堆積しているところで40 cm程あった。この層は7層に細分することができ最下層の3 cm程が火山灰降下の一次堆積と考えられ、降下直後の雨などによって二次堆積した結果、厚く堆積したものと考えられている。本市南部の富沢遺跡（仙台市教委：1984）等では火山灰を鋤込んで耕作を継続している痕跡があるが、赤生津遺跡では火山灰降下直後の厚い二次堆積のため、水田を放棄してしまったと考えられる。

C　寺院跡

宮城郡と黒川郡との郡界付近にある標高252.3 mの堂庭山山頂南斜面にある堂庭廃寺跡は、昭和43年の調査（泉町教委：1968）によって、10世紀と推定される宝塔跡が発見された。方形の瓦積基壇があり、基壇上から12基の礫石および、礫石下の根石・堀方が発見された。これらは、ほぼ1.50 mの等間隔で直線にはならず、円周をなすように並んでおり十二角形の建物（宝塔）が想定されている。年代は基壇出土の瓦および周辺出土の土師器・須恵器から10世紀前半と考えられている。

5．中世

鎌倉時代後期、実沢・小角・西田中地区は山村とよばれ鎌倉御家人高柳氏が地頭職を有していた。領家は不明だが、現地の管理は代官郡司太郎が行っていたようである。南北朝期には山村の地に、山村城が築かれ、後醍醐天皇の皇子山村宮を擁する南朝方大河戸隆行らの拠点となった。観応の乱以後、宮城郡東部を留守氏、西部を国分氏が支配した。こうして現在の泉区は国分氏の領地となり戦国期に至った。国分氏は天文頃に松森城に移るが、やがて伊達氏に攻められ、天正16年頃に松森城は伊達氏家臣の領地になった。このころ泉区一帯も伊達氏の支配下に入ったと考えられる。文献資料が乏しいため以下遺跡・遺物で泉区の中世の歴史を補足することとする。

A　館跡

泉区内には、12ケ所の館跡が知られている。主な館跡について概観する。

西田中地区にある杭城館跡は、七北田川支流田中川をさかのぼった最奥部、白木峠の分水嶺から東に延びた丘綾の一支脈杭城山にあり、沖積地から約4 kmも隔たる山中に立地している。昭和54年の測量調査（泉市教委：1980）の結果、東西約800 m、南北約400 m、面積約30 haの大規模で保存良好な館跡であることが判明した。これら遺構群は、最西辺に位置し最高所から南側に延びる遺構群（西郭）とこれに接続して東西・南北の尾根に展開する遺構群（中央郭）、東辺に位置し尾根の鞍部全体に広がる遺構群（東郭）の3つからなっている。東郭は東西250 m×南北200 mの規模で、南北は急斜面となって谷に面し、東西は土塁によって区画されている。中央郭は中央部がくびれた東西90 m×南北30 mの細長い平場を主体としている。西郭は南北に延びる細長い尾根上に遺構を配置している。「仙台領古城書立之覚」・「仙台領古城書上」・「封内風土記」・「安永風土記」には山野内城（山邑城）の須藤刑部（須藤刑部少輔）が結城七郎に攻め落とされたため、杭城に立籠ったとある。城名の由来についても、杭を建て柵として防備したためとある。この後、天正12年（1584）須藤刑部は福岡の首藤坂で落命したと伝えられ、首藤坂には刑部の供養碑（中央に「南無地蔵大菩薩」右側に「大内五兵衛母　天正十二年　首藤刑部少輔定信墓」と2行あり左には「七月四日桜田彦六母」とある）が、実沢の林泉寺には墓碑（中央に「常景母堂経定大禅定門」右側に「天正十二年七月初四日」左に「首藤刑部少輔定信墓」）がある。本城の特色は、経済基盤となるべき沖積地から隔絶し、交通上の要地とも考えられない山中に立地している点にある。自然地形を生かしながら、平場・土塁・空掘等が巧みに配置されており、とても杭を建てて柵とするような仮の城ではない。本地域は、南北朝期には争乱の一拠点であったことから、戦国期より以前から存在していた（藤沼・小井川他：1981）と考えた方が理解しやすい。

上谷刈地区の長命館跡（第3図3）は、近世以来「吾妻鏡」に記載される「国府中山物見岡」の跡と伝えられてきた。七北田川中流域右岸の河岸段丘上に立地して、東西250 m×南北300 m程の規模で前面は急斜面、側面は谷

によって画され、背後は丘陵に続くが空掘で尾根を切っている。内部は空掘によって区画された５つの郭から構成されている。これらの郭は、北から南を経て東へと弧状に配置され、全体として「C」状を呈している。泉市教育委員会の発掘調査（泉市教育委：1986）によると、13～15世紀の遺物しか出土せず、平安時代末～鎌倉時代初期には遡かのぼらないことが明らかになった。戦国期には、国分氏の家臣団に編入された長命氏の館跡と推定されている。

松森地区にある松森城跡（第３図24）は七北田川左岸の標高 90 m の独立峰上に立地し、２つの平場や空掘・土塁などの遺構が認められる。「仙台領古城書立之覚」には「古城　東西四十五間南北十六間、南に堀幅十六間、長百四十間、右城主国分彦九郎盛重小泉村ヨリ取移、天正年中迄居住申由」とあり「二ノ丸　東西十六間、南北十六間、右城主高平大学ト申者御座候、右大学ト申者ハ国分彦九郎盛重家来之由申伝候」とある。

実沢地区にある山野内城跡（山村館・山邑館）は、七北田川の右岸の断崖絶壁上に築かれている。北部は比高 50 m の段丘崖で沖積地に望み、南側は小さな沢によって画され、西側は堀切によって分断された東西 300 m×南北 100 m 程の規模で、３つの郭からなっている。東郭は径 20 m の円形平場を最高所に配し、下段にも平場や腰郭を巡らしている。中央郭は北部が失われているが、腰郭を２～３段巡らし、南側からの谷が中央郭につきあたる部分の斜面に平場を配している（藤沼・小井川他：1981）。「仙台領古城書上」には、「城主　山内須藤刑部少輔　永禄年中迄居住　相州鎌倉山内殿末孫ト申伝候」とあり、杭城の項には、「須藤刑部少輔　結城七郎ニ山野内城ヲ被責落」とある。大槻文彦は『伊達行朝勤皇事歴』のなかで、『白河文書』や『石川文書』にみえる山村館を山村宮の在所と考えた。

根白石地区にある白石城は、東西 100 m、南北 80 m のほぼ方形に近い平場があり、背後の北・西から東へと高さ 3 m の土塁が鉤形に巡り、外周に深さ 3 m、幅 10 m の空掘がある。「仙台領古城書立之覚」には「白石三河ト申者御座候、其子孫白石勘濃助ト申者御座候」とある。

福沢城跡は「仙台領古城書上」には「東西七十五間、南北二十五間」とあり、城主は近江の弟、古内重広とある。「宮城郡誌」には、「横40間、長さ25間。溝あり、巾２間半、深さ７尺」とある。

朴沢古城跡は、「仙台領古城書上」には「東西50間、南北30間」「風土記」には「山ノ内西館」として「東西50間、南北20間」とある。「宮城郡誌」には「八乙女館」として「長さ60間、横50間。溝の深さ丈余、巾２間」とある。

福岡地区にある福岡館跡は、標高 170 m の尾根を中心に東西南北の各方向に延びた尾根上に配置されており、その規模は東西 250 m×南北 300 m ほどである。最高部には、東西 80 m×南北 30 m 程の平場がある。この平場の西の尾根には、空掘によって画された小規模な郭がある。北側も狭い尾根を３条の空掘で断ち切った２つの細長い小さな平場がある。南側の尾根上にも２つの平場があり平場縁に土塁と空掘を配し、空掘で尾根を切っている。東側の尾根上には、高い段によって画された細長い平場が約 30 m 程延び空掘によって切られている。ここから 300 m 程離れた尾根続きの東端部に土塁・空掘を持つ小平場がある（藤沼・小井川他：1981）。「仙台領古城書立之覚」には記載がなく、唯一「宮城郡誌」に「葛西清重十一代の孫左京太夫の弟大崎隼人清宗の居館。清宗後鴇田に改む。その子若狭天正年間来たりてこの地に拠る」とあるが典拠は明らかでない。

『鬼柳文書』文和５年（1353）正月日の和賀義綱軍忠状によると、同月18日北朝方の吉良貞経・和賀義綱らは「小曾沼城」・「一名坂城」を落とし、翌日「山村城」へ向かい、南部氏・浅利氏らを降している。「一名坂城」は現在の市名坂周辺にあったと考えられ、「小曾沼城」も市名坂の高玉町付近と考えられるが、いずれも場所を特定できない。「山村城」も実沢の山野内城とする説もある。

B　寺院跡

洞雲寺の縁起は、境内にある重興洞雲禅寺碑によると、慶雲年間定恵の開基という。暦応年間に領主国分盛胤が明峰素哲禅師を招請し、再興したといわれている。その後、応永年間に領主国分盛行の援助を受けた梅国祥三が堂塔を新営したといわれている。中世に洞雲寺が存在したことを確実に裏付ける資料としては、同寺所有の銅鐘（宮

城県指定文化財）がある。永正15年（1518）の紀年とともに龍門山洞雲禅寺の名が記されている。

平成４年の仙台教育委員会による発掘調査（仙台市教委：1993）の結果、中世の遺構は検出されなかったが、13～14世紀の中国産の天目茶碗や16～17世紀の中国産染付けの磁器、15世紀以降と考えられる遺物が出土しており、付近に中世の遺構が存在する可能性がある。

C　集落・水田跡

館跡以外の遺跡からも中世の遺構や遺物が発見されている。鹿島（第３図15）・竹之内遺跡（第３図19）（宮城県教委：1984）からは、常滑産と考えられる甕の胴部破片が１点出土しており、鎌倉時代と考えられている。

赤生津遺跡（第３図７）の調査（仙台市教委：1990）では、10世紀前半に降下した灰白色火山灰に被われた水田跡の上層に中世の水田があった可能性が高い。また土壙が３基検出されている。遺物では、13世紀前半以前の山茶碗系のもの、13～14世紀の中国産の青磁皿・白磁や北宋銭が出土している。

D　板碑

15基の板碑がある（泉市：1986）。七北田地区の永仁の碑１基（「バク」永仁２年）、松森地区の松森薬師堂板碑１基（「バン」）、西田中地区の柿屋敷板碑１基（「ア」）、根白石地区の弘安の碑１基（「バク」弘安８年）、新坂下板碑群２基（「キリク」乾元２年・「ア」）、館下板碑群３基（「キリク」・「キリク」延慶・「種子不明」）、福岡地区の慶得庵の碑１基（「キリク・サ・サク」の弥陀３尊）、小山板碑群２基（「バン」嘉元４年・「キリク」）、東泉板板碑群３基（「ア」・「サ」・「種子欠」）である。移動し原位置をとどめないものも多くあると考えられるが、板碑群の付近になんらかの中世の遺溝の存在が考えられる。

６．近世

A　近世の七北田村

現在の泉区には、松森・市名坂・七北田・野村・上谷刈・古内・実沢・小角・田中・根白石・福岡・朴沢の12ケ村があり、すべて宮城郡国分山根通に所属していた。

本遺跡から、近世の建物跡と井戸・屋敷墓が発見されているので、近世の七北田村周辺の様子を概観してみることとする。

「正保郷帳」には七北田宿と記載され、田26貫753文、畑35貫888文、新田633文とある。「元禄郷帳」には七北田村宿とあり、727石36斗とある。「天保郷帳」（内閣文庫「天保郷帳　陸奥　十四」）には、1605石５斗８升とある。「七北田村安永風土記」では田76貫964文、畑42貫188文で、内100貫356文が蔵入地で18貫796文は給所である。

当村に田宅を持つ100石の番士以上の者は、「伊達世臣家譜」（平：1978）から拾うと小島氏（950石）・小島氏（105石）・大塚氏（130石）・白土氏（虎間番士　364石８斗３升）の４家であった。また、「宮城郡国分屋敷銘委帳」（多賀城市：1988）によると、当村に居・侍屋敷を持つ藩士は、白土三左衛門（１軒）・古内木杢兵衛（３軒）・犬飼鎌（１軒）・小島庄三郎（１軒）・錦戸秀治（１軒）・安倍留一郎（１軒）の６人である。また、市名坂二柱神社の社家金剛院の寄進帳（七北田村：1966）によると、寛文10年には、藩士39名、同家中67名、文化８年には、藩士25名、同家中12名の名がみえる。また、明治９年の「宮城県地誌」によると七北田村には士族６戸（人口114人）とある。さらに、明治20年の戸籍には（七北田村：1978）、犬飼清長・沢崎直行・古内驍尾・犬飼成美・錦戸景訓・岡影行・高田短重・佐藤吉・吉川雅次・斎藤行明・白土愛次郎・佐々木広保・松田官蔵ら13人の名がみえる。また、「七北田村安永風土記」には八乙女の阿弥陀堂は、犬飼清蔵の知行所の内とある。また同書には須釜御林が以前、鈴木治太夫・犬飼多利之丞の御預林だったとある。

次に農民をみていくことにする。寛文11年の「松森熊野堂建立勧進帳」（七北田村：1978）に見えた寄進者数は50人である。明和９年の「封内風土記」には人頭85戸、安永３年の「七北田村安永風土記」によると人頭69人で浄満

寺１人、家数96軒（名子・借屋を含む）、男女都合485人、内男266人、女219人、馬76疋とある。天明元年の「市名坂金剛院書出」（七北田村：1978）には人頭67、借家28、文化８年「市名坂金剛院神社明細帳」（七北田村：1978）には人頭54、文政12年の「市名坂金剛院書出」（七北田村：1978）には人頭60、借家10とある。

これら農民の内、代数有之百姓・品替百姓は「七北田村安永風土記」によると17人である。これらはいずれも町屋敷に住居し、代数有之百姓には、検断の新三郎、組頭の山三郎・与三郎・五兵衛・小肝入の覺左衛門、並御百姓の七右衛門・三治・弥左衛門・新助・権兵衛・文八郎・甚兵衛・八五郎・平六・新兵衛・勘右衛門、品替百姓には、検断の新三郎の高祖父重兵衛である。他に名が見えるのは、肝入の仲四郎、雷神社の地主で町屋敷に居住する百姓圓之助、熊野三社の地主で町屋敷の百姓清三郎、薬師堂の地主で町屋敷の百姓嘉吉、孝子として山守屋敷の久兵衛・よね兄妹の名がある。また「七北田村安永風土記」によると小名として、赤坂、中新田・赤生津・須釜・前沖・日向坂・白水坂・狐沢・丹波沢・大欠新田・柏方・東裏・菅ノ田とともに高柳という名がみえる。屋敷名としては町屋敷が57軒・八乙女屋敷が５軒・山守屋敷が２軒・台屋敷が２軒・西原屋敷が２軒とある。

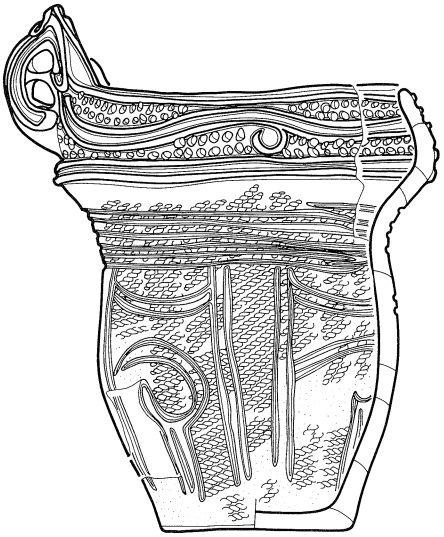
B　近世の遺跡

近世の遺跡としては、昭和57年に調査（泉市教委：1984）を実施した松森焔硝蔵跡（第３図27）がある。現在のところ初出の文献は、正徳５年（1715）の「軍器秘数」で、仙台藩焔硝蔵として砂押御蔵・若林御蔵・鷺ケ森御蔵・山中御蔵・辰ノ口御蔵とともに松森浦田御蔵の名が見える。宝暦６年（1756）の「藩秘録」には若林を欠く５ケ所の名がある。

残存していた３基の内、２基の調査が行われ１基は保存されている。調査の結果（泉市教委：1982）１号焔硝蔵跡は、東西約45ｍ×南北約31ｍの規模で、内部は15.5ｍ×17.0ｍの長方形を呈し土塁を巡らしている。この土塁は、下端5.3～8.4ｍ、上端0.9～2.0ｍ、高さ2.3～2.9ｍの大規模なものである。内部には梁間15尺、桁行30尺で３間×５間の建物が１棟ある。掘り方底面に石を置き、その上に根石を敷き礎石を据えるという堅固な下部構造となっている。建物を取り囲んで敷石があり、入口まで続いている。敷石の周りには溝を巡らしており、排水溝と考えられる。これら建物跡・敷石・溝の下から14×17ｍの不整形で断面が摺鉢型で深さが1.6ｍある穴が検出された。火薬の爆発によって生じた爆発穴と考えられる。建物跡・敷石・排水溝は爆発後に生じた爆発穴を埋めて構築されたものである。建物跡周辺や溝からは、桟瓦・片切平瓦・軒瓦・丸瓦・棟瓦・熨斗瓦等が出土しており桟瓦葺と考えられる。１号焔硝蔵跡の北隣にある２号焔硝蔵跡は、東西約32ｍ×南北約19ｍの規模で内部に11.4×13.6ｍの不整形で断面が摺鉢型の穴があり１号焔硝蔵跡と同様爆発穴と考えられている。２号焔硝蔵跡は、爆発後廃棄されたと考えられる。２号焔硝蔵跡の北隣にある３号焔硝蔵跡は、もっとも保存状態が良いため保存されており、現存する仙台藩焔硝蔵跡唯一のものである。東西40ｍ×南北27ｍの規模で高さ3.3ｍ以上の土塁を巡らしている。これら焔硝蔵跡の創建年代は「軍器秘数」や「仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調」から元禄５～６年以降、正徳５年以前と考えられている。爆発年代・再建年代とも不明であるが、明治初期には廃絶している。

平成４年の仙台市教育委員会による洞雲寺遺跡の発掘調査（仙台市教委：1993）の結果、安永４年に建立され、昭和18年に焼失した開山堂の礎石が検出された。開山堂を構築するための地業は、斜面を削平し斜面下に盛土をして平場を造成しており、旧地形を大きく改変するものだった。平場に礎石を据えるための掘り方を掘り、根石を敷いて礎石を設置している。斜面を削平して岩盤が露出している部分の礎石は小さく、盛土をして地盤の弱い部分には大きめの礎石を据える等の地業の工夫が見られる。礎石下部に敷かれた根石の中には墨書痕のあるものが９点出土しているが性格は不明である。現庫裏東方の平場から土壙を27基検出している。土壙の壁が焼けているものや堆積土中に焼土があるものがあり、古銭・煙管や骨片が出土しているので、火葬に関わる土壙と考えられている。

第Ⅲ章　調査の経過と方法



第Ⅲ章　調査の経過と方法

第１節　野外調査の経過と方法

１．野外調査の経過

平成元年５月１日（月）より、調査員佐藤・工藤とスタッフ33名の体制で調査を開始した。調査地点は居久根の杉林と近世の墓地跡、これらの南の畑地、北の水田とであった。北側の水田をⅠ区、杉林をⅡ区、畑をⅢ区として調査を進めることとした。調査開始時点で杉林は伐採が完了し、墓地は地表に露出している墓石は撤去が終わっていた。杉林の伐採後の下枝を搬出して清掃したところ、地表面で多量の土器片を採取することができ、良好な遺物包含層の存在が予想できた。そのため杉林の抜根作業は慎重を要するため、七北田川に隣接する調査区北部の水田であるⅠ区から調査を開始することとした。水田耕作土を除去した地山面で、土壙や竪穴遺構、溝などを検出した。南の杉林のⅡ区寄りにわずかに包含層が残存していた。

水田のⅠ区の遺構検出・精査と一部並行して、５月11日より杉林のⅡ区の抜根作業を行った。抜根にはツンドラ地帯の溝掘削に使われているツインヘッダーで根の大きい部分を粉砕してチップ状にし、細い根はチェンソーおよびノコギリを使った。

５月22日からバックホーによってⅡ・Ⅲ区の表土除去作業に取りかかった。その結果、表土中から多くの礫が出土し、しかも規則的に配置されているものであることが判明した。これら礫群は墓地があった場所と略一致していたため、墓石下の石組と判断された。

６月12日からは、地表の遺物散布状況からもっとも多量に遺物を包含していると推定されるⅡ区の状況を知るためⅡ区南端の28・29区を先行して調査することとした。その結果、１層表土下には遺物を多量に包含する４つの層が存在することが明らかになった。しかもこの包含層はⅡ区を中心にⅢ区までひろがることも判明した。

６月30日には水田地区の精査が略完了したため、Ⅱ区に主力を注ぐこととし、近世墓壙群を除いたⅡ区北半の表土下の包含層の精査にかかった。日毎に出土遺物が増えていった。

７月５日、北仙台小学校第６学年ＰＴＡの父兄24名が体験学習として発掘調査に参加した。

７月10日から近世墓壙群の石組の実測を開始する。石組の観察の結果、約31組の石組があることが判明し、それぞれの石組下部に墓壙の存在が予想された。

当初想定したよりも良好な遺物包含層が存在し、出土遺物も多量であるため、調査計画を再検討する必要が出てきた。そこで、８月９日に交通局高速鉄道部と調査日程について再協議を行った。当初の計画では８月末に調査完了の予定であったが、10月21日までに調査を完了するということになった。

８月10日から石組をはずしながら下部の墓壙の検出作業と精査を開始する。

９月12日に近世墓壙群の精査を完了し実測にとりかかった。合計34基の墓壙群であった。近世墓壙群の実測と並行して、Ⅱ区南半の包含層の精査にとりかかった。

９月18日からは調査員２名（吉岡・荒井）を増員し、Ⅲ区の精査にとりかかった。Ⅲ区はⅡ区の包含層程遺物の出土量は多くないが、近世の井戸とピット群を検出した。

さらに、９月26日から調査員２名（高倉・渡部）、10月２日から調査員１名（篠原）を増員し、10月は調査員計７名、スタッフ98名の体制で調査を進めた。

10月５日には調査の略全容が明らかになったので報道機関に公開し、７日に一般市民を対象に現地説明会を実施した。一般市民・研究者約100名の参加があった。

10月21日には、土層断面図・調査区全景写真・花粉分析及び脂肪酸分析用の土壌サンプリングを行い調査の一切を完了した。５月１日からの実働日数106日であった。

２．野外調査の方法

A　調査区の設定

八乙女駅から北上する高速鉄道の計画路線敷は、遺跡内をやや東にカーブしながら北上している。そこで調査区の設定にあたっては、工事に係わる与点1P-3 と1P1-4 の線上に任意の点③と⑥を設定し、③の点で直交する①•②•③•④を設けて基準線とした。標高は与点の水準点 No301（標高 22.356 m）を基準とした。各点の国家座標及び標高は以下の通りである。

	X座標	Y座標	標　高
①	−187,269.482	4,493.380	21.841
②	−187,238.275	4,482.651	21.954
③	−187,212.742	4,473.873	21.972
④	−187,184.372	4,464.119	22.171
⑤	−187,156.002	4,454.366	22.012
⑥	−187,208.841	4,485.221	22.229

これら点③～⑥と、これに直交する点①～②～④～⑤を基準線として３m 区画のグリッドを設定した。地区名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で表し両者の組み合わせで呼ぶこととし、点③の南東の区をAE21 区と定めた。また南北に長い調査区なので、水田のある13区以北をⅠ区、杉林のある14～29区をⅡ区、Ⅱ区をさらに20区以北のⅡ区北半と21区以南のⅡ区南半とし、30～38区をⅢ区として調査を進めることとした。Ⅱ・Ⅲ区に分布する３層以下の各層については３m 区画のグリッドを1.5 m 区画の小グリッドに４分割して遺物を取り上げた。それぞれの小グリッドは、北西をａ区とし時計回り方向にそれぞれｂ・ｃ・ｄ区とした。

B　調査の方法

[遺構調査の方法]

検出した遺構は、下記のように遺構の種類毎にアルファベットの記号を使い、発見順にアラビア数字の番号を付けて登録した。

各遺構の堆積土の精査にあたっては、廃絶後の周辺からの土砂流入状況を把握するため、４分割もしくは２分割した断面観察用のベルトを残して調査した。

ＳＢ：掘立柱建物	ＳＤ：溝	ＳＥ：井戸	ＳＩ：竪穴遺構
ＳＫ：土壙	ＳＮ：配石遺構	ＳＭ：墓壙	ＳＸ：風倒木痕

[遺物の取り上げ方法]

出土した遺物は遺物カードに必要事項を記入して取り上げた。左側は切り取り遺物と一緒に収納し、右側を「出土遺物台帳」とした。最終的には遺物番号 No1～10025 まで取り上げた。

遺構のうち、竪穴遺構（SI）・井戸（SE）・風倒木痕（SX）については４分割し、土壙（SK）・墓壙（SM）は２分割して、それぞれ分割した小区ごとに取り上げた。

包含層出土の遺物については、比較的まとまりがある状態で出土した縄文土器は1/10の平面図を作成し、ナンバ

ーを付して取り上げた。その他の小破片の縄文土器は、区・層ごとにまとめて取り上げた。

遺跡名	89高柳	遺物番号	
年月日		種別	
地区名		遺構名	
層位	層	細部	
出土状況・遺存状況・その他			
写真	無・有［MC　・RB］		
実測	無・有［No　・No］		
保管場所			

遺跡名89高柳
遺物番号
年月日
地区名
細部
層位
層

［実測図の作成方法］

（断面図）

各遺構の堆積状況を観察するために残したベルトの断面図を1/20で作成した。堆積土の色調・土質・土性の特徴を合わせて記録した。

（平面図）

国家座標の確定している点①～⑥を基準点とした簡易な遣り方測量によって平面図を作成した。平面図にはそれぞれ標高を記入してある。遺構および調査区内の平面図は1/20で作成したが、包含層の遺物出土状況および遺構内の遺物出土状況については1/10とした。

［写真記録の方法］

写真記録としては、35 mm 版モノクロ写真と 35 mm 版カラーリバーサル写真（スライド用）を併用した。重要な記録の一部は、６×4.5インチ版モノクロ写真・６×７インチ版モノクロ写真・６×７インチ版カラー写真を適宜使い分けて記録した。空中写真は委託とし、ラジコンヘリコプターを使って６×4.5インチ版モノクロ写真と６×4.5インチ版カラー写真を撮影した。

35 mm 版カラーリバーサル写真は遺構ごと、包含層遺物出土状況は地区ごとに整理してスライドファイルに収納した。重要なものについてはデュープして保存した。カラーリバーサル以外のモノクロ写真は、すべてベタ焼きしネガアルバムに収納した。

各遺構については原則として、検出面での確認状況写真、断面観察用のベルトの堆積状況写真、完掘状況写真を撮影し、適宜細部写真や遺物出土状況写真を撮影した。

遺物包含層については、出土状況を実測したものと土偶などの特殊な遺物の出土状況を撮影した。その他必要と判断されたものについては適宜撮影し記録した。

［その他の記録方法］

調査経過や調査内容中重要なものは、調査日誌に記録した。

第２節　室内調査の経過と方法

１　室内調査の計画と経過

膨大な遺物量のため室内調査は困難が予想された。そこで効率的な室内調査を運営するため、計画的な室内調査を実践するよう努めた。５年間を通した「長期計画」・年度毎の「中期計画」・月毎の「短期計画」をそれぞれ年度当初・月当初に策定し調査を進めた。月毎の「短期計画」は実績記録としての性格となり、実績記録を基に「中期計画」を修正しながら「長期計画」実現を計った。

また室内調査を実施するにあたっては、それぞれの調査工程の流れを視覚的に把握することを主なねらいとし、第４図のようなフロチャートを作成して進めた。当初の「長期計画」とは行程の細部で違いが出てきたが、最終的な期間と予算は略当初策定した「長期計画」通りであった。

２　室内調査の方法

Ａ　遺物の洗浄

［縄文土器］

平箱約1,000箱、総重量約4.9ｔ（洗浄後）という多量の縄文土器の洗浄作業には膨大な時間と予算を要する。限られた時間と予算の中で効率的な洗浄作業を進めるには、どんな方法が効率的なのかを検討した。

洗浄方法についての実験

（実験目的）

従来から実施しているブラシ使用の洗浄方法と、高圧洗浄機による洗浄法の作業量、及び土器の状態（乾湿の有無）の違いによる作業量を比較検討してみた。

（実験方法）

［１］洗浄対象

酸性の強い包含層出土のもので保存状態は良好とはいえない。比較資料の均質化を計るため、任意に抽出した縄文土器（保存状態の良・不良、破片の大小関係なく）を洗浄対象とした。

［２］作業量の比較方法

洗浄した縄文土器の重量で作業量を比較する方法をとった。

［３］洗浄方法

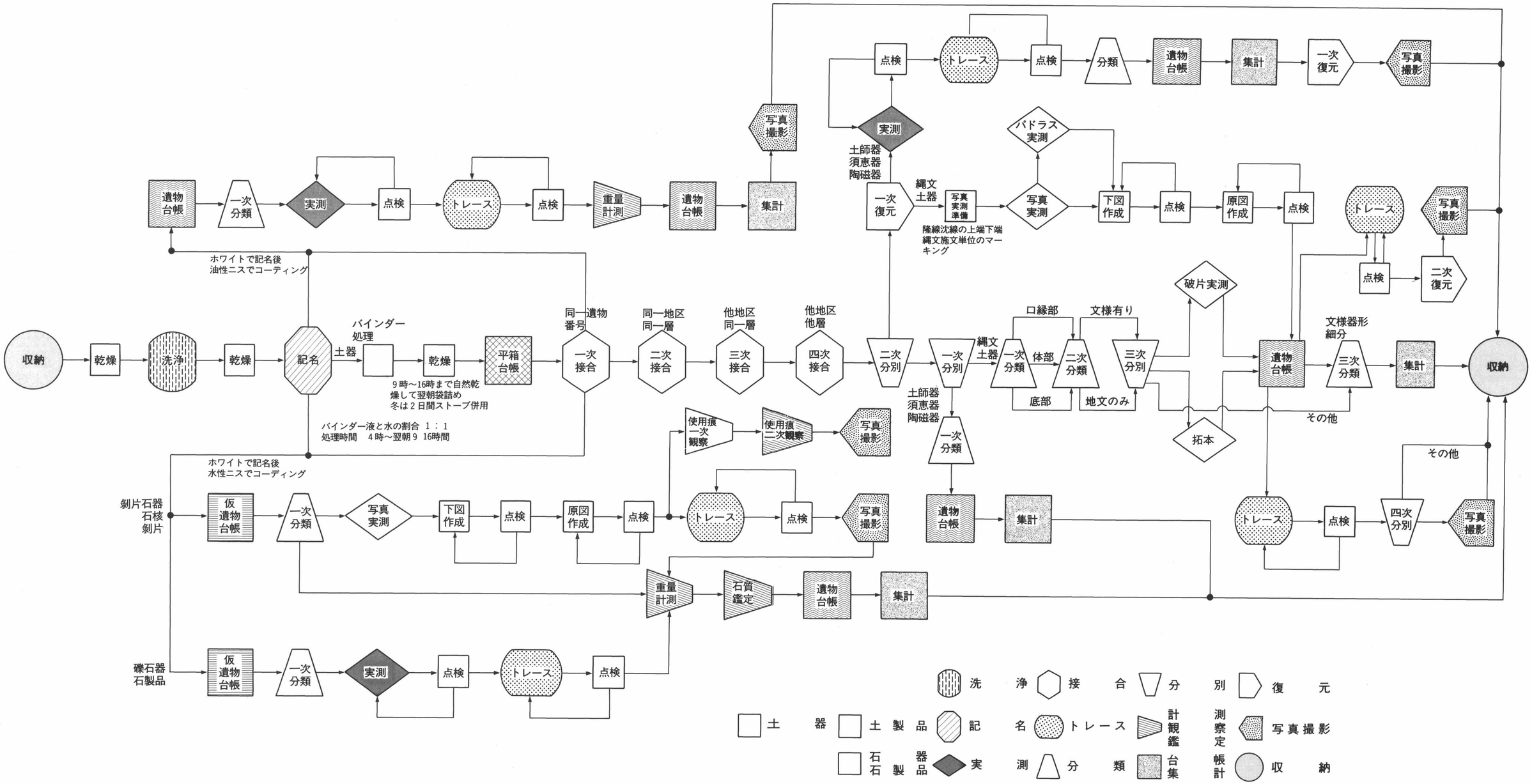
（１）手洗い　　輸入天然軟毛のブラシを使用し、２～３人１組となって洗浄した。

（２）高圧洗浄機　５人１組とし、１台の洗浄機に３つのノズルをつけそれぞれ一人づつ３人があたった。残り２人は保存状態が悪く、高圧洗浄機の使用に耐えられないものや高圧洗浄機で落ちないものを手洗いで補備洗浄をした。

機器仕様　全長 680 mm・全幅 423 mm・全高 800 mm・重量 28 Kg
ポンプ圧力 30～35 Kgf/cm²・回転数 1720～1430 rpm
「スカッシュ　HPJ-８　鶴見製作所㈱」

［４］洗浄者

土器洗浄の経歴年数が同じ女子のなかから10名を抽出して実験することにした。10名を５人１班のＡ・Ｂの２班としできるだけ各班が洗浄機と手洗いを交互に作業できるようにした。



第4図　室内調査行程フロチャート図

［５］土器の状態

以下のような３つの状態でそれぞれ作業量を比較することとした。

「普　通」――出土時のままポリ袋に収納した状態で若干湿っている状態。

「乾　燥」――天日に約１日（９時～３時）干して乾燥した状態。

「水付け」――水に略２昼夜浸した状態。

（実験結果）

実験１～18まで実施したが、詳細については省略する。

（結果の分析）

［１］作業量の個人（グループ）差について

班間の作業量を比較してみた。高圧洗浄機使用・手洗い、土器の状態が普通・乾燥・水付けいずれの場合もＡ班がＢ班を上回る作業量であり、班間の間に作業量の差が見られた。しかし、手洗いの場合には作業量の差が大きいが、高圧洗浄機使用の場合には小差である。個人差の少ない高圧洗浄機による洗浄方法は積算する上で都合がよい。

洗浄方法	土器の状態	Ａ班			Ｂ班			Ａ班対Ｂ班の比率 Ａ：Ｂ
		総洗浄量	延人数	一人あたり洗浄量	総洗浄量	延人数	一人あたり洗浄量	
高圧洗浄機使用	普通	94.46 kg	20人	4.72 kg	41.93 kg	10人	4.19 kg	1.1：1
	乾燥	37.82 kg	5人	7.56 kg	64.67 kg	10人	6.47 kg	1.2：1
	水付け	31.79 kg	5人	6.36 kg	24.10 kg	5人	4.82 kg	1.3：1
手洗い	普通	45.03 kg	14人	3.22 kg	38.03 kg	18人	2.10 kg	1.5：1
	乾燥	27.50 kg	6人	4.68 kg	15.68 kg	5人	3.14 kg	1.5：1

［３］高圧洗浄機と手洗い、土器の状態の相違による作業量について

高圧洗浄機使用と手洗いを比較した場合、高圧洗浄機の作業量が上回り、約1.8倍の効率化がはかれる。土器の状態によっても作業量の効率化がはかれることもわかった。水付けの場合、普通状態よりも効率が良いが保存の悪い土器が溶け出したため中止した。普通状態と乾燥状態のものでは、乾燥した土器を洗浄した方が1.5倍の効率化がはかれる。

	高圧洗浄機使用			手洗い			比率
	総洗浄量	延人数	一人あたり洗浄量	総洗浄量	延人数	一人あたり洗浄量	洗浄機：手洗い
普　通	136.39 kg	30人	4.55 kg	83.06 kg	32人	2.60 kg	1.8：1
乾　燥	102.49 kg	15人	6.83 kg	43.18 kg	11人	3.92 kg	1.7：1

全　体	238.88 kg	45人	5.31 kg	126.24 kg	43人	2.94 kg	1.8：1
水付け	55.83 kg	10人	5.88 kg	／	／	／	／
普通：乾燥	1：1.5			1：1.5			

［4］効率的な高圧洗浄機の活用法

手洗いよりも高圧洗浄機（5人1組で内2名が手洗いによる補備洗浄）による洗浄がより効率的で、さらに縄文土器が普通状態（湿っている）よりも乾燥状態の土器を洗浄した方が効率化を計れることが明確になった。次に高圧洗浄機と手洗い洗浄（機械洗浄の補備洗浄）の組合わせによって、全体の作業量を向上するための実験を実施した。その結果土器が乾燥状態の場合、最終的には高圧洗浄機1台による1日の洗浄量が100 Kgまで可能で、補備手洗いの人数も15人位で充分なことが分かった。18人1組で1台の高圧洗浄機（ノズルに3名）と15人位の補備手洗いで、手洗いだけの作業量の1.7倍の効率化をはかれる。実験以前の方法(手洗いで土器が普通状態の場合）とでは2.5倍の効率化がはかれることが明らかとなった。

［5］土器の洗浄状態

保存状態の悪い土器については、高圧洗浄機による洗浄時に注意を要するが(補備手洗いにまわす)、全体的に手洗いと比較して遜色はない。むしろ、凹凸の多い土器や断面の洗浄には高圧洗浄機の方がよりきれいに洗浄できる。

(まとめ)

（1）大量に出土した縄文土器の洗浄法は、従来の手洗いよりも高圧洗浄機による方法が効率的である。

（2）保存の良好でない包含層出土の縄文土器の洗浄は、高圧洗浄機と手洗いの組合わせ方式が効率的である。

（3）縄文土器の洗浄にあたっては、出土時のやや湿った状態よりも、乾燥させた方がより効率的である。

（4）手洗洗浄には個人差が大きいが、高圧洗浄機にはあまりない。

上記実験結果を踏まえ、縄文土器の洗浄は天日で1日乾燥させ、高圧洗浄機と手洗い（保存状態が悪く高圧洗浄機の使用に耐えられないものや、高圧洗浄機で汚れの落ちないものは手洗いで補備洗浄した）の組み合わせで洗浄した。

また、全体的に保存が良好とはいえないので、洗浄後すべてバインダー25による強化処置を行った。バインダー25を水で半分に希釈し、一昼夜浸した。

[縄文土器以外の遺物]

土製品・剝片石器・石製品等は縄文土器よりも数が少ないので、従来通り手洗いで洗浄した。礫石器は点数が多いので縄文土器と同じように高圧洗浄機と手洗いの組み合わせで洗浄した。

B　遺物の記名

[縄文土器]

すべての破片に遺跡名・調査年次・地区名・層位・遺構名を記入することとした。膨大な作業量になるため、効率的な記名作業を進めるための方法を検討してみた。

遺物記名の実験

（実験目的）

従来から実施している筆を使った手作業による記名法と、ゴム印を使った記名法の作業量を比較することによって、どの程度の効率化を進めることができるのか比較検討してみた。

（実験方法）

［１］記名対象

比較資料としての均質化を計るため、任意に抽出した縄文土器（保存状態の良･不良、破片の大小関係なく）を記名対象とした。

［２］作業量の比較方法

作業量は記名した破片の点数で比較する方法をとった。流れ作業の場合は１人あたりの作業量を破片点数でだした。１日を通しての作業量の比較が困難であったため、１時間単位の作業量を比較することとした。

［３］記名方法

Ａ　手作業

Ｂ　ゴム印＋手作業（Ｂ１－１人による作業・Ｂ２－２人による流れ作業・Ｂ３－３人による流れ作業）

（１）手作業

面相筆を使い、ポスターカラーのホワイトで記名した。記名後水性ニスでコーデング処理した。

（２）ゴム印＋手作業

保存状況が悪く土器の表面がざらざらしているためゴム印のインクがのりにくかったり、色調が黒の土器片については、手書きで記名した。記名後水性ニスでコーテング処理した。ゴム印用のインクには強着スタンプ台多目的タイプ（油性顔料系黒）を使用したが耐久性に問題はなかった。ゴム印には６号明朝体（数字・英文字）を加工して使った。文字間隔を密にし、土器の曲面に対応できるようにゴム印の長軸の両側面を削り落とし、手で持つ側をゴム印側よりも薄く加工して使った。更に小さい７号で捺印すると文字がつぶれてしまう。

（実験結果）

33回の実験を実施したが、詳細については省略する。

（結果の分析）

［１］作業量の個人差について

手書きの場合には、明らかに個人差があり、最大と最小の比率は１：2.3となる。

	手　書　き				手　書　き		
	1人1時間延べ点数	回数	平均		1人1時間延べ点数	回数	平均
Ａ氏	277点	２回	139点	Ｅ氏	134点	１回	134点
Ｂ氏	313点	２回	157点	Ｆ氏	94点	１回	94点
Ｃ氏	212点	１回	212点	総計	1140点	９回	127点
Ｄ氏	110点	１回	110点				

［2］習熟の度合いについて

手書きは熟練を要するが、ゴム印方式は熟練を要しないので習熟にさほど時間は必要でない。

［3］手書きとゴム印方式による作業量について

手書き方式よりも、ゴム印方式の方が1.6倍効率的であることがわかった。しかも、2～3人組合わせの流れ作業方式よりも1人での作業が効率的である。

作業方法		総記名点数	延べ人数	1人1時間点数	比率
					手書：ゴム印
手書き		1140点	9人	127点	／
ゴム印	1人	2000点	10人	200点	1：1.6
	2人流れ作業	2563点	20人	128点	1：1.0
	3人流れ作業	1337点	12人	111点	1：0.9

［4］記名文字の状態

保存状態が良好なものは、ゴム印の文字が鮮明で仕上がりが良好であるが、保存の悪いものは手書きによる手直しが必要である。また、バインダー処理前より処理後の方がインクののりが良好である。更に保存が悪いものはバインダー処理後水性ニスでコーティングした後の方が良好である。

（まとめ）

全般的に実験データーが不足しているが、今回の実験の結果から、従来の手書き方式よりもゴム印方式が効率的で初心者でも簡単に作業ができる。また手書き方式よりも作業の疲労度が極めて少ない。

上記実験結果を踏まえ、縄文土器の記名作業は手書き方式とゴム印方式を併用して実施した。

［縄文土器以外の遺物］

他の遺物の記名は従来通り毛筆による手書きとした。

C　遺物の接合

［縄文土器］

膨大な量と、限られた作業空間という制約のため以下のように4段階にわけて接合作業を実施した。一次接合と二次接合は十分にできたが三次接合と四次接合は十分とは言い難かった。

一次接合		二次接合		三次接合		四次接合
同一遺物番号	⇨	同一地区同一層	⇨	他地区同一層	⇨	他地区他層

［土製品・石製品・礫石器］

いずれも個体数がかぎられているので、それぞれの接合作業を実施した。

［剝片石器］

剥片を含めると膨大な数量のため、接合作業を実施することができなかった。

D　遺物の登録

遺物の登録にあたっては便宜的に以下の記号を使用し、全ての遺物を登録台帳に記載して登録した。ただし縄文土器については膨大な量のため、図上復元可能なものと、立体的な突起をもつもの、大型の破片、特徴ある文様を持つもの以外は登録しなかった。

［縄文土器］
P：縄文土器
［縄文土器以外の土器］
A：土師器　B：須恵器　C：赤焼土器　D：陶磁器　E：その他
［土製品］
A：土偶　B：円板状土製品　C：袖珍土器　D：その他の土製品
［礫石器］
A：凹石　B：敲凹石　C：敲石　D：敲磨石　E：石皿　F：磨石　G：その他
［石製品］
A：石製品　G：磨製石斧　H：珪化木製（B～F は欠番）
［剥片石器］
A：石鏃　B：石匙　C：石錐　D：石篦　E：尖頭器　F：不定形石器
G：楔形石器　H：二次加工剥片　I：微細剥離痕ある剥片　J：石核　K：剥片　L：その他

E　遺物の実測

遺物の数量が多いため、実測図作成の効率化を計る必要があったため、以下のような方式を遺物の特性に応じて使い分けた。

［写真実測］――――――――大型・中型の縄文土器、剥片石器
［ニシオグラフによる実測］――小型の縄文土器、縄文土器の破片・土製品・石製品
［手実測］――――――――礫石器・無文の縄文土器と断面図

［縄文土器］

膨大な数量のため、大型や中型の土器はスリット撮影方式で正射投影撮影した写真から実測図を作成した。写真撮影は委託とし、原寸大に焼き付けた写真から1/1の実測図を作成した。小型の土器及び立体的突起や把手を持つものはニシオグラフで実測し1/1の実測図を作成した。無文の土器及び断面図はいずれも手実測で作成した。

写真実測したものは、マイラー（トレーシングフィルム）に鉛筆を使って原図を作成した。縄文土器の原図には地文の施文原体の種別（RLR・LRL・RL・LR・R・L・r・l）と施文方法（方向・工程）と節の単位を線描し、縄文はトレースの段階で入れた。

文様展開が複雑なため、実測したものについてはできるだけ展開図を作成するよう努めた。展開図は文様構成が理解できることに主眼を置くこととし、展開拓影図を作成しこの拓影図から1/2の展開図を作成した。

図上復元が不可能な大型の破片や、特徴のある文様を持つ縄文土器片については拓影図を作成した。拓影図は隆

帯・隆線と沈線の区別が付くようコピーした拓影図を黒ペンで補正している。

[剝片石器]

縄文土器と同じように、スリット撮影方式で正射投影撮影した写真から実測図を作成した。写真撮影は委託とし２倍に焼き付けた写真から2/1の実測図を作成した。

[土製品・石製品]

ニシオグラフで実測し1/1の実測図を作成した。

[礫石器]

礫素材の形態と使用痕跡に重点を置いた実測図を作成した。素材の輪郭と使用痕跡の範囲のみを実測した。

F　遺物のトレース

それぞれの遺物の特性に応じて以下のようにトレース基準を定めた。

第２表　遺物トレー基準

縄文土器　縮尺1/3		土製品　縮尺1/2		剝片石器　縮尺2/3	
外形線	━━ 0.8	外形線	━━ 0.6	外形線	━━ 0.5
欠損部	─── 0.1	欠損部　外形	─── 0.3	折損部	─── 0.4
隆線　上端	━━ 0.6	範囲	─── 0.1	剝離痕	─── 0.3
下端	─── 0.1		スクリートン	リング	─── 丸ペン
沈線　上端	─── 0.3	剝離部　範囲	─── 0.1	フイッシャー	─── 丸ペン
下端	─── 0.1		スクリートン	バルブ	─── 丸ペン
縄文	─── 0.2	隆帯　上端	─── 0.6	バルバースカー	─── 丸ペン
		下端	─── 0.1	礫面	ドット　0.1
		沈線　上端	─── 0.3	節理面	スクリートン
		下端	─── 0.1	焼面	スクリートン
		稜線	┈┈ 0.2	パティナ	スクリートン
礫石器　縮尺1/3		**磨製石斧　縮尺2/3**		**石製品　縮尺2/3**	
外形線	━━ 0.6	外形線	━━ 0.6	外形線	━━ 0.6
欠損部　外形	─── 0.3	欠損部　外形	─── 0.4	欠損部　外形	─── 0.4
範囲	─── 0.4	範囲	─── 0.3	範囲	─── 0.2
凹痕	ドット　0.1	リング	─── 丸ペン	稜線	ドット　0.1
敲凹痕	ドット　0.1	フイッシャー	─── 丸ペン		
敲打痕	ドット　0.1	稜線	┈┈ 0.3		
磨痕　痕跡範囲明瞭	─── 0.1	敲打痕　研磨以前	ドット　0.1		
	スクリートン		スクリートン		
痕跡明瞭	┈┈ 0.1	研磨以後	ドット　0.1		
	スクリートン				
その他	スクリートン				
敲痕跡　範囲	─── 0.1				
	スクリートン				
ヒビ痕	─── 0.1				

G　遺物の計測

各遺物の特性に応じた計測基準を定めて計測作業を進めた。数量が多い遺物は、計測者も多数で実施したため、計測誤差が懸念された。そこであらかじめ測定誤差を調査した上で計測作業を行った。各遺物について測定誤差を検証したが、ここでは礫石器の測定値の資料を取り上げる。

計40個の礫石器を８名が計測した計測値をまとめたのが第３表である。それぞれ１個について８名が計測した値の最大値と最小値の差をしめしている。長さの最大が 3.2 mm 最小が0.2で平均 1.10 mm である。幅の最大が 3.1 mm・最小が 0.3 mm で平均 1.08 mm、厚さの最大が 4.7 mm・最小が 0.4 mm で平均 1.61 mm あった。礫石器の計測値上問題がないと判断した。尚、正確を期すため、１個の礫石器を２名が計測しその平均値を計測値し、２名の計測値が 3 mm 以上のものは、再計測した。他の遺物についても同様の方法をとった。

第３表　礫石器計測値検証資料

登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ	登録番号	長さ	幅	厚さ
A1	1.2	0.7	1.1	A11	0.4	0.5	2.4	A21	0.4	2.0	0.8	A31	1.7	0.9	1.1
A2	0.9	0.9	0.8	A12	0.8	1.2	4.3	A22	0.5	0.5	0.6	A32	0.7	0.9	1.8
A3	1.1	0.8	1.1	A13	0.4	1.5	1.5	A23	1.0	0.9	0.7	A33	2.9	2.2	2.0
A4	0.7	1.0	1.0	A14	0.6	0.9	2.2	A24	2.6	0.9	1.2	A34	1.4	1.8	0.8
A5	0.7	1.0	1.2	A15	0.2	0.2	0.9	A25	3.2	0.3	3.7	A35	0.6	0.4	1.5
A6	0.8	0.6	0.9	A16	0.8	1.6	1.2	A26	1.2	0.5	0.4	A36	0.3	0.3	0.9
A7	0.8	0.7	4.7	A17	1.6	1.6	0.8	A27	0.9	0.9	1.4	A37	0.9	0.9	3.0
A8	0.9	0.9	1.2	A18	0.9	1.2	3.8	A28	0.6	2.0	0.4	A38	0.7	0.5	1.4
A9	0.3	1.0	1.1	A19	0.4	1.1	2.4	A29	0.7	0.6	3.1	A39	0.7	3.1	2.1
A10	1.3	0.9	0.5	A20	0.9	0.6	0.8	A30	1.6	1.7	1.6	A40	1.4	2.9	1.2
												平均	1.10	1.08	1.61

［縄文土器］

第５図の要領で口縁部径・口縁部最大径・口頸部径・胴部径・底部径・器高を計測した。図上復元した計測値は括弧でくくった。

［土製品］

それぞれの種別ごと第５図の要領で計測した。

［剝片石器］

それぞれの器種ごと第５図の要領で計測した。

［礫石器］

礫石器の長・幅・厚、敲磨の痕跡をもつものは敲磨長・敲磨幅を計測した。

［磨製石斧］

第５図の要領で計測した。

Ｈ　遺物の重量計測

［縄文土器］

縄文土器出土量を客観的に捉えることを目的に重量を計測した。洗浄・記名が終わった段階で全ての縄文土器の重量を計測した。重量計測には台秤を使用した。

［土製品・剥片石器］

重量計測には電子天秤を使用した。

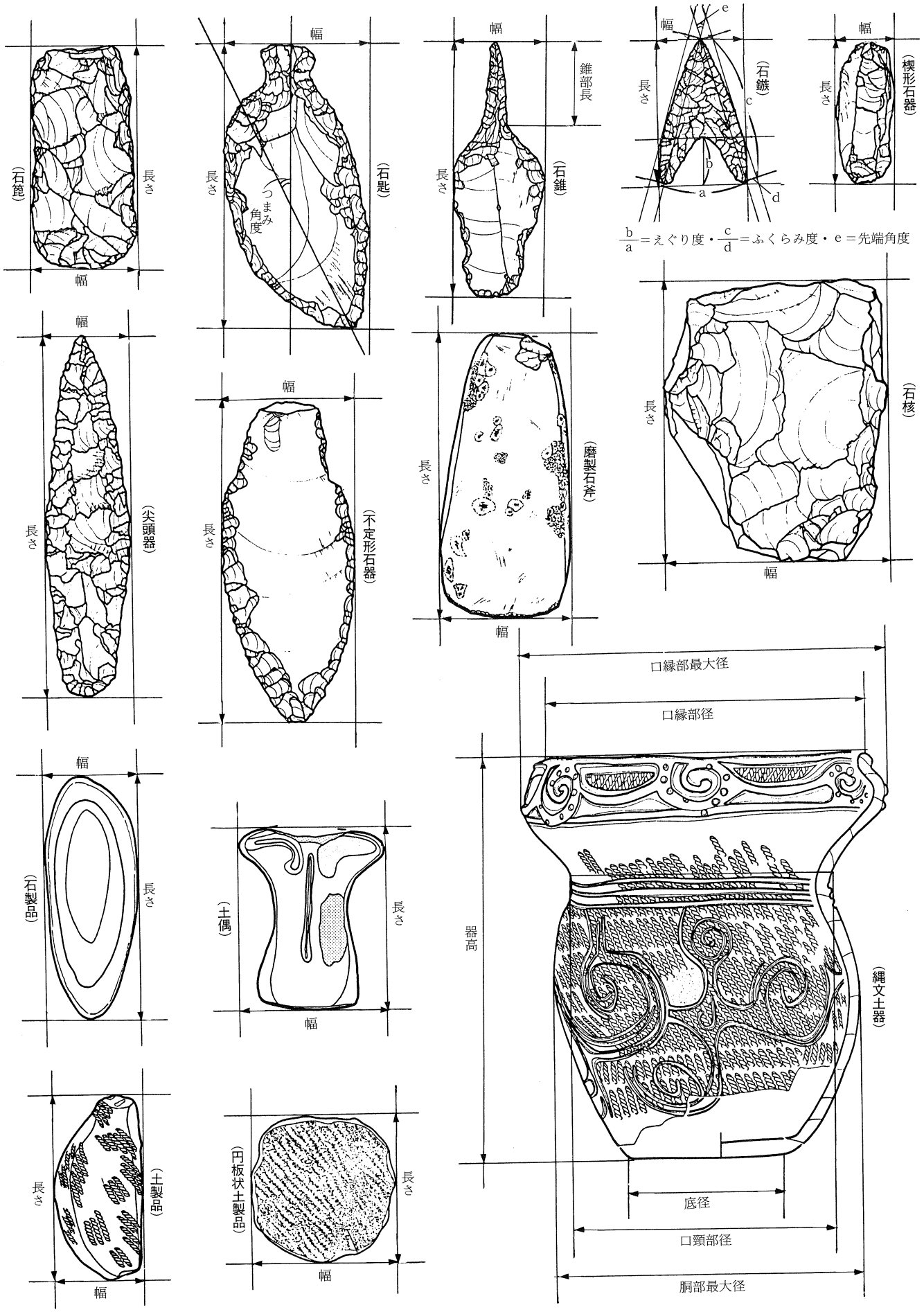
［礫石器・石製品］

重量計測には台秤を使用した。

Ｉ　石材の鑑定

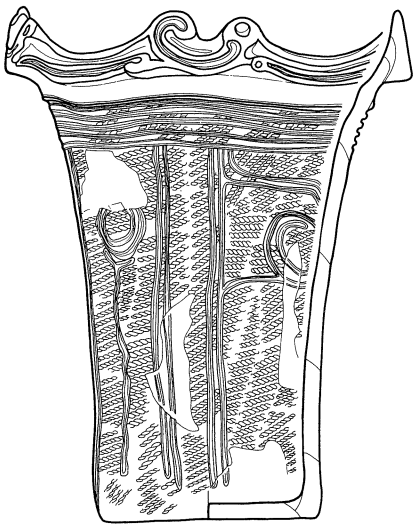
［剥片石器］・［礫石器］・［石製品］

剥片石器・礫石器・石製品とも膨大な点数のため、石材鑑定にあたっては、肉眼観察で違う石材と想定されるものをサンプリングし、東北大学の蟹沢聰史氏に鑑定を依頼した。サンプリングにあたっては、剥片石器を72点、礫石器を48点抽出した。その結果21種類の石材で構成されていることが判明した。


(石箆)
長さ
幅
(石匙)
つまみ角度
(石錐)
錐部長
(石鏃)
(楔形石器)
b/a＝えぐり度・c/d＝ふくらみ度・e＝先端角度
(尖頭器)
(不定形石器)
(磨製石斧)
(石核)
口縁部最大径
口縁部径
器高
(縄文土器)
底径
口頸部径
胴部最大径
(石製品)
(土偶)
(土製品)
(円板状土製品)

第5図　遺物計測基準

第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物



第Ⅳ章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　基本層位

本遺跡の基本層位は以下のような層によって構成されている。

1　層――暗褐色（10YR3/3）シルト層。Ⅰ区の水田地区を除いた、調査区の略全域に分布している。
縄文時代から古代・近世の遺物を包含する層。

2　層――黒褐色（10YR2/3）シルト層。Ⅰ区の水田地区を除いた、調査区の略全域の分布している。
縄文時代から古代・近世の遺物を包含する層。

3　層――黒褐色（10YR2/2）シルト層。Ⅰ区の水田地区を除いた、調査区の略全域の分布している。
縄文時代の遺物を多量に包含する遺物包含層。

4　層――黒　色（10YR2/1）シルト層。Ⅰ区の水田地区を除いた、調査区の略全域の分布している。
縄文時代の遺物を多量に包含する遺物包含層。

5　層――黒　色（7.5YR2/1）シルト層。Ⅰ区の水田地区を除いた、調査区の略全域の分布している。
縄文時代の遺物を包含する遺物包含層。

6　層――にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト層。

7ａ層――黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト層。無遺物層。

7ｂ層――黄褐色（10YR5/8）粘土質シルト層。無遺物層。

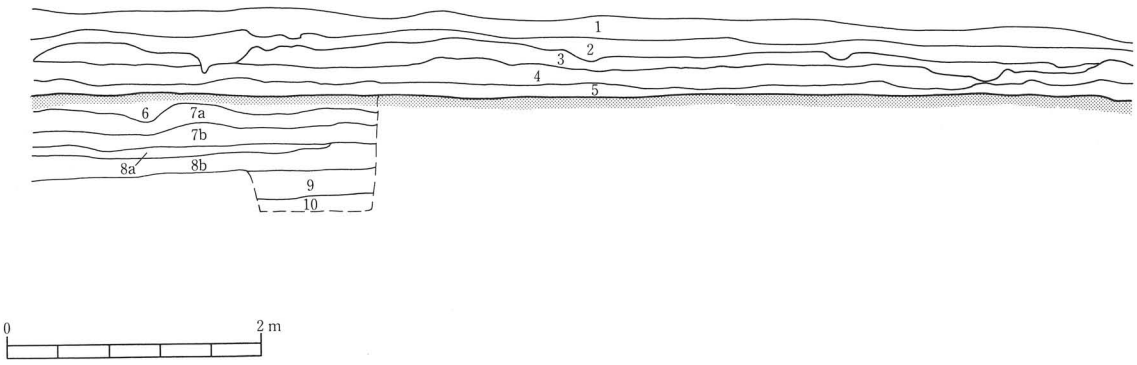
8ａ層――灰黄色（2.5Y7/2）粘土質シルト層。無遺物層。

8ｂ層――灰黄色（2.5Y6/2）粘土質シルト層。無遺物層。

9　層――にぶい黄褐色（10YR4/3）砂層。無遺物層。

10　層――砂礫層。無遺物層。

６～10層の各層とも遺物を包含していない。調査区内の一部を深掘りをして確認している。



第６図　基本層位図（AG 15区～18区東壁）

第２節　配石遺構（SN）

合計８基の配石遺構を検出した。SN １～５は、比較的小さい河原石を配した遺構であるが、SN ６～８は扁平で比較的大きな河原石を配しており、SN ８は列状の配石遺構である。

［検　出　面］ SN １～７は、４層中で検出したが、SN ８は５層上面で検出している。

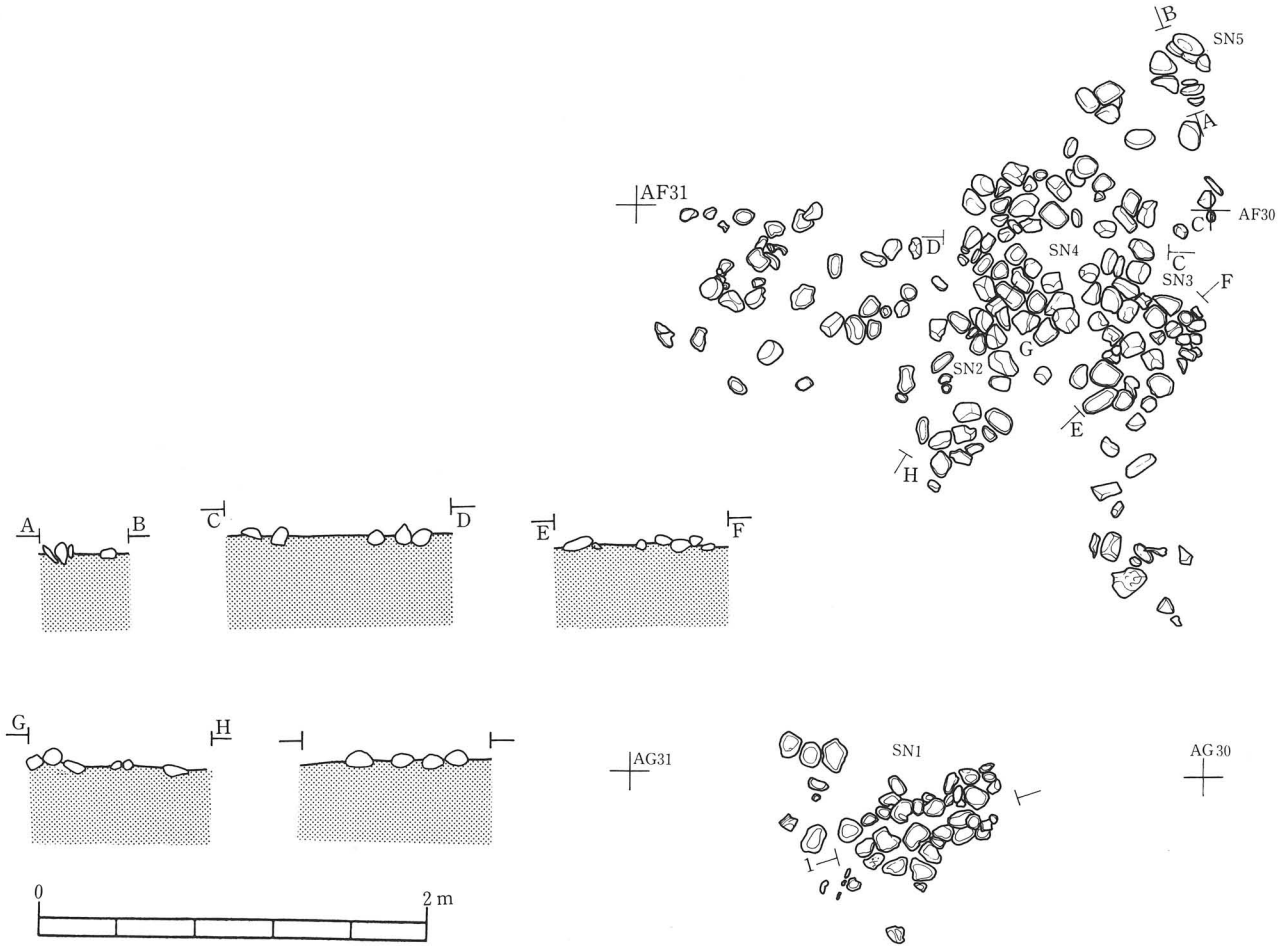
［配石の状況］ SN ２～５は、重複しているため平面形が明瞭ではないが、これらと重複しない SN １は、河原石を楕円状に配している。SN ６・７は規模が小さい。SN ８は、比較的大きな河原石を列状に6.2m 程配しているが調査区外に延び、部分的に２列になっている。

［配石下の状況］ SN １～６・８の配石下からは、何らの遺構を検出することはできなかったが、SN ７の配石下からは、52×44 cm で、深さが19 cm の土壙を検出した。

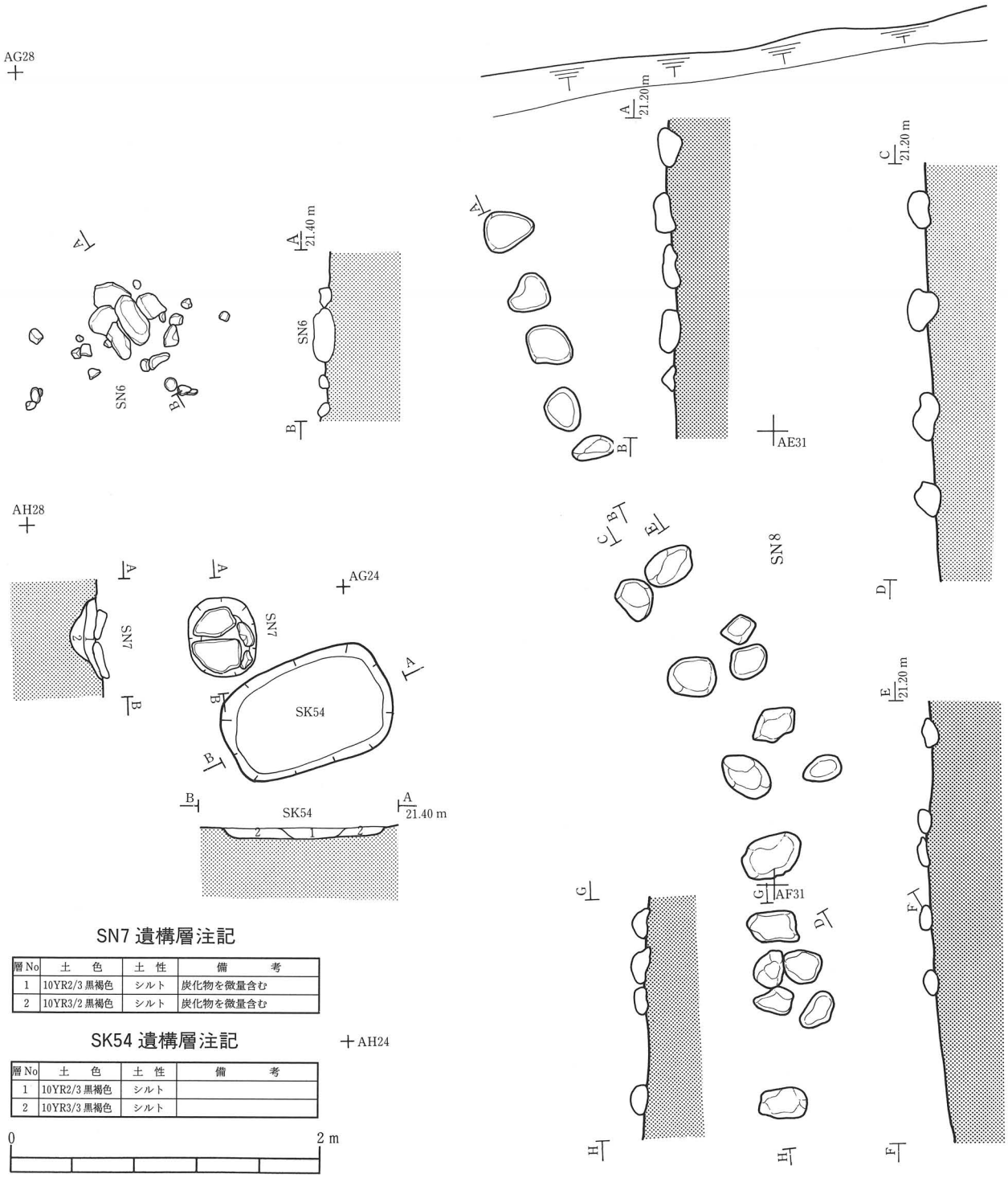
［遺構の年代］ 包含層出土遺物の年代から、SN １～８はいずれも縄文時代中期中葉の大木８式期と考えられる。

第３節　土　壙（SK）

合計55基の土壙を検出しており、Ⅰ区に集中していた。平面形態は円形を基調としているが、規模は様々である。SK ４・６の堆積土中からはまとまった土器が出土しているが、大半の土壙の出土遺物は細片である。包含層出土の土器と同じ特徴からこれら土壙の年代は、いずれも縄文時代中期中葉と考えられる。



第７図　配石遺構(1)



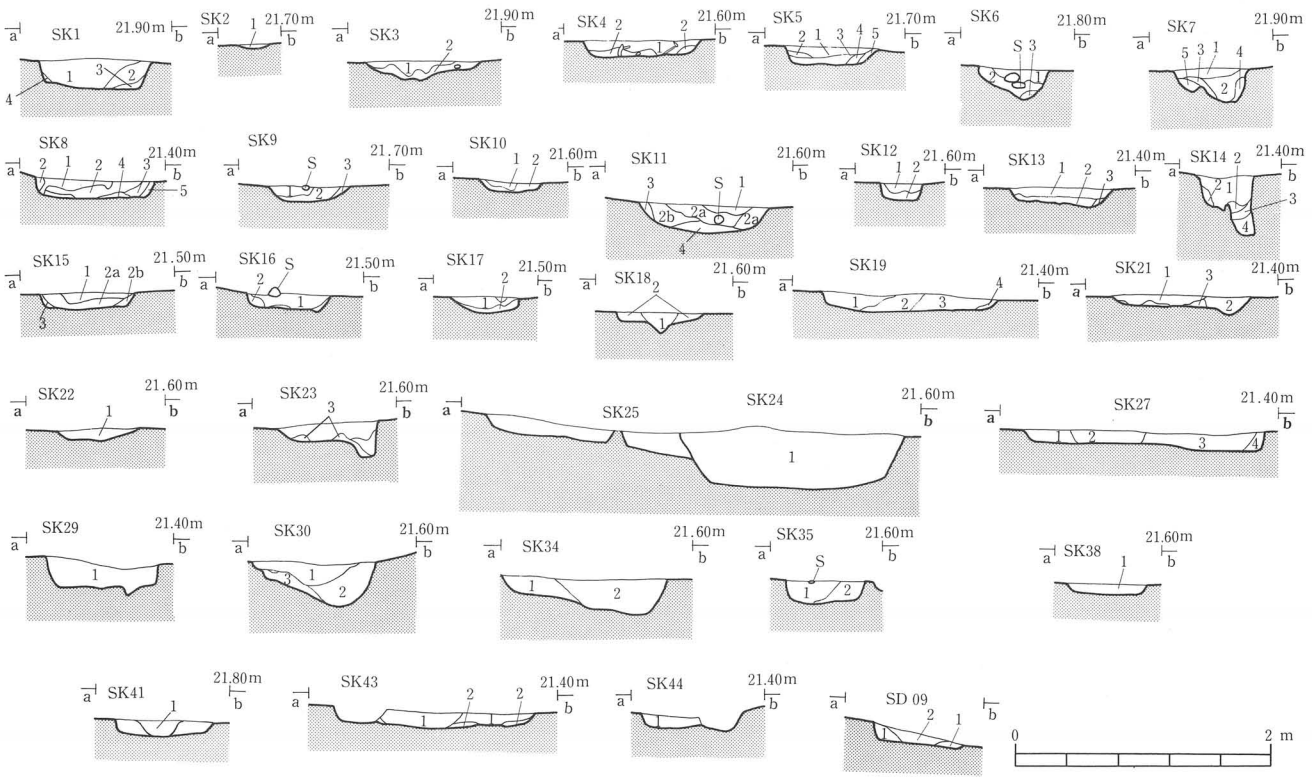
SN7 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　　考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を微量含む

SK54 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　　考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	
2	10YR3/3 黒褐色	シルト	

第8ａ図　配石遺構(2)



SK1 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	粘性ひくい・におい黄橙色土10YR6/4粒子が多量に混入・炭化物わずかに混入・しまり良
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	粘性ひくい・炭化物多量に混入・細いにおい黄橙色　粒子10YR6/4わずかに混入
3	暗褐色土10YR3/3とにおい	シルト	黄橙色土10YR6/4のブロック層・粘性ひくい・しまり良
4	黄褐色土層10YR5/6	シルト	粘性ふつう・暗褐色土10YR3/3が小ブロック状にまじる・しまり良

SK4 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物混入　においい黄色粒子　10YR5/3粒子混入
2	黒褐色土10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・黄褐色土10YR6/4のブロック層

SK7 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/3	シルト	粘性ひくい・におい黄橙色土10YR7/3がブロック状に入る・しまり良
2	灰黄褐色土層10YR4/2	シルト	粘性ひくい・にぶい黄橙色粒子10YR7/3が多量にまじる・しまり良
3	灰黄褐色土10YR4/2	シルト	粘性ひくい・にぶい黄橙色土10YR7/3のブロック層・しまり良
4	にぶい黄褐色土層10YR4/3	シルト	粘性ひくい・灰黄褐色土10YR4/2がブロック状に入る・しまり良
5	褐色土層10YR4/4やや砂質	シルト	粘性ふつう・しまり良・灰黄褐色土10YR4/2がわずかにまじる

SK11 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物粒子混入・1層下部に炭化物が入る
2a	にぶい黄褐色土層10YR4/3	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物粒子混入・黄褐色土10YR5/6がまじる
2b	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物粒子混入・2a層がまじる
3	にぶい黄褐色土層10YR4/3	シルト	しまり良・粘性普つう・黄褐色土10YR5/6がまじる
4	褐色土層10YR4/4	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物粒子混入

SK14 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性つよい・炭化物粒子混入　黄褐色土10YR5/6が多量にまじる
2	褐色土層10YR4/4	シルト	しまり良・粘性がよい・黄褐色土10TR5/6がまじる
3	褐色土層10YR4/6	砂	しまり有・湿多
4	黒褐色土層10YR3/2	砂	しまり有・湿多

SK17 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒色土層10YR2/1	シルト	しまり良・粘性ひくい
2	黒褐色土層10YR3/1	シルト	しまり良・粘性ひくい・にぶい黄褐色土10YR4/3カットブロック

SK2 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK5 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10TR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物粒子多量に混入・黄褐色粒子10YR5/6混入
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物粒子・焼土粒子多量に混入
3	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物粒子・焼土粒子かなり多量に混入
4	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・におい黄褐色土10YR5/4がまじる
5	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK8 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・黄褐色粒子10YR5/6混入
2	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・暗褐色土10YR3/3がまじる・炭化物粒子わずかに混入
3	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい
4	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい
5	暗褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK12 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・黄褐色粒子10YR5/6混入
2	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・黄褐色土10YR5/6がブロック状にまじる

SK15 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/1	シルト	しまり良・粘性ひくい
2a	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい
2b	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・カーボン粒子混入
3	黄褐色土層10YR5/6	シルト	しまり良・粘性ひくい・にぶい黄褐色土10YR4/3がまじる

SK18 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/1	シルト	しまり良・粘性ひくい・小砂粒含有
2	黒褐色土10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・暗褐色土10YR3/3のブロック層

SK21 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物混入
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性普つう
3	にぶい黄褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性普つう

SK3 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色度10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・1mm大の小砂礫多量にまじる　炭化物粒子わずかに混入
2	黒褐色度10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物わずかに混入・焼土粒子わずかに混入・にぶい黄褐色土10YR5/3のブロック層

SK6 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	粘性ひくい・しまり良・炭化物粒子混入
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	粘性ひくい・しまり良・にぶい黄褐色土10YR5/4粒子混入　炭化物粒子多量に混入
3	暗褐色土層10YR3/3	シルト	粘性ひくい・しまり良・炭化物粒子混入

SK9 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物粒子わずかに混入・黄褐色粒子10YR5/6混入
2	暗褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/6がまじる
3	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK10 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/4が小ブロック状にまじる
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・黄褐色土10YR5/6が小ブロック状にまじる

SK13 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物混入・暗褐色土10YR3/3がまじる
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・黒褐色土10TR2/2が小ブロック状にまじる
3	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物混入

SK16 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物混入
2	暗褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/4がまじる

SK19 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/6ブロック状に混入
2	黒褐色土10YR3/2と褐色土10YR4/6のブロック層	シルト	しまり良・粘性ひくい
3	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性ひくい
4	褐色土層10YR4/4	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK22 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物混入

第8b図　Ⅰ区土壙断面図

SK23 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・黒褐色土10YR3/1が小ブロック状に入る
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・褐色粒子10YR4/4が多量に混入
3	暗褐色土10YR3/4	シルト	しまり良・粘性普つう・黄褐色土10YR5/6のブロック層

SK29 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性つよい・湿多

SK35 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/4が小ブロック状にまじる
2	暗褐色土10YR3/3・褐色土10YR4/4のブロック層	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK41 埋土遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	やや砂質・しまり良・粘性ひくい・炭化物多量に混入・極小砂粒混入
2	黒褐色土層10YR2/3	シルト	多少粘性有

SD08 埋土遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黒褐色土10YR3/4	シルト	黒褐色土10YR3/1のブロック層

SK24 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土10YR2/2	シルト	しまり良・粘性つよい・湿多・黒褐色土10YR5/6混入

SK25 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・炭化物多量に混入

SK30 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性ひくい
2	黒褐色土10YR2/3	シルト	暗褐色土10YR3/4のブロック層・しまり良・粘性ひくい・炭化物混入
3	黒褐色土10YR2/3	シルト	黄褐色土10YR5/6のブロック層・しまり良・粘性ひくい

SK38 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/4のブロック状に入る

SK43 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・にぶい黄褐色土10YR6/3がブロック状に入る
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ふつう

SK27 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	褐色土層10YR4/4	シルト	しまり良・粘性ひくい
2	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性ひくい・褐色土10YR4/4がブロック状に入る
3	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性ひくい
4	暗褐色土層10YR3/4	シルト	しまり良・粘性ひくい

SK34 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性普つう・褐色土10YR4/4がブロック状に入る
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・２層上面に炭化物が多量に入る

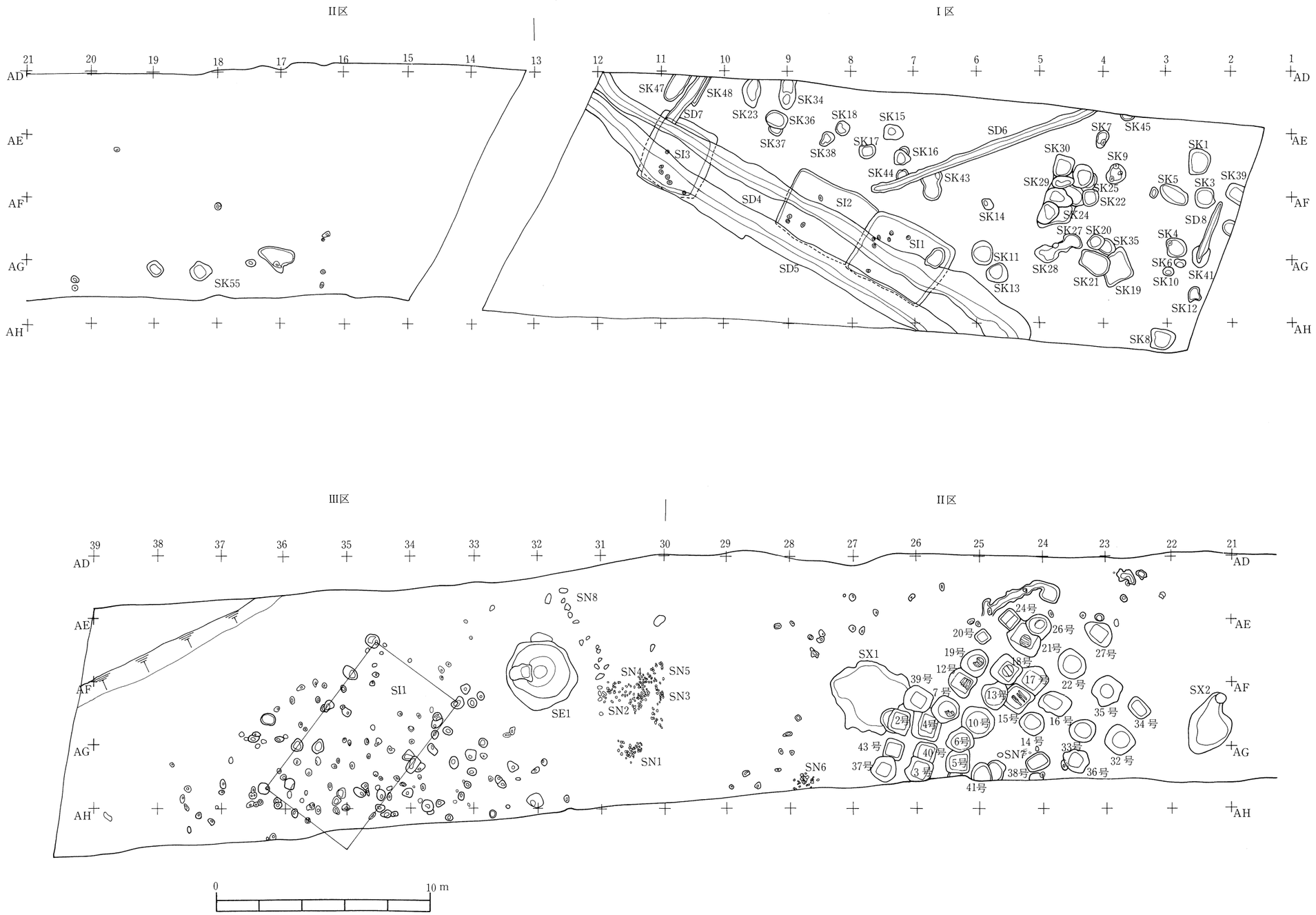
SK44 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性普つう・黄褐色土10YR5/6のブロック状に入る

SD09 遺構層注記

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色土層10YR2/1	シルト	しまり良・粘性強・炭化物混入・２層2.5YR2/2多く
2	黒褐色土層2.5YR2/2	シルト	しまり良・粘性強・ややダイ化・酸化鉄粒子2.5YR3/6多量に混入

第９図　Ⅰ区土壙平面図



第10a 図　調査区全体図

第４表　深鉢形土器の出土状況

A群　狭小な口縁部文様帯（A～G）			1～2層	3層	4層	5層	遺構
A類	文様帯３類	Dd			●		
B類	文様帯１類	A－			●		
B類	文様帯３類	Cd・Gf			●●		
D類	文様帯１類	Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr	●●	●	●●●	●	
D類	文様帯２類	C地・E地・			●		
D類	文様帯３類	Br・Dw・Gk・Gh		●	●●	●	
D類	文様帯４類	Gf				●	
D類	文様帯５類	A地・C地・E地			●●●	●	
E類	文様帯１類	Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw			●●●●●●●●	●	
E類	文様帯２類	Dr・			●		
E類	文様帯３類	Ae・Bl	●		●●●		
E類	文様帯４類	Ed・Gi		●	●		
E類	文様帯５類	A地・B地・C地・E地		●	●●●●	●	
F類	文様帯２類	Dt			●		
F類	文様帯３類	E－		●			
F類	文様帯４類	As・Cd・Ek・Gd・Gh			●●●	●	
F類	文様帯５類	C地・E地		●●	●●●●●●●		
B群　口縁部文様帯が複帯（H）							
A類	文様帯７類	Hp・Hw・H－		●●	●●●	●●●	
A類	文様帯８類	Hh・Ht・Hx・H－・Nd			●●●●	●	
A類	文様帯10類	Hi・Hp			●●	●	
A類	文様帯11類	H地		●●	●●	●	
B類	文様帯７類	Hk・Hm・Ho・H－・Nf	●		●●●●●●●	●	
B類	文様帯８類	Hf・Hp・Ht	●	●	●●●		
B類	文様帯９類	Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm・Ho・H－	●●	●	●●●●●●●●	●	
B類	文様帯11類	H地			●●●		
D類	文様帯７類	Ha・Hm・Hn・H－			●●●●	●●	● SK23
D類	文様帯８類	Hi・Hl・Hm			●●●●		
D類	文様帯９類	Hd・Hl・Hm		●	●●	●●	
D類	文様帯10類	Hp			●		
D類	文様帯11類	H地		●	●●		
E類	文様帯７類	H－				●	
E類	文様帯９類	Hd・Hf・Hl・Ht			●●	●●	
E類	文様帯10類	Hf			●		
E類	文様帯11類	H地	●		●●●●	●	
F類	文様帯７類	Hn			●		
F類	文様帯８類	Hn・H－			●●		
F類	文様帯９類	Hd・Hf・Hl・H－	●	●	●●●		
F類	文様帯10類	Hi		●			
F類	文様帯11類	H地	●		●		
F類	文様帯12類	H無			●		

第５表　深鉢形土器の出土状況（２）

D群	口縁部文様帯が単帯（沈・隆線系）（Ｉ～Ｏ）		１～２層	３層	４層	５層	遺構
Ａ類	文様帯１類	Ja・Jh・Js・J－・Lh・Ll・Lr L－・M－・Nh・Nk・Nr	●●	●●	●●●●●●●●●●	●●●●	
Ａ類	文様帯２類	Ｌ地・Ｍ地			●	●	
Ａ類	文様帯３類	Ja・Jh・J－・L－・Mh・N－ Oh	●	●●	●●	●●	
Ａ類	文様帯４類	Ib・Ik・Ko・Nf・Nk・Oh	●		●●●	●●	
Ａ類	文様帯５類	Ｊ地・Ｋ地・Ｌ地・Ｍ地・Ｎ地 Ｏ地	●	●	●●●●●●●●	●	
Ａ類	文様帯６類	Ｍ無			●		
Ｂ類	文様帯４類	Nf			●		
Ｃ類	文様帯３類	Ko			●		
Ｃ類	文様帯５類	Ｊ地・Ｋ地			●	●	
Ｅ群	口縁部文様帯が単帯（隆沈線系）（Ｐ～Ｕ）						
Ａ類	文様帯１類	Pa・Ph・Px・P－・Qa・Qh Ql・Qw・Q－・Ra・Ru・R－ Sa・Se・St・Su・S－・Ta・Te Th・Tk・Tl・Tt・Tw・T－	●●●	●●●	●●●●●●●●●

第６表　深鉢形土器の出土状況（３）

J群　口縁部文様帯がその他（Y）			1～2層	3層	4層	5層	遺構
A類	文様帯３類	Yk			●		
A類	文様帯４類	Yd			●		
A類	文様帯５類	Y地			●●●●		
A類	文様帯６類	Y無			●		
B類	文様帯２類	Y地			●		
B類	文様帯３類	Yt			●		
B類	文様帯４類	Yf			●		
B類	文様帯５類	Y地		●	●●●	●●	
B類	文様帯15類	Yi				●	
B類	文様帯16類	Yd			●		
C類	文様帯４類	Yh	●				
C類	文様帯５類	Y地			●		
D類	文様帯１類	Yw			●		
D類	文様帯５類	Y地		●●	●●		
D類	文様帯６類	Y地			●		
E類	文様帯５類	Y地	●		●		
E類	文様帯６類	Y無				●	
F類	文様帯１類	Yd			●		
F類	文様帯４類	Yf			●●		
F類	文様帯６類	Y無			●		
G類	文様帯１類	Y－			●		
G類	文様帯５類	Y地			●		
K群　口縁部文様帯が無文・地文							
D類	文様帯16類	無g			●		
D類	文様帯17類	無地				●	
E類	文様帯16類	無l		●			
E類	文様帯17類	無地			●		
F類	文様帯16類	無c		●			
F類	文様帯17類	無地			●		
G類	文様帯16類	無n		●			
G類	文様帯17類	無地		●			

第４節　遺物包含層

１　遺物出土状況

第１節の基本層位でのべたように、第３～５層は、廃棄時の原位置を保った状況で縄文時代の遺物が多量に出土する遺物包含層である。第１～２層からも縄文時代の遺物が多量に出土しているが、陶磁器なども出土しており廃棄時の原位置を保ってはいない。しかし、第１～２層と第３～５層とも縄文時代中期中葉の遺物である。ここでは遺物のなかでも特に縄文土器の深鉢形土器を取り上げ層位的な出土状況を検討することとした。深鉢形土器の各類型と出土層位をまとめたのが第４～６表であるが、分析・検討まではいたらなかった。各類型型の内容については後述した。

2　包含層出土の遺物

遺物包含層からは、縄文時代中期中葉の縄文土器・土偶等の土製品・剝片石器・礫石器・磨製石斧等の磨製石器・岩偶等の石製品等が多量に出土した。これらはいずれも中期中葉のものであり、１・２層やその他の遺構から出土したものも、包含層出土のものと同時期のものである。従って以下遺物個々の分類では包含層と１・２層やその他の遺構出土のものも一括して扱うこととした。

A　縄文土器

⑴第Ⅰ群土器（第10b図）

第Ⅰ群土器は各地区の基本層位１～５層などから深鉢・浅鉢の口縁部・胴部破片が出土しているが、第II群土器と比較して極めて少なく、出土状況にもまとまりが見られなかった。これらは文様の特徴から大木７式（144図２～211図５）と大木９式（174図８～114図３）に位置付けられる。

⑵第II群土器

本群は今回の調査において、遺物包含層から主体的に出土した土器群である。ここでは第II群土器の成形技法・文様表現技法・文様帯の構成・口縁部文様帯のあり方・胴部文様帯のあり方・器種・器形の特徴について観察することからその特性を明らかにし、主に器形・文様に基づいて分類することとする。年代的位置付けやその他の問題点についてはVI章の考察の項で検討することとする。

［土器の観察］

1　成形技法

土器の大まかな形を整えるまでの成形技法について観察した。土器の割れ口を観察すると、成形の際の接合部分が剝がれて曲面の状態を示しているものがあり、これらを観察することにより土器の成形技法を明らかにすることできる。土器の成形の順序は、底部の製作の後に粘土紐を長い帯状にして巻き上げていく方法と、粘土紐を輪状にして積み上げていく方法が考えられるが、いずれの方法をとったのかを明らかにできるような資料はなかった。口縁部・胴部・底部の成形技法とそれぞれの接合方法を観察した。

⑴　口縁部の成形技法（第11図）

口縁部の形態には内彎・内反するものと、外彎・外反するものとに大きく２つに分けられる。これらの断面観察の結果、６種類の粘土紐の積み上げ方法があることが分かった。

Ａ類　内側に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

Ｂ類　外側に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの

Ｃ類　中央に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

Ｄ類　中央に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの

Ｅ類　外側に粘土紐の丸味を残して反り、内側が下がるもの

Ｆ類　粘土紐の丸味を内外側に残し、内外側が下がるもの

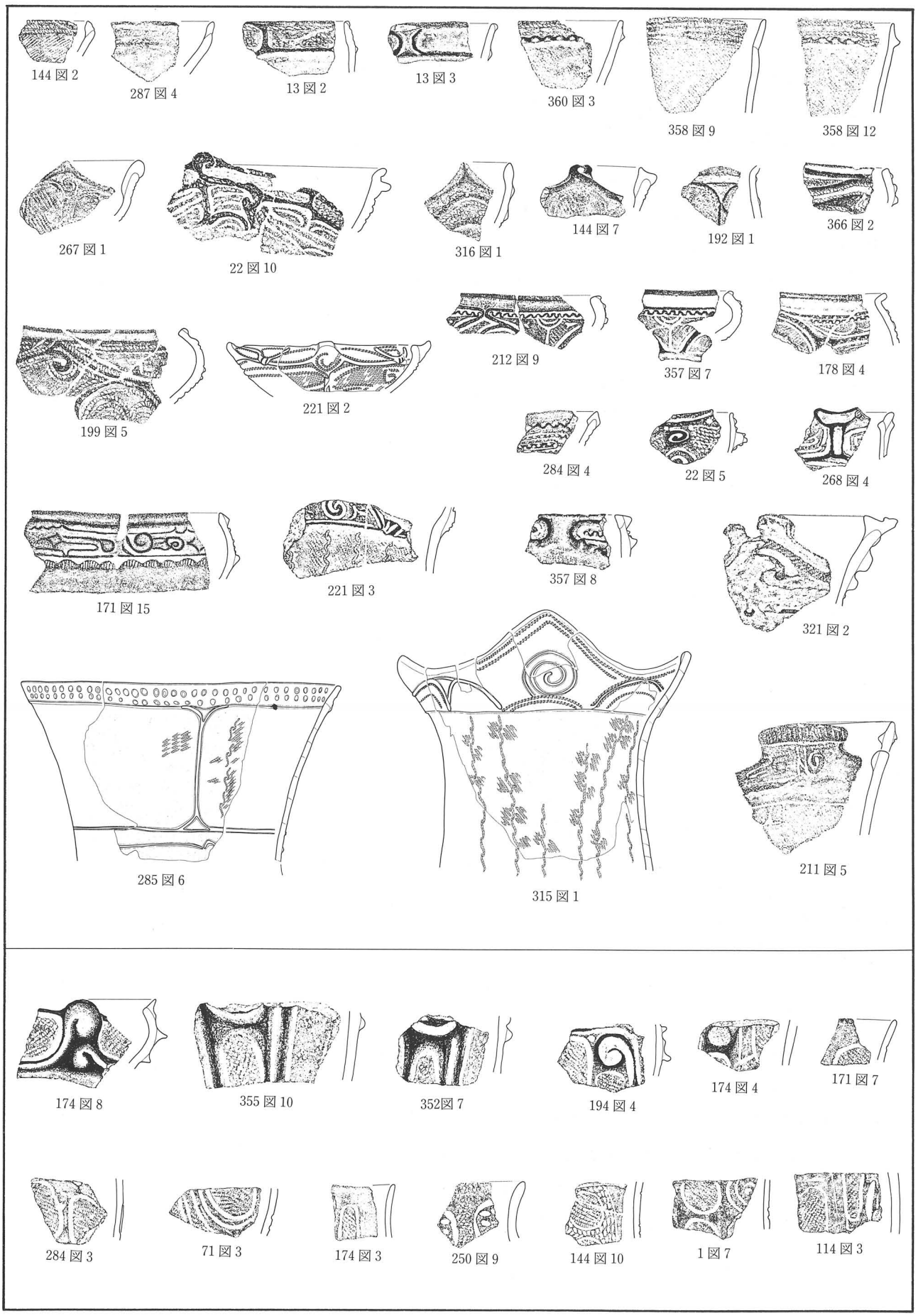
内彎・内反するものには６種類すべてが認められたが、外彎・外反するものにはＤ類とＥ類を欠く４種類がある。数量的に比較すると、内彎・内反するものはＡ類・Ｃ類が略同数で全体の約80％を占めるが、外彎・外反するものはＣ類が圧倒的に多く約70％を占める。器形に関係なく全体的にみると、外側が下がるＡ類・Ｃ類が圧倒的に多く全体の約80％を占めている。

⑵　胴部の成形技法（第12図）

胴部の粘土紐積み上げ方法は略口縁部の粘土積み上げ方法と同様であるが、若干違うものも認められた。

Ａ類　内側に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

Ｂ類　外側に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの



第 10b図　第I群土器集成図

C類　中央に粘土紐の丸味を残し、外側が下がるもの

D類　中央に粘土紐の丸味を残し、内側が下がるもの

E類　中央に粘土紐の下向きの丸味を残して反り、内側が下がるもの

F類　中央に粘土紐の丸味を残し、内外側が下がるもの

数量的にはC類が圧倒的に多く約70％を占め、A類が約20％でこれに次いでいる。外側に下がるA類・C類が圧倒的に多く全体の約90％を占めている。口縁部の粘土紐積み上げ方法と比較しても、外側に下がるものが圧倒的に多く、口縁部・胴部とも一貫した粘土紐積み上げ方法を伺うことが出来る。

⑶　口縁部と胴部の接合方法（第13図）

口縁部と胴部の接合方法を観察した結果、様々な接合方法が認められた。胴部から口縁部へ屈曲するものと、屈曲しないものとでは、接合方法が大きく違っている。両者合わせて10種類の接合方法が認められた。A～E類は屈曲するもので、F～J類は屈曲しないものである。

A類　上の粘土紐を下の粘土紐の端部側辺に接合したもの

B類　下の粘土紐を上の粘土紐の端部側辺に接合したもの

C類　上下の粘土紐の端部を接合したもの

D類　上下の粘土紐の端部を接合し内側に粘土紐を補強したもの

E類　上下の粘土紐の端部側辺を接合し、上の粘土紐を外側に折り曲げたもの

F類　上下の粘土紐の端部を接合したもの

G類　上下の粘土紐の端部をややずらして接合したもの

H類　上下の粘土紐の端部側辺を接合したもの

I類　上下の粘土紐の端部を接合し、内側に粘土紐を補強したもの

J類　上下の粘土紐の端部を接合し外側に粘土紐を補強したもの

数量的に比較してみると、屈曲するものではA類が全体の約70％を占め、屈曲しないものではF類がほとんどであった。

⑷　底部の成形技法（第14図）

口縁部や胴部の断面観察で見られるような接合部分の剝がれ面が見られず、底部がどのようにして成形されたものか明らかに出来る資料はなかった。しかし、このことは底部が大きな粘土塊によって成形されたためと考えられる。底部底面には網代痕・木葉痕・無文（ナデ・ケズリ・ミガキ痕）があり、これらは底部成形時に粘土塊の下に敷いた敷材の痕跡と考えられる。

⑸　底部と胴部の接合方法（第15図）

底部と胴部下端とが剝離し、接合方法を推定できる資料がかなりの数であった。これらを観察した結果、以下のような3種類の接合方法を推定することが出来た。

A類　円板状の底部の周縁の真上に粘土紐を積み上げ、底部と胴部を接合したもの

B類　円板状の底部の周縁の端部に斜めの角度で粘土紐を積み上げ、底部と胴部を接合したもの

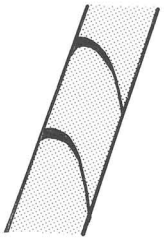
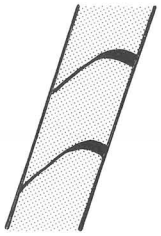
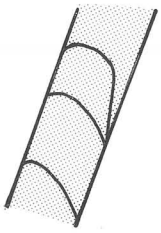
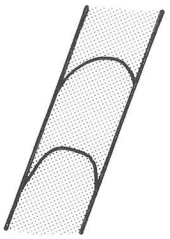
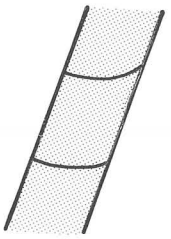
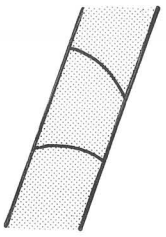
C類　円板状の底部の側縁の真横に粘土紐を接合して、底部と胴部を接合したもの

これら3種類の方法で接合された胴部・底部の中には、接合部分の内側や外側に粘土紐を貼付して補強しているものも認められた。これらを子細に観察すると、接合部の内側を補強したもの、外側を補強したもの、接合部の反対側の底部を補強したもの、内側と接合部の反対側の底部を補強したものとが認められた。

第11図　口縁部粘土紐積み上げ法

類型	粘土紐接合方法	内彎・内反するもの	外彎・外反するもの	
A類	内側に粘土紐の丸味を残し外側が下がる	140点 (38%)	26点 (24%)	166点 (34%)
B類	外側に粘土紐の丸味を残し内側が下がる	29点 (8%)	5点 (5%)	34点 (7%)
C類	中央に粘土紐の丸味を残し外側が下がる	149点 (40%)	77点 (71%)	226点 (47%)
D類	中央に粘土紐の丸味を残し内側が下がる	37点 (10%)	0点 (0%)	37点 (8%)
E類	外側に粘土紐の丸味を残して反り内側が下がる	3点 (−%)	0点 (0%)	3点 (1%)
F類	粘土紐の丸味を内外側に残し内外側が下がる	15点 (4%)	1点 (−%)	16点 (3%)
小計		373点 (100%)	109点 (100%)	482点 (200%)

第12図　胴部粘土紐積み上げ法

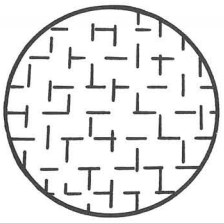
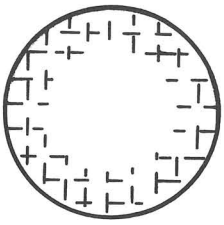
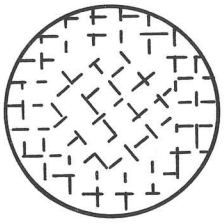
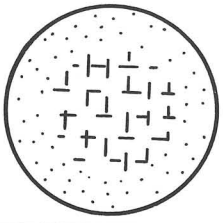
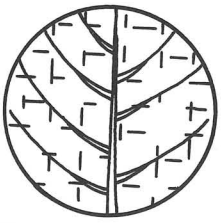
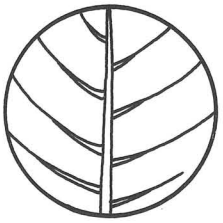
A類	内側に粘土紐の丸味を残し外側が下がる		34点 （19%）
B類	外側に粘土紐の丸味を残し内側が下がる		6点 （3%）
C類	中央に粘土紐の丸味を残し外側が下がる		126点 （72%）
D類	中央に粘土紐の丸味を残し内側が下がる		6点 （3%）
E類	中央に粘土紐の下向きの丸味を残して反り内側が下がる		3点 （2%）
F類	中央に粘土紐の丸味を残し内外側が下がる		2点 （1%）
合計			177点 （100%）

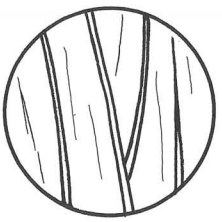
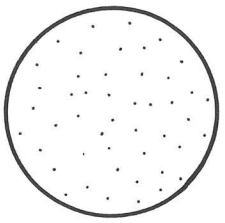
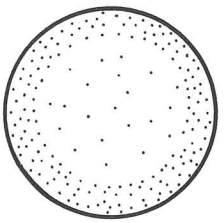
第13図　口縁部と胴部の接合方法

類型	胴部から口縁部へ屈曲するもの
A類 上の粘土紐を下の粘土紐の端部側辺に接合	26点 (72%)
B類 下の粘土紐を上の粘土紐の端部側辺に接合	4点 (11%)
C類 上下の粘土紐の端部を接合	3点 (8%)
D類 上下の粘土紐の端部を接合し内側に細い粘土紐を補強	1点 (3%)
E類 上下の粘土紐の端部側辺を接合し上の粘土紐を外側に折り曲げる	2点 (6%)
合　　計	(100%) 36点

類　型	胴部から口縁部へ屈曲しないもの
F類 上下の粘土紐の端部を接合	401点 (98%)
G類 上下の粘土紐の端部をややずらして接合	4点 (1%)
H類 上下の粘土紐の端部側辺を接合	3点 (1%)
I類 上下の粘土紐の端部を接合し内側に細い粘土紐を補強	1点 (−%)
J類 上下の粘土紐の端部を接合し外側に細い粘土紐を補強	2点 (−%)
合　　計	(100%) 411点

第14図　底部底面の痕跡

種別	痕跡の状態	
網代痕	底部底面の全面に網代痕があるもの	
	底部底面の周縁に網代痕があるもの	
	底部底面の周縁と内部の網代痕の方向が違うもの	
	底部底面の内部に網代痕があり周縁が無文のもの	
木葉痕	底部底面の全面に木葉痕と網代痕が重複するもの（網代の下に木葉を敷く）	
	底部底面の全面に一枚の木葉による木葉痕（広葉）があるもの	
	底部底面の全面に複数の木葉による木葉痕があるもの	

種別	痕跡の状態	
木葉痕	底部底面の全面に笹状の木葉痕があるもの	
無文	底部底面の全面にナデ痕跡があるもの	
	底部底面の全面にナデ痕跡があり周縁がやや盛り上がるもの	
	底部底面の全面にケズリ痕跡があるもの	
	底部底面の全面にナデ痕跡とミガキ痕跡があるもの	

網代痕	木葉痕	無　文	計
73点 (37%)	7点 (4%)	115点 (59%)	195点 (100%)

第15図　底部と胴部の接合方法

	A類　周縁真上	B類　周縁斜め	C類　側縁真横	小計
補強なし	198点 (72%)	61点 (22%)	1点 (－%)	260点 (94%)
内側補強	1点 (－%)	6点 (2%)	2点 (1%)	9点 (3%)
外側補強	1点 (－%)	2点 (1%)	0点 (0%)	3点 (1%)
底部補強	4点 (2%)	0点 (0%)	0点 (0%)	4点 (2%)
内側と底部補強	1点 (－ %)	0点 (0%)	0点 (0%)	1点 (－%)
小計	205点 (74%)	69点 (25%)	3点 (1%)	277点 (100%)

2　文　様

(1)　文様表現技法

縄文土器の文様には様々なものが認められた。これらは文様を表現する技法から、地文・押圧縄文・刺突文・沈線文・隆線文・隆沈線文の6つに分けられる。

[地　文]

（縄文）

繊維の束を撚り合わせた縄を回転させて施文したもので、回転縄文（原体：LRL・RLR・LR・RL・L・R）と、撚糸文（原体：L・R）とがあり、いずれも地文として施文されている。

（条線文）

串もしくは刷毛状の工具で施文したもので回転縄文や撚糸文と同様に地文としている。

[押圧縄文]

縄の側面を圧したもので、縦・横位に直線的に圧したものと、曲線状に圧したものがある。原体にはLR・RL・L・Rがある。

[刺突文]

ヘラ状もしくは棒状の工具を連続的に突き刺して施文したもので、工具の形状や刺突する角度から角形・円形・楕円形のものがある。また縦・横位に連続して刺突したものや、交互に刺突を繰り返すものもある。また他の文様表現技法によって描かれた文様に付加したり、隆線の上に刺突を加え装飾効果を高めるためのものもある。さらに他の文様で描かれた区画内に刺突文を充塡的に加えるものもある。

[沈線文]

刺突文と同じようにヘラ状もしくは棒状の工具を器面に突き刺して、そのまま一定方向に移動しながら粘土を削り取って凹状に施文した文様である。工具移動の際に内面に軽い段状の付くものと、一定の凹面を保ち凹面の底面が平滑なものとがある。縦・横位の移動によって様々な形状の文様を作りだしている。このような沈線文のなかには他の文様に付加して文様効果を高めたり、区画内を充塡したりするものもある。また、縦位・横位に連続させたり、連結したりして一見複雑な文様を構成するものもある。

[隆線文]

細い紐状にした粘土紐を貼付したものや、貼付後調整を加えた凸状のものである。粘土紐貼付後に指頭で押圧したものもある。沈線文と同様に縦・横位に貼付することにより様々な形状の文様を作り出している。

[隆沈線文]

沈線文と隆線文が一体となったものである。沈線文・隆線文と同様に縦・横位に展開して様々な形状の文様を作り出している。

(2)　単位文様

各文様表現技法によって様々な文様を描き、これらが組み合って全体の文様を構成している。これを整理すると、個々の文様が単独で文様を構成するものと、いくつかの文様が組み合って文様を構成するものがある。文様が組み合わさるものには全体の文様構成が曲流しながら展開するものと、クランク状に上下左右に折れ曲がりながら展開するものがある。文様が縦位や横位に展開しながら、文様体を区画したり、この区画内を充塡するものもある。さらに他の文様に付加したり、加飾することにより文様の装飾効果を高めるものもある。一見複雑な第II群土器の文様も単位となる個々の文様に分解して分析を進めることができる。ここではやや繁雑にはなるが、最上位に文様帯の全体形状、以下文様の展開方向、他文様との関係、単位文様の形状、文様表現技法の順に該当するものの名称を組み合わせて以下のように呼称することにした。

またＡ（文様帯の全体の形状）をのぞいたＢ＋Ｃ＋Ｄ＋Ｅの組み合わせからなる単位文様は第16・17図のようになる。

A		B		C		D		E
文様帯全体の形状		文様の展開方向		他文様との関係		単位文様の形状		文様表現技法
曲流 直折	＋	横位 縦位	＋	充塡 連結 区画 付加 連続 加飾	＋	形状	＋	地文 押圧縄文 刺突文 沈線文 隆線文 隆・沈線文

3　文様帯の構成

個々の文様が土器の表面に施文され、文様の集合体としての文様帯が形成されている。このような文様帯には、配置される部位や文様帯の構成方法に規則性が認められた。

口縁部には沈・隆・隆沈線によって様々な文様を施文した口縁部文様帯を構成しているものと、地文帯のもの、無文帯のものとがある。この口縁部文様帯には２つ以上の文様帯が複合して構成される複帯型のものと、１つの文様帯で構成される単帯型がある。

口縁部下の頚部には地文帯のものと、無文帯の２種類がある。頚部文様帯を形成しないものは、口縁部文様帯と胴部文様帯が接している。

頚部文様帯下もしくは口縁部文様帯と接する胴部には、沈・隆・隆沈線によって様々な文様を施文して胴部文様帯を構成しているものと、地文帯のもの、無文帯のものとがある。この胴部文様帯には２つ以上の文様帯が複合して構成される複帯型のものと、単帯として構成される単帯型がある。

さらに、口縁部・頚部・胴部とそれぞれの部位の個々の文様帯が独立せず、口縁部から胴部へと連続して文様が展開するものもある。また、口縁部・頚部・胴部全面が地文帯か無文帯のものもある。これら文様帯の構成のあり方をまとめたのが第18図である。

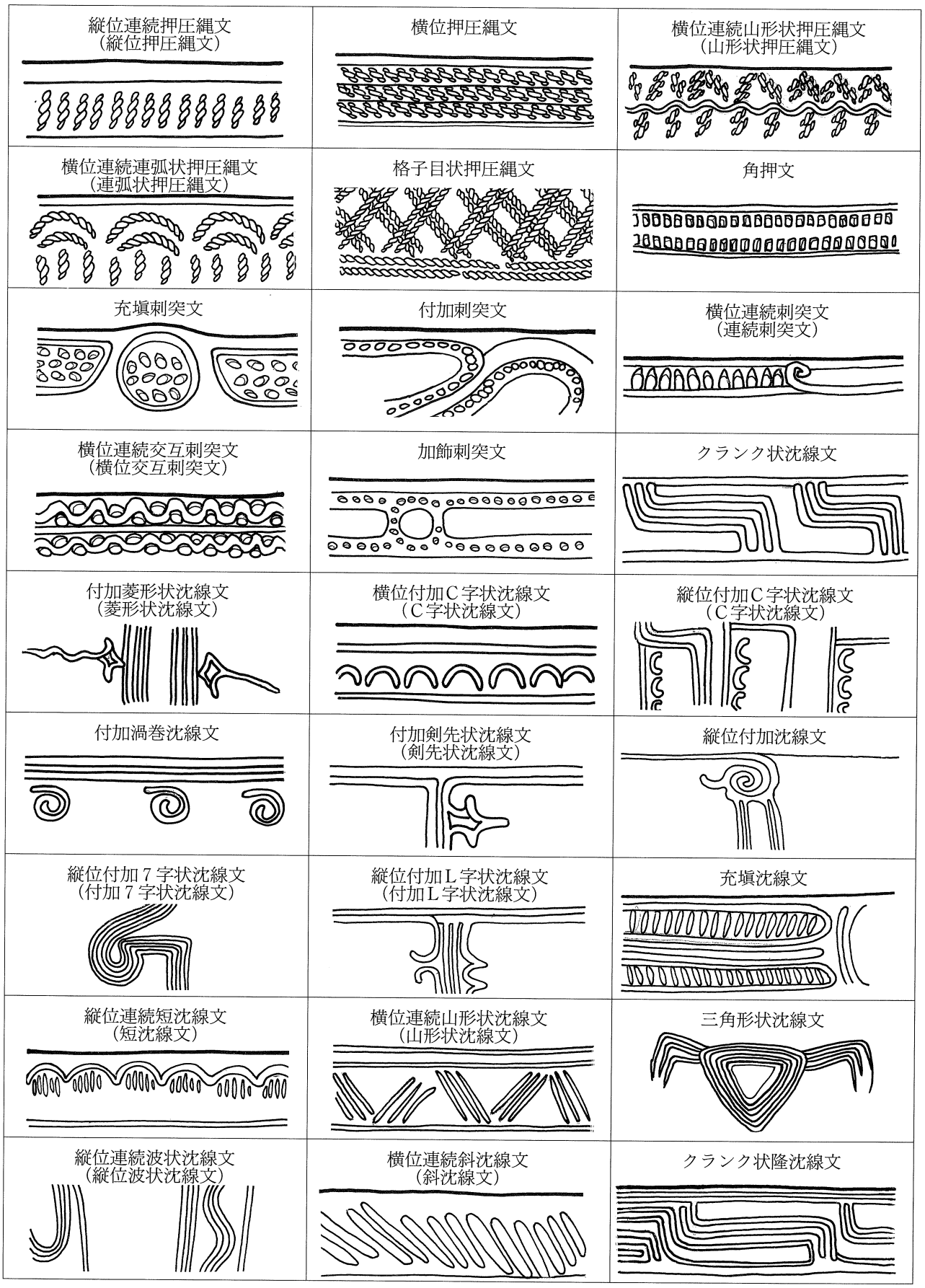
4　口縁部文様帯

口縁部文様帯の構成を観察すると、口縁部文様帯が狭小なものと、一定の幅をもって展開するものと大きく２つに分けられる。狭小な口縁部文様帯を持つものは単帯のみであるが、一定幅を持つものには単帯のものと複帯のものとが認められる。これらはそれぞれ刺突文・押圧縄文・沈線文・隆線文・隆沈線文によって様々な文様が施文されている。これら口縁部文様帯の文様のあり方をまとめたのが第19・20図である。狭小な口縁部文様帯を構成する文様はほとんど単位文様であるが、単帯の幅広口縁部文様帯は単位文様が連結して文様帯を構成しているため文様の内容について説明する。

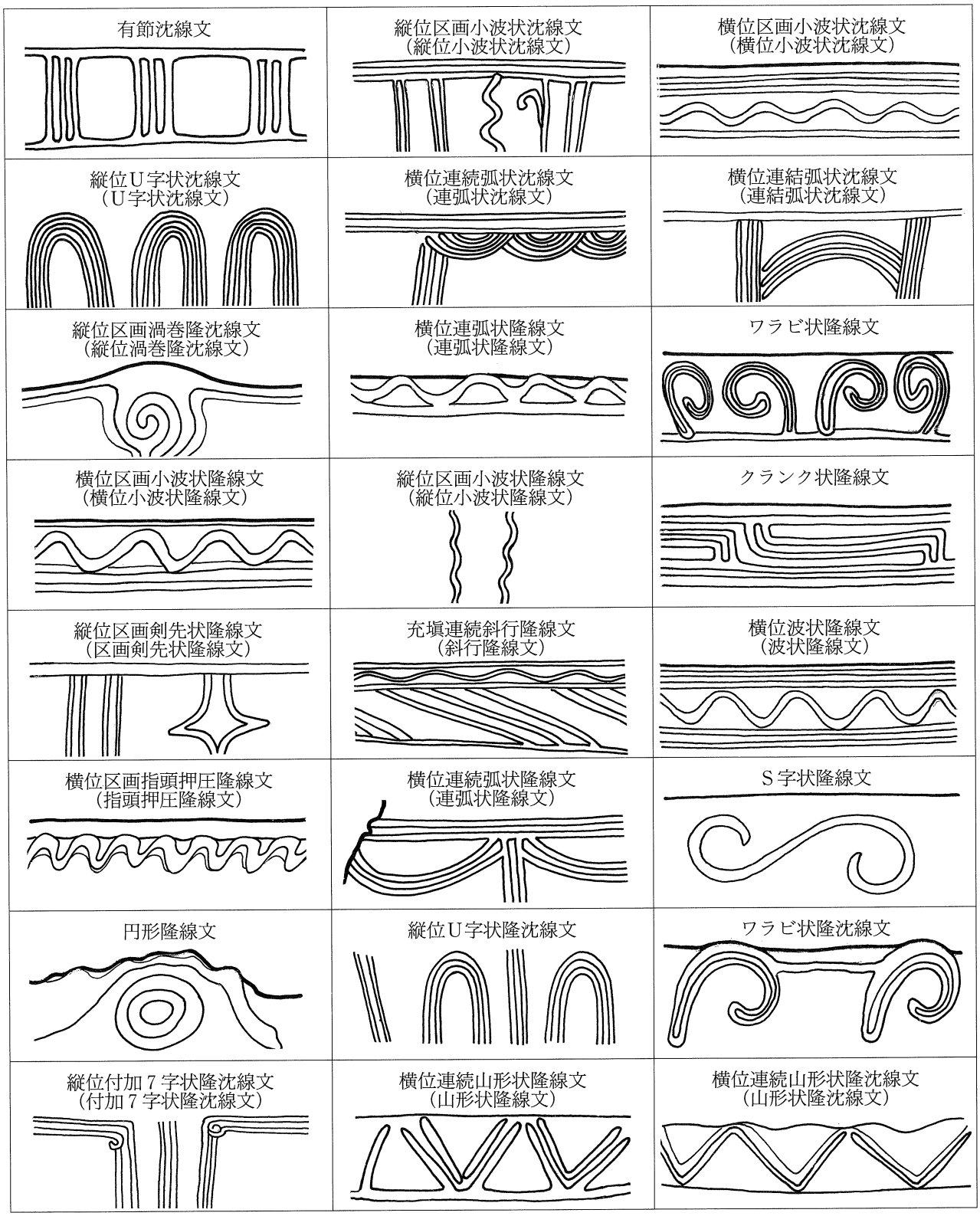
［独立横位渦巻隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、２本の隆線・隆沈線文が横位渦巻文を描き他の横位渦巻文と連結せず独立しているもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接するものとがある。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものもある。なかには上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接する縦位区画状の縦位付加隆線文・隆沈線文を持つものもある。上下端の横位区画隆線文・隆

第16図　単位文様（１）


縦位連続押圧縄文
（縦位押圧縄文）
横位押圧縄文
横位連続山形状押圧縄文
（山形状押圧縄文）
横位連続連弧状押圧縄文
（連弧状押圧縄文）
格子目状押圧縄文
角押文
充塡刺突文
付加刺突文
横位連続刺突文
（連続刺突文）
横位連続交互刺突文
（横位交互刺突文）
加飾刺突文
クランク状沈線文
付加菱形状沈線文
（菱形状沈線文）
横位付加Ｃ字状沈線文
（Ｃ字状沈線文）
縦位付加Ｃ字状沈線文
（Ｃ字状沈線文）
付加渦巻沈線文
付加剣先状沈線文
（剣先状沈線文）
縦位付加沈線文
縦位付加７字状沈線文
（付加７字状沈線文）
縦位付加Ｌ字状沈線文
（付加Ｌ字状沈線文）
充塡沈線文
縦位連続短沈線文
（短沈線文）
横位連続山形状沈線文
（山形状沈線文）
三角形状沈線文
縦位連続波状沈線文
（縦位波状沈線文）
横位連続斜沈線文
（斜沈線文）
クランク状隆沈線文

第17図　単位文様（２）


有節沈線文
縦位区画小波状沈線文
（縦位小波状沈線文）
横位区画小波状沈線文
（横位小波状沈線文）
縦位Ｕ字状沈線文
（Ｕ字状沈線文）
横位連続弧状沈線文
（連弧状沈線文）
横位連結弧状沈線文
（連結弧状沈線文）
縦位区画渦巻隆沈線文
（縦位渦巻隆沈線文）
横位連弧状隆線文
（連弧状隆線文）
ワラビ状隆線文
横位区画小波状隆線文
（横位小波状隆線文）
縦位区画小波状隆線文
（縦位小波状隆線文）
クランク状隆線文
縦位区画剣先状隆線文
（区画剣先状隆線文）
充塡連続斜行隆線文
（斜行隆線文）
横位波状隆線文
（波状隆線文）
横位区画指頭押圧隆線文
（指頭押圧隆線文）
横位連続弧状隆線文
（連弧状隆線文）
Ｓ字状隆線文
円形隆線文
縦位Ｕ字状隆沈線文
ワラビ状隆沈線文
縦位付加７字状隆沈線文
（付加７字状隆沈線文）
横位連続山形状隆線文
（山形状隆線文）
横位連続山形状隆沈線文
（山形状隆沈線文）

沈線文は、上下各１本のものが多いが上１本下２本、上下２本のものもある。

［直線状連結横位渦巻隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、１～２本の隆線・隆沈線文が横位渦巻文として直線状に連結して横位に展開するもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものがある。縦位付加隆線・隆沈線をともなうものが多い。隆線・隆沈線自体が渦巻文を描くものが多いが隆線間の沈線が沈刻状に渦巻文を描くものもある。沈刻状の渦巻文のものは縦位付加隆沈線文も沈刻状である。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各１本のものが多いが上１本下２本のものもある。

［波状連結横位渦巻隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、２本の隆線・隆沈線文が波状に横位に展開し、部分的に横位渦巻隆線文・隆沈線文になっているもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するもの、接続しないものがある。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものが多い。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各１・２・３本のもの、上１本下２本、上２本下１・３本、上３本下２本のものなど様々である。

［小単位連結横位渦巻隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、１～２本の隆線・隆沈線文によって構成される２つ以上の横位渦巻文が連結して、小単位の横位渦巻文を構成している。それぞれの小単位は連結せず、独立した文様単位となっている。縦位付加隆線・隆沈線文をともなうものもある。隆線・隆沈線自体が渦巻文を描くものが多いが、隆線間の沈線が沈刻状に渦巻文を描くものもある。上下端の横位区画隆線・隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものとがある。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は、上下各１本のものが多いが、上下各２本のものもある。

［直折隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、横位に展開する１～２本の隆線・隆沈線文が直線もしくは直角状に折れ曲がりながら直折的に隆線・隆沈線文が展開するもの。上下端の横位区画隆沈線文の両方に接続するものと片方だけに接続するものとがある。縦位付加隆線文のなかには上下端の横位区画隆線文の両方に接する縦位区画状の縦位付加隆線・隆沈線文を持つものもある。上下端の横位区画隆沈線文は、上下各２本のものが多いが、上下各１本のものや、上２本下３本のものもある。

［横位波状隆線文・隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆線・隆沈線文で区画された中を、横位に１～２本の隆線・隆沈線文が波状に展開するもの。上下端の横位区画隆線・隆沈線文は上下１本のものが多いが、２本のものもある。

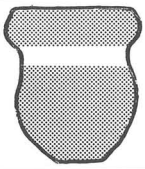
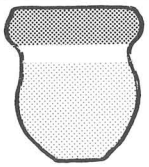
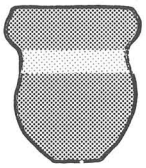
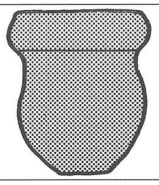
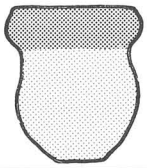
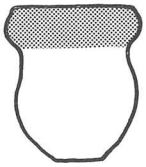
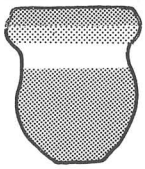
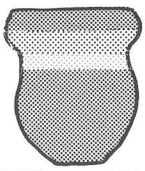
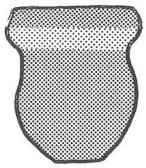
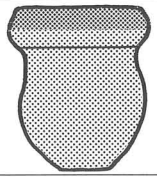
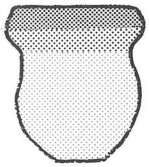
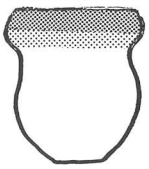
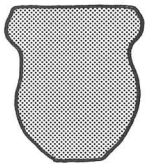
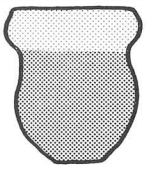
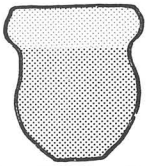
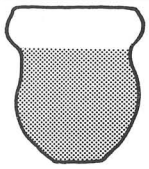
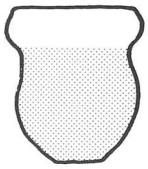
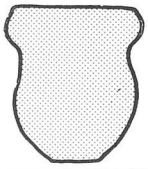
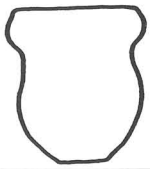
［連結横位渦巻隆沈線文］

口縁部文様帯の上下端にある横位区画隆沈線文で区画された中を、横位に２本の隆沈線文が連結して横位渦巻文が展開するもので、連結の仕方に規則性がみられないもの。上下端の横位区画隆沈線文の両方に接続するものと、片方だけに接続するものとがある。上下端の横位区画隆沈線文は、上下各１本のものが多いが、上下各２本のものや、上１本下２本のものもある。

［横位沈刻状隆沈線文］

口縁部文様帯の上下幅にある横位区画隆沈線文で区画された中を、横位に１～２本の隆沈線文が横位渦巻文を展開するもの。他の渦巻隆線・隆沈線文は隆線・隆沈線自体が渦巻文となっているが、横位沈刻状隆沈線文は２本の隆沈線間の沈線部分が大きく渦巻文を刻むようになっている。さらにこの隆沈線によって区画された部分が、変形楕円状を呈している。

第18図　土器文様帯分類

1類	口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）	
2類	口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部地文帯	
3類	口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）	
4類	口縁部文様帯（単帯） ―――― 胴部文様帯（単帯）	
5類	口縁部文様帯（単帯） ―――― 胴部地文帯	
6類	口縁部文様帯（単帯） ―――― 胴部無文帯	
7類	口縁部文様帯（複帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）	
8類	口縁部文様帯（複帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）	
9類	口縁部文様帯（複帯） ―――― 胴部文様帯（単帯）	
10類	口縁部文様帯（複帯） ―――― 胴部文様帯（複帯）	
11類	口縁部文様帯（複帯） ―――― 胴部地文帯	
12類	口縁部文様帯（複帯） ―――― 胴部無文帯	
13類	口縁部～胴部文様帯	
14類	口縁部地文帯 ―――― 胴部文様帯（単帯）	
15類	口縁部地文帯 ―――― 胴部文様帯（複帯）	
16類	口縁部無文帯 ―――― 胴部文様帯（単帯）	
17類	口縁部無文帯 ―――― 胴部地文帯	
18類	地　文のみ	
19類	無　文のみ	

胴部の横位区画沈・隆・隆沈線だけのものも胴部文様帯（単帯）とした。

第19図　深鉢形土器口縁部文様帯分類（1）

狭小な口縁部文様帯	単帯型	沈線系	A　横位沈刻状渦巻沈線文	B　縦位短沈線文
		隆線系	C　小波状隆線文	D　横位隆線文
		押圧縄文系	E　縦位押圧縄文	F　山形状押圧縄文
		刺突系	G　刺突文	
一定の幅がある口縁部文様帯	複帯型	沈線系	H	
		隆線系	H	
		押圧縄文系	H	
		刺突文系	H	
		沈線系	I　弧状沈線文	

第20図　深鉢形土器口縁部文様帯分類（２）

一定の幅がある口縁部文様帯	単帯型	隆線系	J　独立横位渦巻隆線文	K　直線状連結横位渦巻隆線文
			L　波状連結横位渦巻隆線文	M　小単位連結横位渦巻隆線文
			N　直折隆線文	O　横位波状隆線文
		隆沈線系	P　独立横位渦巻隆沈線文	Q　波状連結横位渦巻隆沈線文
			R　連結横位渦巻隆沈線文	S　直線状連結横位渦巻隆沈線文
			T　小単位連結横位渦巻隆沈線文	
			U　直折隆沈線文	V　横位沈刻状隆沈線文
		その他	W　横位連続楕円文	X　突起付無文帯
			Y　その他	

[横位連続楕円文]

隆線の区画内が楕円状の形状のもので、横位に連続するもの。

5　胴部文様帯

胴部文様帯の構成を観察すると、口縁部文様帯から独立するものと、口縁部文様帯と連結して胴部文様帯として展開するものと大きく２つに分けられる。さらにそれぞれ単位文様の表現技法から沈線文系・隆線文系・隆沈線文系のものがある。ただし口縁部文様帯と連結する胴部文様帯のものには隆線文系のものはない。これらは文様展開が胴部全面に展開するものと、縦位区画内で展開するもの、縦・横位区画内で展開するものとに分けられる。胴部全面に展開するものは、構成する文様によってさらに細分した。これらをまとめたのが第21・22・23図である。胴部全面に展開するものは単位文様が連結して文様を構成しているため主な文様の内容について説明する。

[曲流横位渦巻沈線文]

頚部と胴部文様帯を区画する横位区画沈線文から出発し、曲流しながら沈線文で大きく渦巻文を描くもの。渦は右巻きと左巻きがある。右巻きのものは、横位区画沈線からやや下降しながら渦を巻くが、左巻きのものはいちど下に屈曲して渦を巻くものが多い。この主文様である渦巻文に「７」字状や直線状に垂下する沈線文が付加して文様全体を構成しており、かなり定型化している。主文様である横位の沈線渦巻文や付加する沈線文は３本単位の沈線が多いが２本単位のものもある。

[曲流横位渦巻隆沈線文]

曲流横位渦巻沈線文と同様に、頚部と胴部文様帯を区画する横位区画沈線文から出発し、曲流しながら隆沈線文で大きく渦巻文を描くものであるが、曲流横位渦巻沈線文ほど定型化せず様々なバリエーションのものがある。２本隆線と３本沈線のものが多いが、１本隆線と２本沈線のものもある。

[曲流横位変形渦巻沈線文]

曲流横位渦巻沈線文のように頚部と胴部文様帯を区画する横位区画沈線文と連結せず、独立した渦巻文のもの。

[連結曲流横位渦巻沈線文]

曲流しながら横位に展開する渦巻沈線文であるが、縦横位に連結して胴部全面に展開するもの。３本単位の沈線が多いが、２本単位のものもある。

[連結曲流横位渦巻隆沈線文]

曲流しながら横位に展開する渦巻隆沈線文であるが、縦横位に連結して胴部全面に展開するもの。２本の隆線間の沈線部分が大きく渦巻文を刻むような沈刻状のものもある。さらに隆沈線が複雑に縦横位に連結しているため、隆沈線の区画内が変形楕円文状を呈しているものもある。

[直折渦巻沈線文]

横位区画沈線文に連結しないで独立し、直角状垂下して完結している渦巻沈線文。

[連結直折渦巻沈線文]

２～３本単位の沈線が渦巻文を描きながら直角状に折れ曲がって連結して展開するもの。

[連結直折沈線文]

２～３本単位の沈線が直角状に折れ曲がりながら連結して展開しているもの。

6　口縁部文様と胴部文様との関係

４・５でそれぞれ口縁部文様帯と胴部文様帯の文様のあり方を観察したのでここでは、それぞれの文様帯の文様がどのような関係にあるのかを見ることにする。口縁部文様帯と胴部文様帯の文様の相関関係をまとめたのが第７表である。繁雑なので整理したのが第８表である。これら多数の文様のなかで、数量が多いものや特徴的なものを抜き出して凡その傾向を整理してみたのが第９表である。

口縁部文様帯が狭小な口縁部文様Ａ～Ｇには、胴部文様の胴部全面展開型ではａ（曲流横位渦巻沈線文）も若干あるが直折沈線系のｄ・ｅ・ｆが多い。直折沈線系のｄ（連結直折渦巻文）は狭小な口縁部文様帯のものにしか認められない。区画内展開型の沈線系ではｂ・ｌ・ｋ・ｌ、隆線系ではｒ・ｓ・ｔ、隆沈系ではｗ・ｘがある。

口縁部文様帯が一定の幅がある複帯の口縁部文様Ｈには、胴部文様の胴部全面展開型ではａ（曲流横位渦巻沈線文）も若干あるが直折沈線系のｄ・ｅ・ｆや直折隆線系のｍ・ｎが多い。直折隆線系のｍ（連結直折渦巻隆線文）・ｎ（連結直折隆線文）は口縁部文様Ｈ（複帯）にしかみられない。区画内展開型の沈線系ではｈ・ｉ・ｋ・ｌ、隆線系ではｏ・ｐ・ｒ・ｔ、隆沈系ではｗ・ｘがある。隆線系のｐ（縦横位区画内展開隆線文）は口縁部文様Ｈだけにしかない。

口縁部文様帯が一定の幅があり単帯で隆線系の口縁部文様Ｊ～Ｏには、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のｆのみである。区画内展開型の沈線系ではｈ・ｋ・ｌ、隆線系ではｏ・ｒ・ｓ、隆沈系はない。

口縁部文様帯が一定の幅がある単帯で隆沈線系の口縁部文様Ｐ～Ｕには、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のａ・ｅと隆沈線系のｕ・ｖが多い。区画内展開型の沈線系ではｈ・ｋ・ｌ、隆線系ではｒのみで、隆沈系ではｗ・ｘがある。

口縁部文様帯が一定の幅があり単帯で隆沈線系の口縁部文様Ｖ（横位沈刻状隆沈線文）には、胴部文様の胴部全面展開型では沈線系のａ・ｃ・ｅ、と隆沈線系ｕ・ｖが多い。沈線系ｃ（連結曲流横位渦巻沈線文）は口縁部文様Ｖにしかない。区画内展開型の沈線系のものはなく、隆線系のｔと、隆沈線系のｘである。

口縁部から胴部に連結する文様帯は、胴部文様ｙ・ｚのみである。

口縁部文様帯の文様を、狭小な口縁部文様帯（Ａ～Ｇ）のもの・複帯型のもの（Ｈ）・単帯型で隆線系のもの（Ｊ～Ｏ）・単帯型で隆沈線系のもの（Ｐ～Ｕ）・単帯型で沈刻状隆沈線系のもの（Ｖ）・口～胴部展開系のものと大きく５つに分けて胴部文様帯のあり方を検討してみた。その結果、口～胴部展開系の文様は沈刻状隆沈線系Ｖの胴部文様に類似し（ｙ口～胴部連結曲流横位渦巻沈線文とｃ連結曲流渦巻沈線文、ｚ口～胴部連結曲流横位渦巻隆沈線文とｖ連結曲流渦巻隆沈線文）口縁部文様帯と胴部文様帯が分離しているかどうかの違いだけである。こうした胴部文様帯の類似、非類似の度合いをそれぞれ検討してみた。

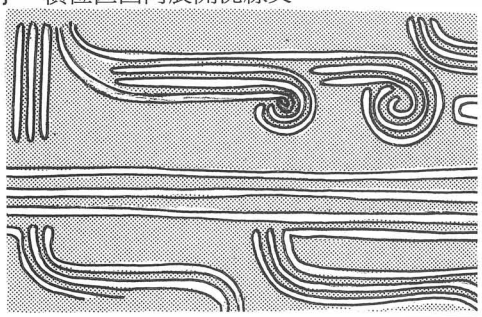
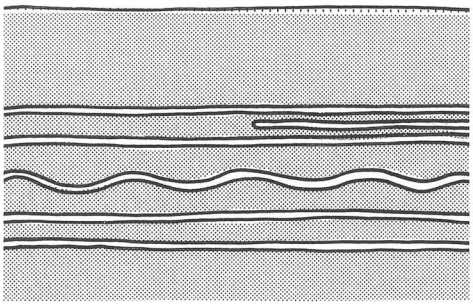
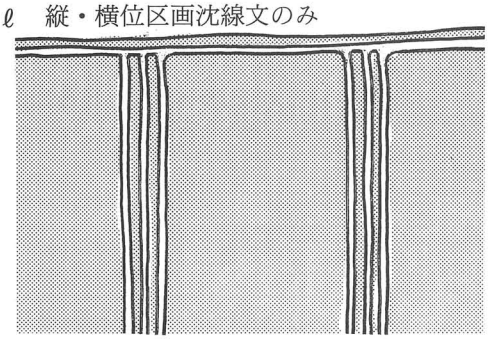
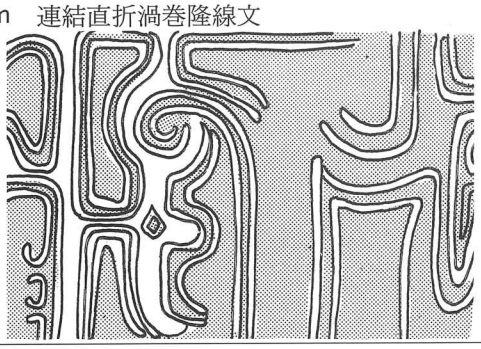
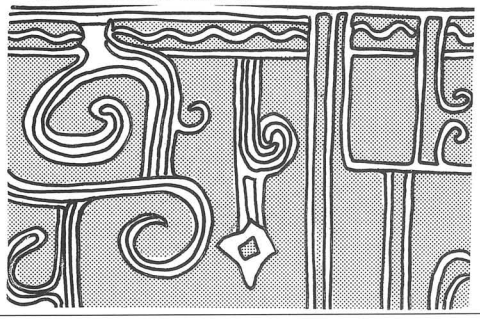
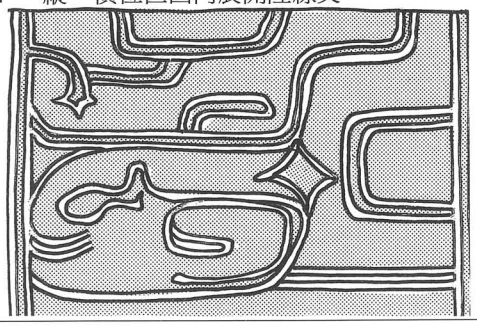
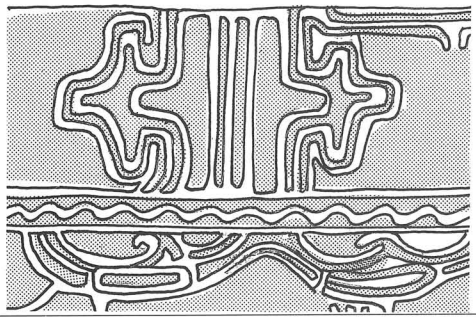
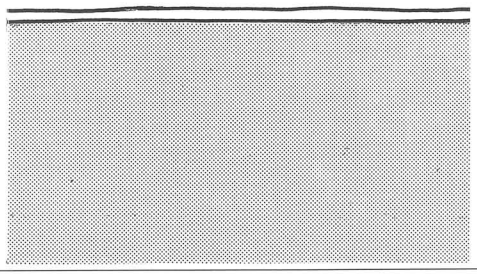
第９表　深鉢形土器の口縁部文様帯・胴部文様帯相関表(3)

胴部文様 ＼ 口縁部文様		沈線系		隆線系		隆沈線系	
		全面展開型	区画内展開型	全面展開型	区画内展開型	全面展開型	区画内展開型
狭小型	Ａ～Ｇ	ａ　ｄｅｆ	ｈｉｋｌ		ｒｓｔ		ｗｘ
複帯型	Ｈ	ａ　ｄｅｆ	ｈｉｋｌ	ｍｎ	ｏｐｒ　ｔ		ｗｘ
単帯型 隆線系	Ｊ～Ｏ	ｆ	ｈ　ｋｌ		ｏ　ｒｓ		
単帯型 隆沈線系	Ｐ～Ｕ	ａ　ｅ	ｈ　ｋｌ		ｒｓ	ｕｖ	ｗｘ
単帯型 沈刻状隆沈線系	Ｖ	ａｃ　ｅ			ｒｓ	ｕｖ	ｘ
口～胴部展開型		ｖ				ｚ	

第21図　深鉢形土器胴部文様帯分類（1）

口縁部文様帯から独立する胴部文様帯	沈線文系	胴部全面展開型	a　曲流横位渦巻沈線文	b　曲流横位変形渦巻沈線文
			c　連結曲流横位渦巻沈線文	d　連結直折渦巻沈線文
			e　直折渦巻沈線文	f　連結直折沈線文
			g　連弧状沈線文	
		区画内展開型	h　縦位区画内展開沈線文	i　縦・横位区画内展開沈線文

第22図　深鉢形土器胴部文様帯分類（２）

<table>
<tr><td rowspan="5">口縁部文様帯から独立する胴部文様帯</td><td rowspan="2">沈線文系</td><td rowspan="2">区画内展開型</td><td>j　横位区画内展開沈線文
  </td><td>k　横位区画沈線文のみ
  </td></tr>
<tr><td>ℓ　縦・横位区画沈線文のみ
  </td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">隆線文系</td><td>胴部全面展開型</td><td>m　連結直折渦巻隆線文
  </td><td>n　連結直折隆線文</td></tr>
<tr><td rowspan="2">区画内展開型</td><td>o　縦位区画内展開隆線文
  </td><td>p　縦・横位区画内展開隆線文
  </td></tr>
<tr><td>q　横位区画内展開隆線文
  </td><td>r　横位区画隆線文のみ
  </td></tr>
</table>

第23図　深鉢形土器胴部文様帯分類（３）

口縁部文様帯から独立する胴部文様帯	隆線文系	区画内展開型	s　縦位区画隆線文のみ	t　縦・横位区画隆線文のみ
	隆沈線文系	胴部全面展開型	u　曲流横位渦巻隆沈線文	v　連結曲流渦巻隆沈線文
		区画内展開型	w　縦位区画内展開隆沈線文	x　縦・横位区画線隆沈線文のみ
口縁部から胴部に連結する文様帯	沈線文系	口～胴部全面展開型	y　口～胴部連結曲流横位渦巻沈線文	
	隆沈線文系	口～胴部全面展開型	z　口～胴部連結曲流横位渦巻隆沈線文	z’　口～胴部連結渦巻隆沈線文

7　器　種

器種には、深鉢形土器・樽形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・壷形土器・注口土器・有孔鉢形土器の８器種が認められた。このうち深鉢形土器は口径と器高の比が１以上のもので、鉢形土器は１未満1/2以上のもの、浅鉢形土器は1/2未満とした。深鉢形土器のうち胴部上半から口縁部にかけて内彎し、最大径が胴部にあり全体形状が樽形でまとまりのある一群のものを樽形土器として独立させた。さらに浅鉢形土器のうち注口を持つものを注口土器とした。鉢形土器の中で全体が無文で口縁直下に小孔を連続して持つ特殊なものを有孔鉢形土器とした。

8　器　形

器形は、口縁部形態と口縁部の傾きの状態、胴部の傾きの状態によって構成されている。口縁部形態には平口縁のものと波状口縁のものと大きく２つある。平口縁は平坦な単純口縁で突起をもつものもある。波状口縁には波頂部に突起を持つものもある。波頂部の数や波頂部の突起の数も様々である。これをまとめたのが第24図である。

深鉢形土器は平口縁・波状口縁のものがあるが、樽形土器・鉢形土器・壷形土器・注口土器・有孔鉢形土器はすべて平口縁である。浅鉢形土器と台付浅鉢形土器にはわずかに波状口縁状のもの（66図1，213図2）がある。

また平坦な単純口縁に突起を持つものや、波頂部に突起を持つものが多いので突起についてまとめる。突起には口縁部文様帯として連続しながら展開するものと、胴部文様帯と連結して展開するもの、独立して突起が付くものとがある。これらには橋状のものと非橋状のものとがある。また大きさや突起の全体的形状から立体的空洞突起・大型立体突起・立体的突起・単純突起・Ｓ字状突起・３字状突起のものがある。これら突起についてまとめたのが第25図である。連続型の橋状の単純突起の一部や非橋状の立体的空洞突起の一部と非橋状の単純突起、連結型の非橋状の立体的空洞突起の一部、独立型の非橋状で立体的空洞突起の大部分は単純平口縁につくものである。その他のものは波状口縁の波頂部となっている。

深鉢形土器には立体的空洞突起・大型立体突起・立体的突起・単純突起・Ｓ字状突起・３字状突起のいずれもあるが、樽形土器・壷形土器・注口土器・有孔鉢形土器は突起がない。鉢形土器には単純突起状のもの（55図1）のがある。浅鉢形土器には橋状型の単純突起を持つもの（29図5）や単純突起やＳ字状突起を持つもの（194図4）がある。台付浅鉢形土器にも単純突起を持つものがある。

口縁部形態と突起形状をいれて器形を分類すると繁雑になるので、口縁部の傾きと胴部の傾きとで分類したのが第26図である。

［土器の分類］

第II群土器には、深鉢形土器・樽形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付浅鉢形土器・壷形土器・注口土器・有孔鉢形土器の８器種が認められた。これらのうち数量の少ない壷形土器・注口土器・有孔鉢形土器をのぞいた５器種について分類した。

1　深鉢形土器分類

８器種中最も数量が多いのは深鉢形土器である。観察の８「器形」の項で述べたように深鉢形土器の器形は、口縁部が内彎しキャリパー形のもの（Ａ類）と、口縁部が内彎するが胴部の屈曲の緩やかなもの（Ｂ類）、胴部が外傾し口縁部がやや内彎するもの（Ｃ類）、口縁部が外傾するもの（Ｄ類）、胴部から口縁部にかけて外傾するもの（Ｅ類）、口縁部が直立するもの（Ｆ類）、胴部から口縁部が大きく内彎するもの（Ｇ類）の７器形に分類した。これらはそれぞれ文様帯のあり方から第31～35図のように細分できる。また器形と文様帯、口縁部・胴部文様の関係をまとめたのが第10表である。これをもとに口縁部文様帯を中心としてＡ群～Ｋ群の11群に分類したのが第11表である。各群の年代的位置付けは第VI章の考察の項で行うこととする。

第７表　深鉢形土器の口縁部文様帯・胴部文様帯相関表（１）

口縁部文様帯	胴部文様帯		
A狭小単帯横位沈刻状渦巻沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 h縦位区画内展開沈線文 r横位区画隆線文のみ x縦横位区画隆沈線文のみ	d連結直折渦巻文 i縦横位区画内展開沈線文 s縦位区画隆線文のみ 地文のみ	c直折渦巻沈線文 l縦横位区画沈線文のみ t縦横位区画隆線文のみ
B狭小単帯縦位短沈線文	k横位区画沈線文のみ	l縦横位区画沈線文のみ	r横位区画隆線文のみ
C狭小単帯小波状隆線文	d連結直折渦巻沈線文	r横位区画隆線文のみ	地文のみ
D狭小単帯横位隆線文	d連結直折渦巻沈線文 w縦位区画内展開隆沈線文	r横位区画隆線文のみ	t縦横位区画隆線文のみ
E狭小単帯押圧縄文	d連結直折渦巻沈線文	k横位区画沈線文のみ	地文のみ
F狭小単帯山形状押圧縄文	地文のみ		
G狭小単帯刺突文	d連結直折渦巻沈線文 i縦横位区画内展開沈線文	f連結直折沈線文 k横位区画沈線文のみ	h縦位区画内展開沈線文
H幅有複帯沈線文・隆線系押圧縄文系・刺突文系	a曲流横位渦巻沈線文 h縦位区画内展開沈線文 l縦横位区画沈線文のみ o縦位区画内展開隆線文 t縦横位区画隆線文のみ 地文のみ	d連結直折渦巻沈線文 i縦横位区画内展開沈線文 m連結直折渦巻隆線文 p縦横位区画内展開隆線文 w縦位区画内展開隆沈線文	f連結直折沈線文 k横位区画沈線文のみ n連結直折隆線文 r横位区画隆線文のみ x縦横位区画隆沈線文のみ
I幅有単帯弧状沈線文	b曲流横位横位変形渦巻沈線文	k横位区画沈線のみ	
J幅有単帯独立横位渦巻隆線文	h縦位区画内展開沈線文	s縦位区画隆線文のみ	
K幅有単帯直線状連結横位渦巻隆線文	o縦位区画内展開隆線文		
L幅有単帯波状連結横位渦巻隆線文	h縦位区画内展開沈線文 地文のみ	l縦横位区画沈線文のみ	r横位区画隆線文のみ
M幅有単帯小単位連結横位渦巻隆線文	h縦位区画内展開沈線文 無文のみ	r横位区画隆線文のみ	地文のみ
N幅有単帯直折隆線文	f連結直折沈線文 r横位区画隆線文のみ	h縦位区画内展開沈線文	k横位区画沈線文のみ
O幅有単帯横位波状隆線文	h縦位区画内展開沈線文	t縦横位区画隆線のみ	地文のみ
P幅有単帯独立横位渦巻隆沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 t縦横位区画隆線のみ	h縦位区画内展開沈線文 地文のみ	k横位区画沈線文のみ
Q幅有単帯波状連結横位渦巻隆沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 w縦位区画内展開隆沈線文	h縦位区画内展開沈線文 x縦横位区画隆沈線文のみ	l縦横位区画沈線文のみ 地文のみ
R幅有単帯連結横位渦巻隆沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 地文のみ	c直折渦巻沈線文	h縦位区画内展開沈線文
S幅有単帯直線状連結横位渦巻隆沈線文	h縦位区画内展開沈線文 v曲流横位渦巻隆沈線文	i横位区画隆線文のみ 地文のみ	t縦横位区画隆線文のみ
T幅有単帯小単位連結横位渦巻隆沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 k横位区画沈線のみ u曲流横位渦巻隆沈線 地文のみ	c直折渦巻沈線文 l縦横位区画沈線のみ w縦位区画内展開隆沈線文	h縦位区画内展開沈線文 t縦横位区画隆線文のみ x縦横位区画隆沈線文のみ
U幅有単帯直折隆沈線文	l縦横位区画沈線文のみ		
V幅有単帯横位沈刻状隆沈線文	a曲流横位渦巻沈線文 t縦横位区画隆線文のみ x縦横位区画隆沈線文のみ	c連結曲流横位渦巻沈線文 u曲流横位渦巻隆沈線文	e直折渦巻沈線文 v連結曲流渦巻隆沈線文
W幅有単帯横位連続楕円文	地文のみ		
X幅有単帯突起付無文帯	k横位区画沈線文のみ o縦位区画内展開隆線文	d連結直折渦巻沈線文 地文のみ	h縦位区画内展開沈線文
Yその他	d連結直折渦巻沈線文 i縦横位区画内展開沈線文 w縦位区画内展開隆沈線文	f連結直折沈線文 k横位区画沈線文のみ 地文のみ	h縦位区画内展開沈線文 t縦横位区画隆線文のみ

第８表　深鉢形土器の口縁部文様帯・胴部文様帯相関表（２）

胴部文様帯分類 ＼ 口縁部文様帯分類	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y
a	●							●								●	●	●		●	●				
b									●																
c																					●				
d		●		●	●	●		●	●																●
e	●																		●		●		●		
f								●	●					●											●
g																									
h	●						●	●		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●
i	●						●	●																	●
j																									
k		●			●		●	●	●					●		●				●				●	●
l	●	●						●				●					●			●	●				
m								●																	
n								●																	
o								●			●													●	
p								●																	
q																									
r	●	●	●	●				●				●	●	●					●						
s	●									●															
t	●			●				●							●	●			●	●		●			●
u																				●			●		
v																			●			●			
w				●				●									●			●					●
x	●							●									●			●		●			
y																									
z																									
地文のみ	●		●		●	●		●				●	●		●					●			●	●	●
無文のみ													●												

第24図　深鉢形土器口縁形態分類

平口縁	平坦な単純口縁		
波状口縁	波頂部があるもの	1つの波状口縁	
		2つの波状口縁	
		3つの波状口縁	
		4つの波状口縁	
		5つの波状口縁	
		6つの波状口縁	
	波頂部が突起のもの	波頂部が4つの突起のもの	
		波頂部が5つの突起のもの	
		波頂部が8つの突起のもの	

第25図　深鉢形土器突起分類

連続型 口縁部文様帯として連続して展開する突起	橋状型	口縁部文様帯全体構成の立体的中空突起	口縁部文様帯全体構成の単純突起
		口縁部第１文様帯構成の立体的中空突起	
	非橋状型	立体的中空突起	単純突起
連結型 胴部文様帯と連結して展開する突起	橋状型	立体的中空突起	
	非橋状型	立体的中空突起	
独立型	橋状型	立体的中空突起	単純突起
	非橋状型	立体的中空突起	立体的突起
		大型立体突起	単純突起
		Ｓ字状突起	３字状突起

第26図　深鉢形土器器形分類

A　類 口縁部が内彎し、キャリパーの形のもの	
B　類 口縁部が内彎するが、胴部の屈曲の緩やかなもの	
C　類 胴部が外傾し、口縁部がやや内彎するもの	
D　類 口縁部が外傾するもの	
E　類 胴部から口縁部にかけて外傾するもの	
F　類 口縁部が直立するもの	
G　類 胴部から口縁部が大きく内彎するもの	

第29図　浅鉢形土器器形分類

A　類 口縁部が大きく内彎するもの	
B　類 口縁部がやや立ち上がるもの	
C　類 胴部から口縁部へ外傾するもの	

第27図　樽型土器器形分類

A　類 胴部上半から口縁部が大きく内彎するもの	
B　類 胴部上半から大きく内彎するが口縁部がやや外反するもの	
C　類 胴部上半から内彎するが口縁部がやや直立気味のもの	

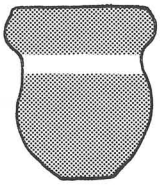
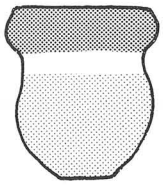
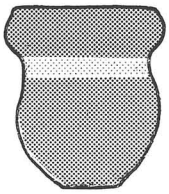
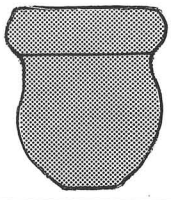
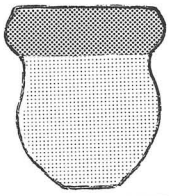
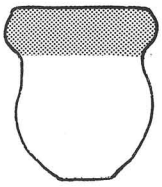
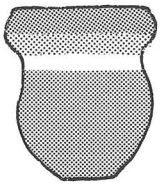
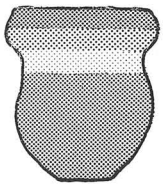
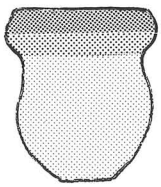
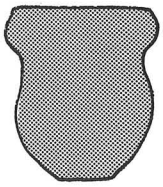
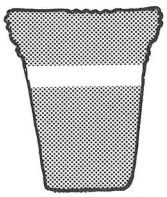
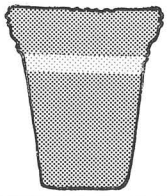
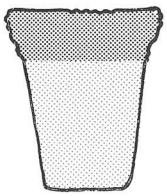
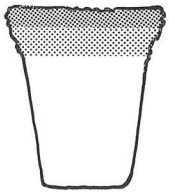
第28図　鉢形土器器形分類

A　類 口縁部が大きく内彎するもの	
B　類 口縁部がやや立ち上がるもの	
C　類 胴部から口縁部にかけて外傾するもの	
D　類 胴部が内彎し口縁部が立ち上がるもの	

第30図　台付浅鉢形土器器形分類

A　類 口縁部がやや立ち上がるもの	
B　類 胴部から口縁部へそのまま外傾するもの	

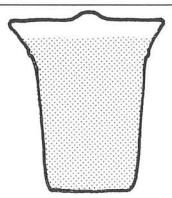
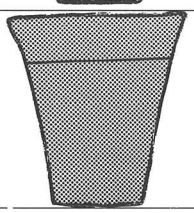
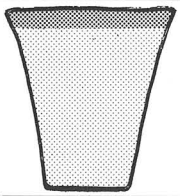
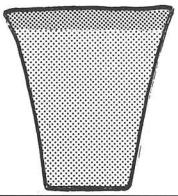
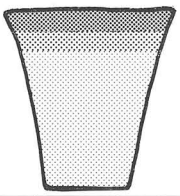
第31図　深鉢形土器器形・文様帯分類（1）

文様帯の有無	器　　形	文　様　帯			
文様帯のあるもの	A　類 口縁部が内彎し、キャリパー形のもの	A 1類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		A 2類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部地文帯	
		A 3類 口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		A 4類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部文様帯（単帯）	
		A 5類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部地文帯		A 6類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部無文帯	
		A 7類 口縁部文様帯（複帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		A 8類 口縁部文様帯（複帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）	
		A 11類 口縁部文様帯（複帯） —— 胴部地文帯		A 13類 口縁部文様帯～ 胴部文様帯	
	B　類 口縁部が内彎するが、胴部の屈曲の緩やかなもの	B 1類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		B 2類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部地文帯	
		B 3類 口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		B 4類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部文様帯（単帯）	
		B 5類 口縁部文様帯（単帯） —— 胴部地文帯		B 7類 口縁部文様帯（複帯） 頸部無文帯 胴部無文帯	

第32図　深鉢形土器器形・文様帯分類（２）

文様帯のあるもの	B　類 口線部が内彎するが、胴部の屈曲の緩やかなもの	B８類 口縁部文様帯（複帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		B９類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（単帯）	
		B11類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部地文帯		B15類 口縁部地文帯 ―― 胴部文様帯（複帯）	
		B16類 口縁部無文帯 ―― 胴部文様帯（単帯）			
	C　類 胴部が外傾し、口縁部がやや内彎するもの	C１類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		C３類 口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）	
		C４類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部文様帯（単帯）		C５類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯	
	D　類 口縁部が外傾するもの	D１類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		D２類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部地文帯	
		D３類 口縁部文様帯（単帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）		D４類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部文様帯（単帯）	
		D５類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯		D６類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部無文帯	
		D７類 口縁部文様帯（単帯） 頸部無文帯 胴部文様帯（単帯）		D８類 口縁部文様帯（複帯） 頸部地文帯 胴部文様帯（単帯）	

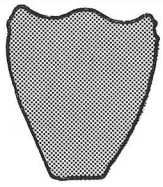
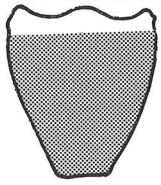
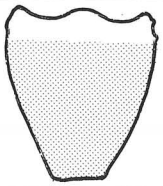
第33図　深鉢形土器器形・文様帯分類（３）

文様帯のあるもの	D　類 口縁部が外傾するもの	D９類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（単帯）		D10類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（複帯）	
		D11類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部地文帯		D13類 口縁部文様帯～ 胴部文様帯	
		D16類 口縁部無文帯 ―― 胴部文様帯（単帯）		D17類 口縁部無文帯 ―― 胴部地文帯	
	E　類 胴部から口縁部にかけて外傾するもの	E１類 口縁部文様帯（単帯） 頚部無文帯 胴部文様帯（単帯）		E２類 口縁部文様帯（単帯） 頚部無文帯 胴部地文帯	
		E３類 口縁部文様帯（単帯） 頚部地文帯 胴部文様帯（単帯）		E４類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部文様帯（単帯）	
		E５類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯		E６類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部無文帯	
		E７類 口縁部文様帯（単帯） 頚部無文帯 胴部文様帯（単帯）		E９類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（単帯）	
		E10類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（複帯）		E11類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部地文帯	
		E13類 口縁部文様帯～ 胴部文様帯		E16類 口縁部無文帯 ―― 胴部文様帯（単帯）	

第34図　深鉢形土器器形・文様帯分類（４）

文様のあるもの	E　類 胴部から口縁部にかけて、外傾するもの	E 17類 口縁部無文帯 ―― 胴部地文帯			
	F　類 口縁部が直立するもの	F 1類 口縁部文様帯（単帯） 頚部無文帯 胴部文様帯（単帯）		F 2類 口縁部文様帯（単帯） 頚部無文帯 胴部地文帯（単帯）	
		F 3類 口縁部文様帯（単帯） 頚部地文帯 胴部文様帯（単帯）		F 4類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（単帯）	
		F 5類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯		F 6類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部無文帯（単帯）	
		F 7類 口縁部文様帯（複帯） 頚部無文帯 胴部文様帯（単帯）		F 8類 口縁部文様帯（複帯） 頚部地文帯 胴部文様帯（単帯）	
		F 9類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（単帯）		F 10類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部文様帯（複帯）	
		F 11類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部地文帯		F 12類 口縁部文様帯（複帯） ―― 胴部無文帯	
		F 16類 口縁部無文帯 ―― 胴部文様帯（単帯）		F 17類 口縁部無文帯 ―― 胴部地文帯	
	G　類 胴部から口縁部がおおきく内彎するもの	G 1類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯		G 5類 口縁部文様帯（単帯） ―― 胴部地文帯	

第35図　深鉢形土器器形・文様帯分類（５）

文様帯のあるもの	G　類 胴部から口縁部が大きく内彎するもの	G13類 口縁部文様帯～胴部文様帯		G16類 口縁部無文帯 ―― 胴部文様帯（単帯）	
		G17類 口縁部無文帯 ―― 胴部地文帯			
地文・無文のみのもの		H　類 口縁部が内彎し、キャリパー形のもの		I　類 口縁部が内彎するが、屈曲の緩やかなもの	
		J　類 口縁部が外傾するもの		K　類 口縁部が直立するもの	
		L　類 口縁部がやや内彎するもの		M　類 口縁部が外反するもの	

胴部の横位区画沈・隆・隆沈線だけのものも胴部文様帯（単帯）とした。

第10表　深鉢形土器の器形・文様帯・口胴部文様相関

器形	文様帯構成	口縁部・胴部文様
A類	文様帯１類	Ja・Jh・Js・J－・Lh・Ll・L－M－・Nh・Nk・Nr・Pa・Ph・Px P－・Qa・Qh・Ql・Qw・Q－・Ra Ru・R－・Sa・Se・St・Su・S－ Ta・Te・Th・Tk・Tl・Tt・Tw T－・Va・Vc・Ve・Vu・Vv・Vx V－
A類	文様帯２類	L地・M地・R地・S地・T地
A類	文様帯３類	Dd・Ja・Jh・J－・L－・Mh・N－ Oh・Ph・Qa・Q－・T－・Vc・Vv Yk
A類	文様帯４類	Ib・Ik・Ko・Nf・Nk・Oh・Q－ Rh・Ul・Yd
A類	文様帯５類	J地・K地・L地・M地・N地 P地・Q地・T地・Y地
A類	文様帯６類	M無・Y無
A類	文様帯７類	Hp・Hw・Nw
A類	文様帯８類	Hh・Ht・Hx・H－・Nd
A類	文様帯10類	Hi・Hp・Hq
A類	文様帯11類	H地
A類	文様帯13類	Z
B類	文様帯１類	A－・X－
B類	文様帯２類	X地・Y地
B類	文様帯３類	Cd・Gf・Yt
B類	文様帯４類	Nf・Xo・Yf
B類	文様帯５類	Y地
B類	文様帯７類	Hk・Hm・Ho・H－・Nf
B類	文様帯８類	Hf・Hp・Ht
B類	文様帯９類	Ha・Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm H－
B類	文様帯11類	H地
B類	文様帯15類	Yi
B類	文様帯16類	Yd
C類	文様帯１類	Pt・Re・Sh・Sr
C類	文様帯３類	Ko・Pk
C類	文様帯４類	Yh
C類	文様帯５類	K地・H地・
D類	文様帯１類	Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr・Xh Xv・Xx・X－・Yw
D類	文様帯２類	C地・E地
D類	文様帯３類	Br・Dw・Gk・Gh・Vt
D類	文様帯４類	Gf・Xd
D類	文様帯５類	A地・C地・E地・Y地・W地
D類	文様帯６類	Y地
D類	文様帯７類	Ha・Hm・Hn・H－

器形	文様帯構成	口縁部・胴部文様
D類	文様帯８類	Hi・Hl・Hm
D類	文様帯９類	Hd・Hl・Hm
D類	文様帯10類	Hp
D類	文様帯11類	H地
D類	文様帯13類	Y・Z
D類	文様帯16類	無g
D類	文様帯17類	無地
E類	文様帯１類	Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw・Xk
E類	文様帯２類	Dr
E類	文様帯３類	Ae・Bl・He・Hi
E類	文様帯４類	Ed・Gi・Xh
E類	文様帯５類	A地・B地・C地・E地・Y地
E類	文様帯６類	Y無
E類	文様帯７類	H－
E類	文様帯９類	Hd・Hf・Hi・Ht
E類	文様帯10類	Hf
E類	文様帯11類	H地
E類	文様帯13類	Z
E類	文様帯16類	無L
E類	文様帯17類	無地
F類	文様帯１類	X－・Yd
F類	文様帯２類	Dt
F類	文様帯３類	E－
F類	文様帯４類	As・Cd・Ek・Gd・Gh・Hf
F類	文様帯５類	C地・E地
F類	文様帯６類	H無
F類	文様帯７類	Hn
F類	文様帯８類	Hn・H－
F類	文様帯９類	Hd・Hf・Hl・H－
F類	文様帯10類	Hi
F類	文様帯11類	H地
F類	文様帯12類	H無
F類	文様帯16類	無e
F類	文様帯17類	無地
G類	文様帯１類	Y－
G類	文様帯５類	Y地
G類	文様帯13類	Z
G類	文様帯16類	無n
G類	文様帯17類	無地

第11表　深鉢形土器の器形・文様帯構成・口胴部文様分類(1)

A群　狭小な口縁部文様帯（A～G）

A類	文様帯３類	Dd
B類	文様帯１類	A－
B類	文様帯８類	Cd・Gf
D類	文様帯１類	Aa・Ad・Ah・Ax・Bk・Cr
D類	文様帯２類	C地・E地
D類	文様帯３類	Br・Dw・Gk・Gh
D類	文様帯４類	Gf
D類	文様帯５類	A地・C地・E地

E類	文様帯１類	Aa・Ae・Ah・Ar・At・Dw
E類	文様帯２類	Dr
E類	文様帯３類	Ae・Bl
E類	文様帯４類	Ed・Gi
E類	文様帯５類	A地・B地・C地・E地
F類	文様帯２類	Dt
F類	文様帯３類	E－
F類	文様帯４類	As・Cd・Ek・Gd・Gh
F類	文様帯５類	C地・E地

B群　口縁部文様帯が複帯（H）

A類	文様帯７類	Hp・Hw・Nw
A類	文様帯８類	Hh・Ht・Hx・H－・Nd
A類	文様帯10類	Hi・Hp・Hq
A類	文様帯11類	H地
B類	文様帯７類	Hk・Hm・Ho・H－・Nf
B類	文様帯８類	Hf・Hp・Ht
B類	文様帯９類	Ha・Hd・Hf・Hh・Hk・Hl・Hm H－
B類	文様帯11類	H地・
D類	文様帯７類	Ha・Hm・Hn・H－
D類	文様帯８類	Hi・Hl・Hm
D類	文様帯９類	Hd・Hl・Hm
D類	文様帯10類	Hp

D類	文様帯11類	H地
E類	文様帯７類	H－
E類	文様帯９類	Hd・Hf・Hl・Ht
E類	文様帯10類	Hf
E類	文様帯11類	H地
F類	文様帯７類	Hn
F類	文様帯８類	Hn・H－
F類	文様帯９類	Hd・Hf・Hl・H－
F類	文様帯10類	Hi
F類	文様帯11類	H地
F類	文様帯12類	H無

C群　単帯（沈線系）（I）

A類	文様帯４類	Ib・Ik・

D群　口縁部文様帯が単帯のもの（隆線系）（J～O）

A類	文様帯１類	Ja・Jh・Js・J－・Lh・Ll・L－ M－・Nh・Nk・Nr
A類	文様帯２類	L地・M地
A類	文様帯３類	Ja・Jh・J－・L－・Mh・N－・Oh
A類	文様帯４類	Ko・Nf・Nk・Oh

A類	文様帯５類	J地・K地・L地・M地・N地
A類	文様帯６類	M無
B類	文様帯４類	Nf
C類	文様帯３類	Ko
C類	文様帯５類	K地

E群　口縁部文様帯が単帯のもの（隆沈線系）（P～U）

A類	文様帯１類	Pa・Ph・Px・P－・Qa・Qh・Ql Qw・Q－・Ra・Ru・R－・Sa・Se St・Su・S－・Ta・Te・Th・Tk Tl・Tt・Tw・T－
A類	文様帯２類	R地・S地・T地
A類	文様帯３類	Ph・Qa・Q－・T－

A類	文様帯４類	Q－・Rh・Ul
A類	文様帯５類	P地・Q地・T地
C類	文様帯１類	Pt・Re・Sh・Sr
C類	文様帯３類	Pk

第12表　深鉢形土器の器形・文様帯構成・口胴部文様分類(2)

F群　口縁部文様帯が単帯のもの（沈刻状隆沈線系）（V）

A類	文様帯１類	Va・Vc・Ve・Vu・Vv・Vx・V－
A類	文様帯３類	Vc・Vu
D類	文様帯３類	Vt

G群　口～胴部展開（ｙ・ｚ）

A類	文様帯13類	－z
D類	文様帯13類	－y・－z
E類	文様帯13類	－z
G類	文様帯13類	－z

H群　口縁部文様帯が横位連続楕円文（W）

D類	文様帯５類	W地

J群　口縁部文様帯その他（Y）

A類	文様帯３類	Yk
A類	文様帯４類	Yd
A類	文様帯５類	Y地
A類	文様帯６類	Y無
B類	文様帯２類	Y地
B類	文様帯３類	Yt
B類	文様帯４類	Yf
B類	文様帯５類	Y地
B類	文様帯15類	Yi
B類	文様帯16類	Yd
C類	文様帯４類	Yh
C類	文様帯５類	Y地
D類	文様帯１類	Yw
D類	文様帯５類	Y地
D類	文様帯６類	Y地
E類	文様帯５類	Y地
E類	文様帯６類	Y無
F類	文様帯１類	Yd
F類	文様帯４類	Yf
F類	文様帯６類	Y無
G類	文様帯６類	Y－
G類	文様帯５類	Y地

I群　口縁部文様帯が突起付無文（X）

B類	文様帯１類	X－
B類	文様帯２類	X地
B類	文様帯４類	Xo
D類	文様帯１類	Xh・Xv・Xx・X－
D類	文様帯４類	Xd
E類	文様帯１類	Xk
E類	文様帯４類	Xh
F類	文様帯１類	X－

K群　口縁部文様帯が無文・地文

D類	文様帯16類	無g
D類	文様帯17類	無地
E類	文様帯16類	無l
E類	文様帯17類	無地
F類	文様帯16類	無c
F類	文様帯17類	無地
G類	文様帯16類	無n
G類	文様帯17類	無地

Ａ群　狭小な口縁部文様帯を持つもの
Ｂ群　口縁部文様帯が複帯のもの
Ｃ群　口縁部文様帯が単帯で沈線系のもの
Ｄ群　口縁部文様帯が単帯で隆線系のもの
Ｅ群　口縁部文様帯が単帯で隆沈線系のもの
Ｆ群　口縁部文様帯が単帯で沈刻状隆線系のもの
Ｇ群　文様が口縁部から胴部に展開するもの
Ｈ群　口縁部文様帯が横位連続楕円文のもの
Ｉ群　口縁部文様帯が突起付無文のもの
Ｊ群　その他の口縁部文様帯のもの
Ｋ群　無文・地文のもの

２　樽形土器分類（第36図）

胴部上半から口縁部にかけて内彎し、最大径が胴部にあり全体形状が樽形の土器である。口縁部が大きく内彎するもの（Ａ類）と、内彎すると口縁部がやや立ち上がり外反気味のもの（Ｂ類）、口縁部がやや直立気味に立ち上がるもの（Ｃ類）とがある。口縁直下の幅のある横位隆線が特徴である。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第36図のようにそれぞれ細分した。

口縁部文様帯は横位隆線と横位隆線の上部の無文帯から構成されるが、ＡⅢ類の破片資料（82図７）のように口縁直下に幅のある横位隆線を巡らさず、口縁部～胴部にかけて無文のものもある。ＡⅢ類を除いた各類とも口縁直下に横位隆線を巡らしている。また横位隆線の上部に縄文を施文しているもの（171図10）もある。この横位隆線はほとんどが幅の広いものであるが、細い隆線を巡らすもの（54図１、99図９）もある。横位隆線はほとんどが１本であるが、２～３本巡らすもの（54図１、99図６－９、105図12、329図６）もある。この横位隆線上に連続する指頭等による圧痕を施すものや、横位・縦位の押圧縄文、縄文を施文するもの、横位隆線下に付加する押圧縄文等がある。

胴部文様帯はＡⅡ（213図１）・Ⅲ類（82図７）を除いて全て縄文を施文している。LR の縦回転が大部分であるが、RL の縦回転のもの（373図２）や、LRL の縦回転（99図７）のものもある。

３　鉢形土器分類（第37・38a 図）

口径と器高の比が１未満1/2以上のものを鉢形土器とした。深鉢形土器のキャリパー形の口縁部のように大きく内彎するもの（Ａ類）と、口縁部がやや立ち上がるもの（Ｂ類）、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（Ｃ類）、胴部が内彎し口縁部が立ち上がるもの（Ｄ類）とがある。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第37図のようにそれぞれ細分した。

Ａ類の口縁部文様帯は、口縁部～胴部にかけて無文のＡＶ類（292図６）とＡⅡ類の一部（56図４）を除いたＡＩ～Ⅳ類は幅の広い文様帯を持っている。ＡⅢ類（367図７）は複帯であるが、他はすべて単帯である。Ｂ類は、複帯のＢⅡ類が幅の広い文様帯であるが、ＢＩ類は狭小な単帯である。Ｃ類は、複帯のＣＩ類の一部と無文のＣⅡ類を除いて、単帯で文様帯は狭小である。Ｄ類は、口縁直下の横位の隆線と胴部文様帯が連結して展開する。

ＡＩ・ＡＶ・ＢＩ・ＣＩ・ＣⅡ類の胴部は無文である。ＡⅡ・ＡⅢ・ＢⅡ類は縄文を施文している。ＡⅣ・ＣⅢ類は縄文施文後に沈線や隆沈線で文様を展開している。

４　浅鉢形土器分類（第39図）

口径と器高の比が1/2未満のものを浅鉢形土器とした。口縁部が大きく内彎するもの（Ａ類）と、口縁部がやや立ち上がるもの（Ｂ類）、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（Ｃ類）とがある。口縁部文様帯・胴部文様

帯のありかたから第39図のようにそれぞれ細分した。

ＡⅡ類は口縁部～胴部にかけて無文であるが、他のＡ類は口縁部文様帯が一部を除き（156図３）いずれも幅の広い文様帯を持っている。Ｂ類は口縁部～胴部にかけて無文であるＢⅢ類を除きいずれも狭小な口縁部文様帯を持っている。口縁部～胴部にかけて無文のＣⅢ類を除いたＣⅠ・ＣⅡ類はいずれも狭小な口縁部文様帯を持っている。ＣⅣ類は縄文を施文している。

ＡⅠ・ＡⅡ類とも胴部は無文である。ＡⅢ類の胴部には縄文が施文されるが、条線文のもの（138図8）もある。ＢⅡ類は縄文を施文しているが、ＢⅠ・ＢⅢとも無文である。ＣⅡ類は縄文を施文しているが、ＣⅠ・ＣⅢ・ＣⅣ類とも無文である。

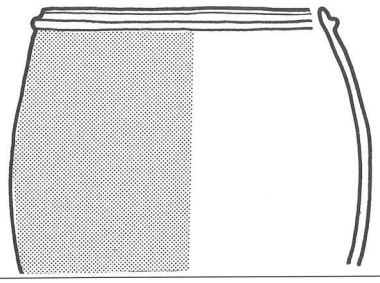
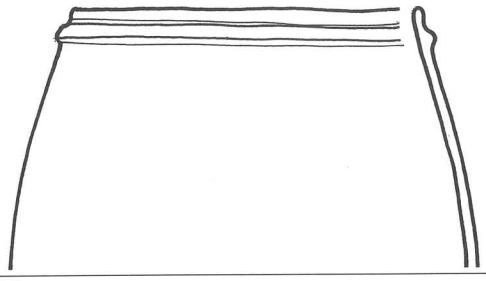
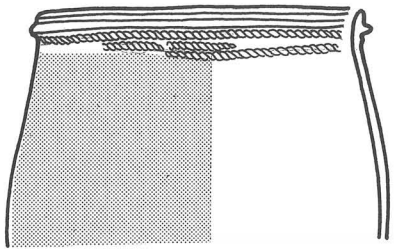
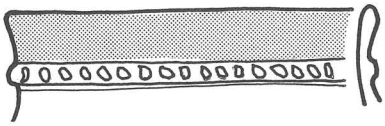
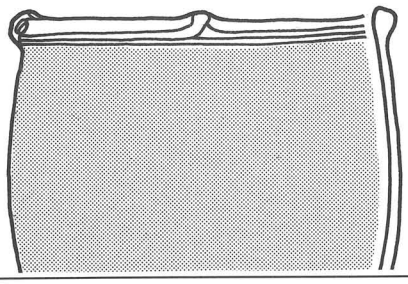
5　台付浅鉢分類（第38b 図）

台部を除いた部分の口径と器高の比が1/2未満のものを台付浅鉢形土器とした。口縁部がやや立ち上がるもの（Ａ類）と、胴部からそのまま口縁部にかけて外傾するもの（Ｂ類）とがある。口縁部文様帯・胴部文様帯のありかたから第38図のようにそれぞれ細分した。

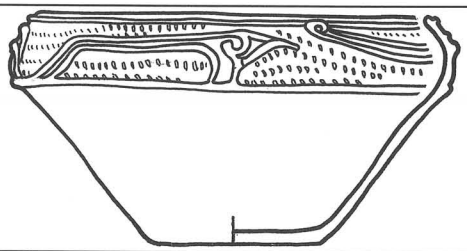
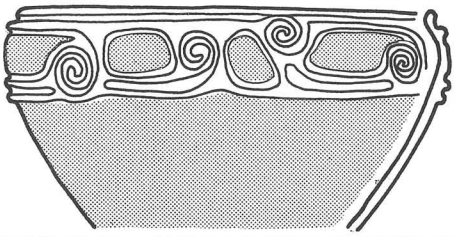
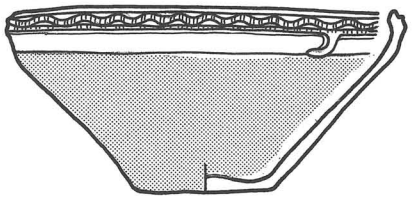
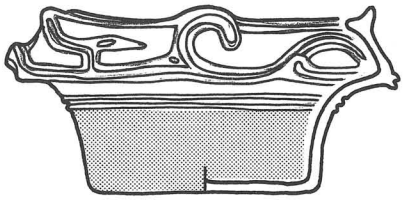
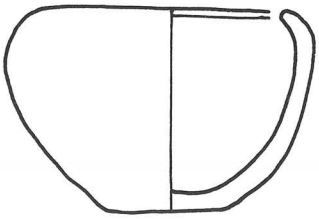
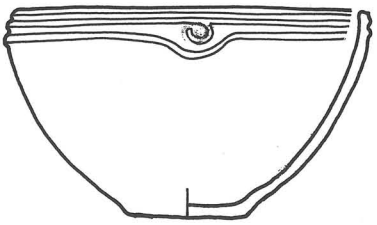
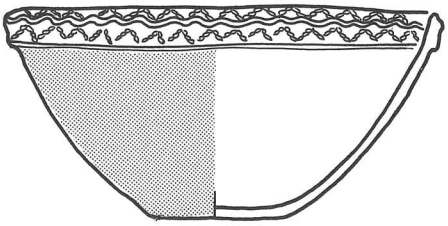
ＡⅡ類は口縁部～台部にかけて無文であるが、他のＡⅠ・ＢⅠ・ＢⅡ類とも狭小な口縁部文様帯を持っている。

ＢⅡ類は口縁部～台部にかけて縄文を施文しているが、他のＡⅠ・ＡⅡ・ＢⅠ類とも無文である。

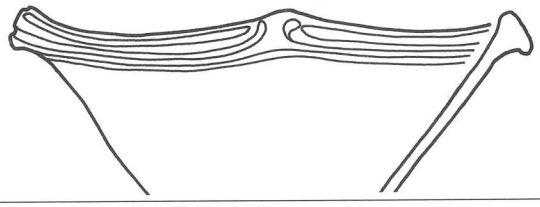
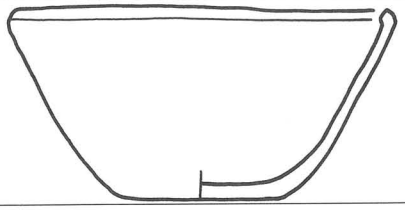
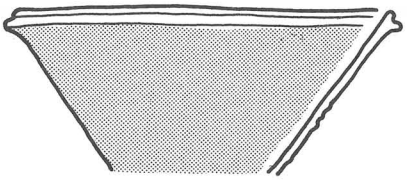
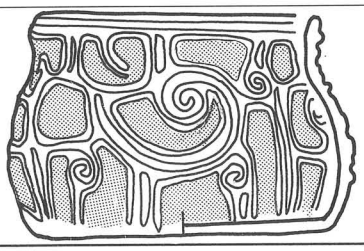
第36図　樽形土器分類

A類 胴部上半から口縁部が大きく内彎するもの	A Ⅰ類 口縁部文様帯は横位隆線で胴部文様帯は地文のもの	
	A Ⅱ類 口縁部文様帯は横位隆線で胴部文様帯は無文のもの	
	A Ⅲ類 口～胴部文様帯が無文のもの	
B類 胴部上半から大きく内彎するが口縁部がやや外反するもの	B Ⅰ類 口縁部文様帯は横位隆線で胴部文様帯は地文のもの	
	B Ⅱ類 口縁部文様帯の隆線から上が地文のもの	
C類 胴部上半から内彎するが口縁部がやや直立気味のもの	C Ⅰ類 口縁部文様帯は横位隆線で胴部文様帯は地文のもの	

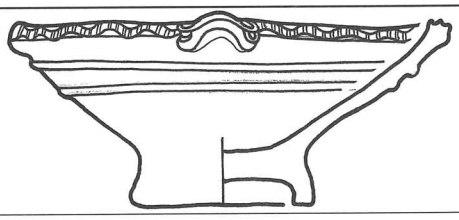
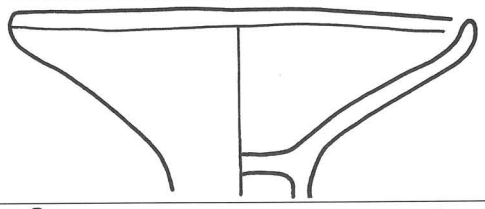
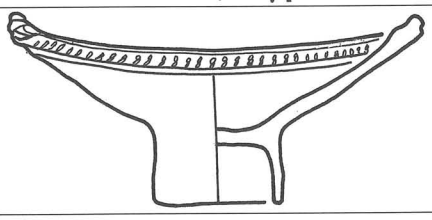
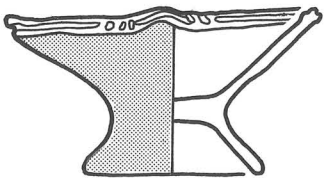
第37図　鉢形土器分類(1)

A類 口縁部が大きく内彎するもの	A Ⅰ類 口縁部文様帯を持ち胴部が無文のもの	
	A Ⅱ類 口縁部文様帯を持ち胴部が地文のもの	
	A Ⅲ類 口縁部文様帯と頚部無文帯を持ち胴部が地文のもの	
	A Ⅳ類 口縁部文様帯と頚部無文帯・胴部文様帯のもの	
	A Ⅴ類 無文のもの	
B類 口縁部がやや立ちあがるもの	B Ⅰ類 口縁部文様帯を持ち胴部文様帯が無文のもの	
	B Ⅱ類 口縁部文様帯を持ち胴部文様帯が地文のもの	

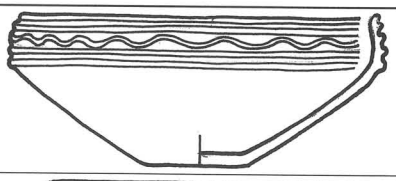
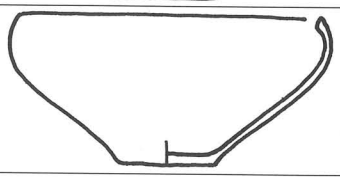
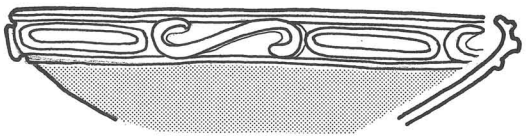
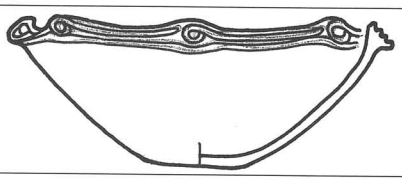
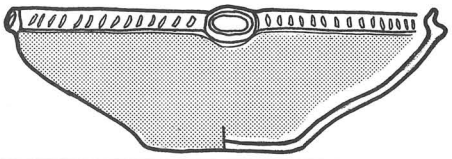
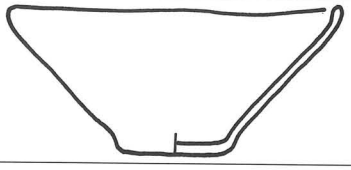
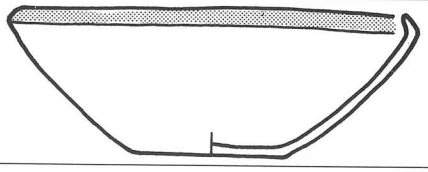
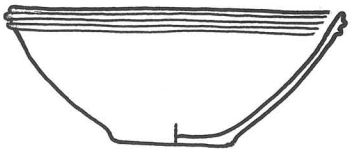
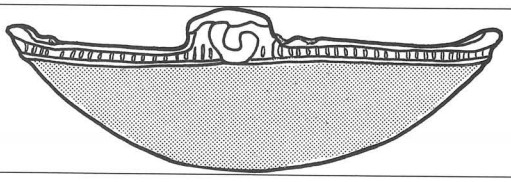
第38a 図　鉢形土器分類(2)

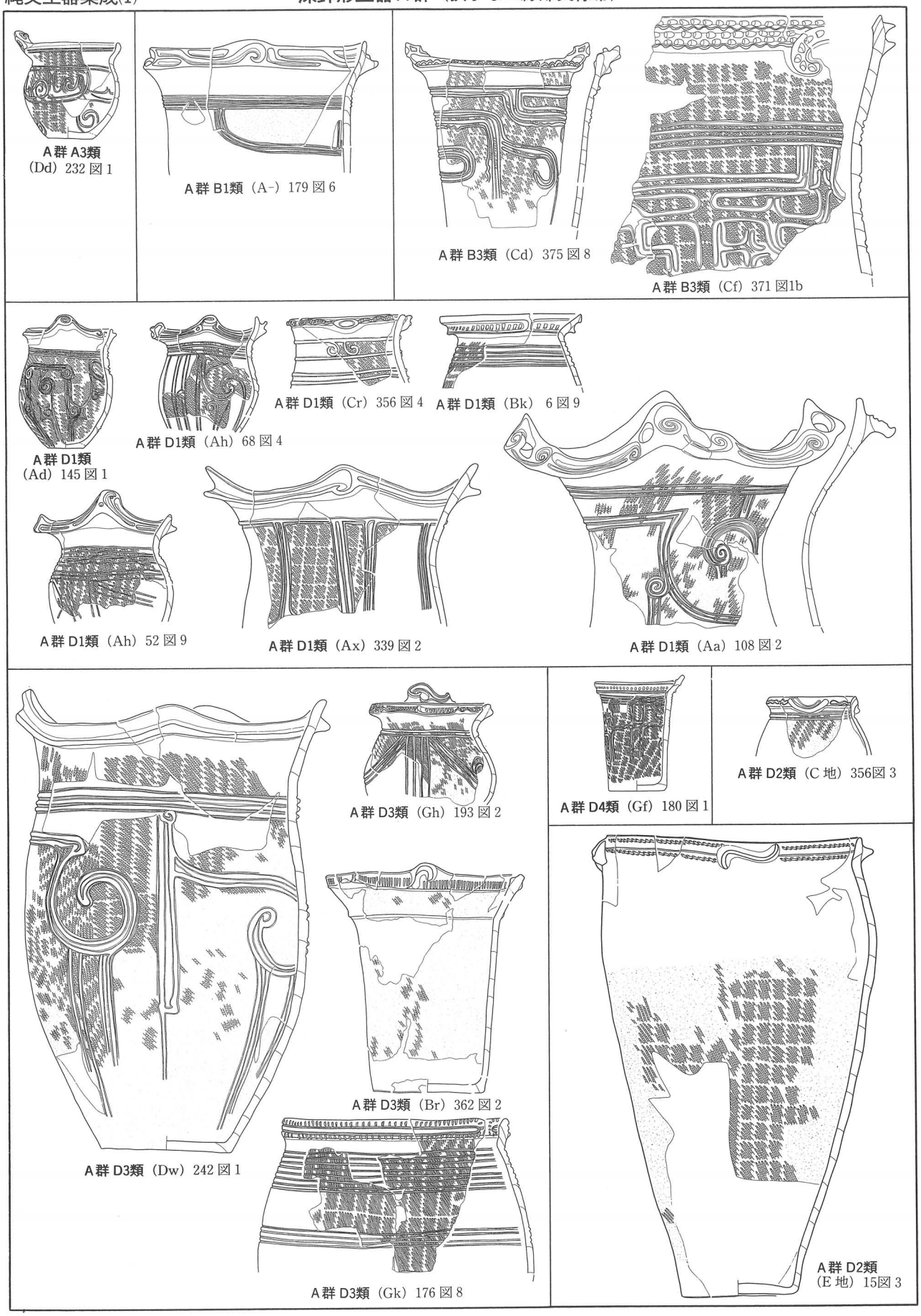
C類 胴部から口縁部にかけて外傾するもの	C Ⅰ類 口縁部文様帯を持ち胴部文様帯が無文のもの	
	C Ⅱ類 無文のもの	
	C Ⅲ類 口縁部文様帯と胴部文様帯を持つもの	
D類 胴部が内彎し口縁部が立ち上がるもの	D Ⅰ類 口縁部文様帯と胴部文様帯が連結するもの	

第38b 図　台付浅鉢分類

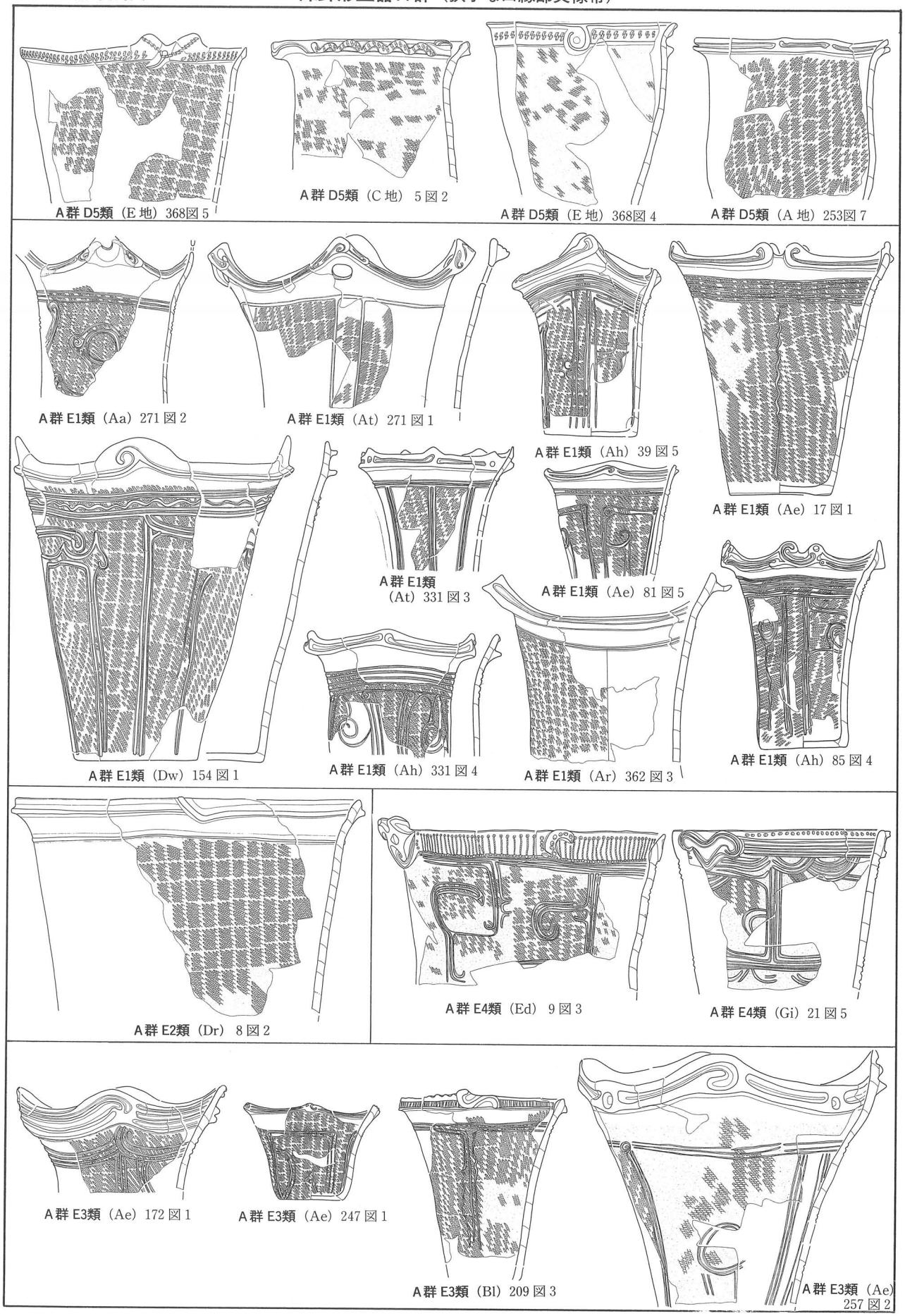
A類 口縁部がやや立ち上がるもの	A Ⅰ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	A Ⅱ類 無文のもの	
B類 胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの	B Ⅰ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	B Ⅱ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	

第39図　浅鉢形土器分類

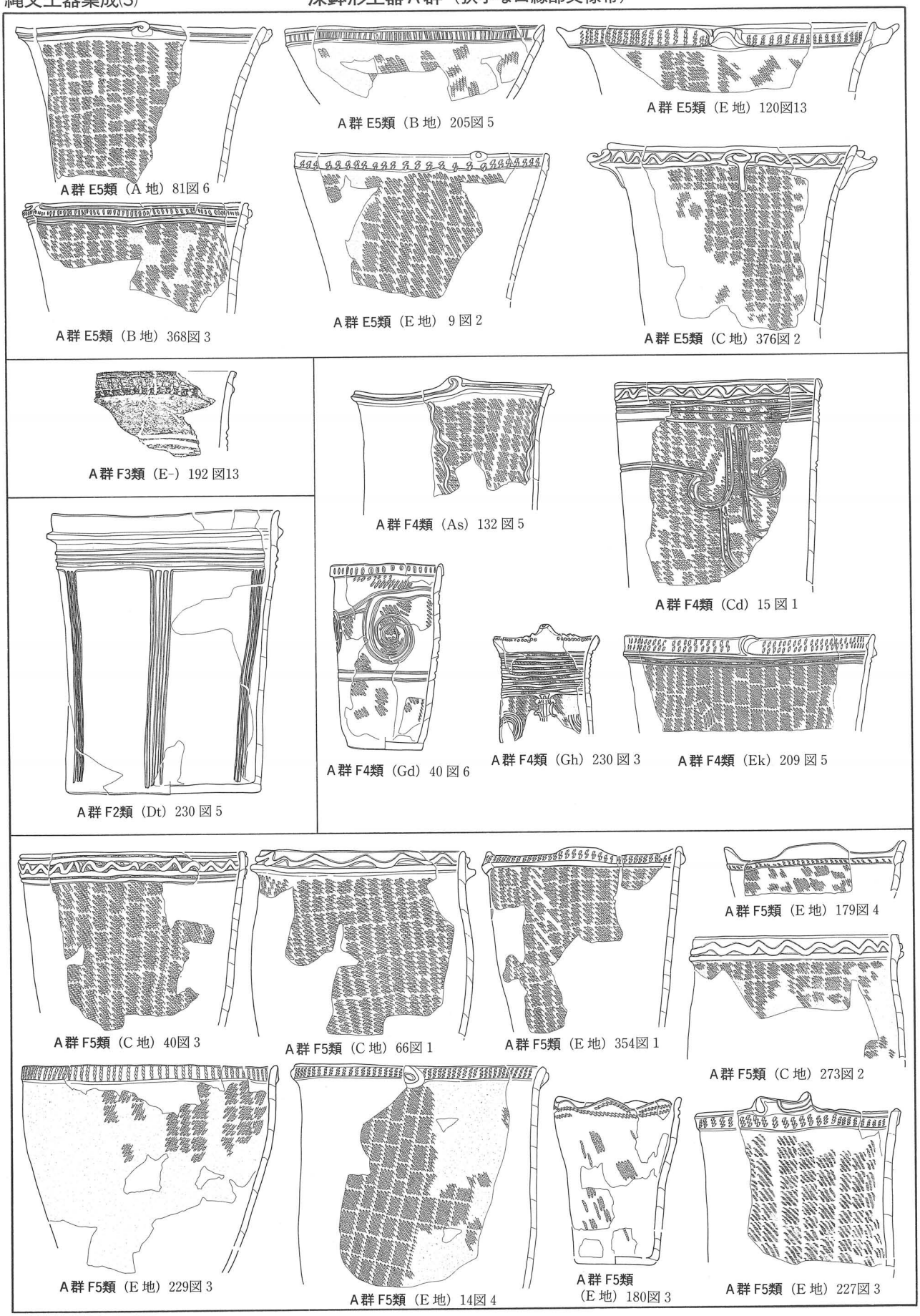
A類 口縁部が大きく内彎するもの	A Ⅰ類 幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	A Ⅱ類 無文のもの	
	A Ⅲ類 幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
B類 口縁部がやや立ち上がるもの	B Ⅰ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	B Ⅱ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
	B Ⅲ類 無文のもの	
	B Ⅳ類 口縁部が地文で胴部が無文のもの	
C類 胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの	C Ⅰ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの	
	C Ⅱ類 狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの	
	C Ⅲ類 無文のもの	



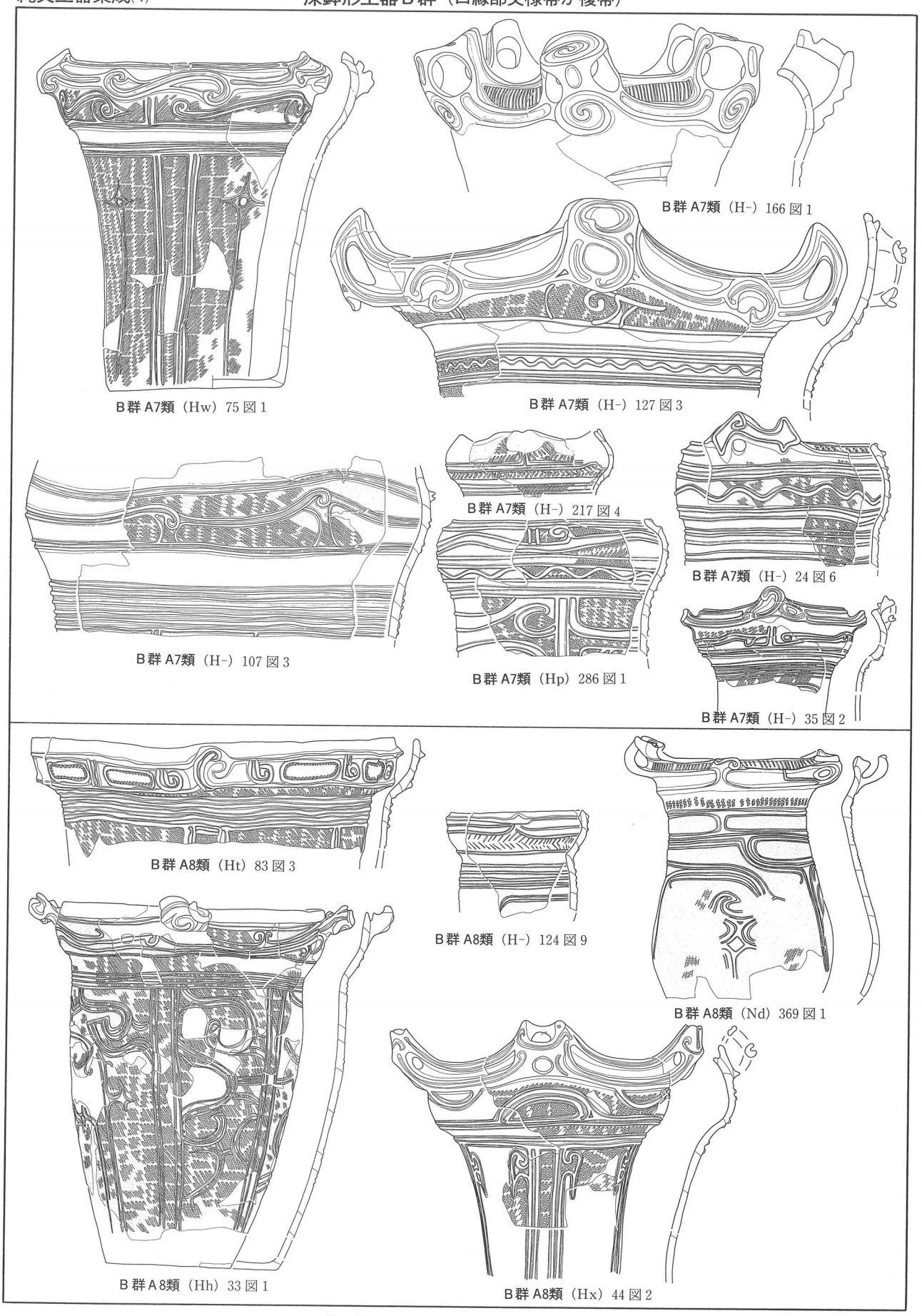
第40図　深鉢形土器A群(1)（縮尺1/6）



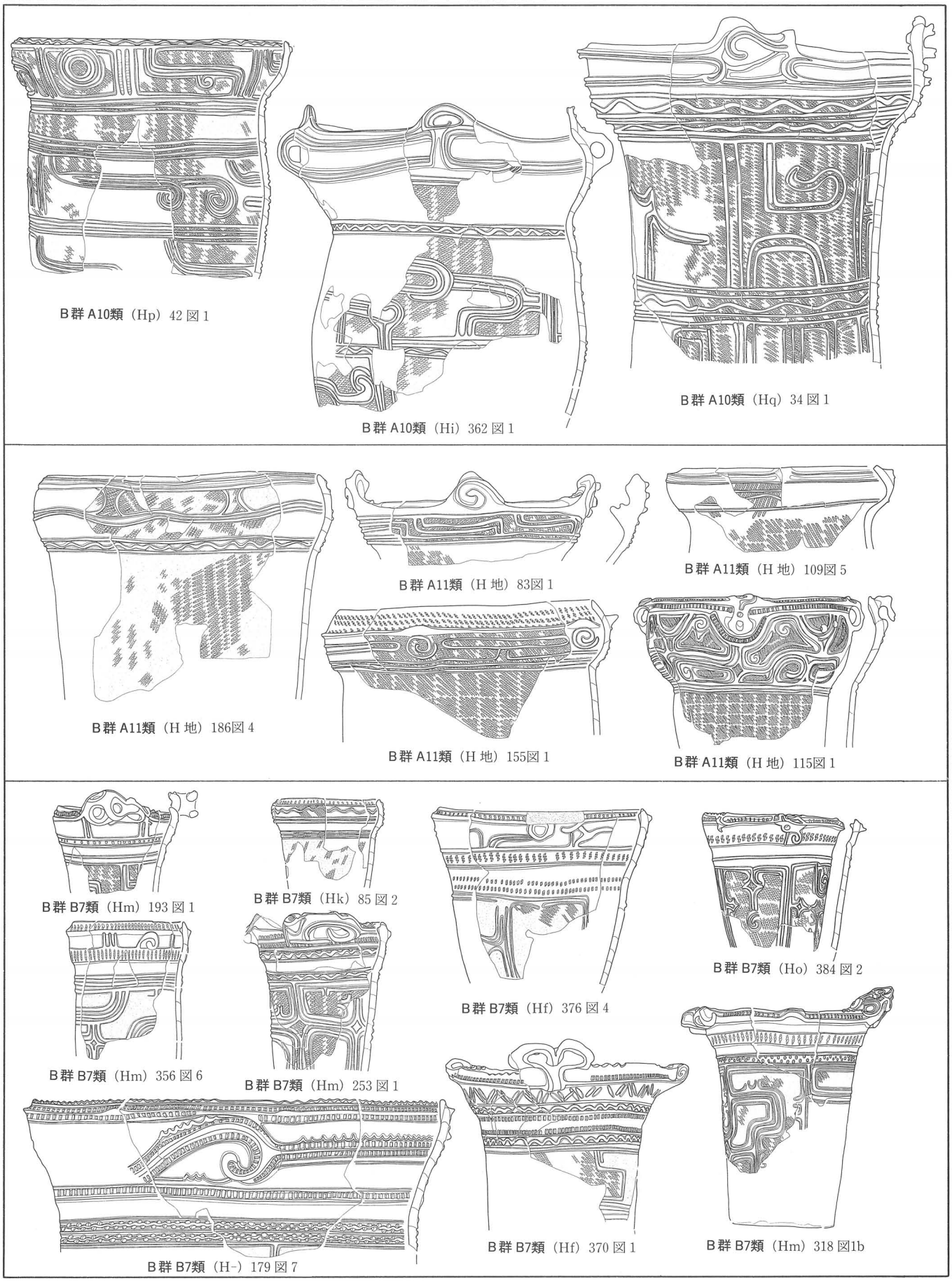
第41図　深鉢形土器A群(2)（縮尺1/6）



第42図　深鉢形土器A群(3)（縮尺1/6）

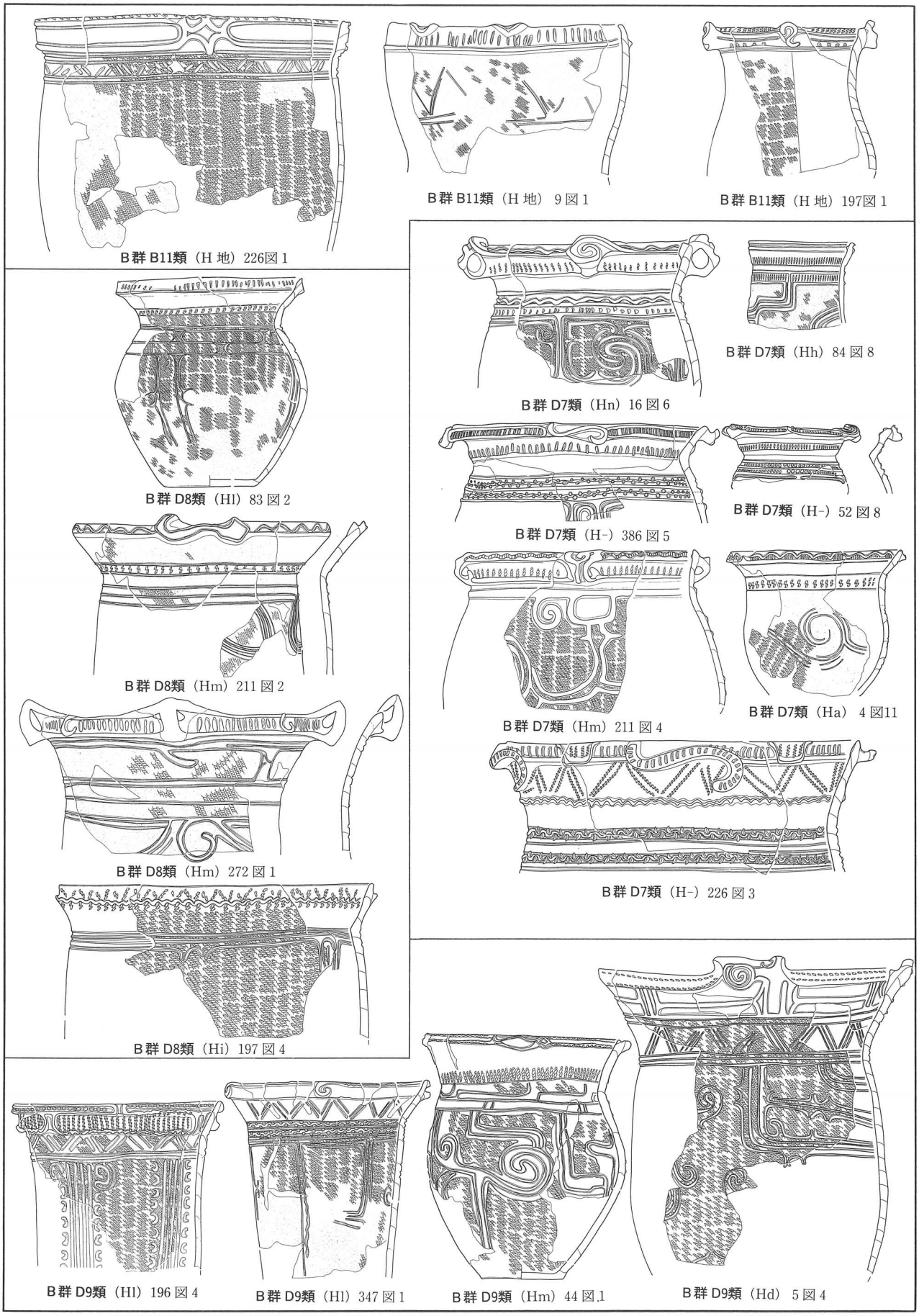


第43図　深鉢形土器Ｂ群(1)（縮尺1/6）

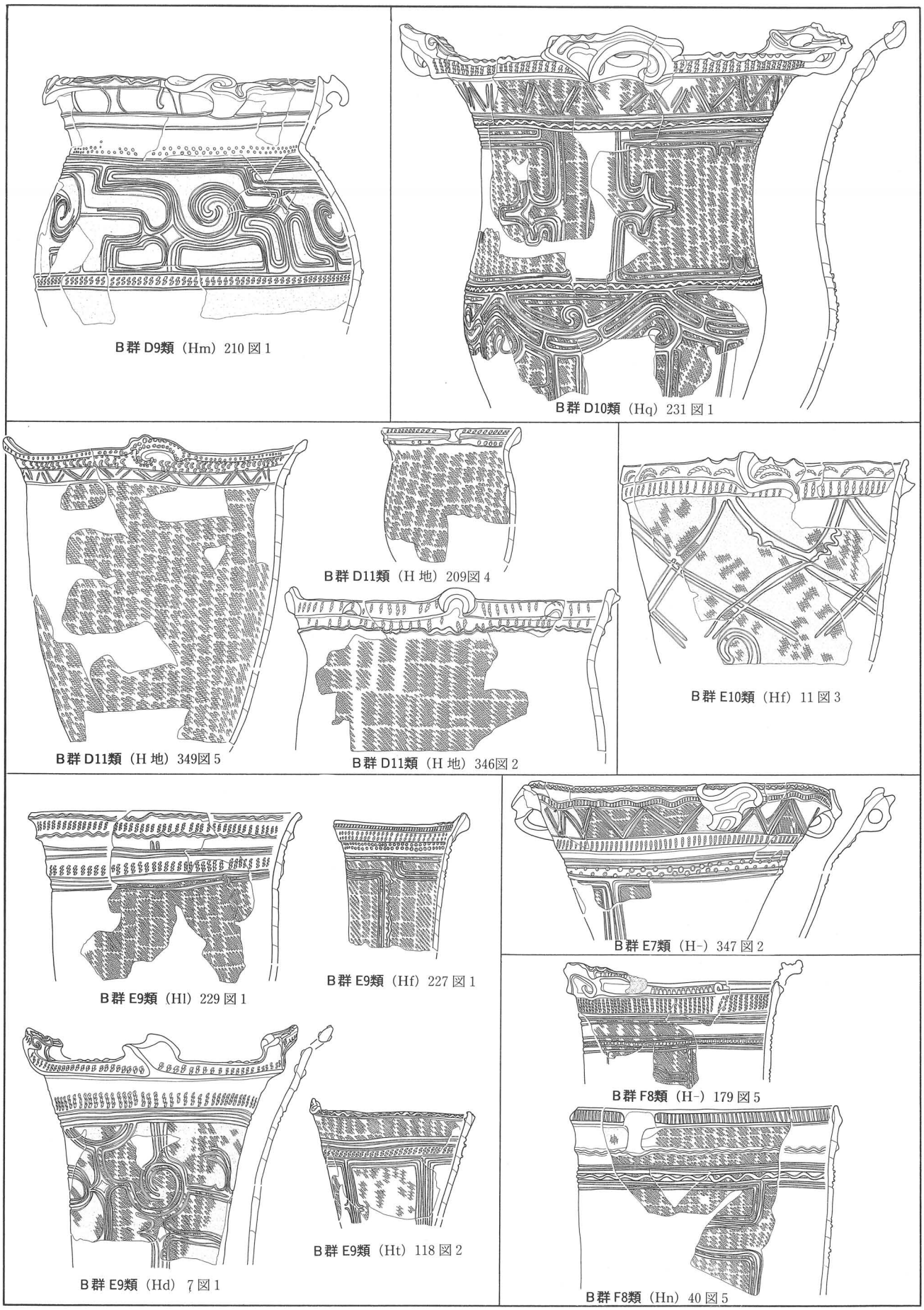


第44図　深鉢形土器Ｂ群(2)（縮尺1/6）

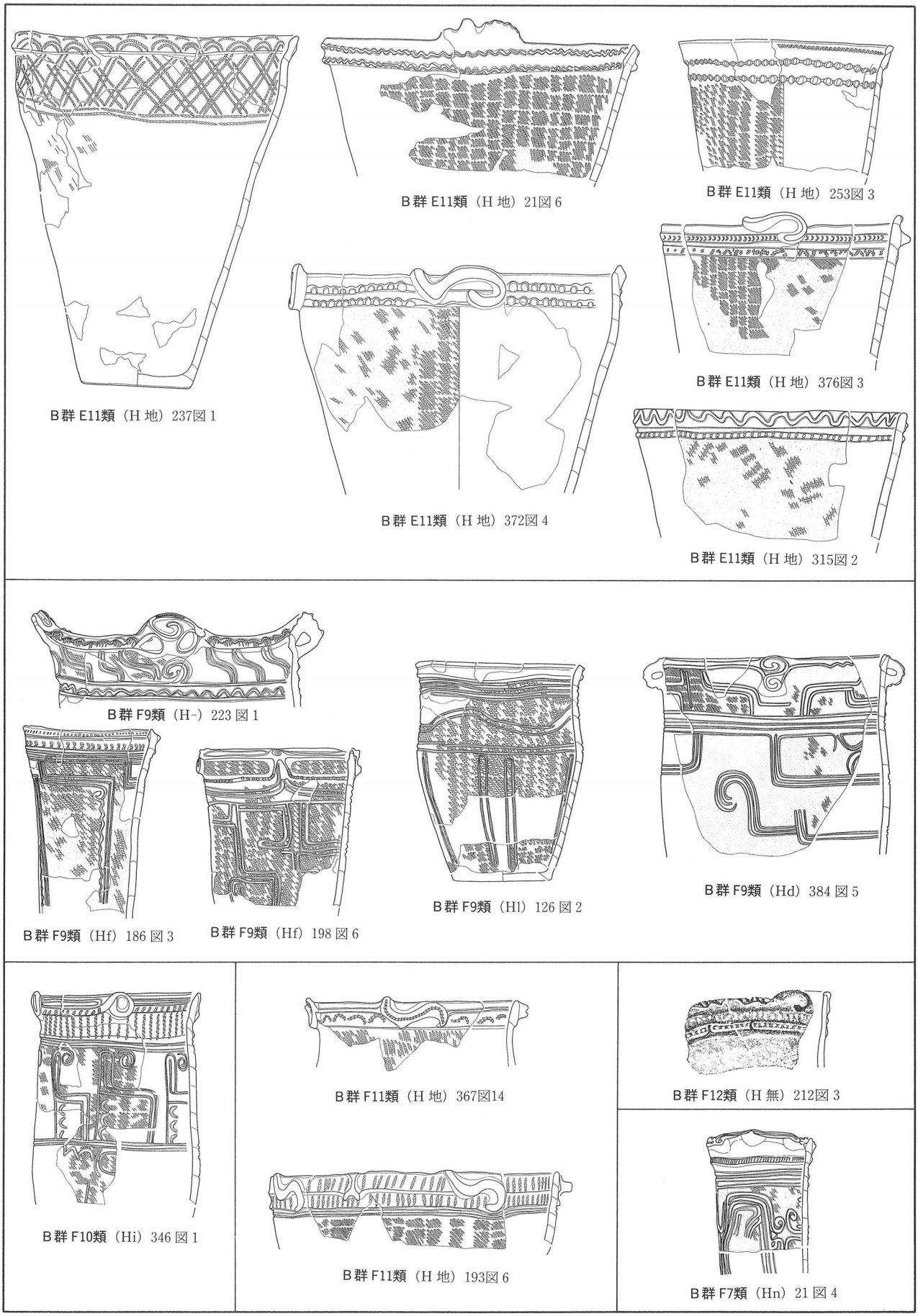
第45図　深鉢形土器Ｂ群⑶（縮尺1/6）



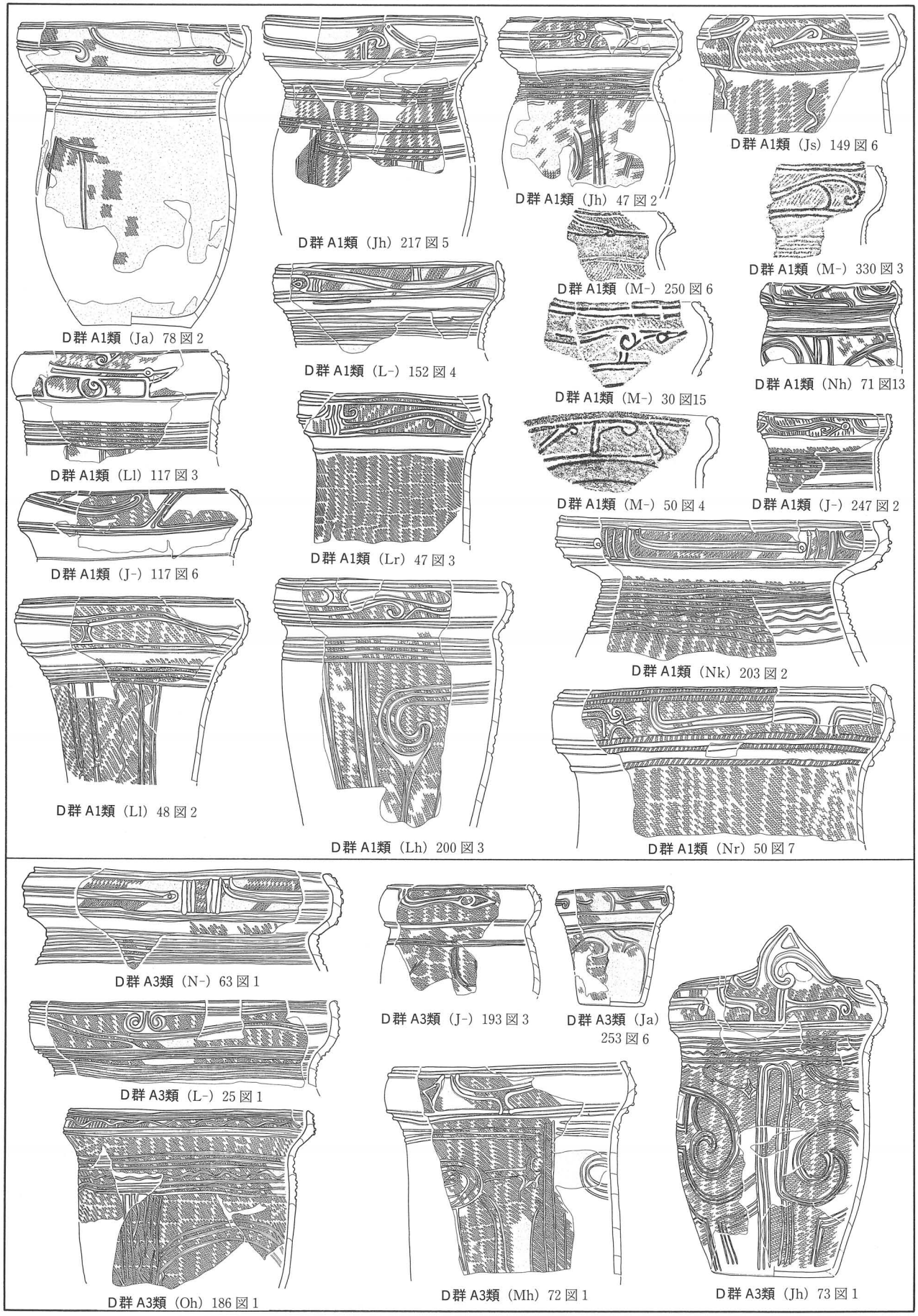
第46図　深鉢形土器Ｂ群(4)（縮尺1/6）



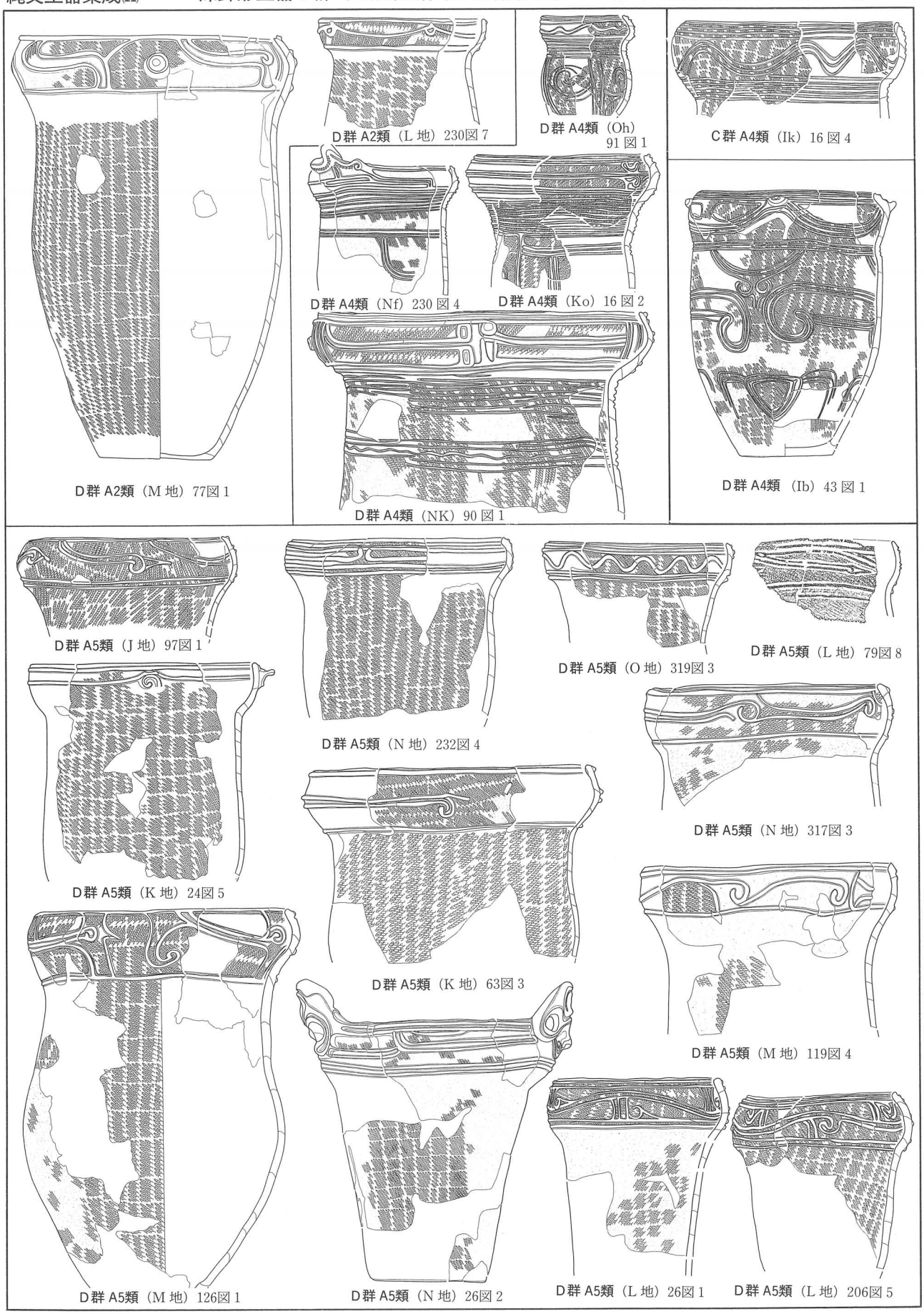
第47図　深鉢形土器Ｂ群(5)（縮尺1/6）



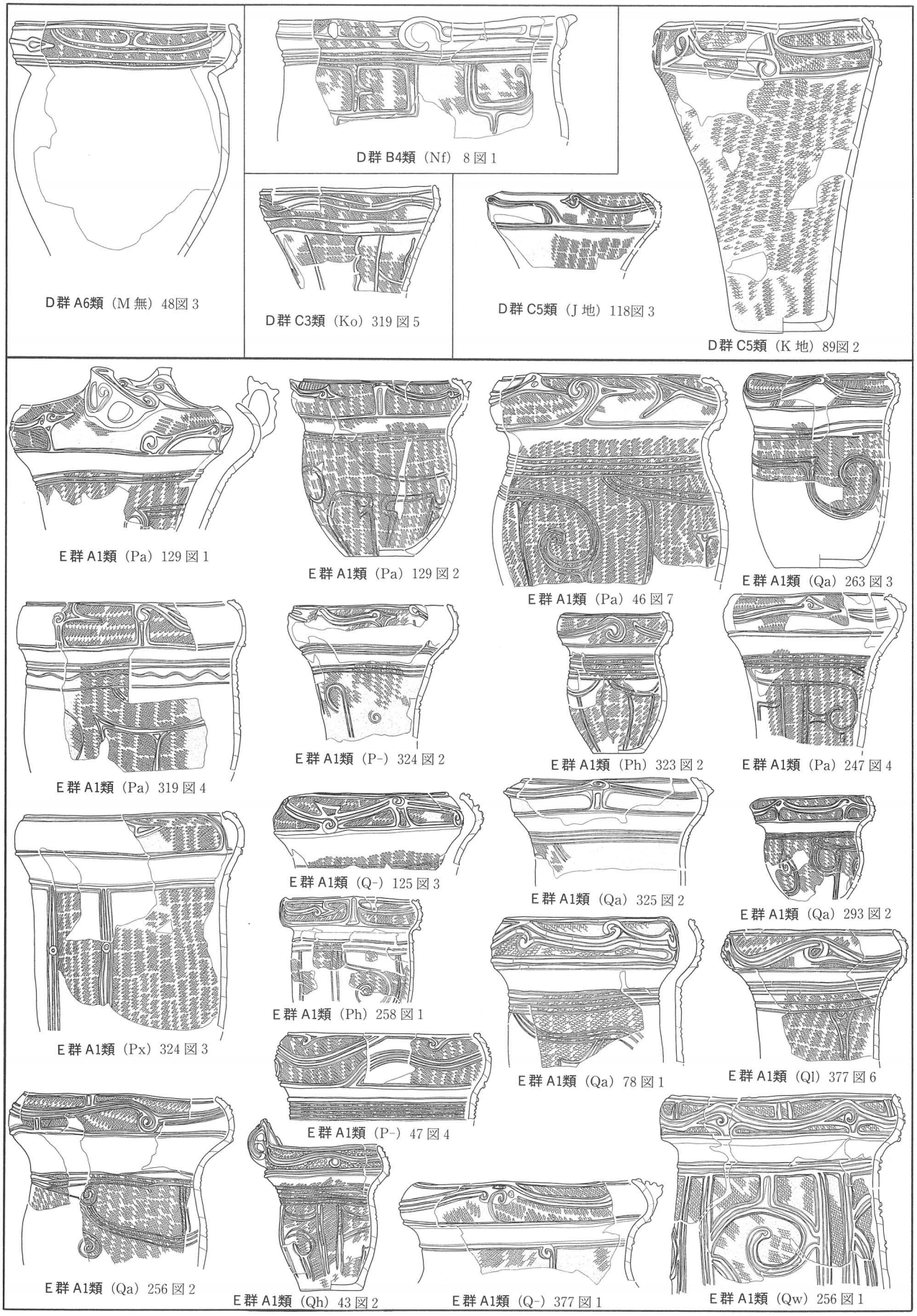
第48図　深鉢形土器Ｂ群(6)（縮尺1/6）



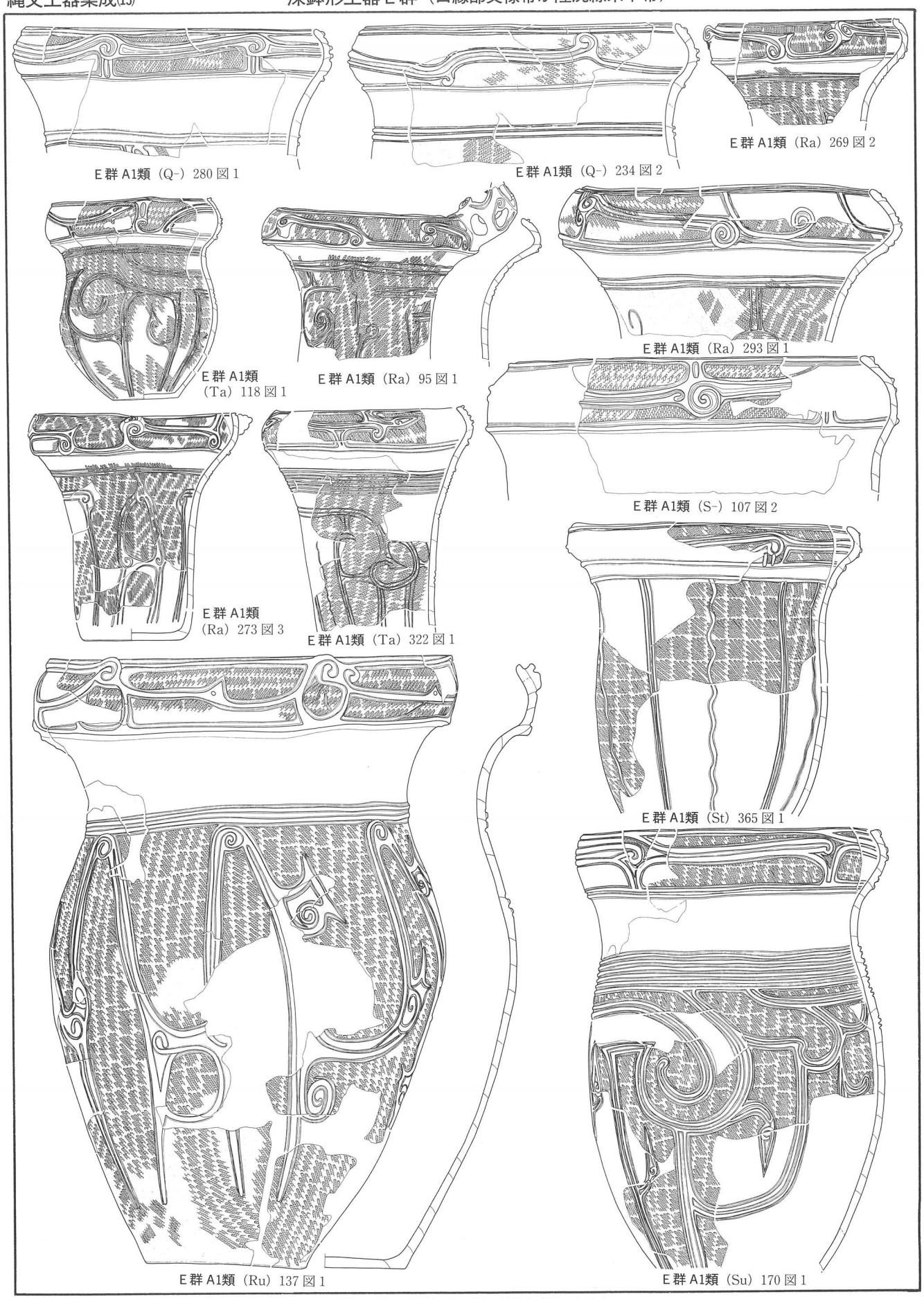
第49図　深鉢形土器Ｄ群(1)（縮尺1/6）



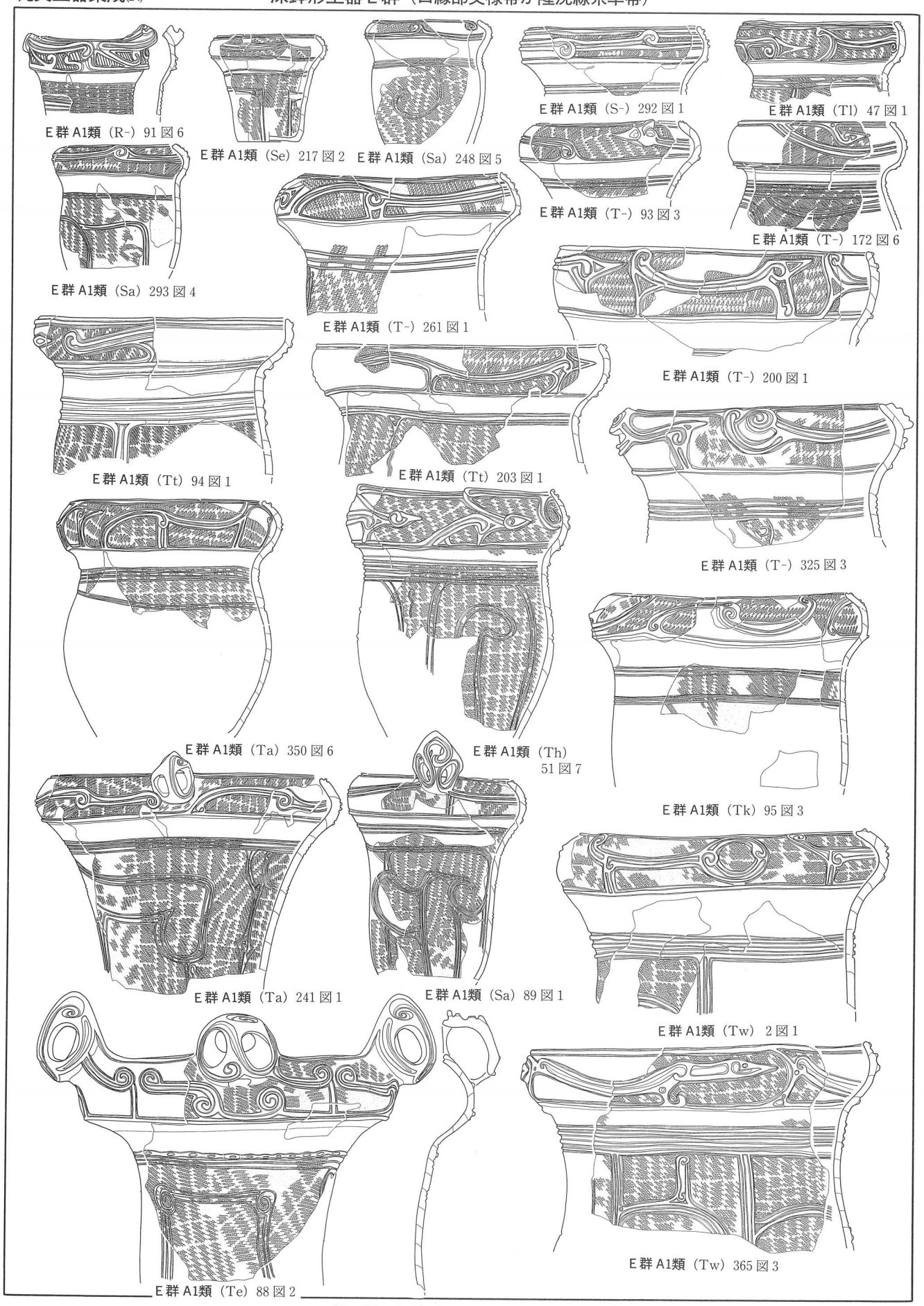
第50図　深鉢形土器Ｃ群・Ｄ群⑵（縮尺1/6）



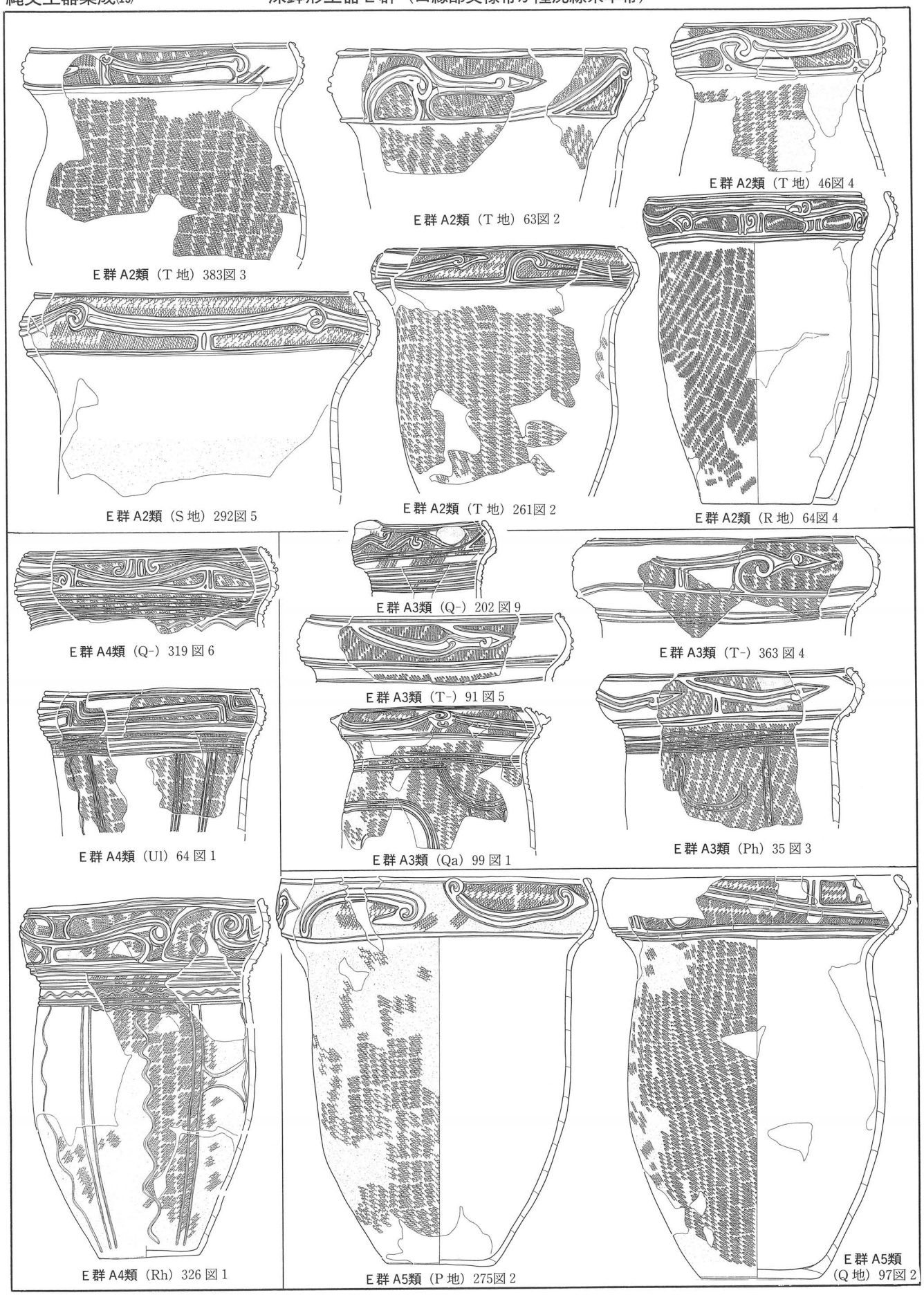
第51図　深鉢形土器Ｄ群(3)・Ｅ群(1)（縮尺1/6）



第52図　深鉢形土器E群(2)（縮尺1/6）

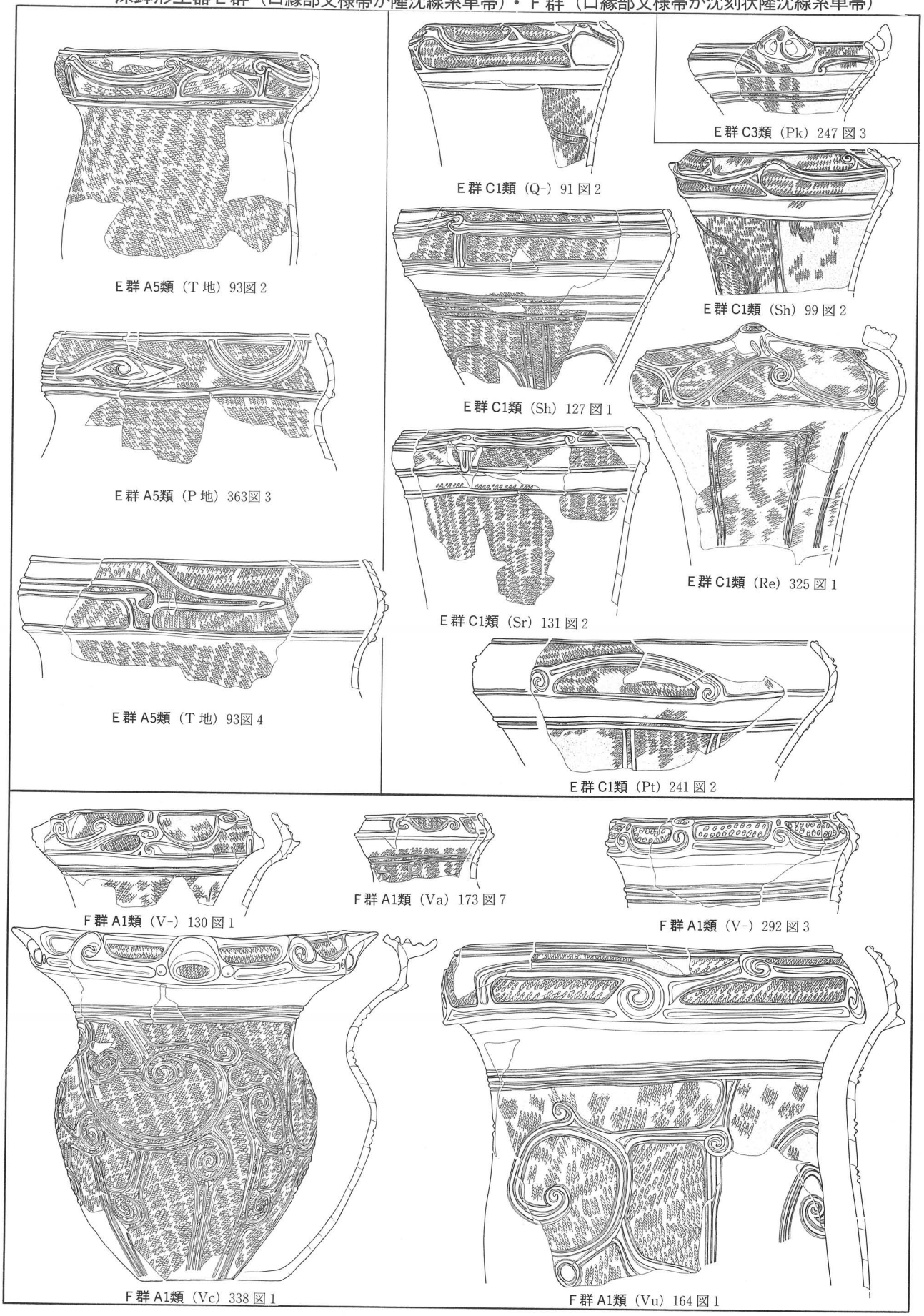


第53図　深鉢形土器E群⑶（縮尺1/6）

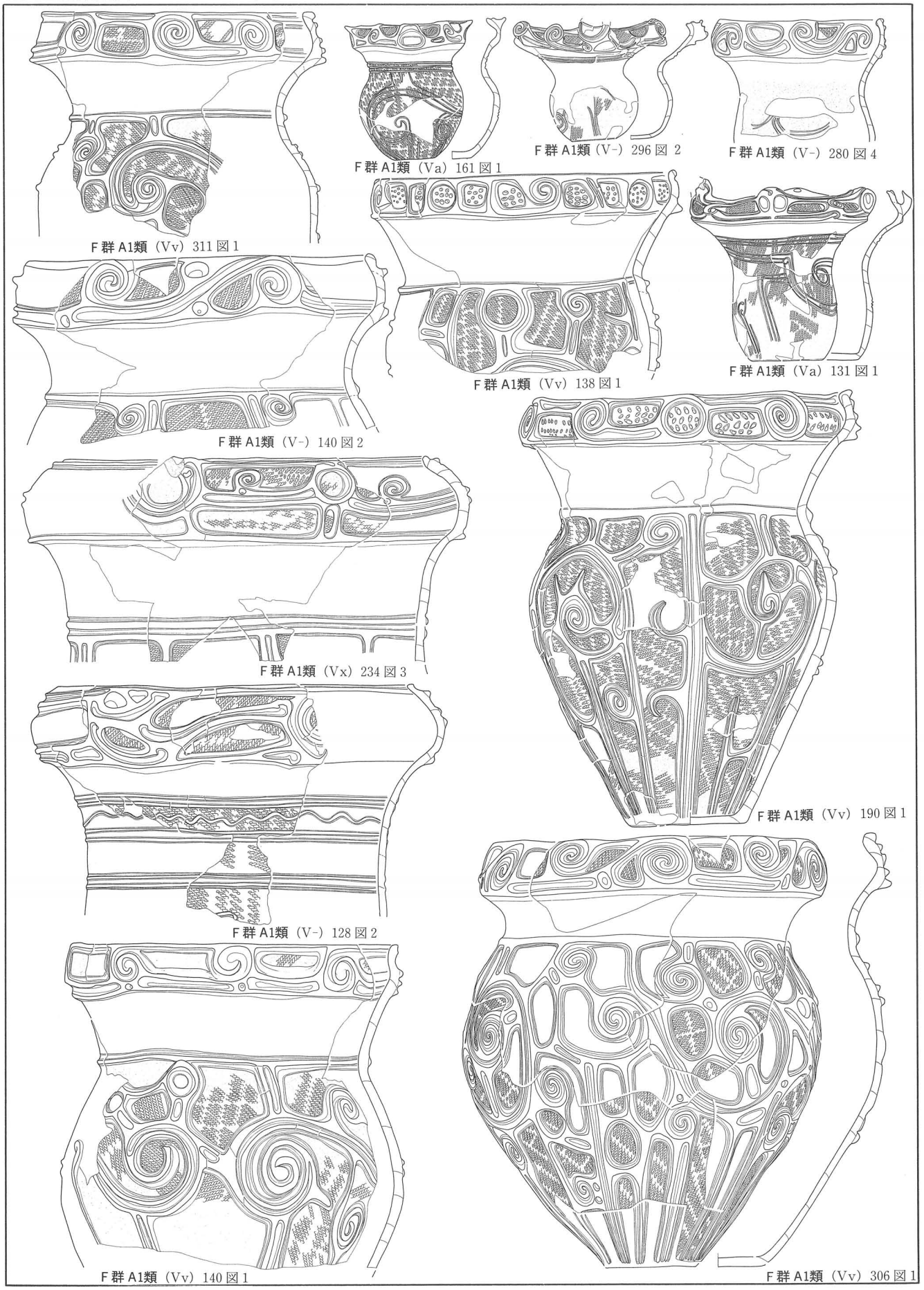


第54図　深鉢形土器E群⑷（縮尺1/6）

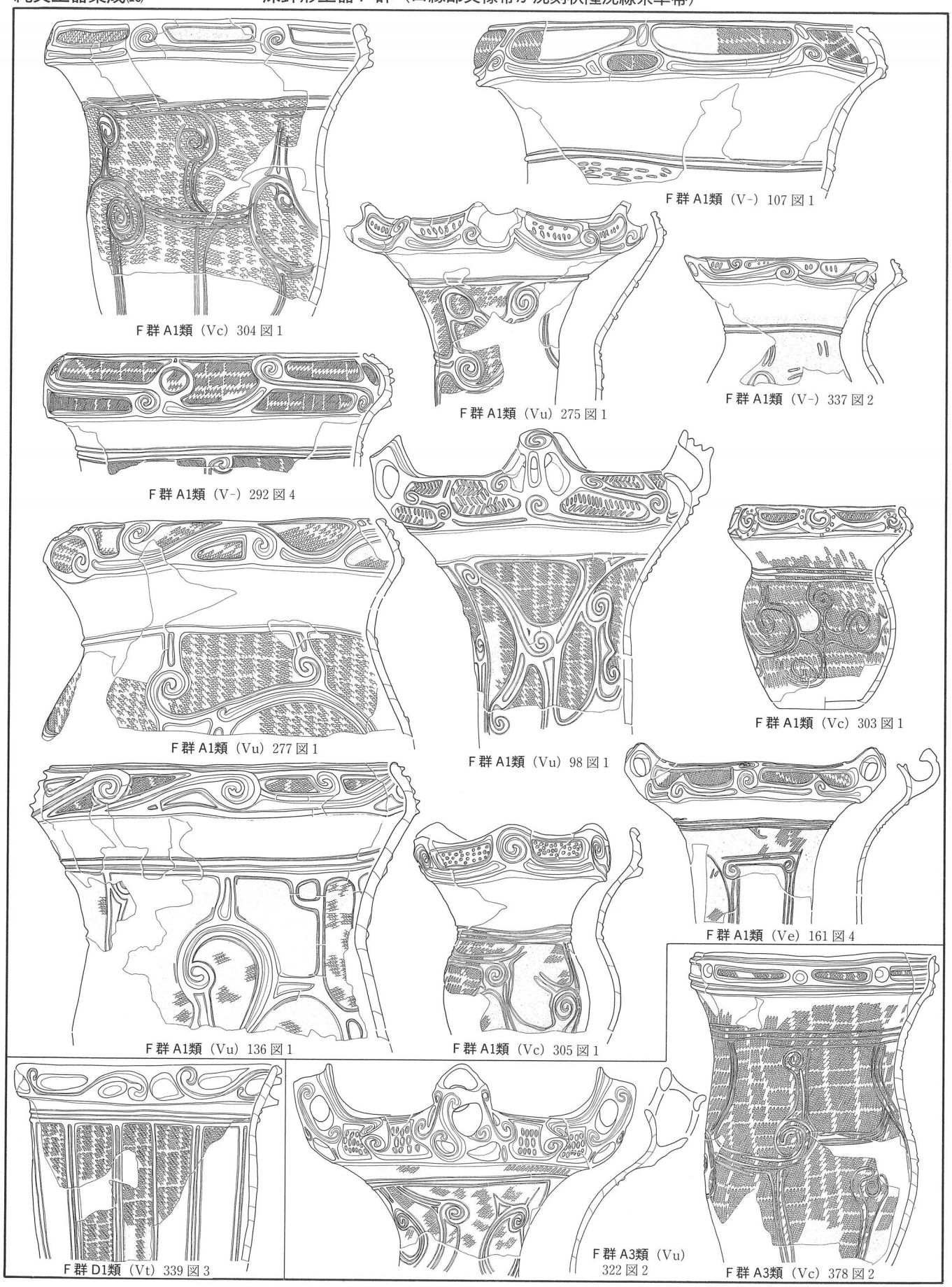
深鉢形土器E群（口縁部文様帯が隆沈線系単帯）・F群（口縁部文様帯が沈刻状隆沈線系単帯）



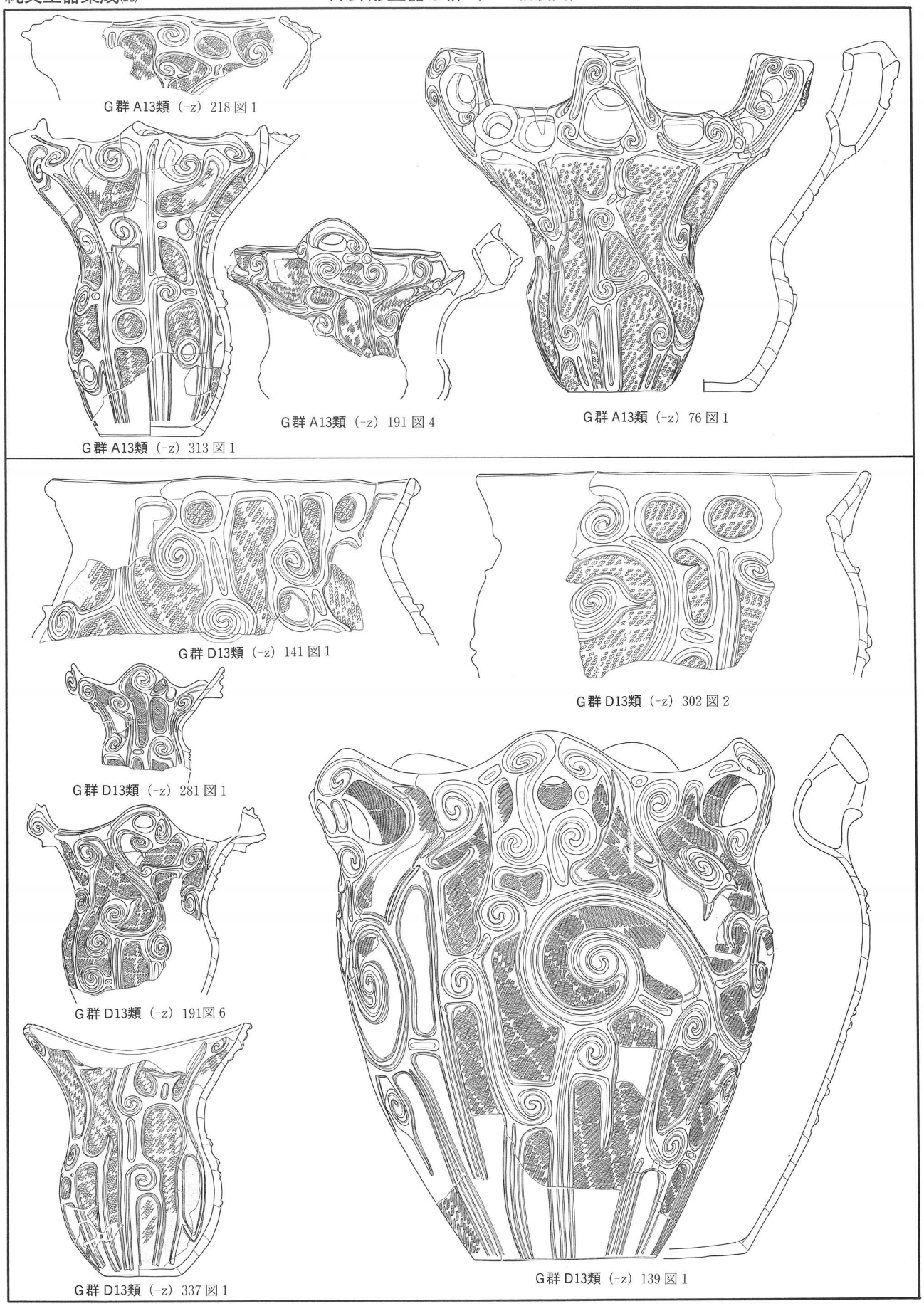
第55図　深鉢形土器E群(5)・F群(1)（縮尺1/6）



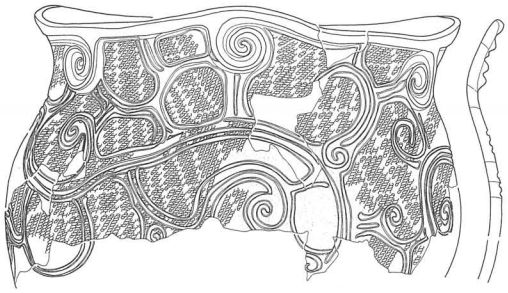
第56図　深鉢形土器F群(2)（縮尺1/6）



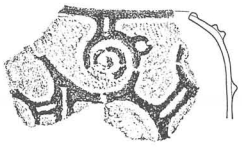
第57図　深鉢形土器F群(3)（縮尺1/6）



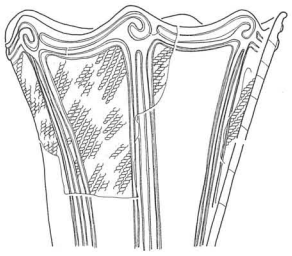
第58図　深鉢形土器Ｇ群(1)（縮尺1/6）



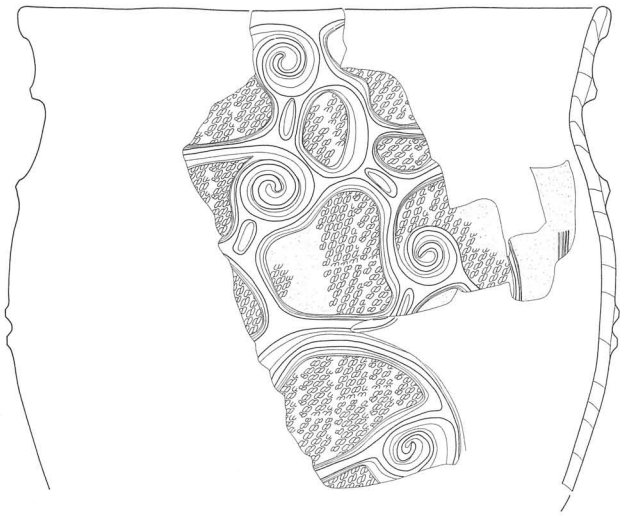
Ｇ群 D13類（-y）204 図 5



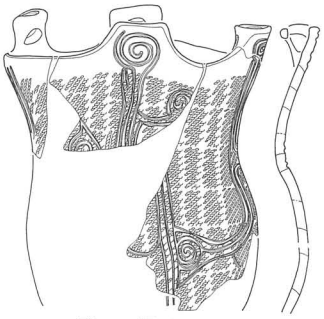
Ｇ群 G13類（-z）142 図 2



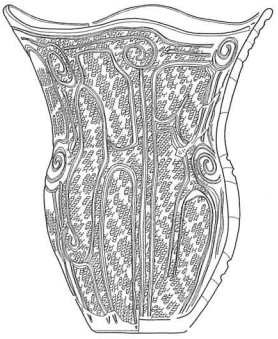
Ｇ群 E13類（-z'）219 図 3



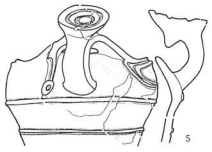
Ｇ群 D13類（-z）141 図 2



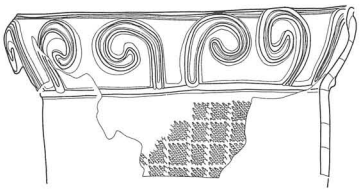
Ｇ群 D13類（-y）135 図 3



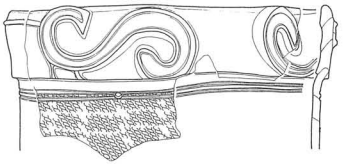
Ｇ群 D13類（-y）305 図 2



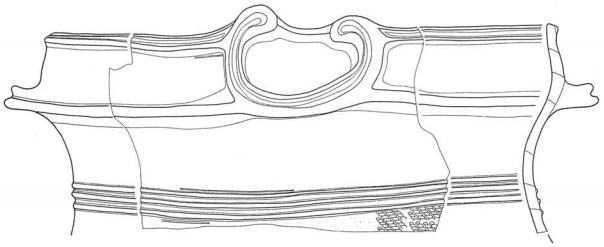
Ｉ群 B1類（X-）288 図 5



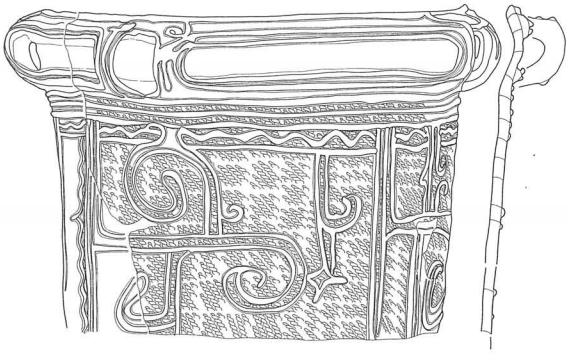
Ｉ群 B2類（X 地）378図 1



Ｉ群 B2類（X 地）301図10

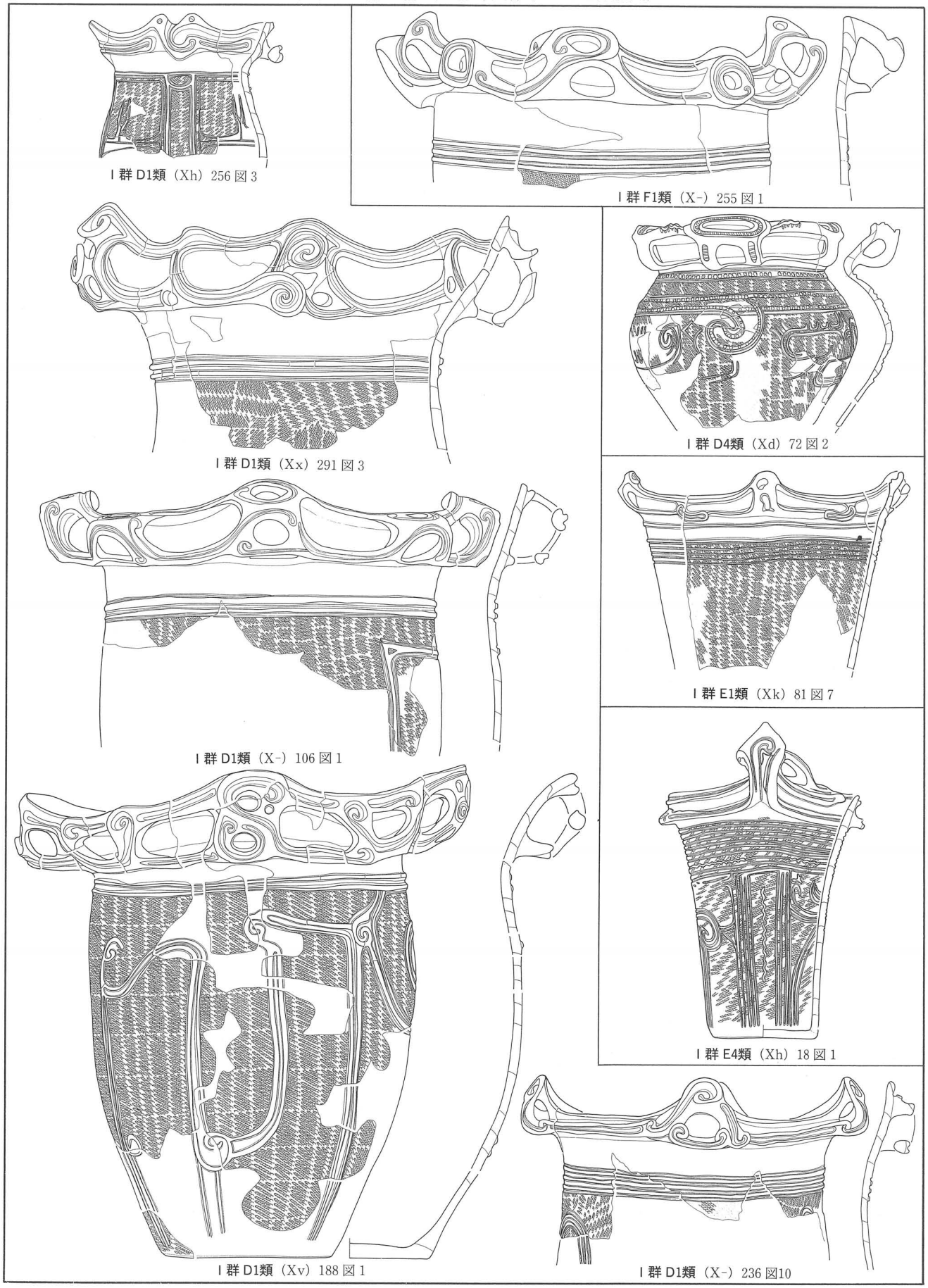


Ｉ群 B1類（X-）153 図 5

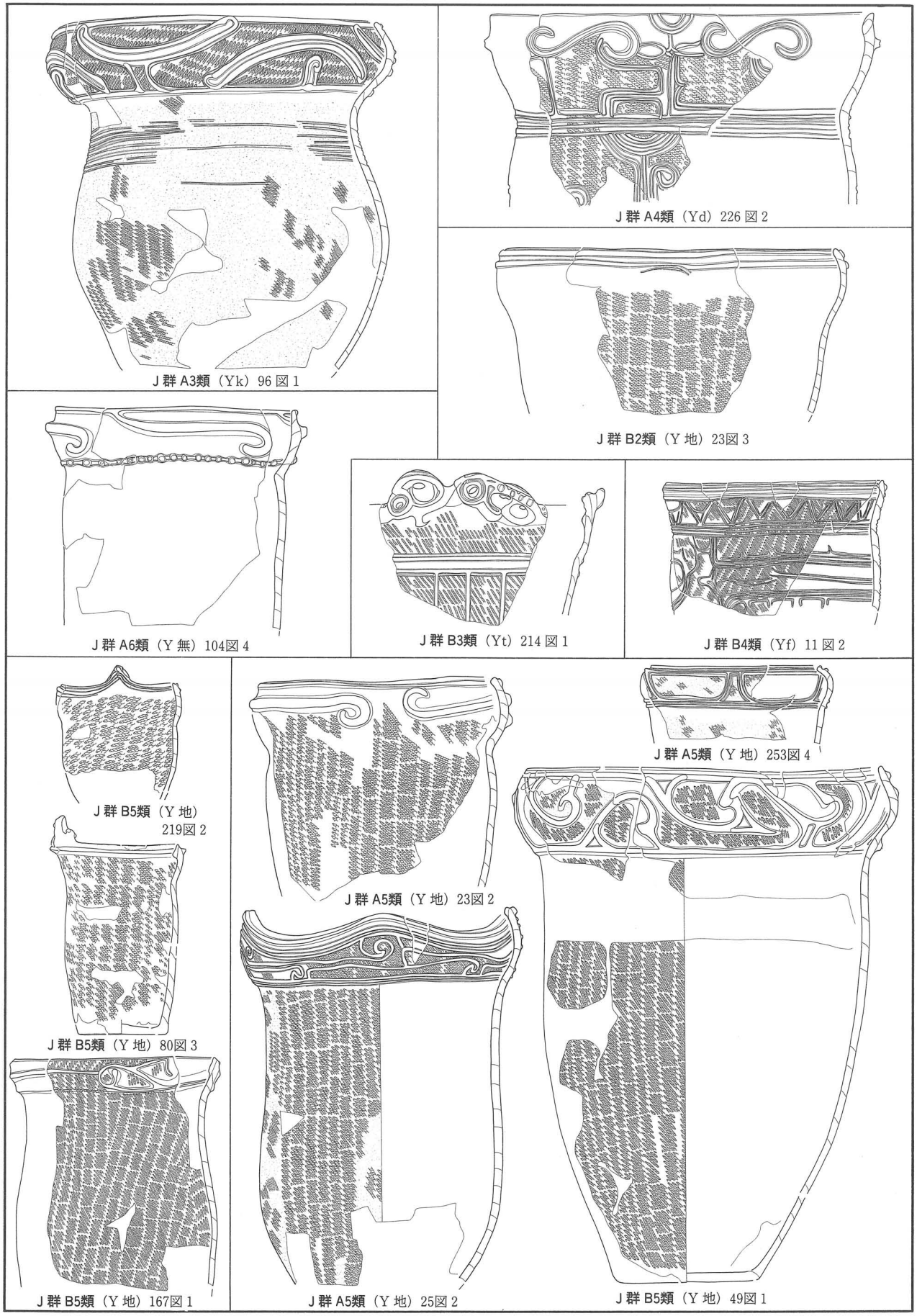


Ｉ群 B4類（Xo）19 図 1

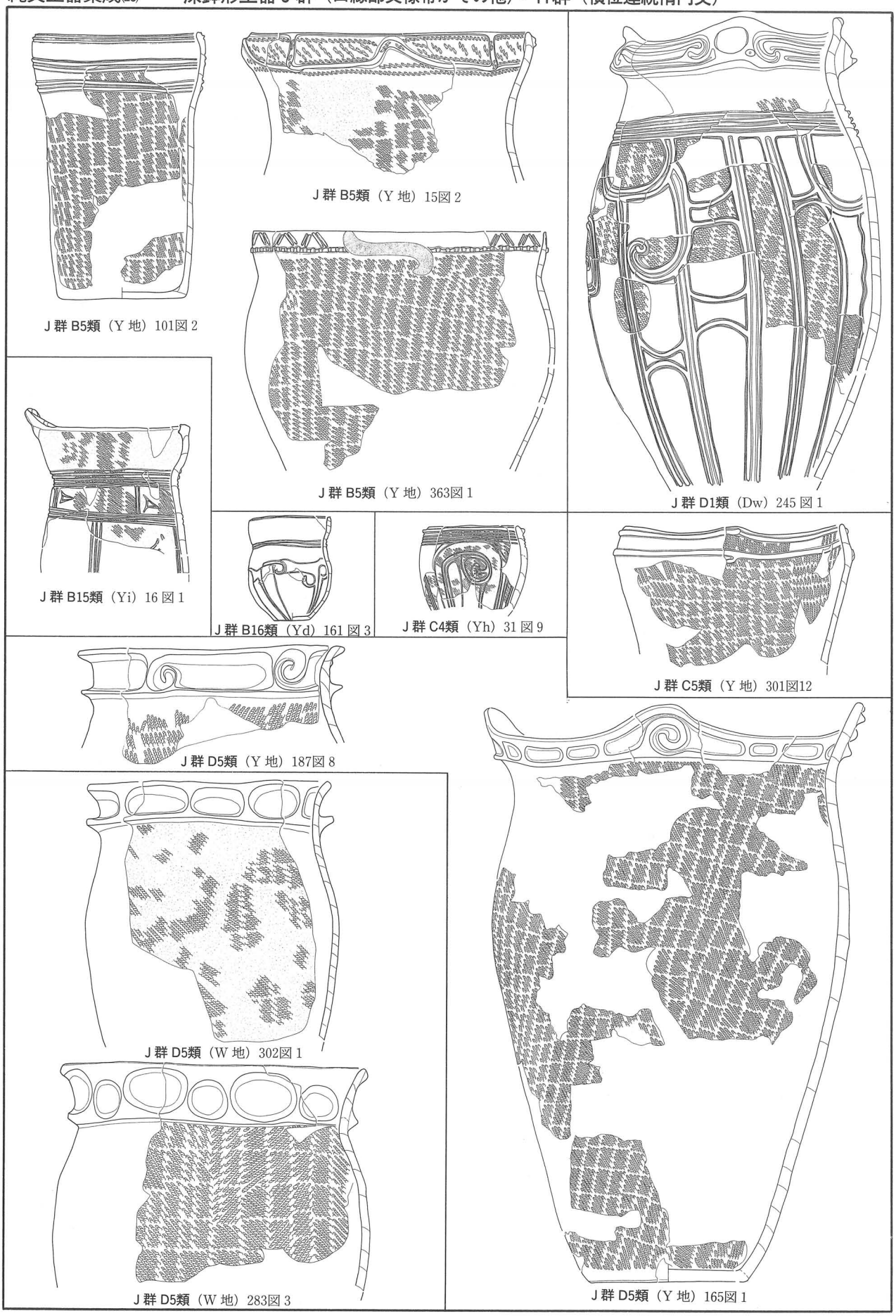
第59図　深鉢形土器Ｇ群(2)・Ｉ群(1)（縮尺1/6）



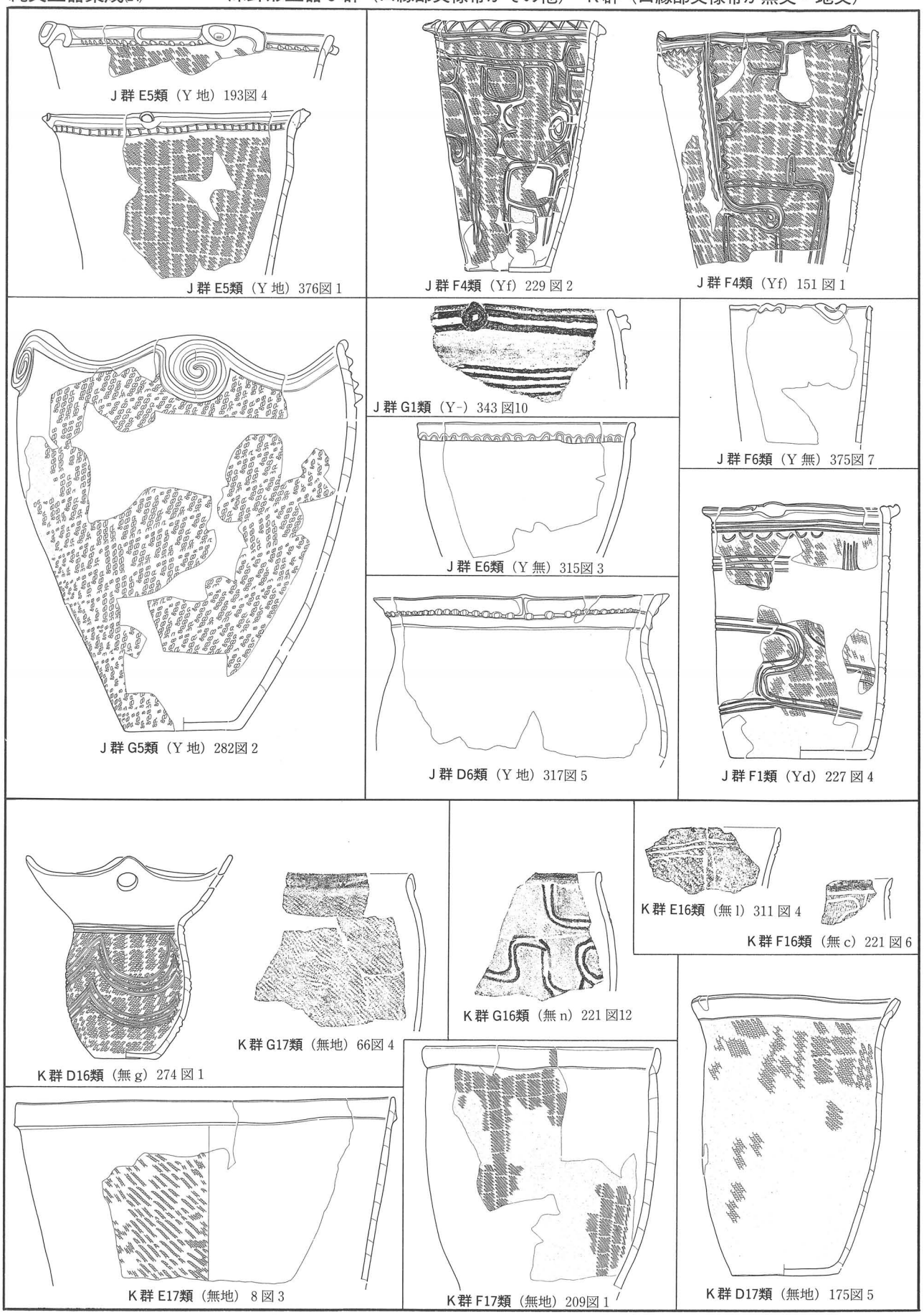
第60図　深鉢形土器Ⅰ群(2)（縮尺1/6）



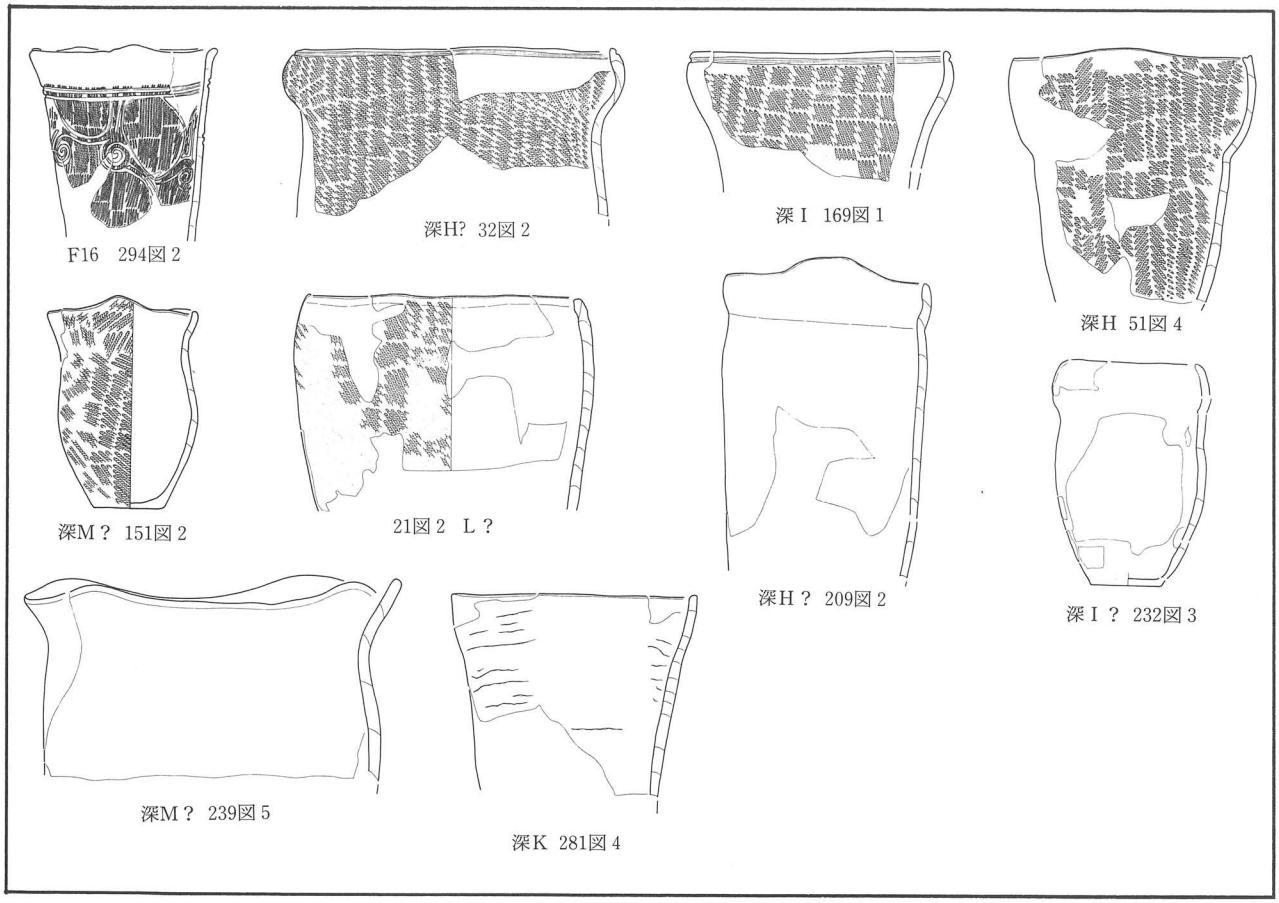
第61図　深鉢形土器 J 群(1)（縮尺1/6）



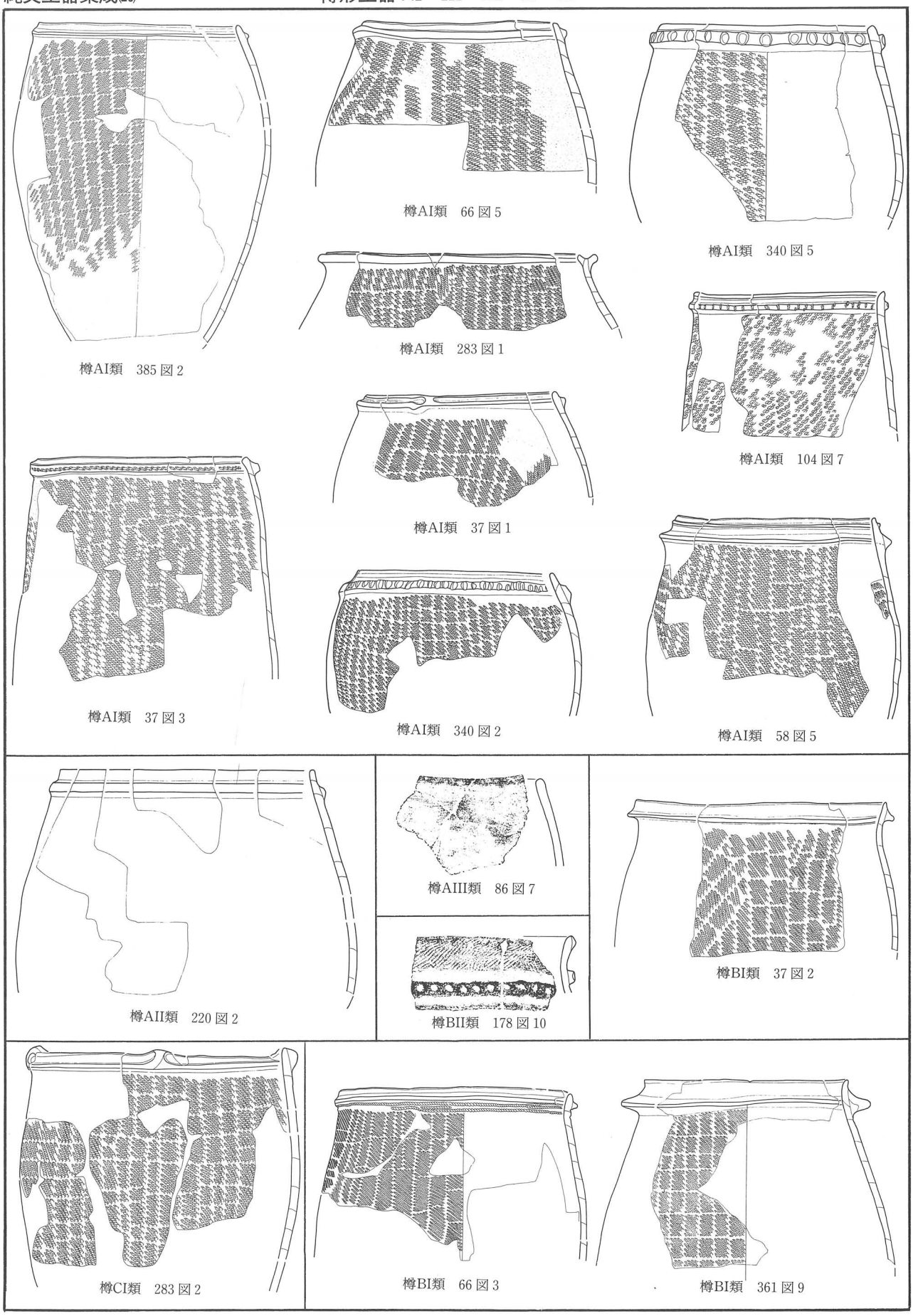
第62図　深鉢形土器Ｊ群(2)（縮尺1/6）



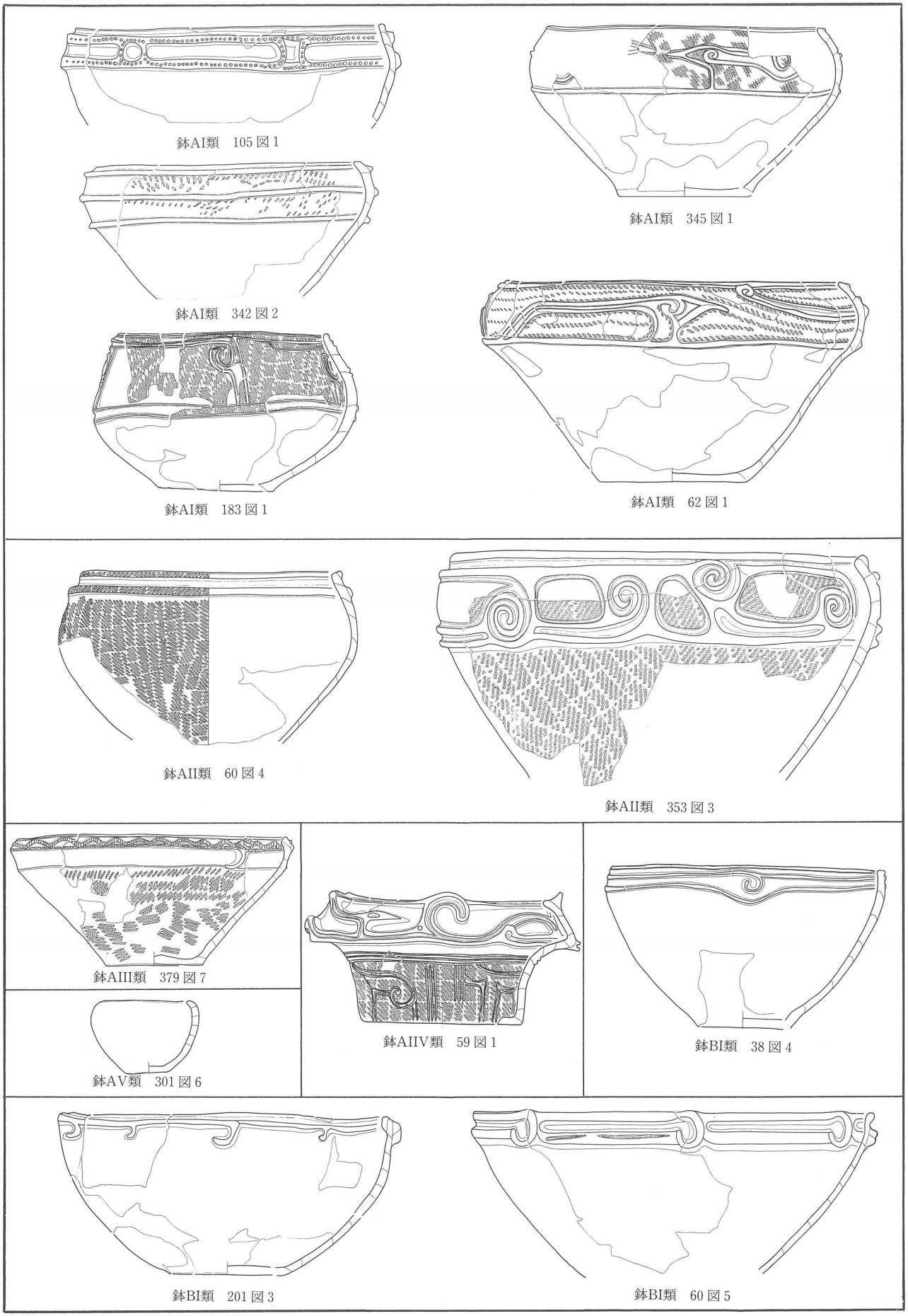
第63a 図　深鉢形土器 J 群(3)・K 群(1)（縮尺1/6）



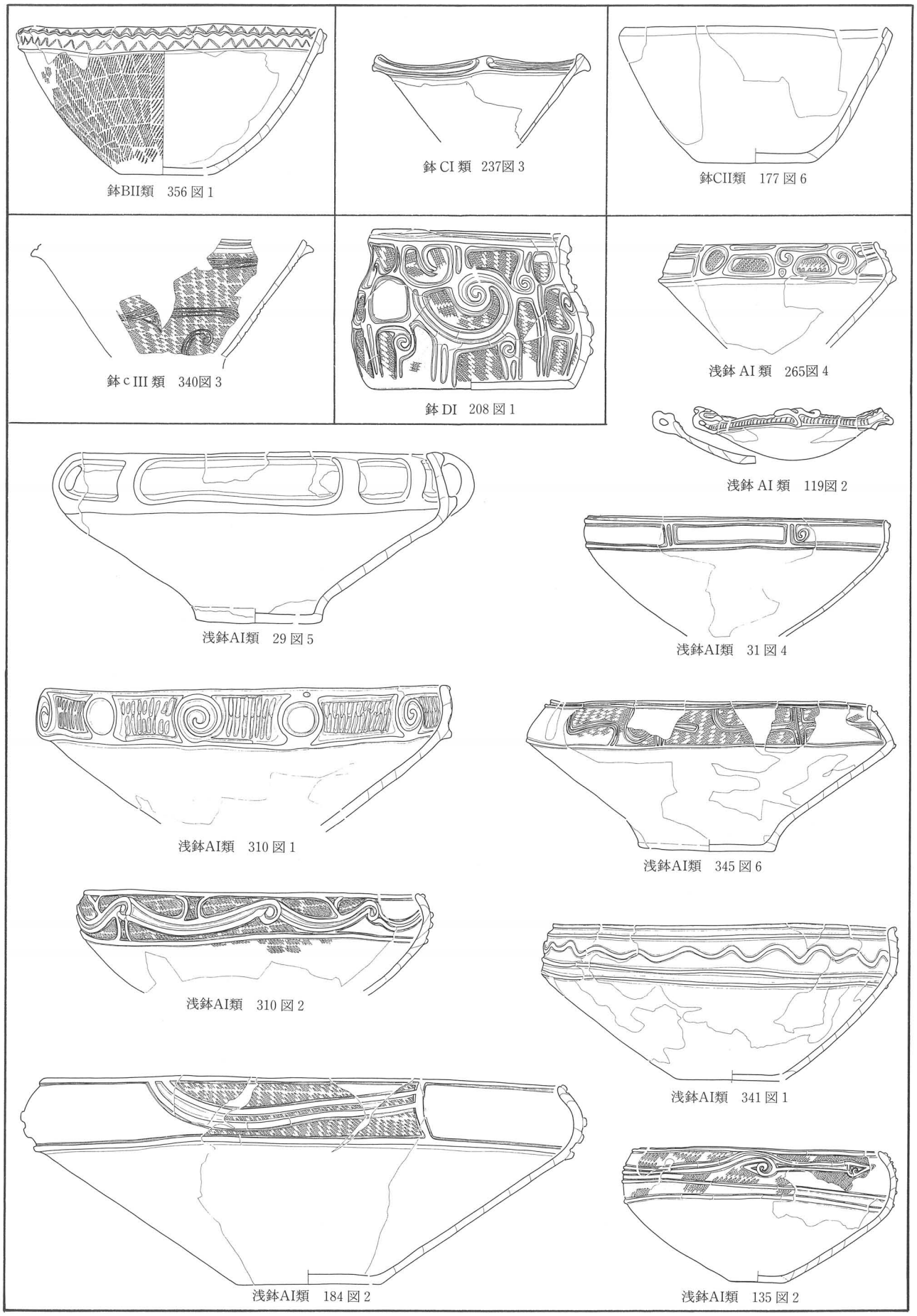
第63b 図　深鉢形土器Ｋ群(2)（縮尺1/6）



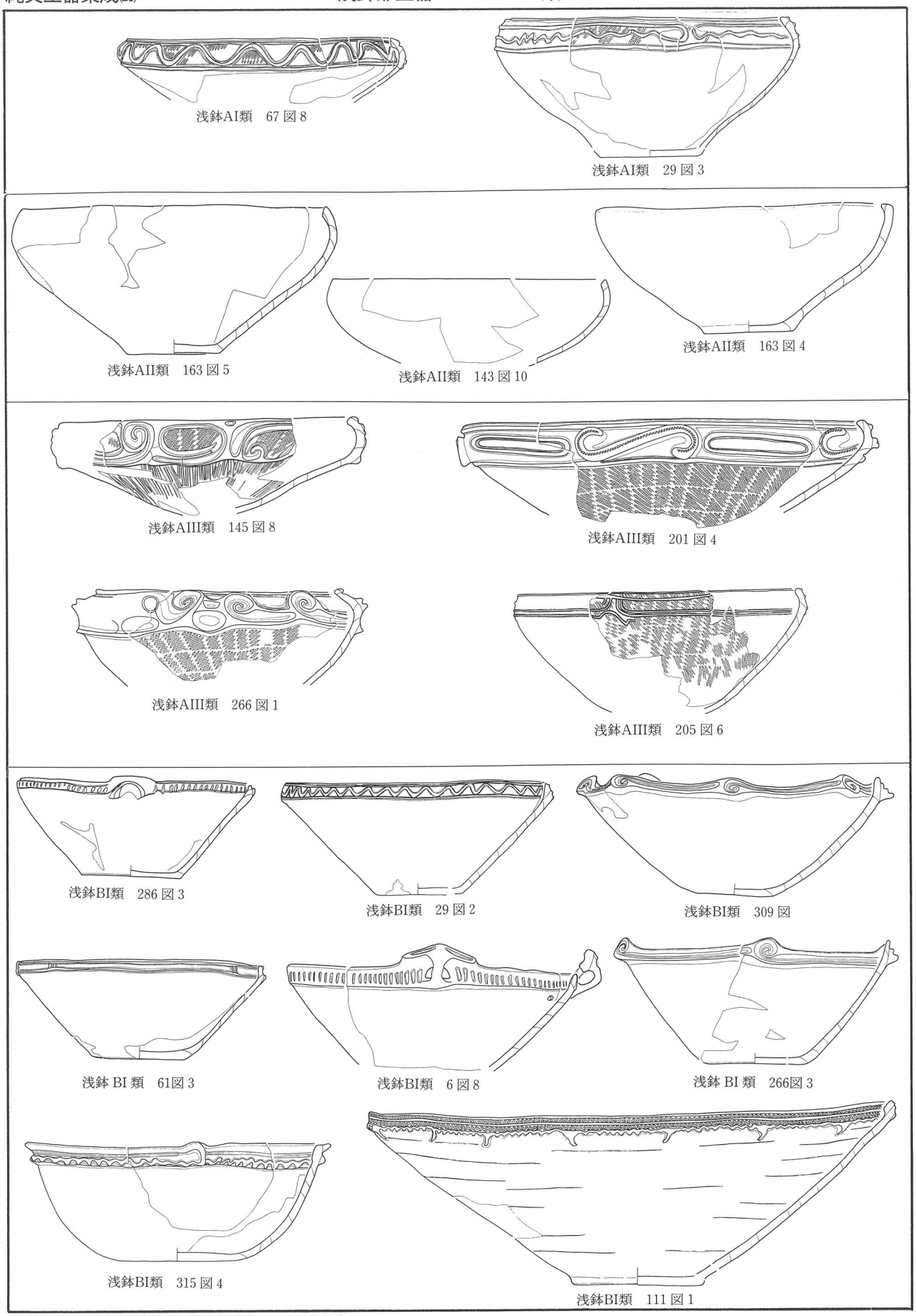
第64図　樽形土器 AI～III・BI～II・CI 類（縮尺1/6）



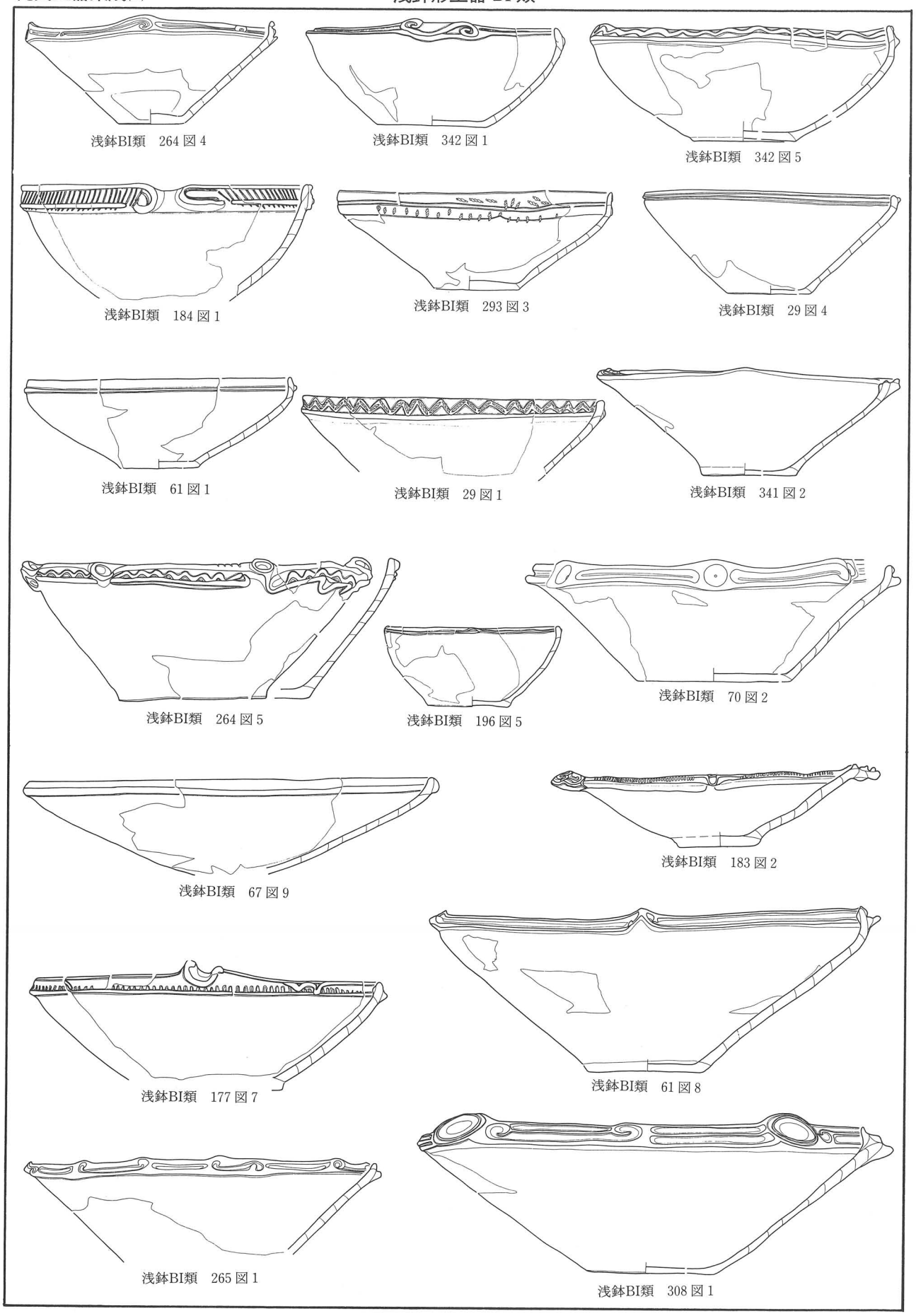
第65a 図　鉢形土器 AI～V・BI 類（縮尺1/6）



第65 b 図　鉢形土器 BII・CI～III・DI 類、浅鉢形土器 AI 類（縮尺1/6）

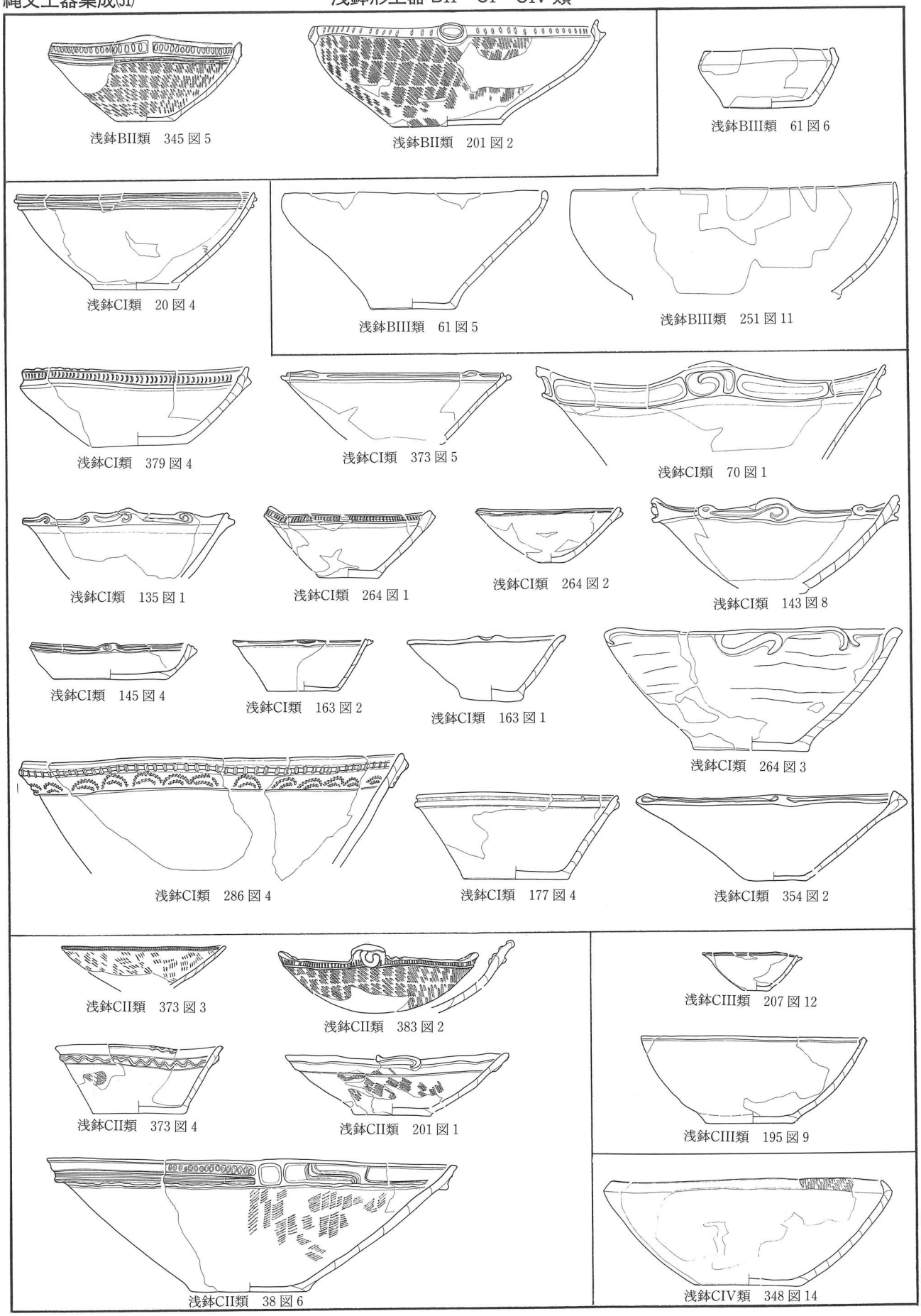


第65c 図　浅鉢形土器 AI～III・BI 類（縮尺1/6）

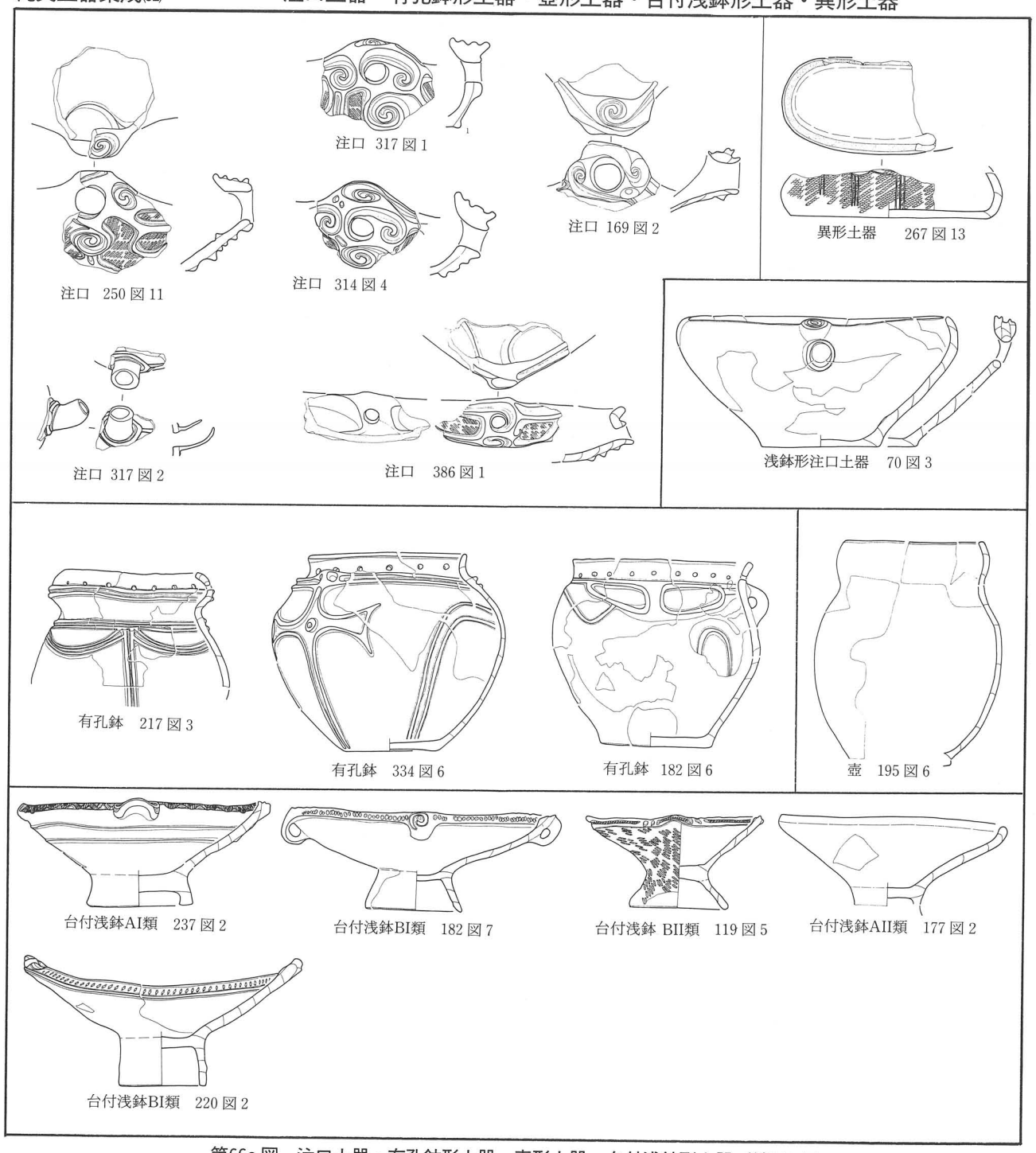


第66a 図　浅鉢形土器 BI 類（縮尺1/6）

浅鉢形土器 BII・CI～CIV 類



第66b 図　浅鉢形土器 BII・CI～IV 類（縮尺1/6）



第66c 図　注口土器・有孔鉢形土器・壺形土器・台付浅鉢形土器（縮尺1/6）

B　土製品

高柳遺跡から出土した土器以外の土製品は422点で、内訳は土偶が63点、土笛２点、土製腕輪１点、土製耳飾１点、土製垂飾品５点、三角擣形土製品２点、男根形土製品１点、三脚形土製品４点、パイプ形土製品７点、円盤状土製品89点、その他不明土製品248点である。

以下各種類ごとに述べていく。

(1)　土　偶　（第391図～第397図、第401図）

土偶は68点出土している。この内65点を図示した。いずれも遺物包含層から出土したもので、土器片や他の遺物などと一緒に出土しており、特殊な状態で出土したものはない。63点のなかで、完全なものはなく、いずれもどこかの部位を欠失している。したがって、ここでは頭部・腕部・胴部（胸部・腹部・臀部・背面）・脚部の各々の部位の特徴を明らかにすることによって全体像を探りながら、分類することにする。

［頭　部］

頭部が残存しているものは12点のみである。391図１は、隆線で眉と鼻、沈線で目をリアルに表現している。391図３も隆線で鼻、沈線で口を表現している。391図５は口のみが表現されているが目・鼻は省略している。391図７は動物の顔立ちに近い表現をしている。391図６は目・鼻・口が省略され、全体が小さな山形状を呈している。391図２・４は頭部を一部欠失しているが、391図６とおなじように突出した山形状と考えられる。401図２・４～７は、目・鼻が表現されず、全体形が円盤状のものでこれらも土偶９頭部と考えられる。以上頭部は大きく５つに類型化することができる。

a類	目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているもの。 （391図１）
b類	目・鼻等の表現が簡略化し、後頭部がやや突出するもの。 （391図３・５）
c類	目・鼻等をリアルに表現しているが、獣面状のもの。 （391図７）
d類	目・鼻等が表現されず、全体が突出した山形状を呈しているもの。 （391図２・４・６）
e類	目・鼻等が表現されず、全体形が円盤状のもの。 （第401図２・４・５・６・７）

［腕　部］

左右の腕部が残存しているもの・左右いずれかの腕部が残存しているものは21点である。胸部と境界が明瞭で左右に突出するように腕を表現しているものと、胸部と境界が明瞭でなく胸部から腕部全体が三角状を呈するものとがある。

a類	胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの （392図１・２，393図２・３・５・７，394図１・２・８）
b類	胸部と境界が明瞭なもの （391図２・４・５・６・７，392図３・４・５，393図１・４，397図７・10）

［胴　部］

胴部は胸部・腹部・臀部・背面から構成されている。腹部は正中線と臍とからなっている。胴部のいずれかが残存しているものは42点ある。

（胸　部）

a類　乳房を表現していないもの
（391図２・４・７，393図１・４）
b類　丸い隆起で乳房を表現しているもの
（391図８，392図３・５，393図２，394図１・８）
c類　腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの
（391図５・６，392図１・２・４，393図３・５・７）
d類　W形の隆起で乳房を表現しているもの
（394図２）

（腹　部）

腹部が残存しているものが27点ある。腹部は「正中線」と「臍」を中心に観察と細分を行った。

「正中線」

a類　正中線を表現していないもの
（391図２・４・６・７，392図５，393図２・４・６，396図１，397図１・２・３）
b類　胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの
（391図５・８，２－３，４－５，５－２，６－８）
c類　胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの
（392図１・２・４，393図１・３，394図１・２・３・５）

「臍」

a類　臍を表現しないもの
（391図２・４・６・７，392図４・５，393図４，396図１・８，397図１・２・３）
b類　臍を丸、もしくは三日月状の隆起で表現するもの
（391図８，392図３，393図１，395図２・３，396図７・11）
c類　臍を沈線等で表現するもの
（392図１・２，395図１・５）

（臀　部）

臀部が残存し形態を観察できるものが、31点ある。

a類　臀部を表現しないもの
（391図２・４・６・７，393図４・６・10・11，397図２・３）

b類　出尻形に表現しているもの
（391図８，392図１・２・３・４，393図１・６，394図６・７，395図１・２・３・４・５・６・７，396図１・２・５・８，397図１）

（背　面）

背面が残存し形態を観察できるものが30点ある。

a類　背すじを表現しないもの
（391図２・４・６・７，392図２・３・５，393図１・４，395図４・７，396図１・７・11，397図１・２・３）

b類　背すじを沈線で表現するもの
（391図５，392図１・４，393図２・３・６，394図１・２，395図１・３）

c類　背すじ以外の沈線による文様をもつもの
（391図８，396図10）

［脚　部］

脚部が残存しているものが32点ある。

a類　腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のもの
（391図６・８，392図３・４，393図１・２・４，396図８・10・11，397図２）

b類　腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚のもの
（392図１，393図１，395図１・５，396図３・４・９・12，397図４・６・８・９）

c類　腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、一脚のもの
（392図２，393図６，395図２・３・４・６・７，396図１・２・５・７，397図１・７・11）

以上、土偶の各部位の観察と細分をした。その結果、脚部形態と臀部形態に大きな特徴があることが判明した。すなわち、脚部形態にはａ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体］と、ｂ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので二脚］、ｃ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一脚］が認められた。脚部形態が判明する35点の内訳は、ａ類11点・ｂ類12点・ｃ類12点で３種類のものがほぼ同数であった。

臀部形態ではａ類［臀部を表現しないもの］とｂ類［出尻形に表現しているもの］とがあり、ａ類22点・ｂ類９点でほぼ２：１の比率であった。

脚部形態と臀部形態を分類上の主な基準とし、胴部（胸部・腹部・背面）・腕部・頭部の形態を加味しながら分類したのが第13表である。各類の頭部～脚部までの全体像を想定することとする。

［土偶Ａ類］　Ａ１類（391図１・３・５，392図１，393図３・５・７，394図３・５・６・７，395図１・５，396図３・４・９，397図４・５・６・７・９）

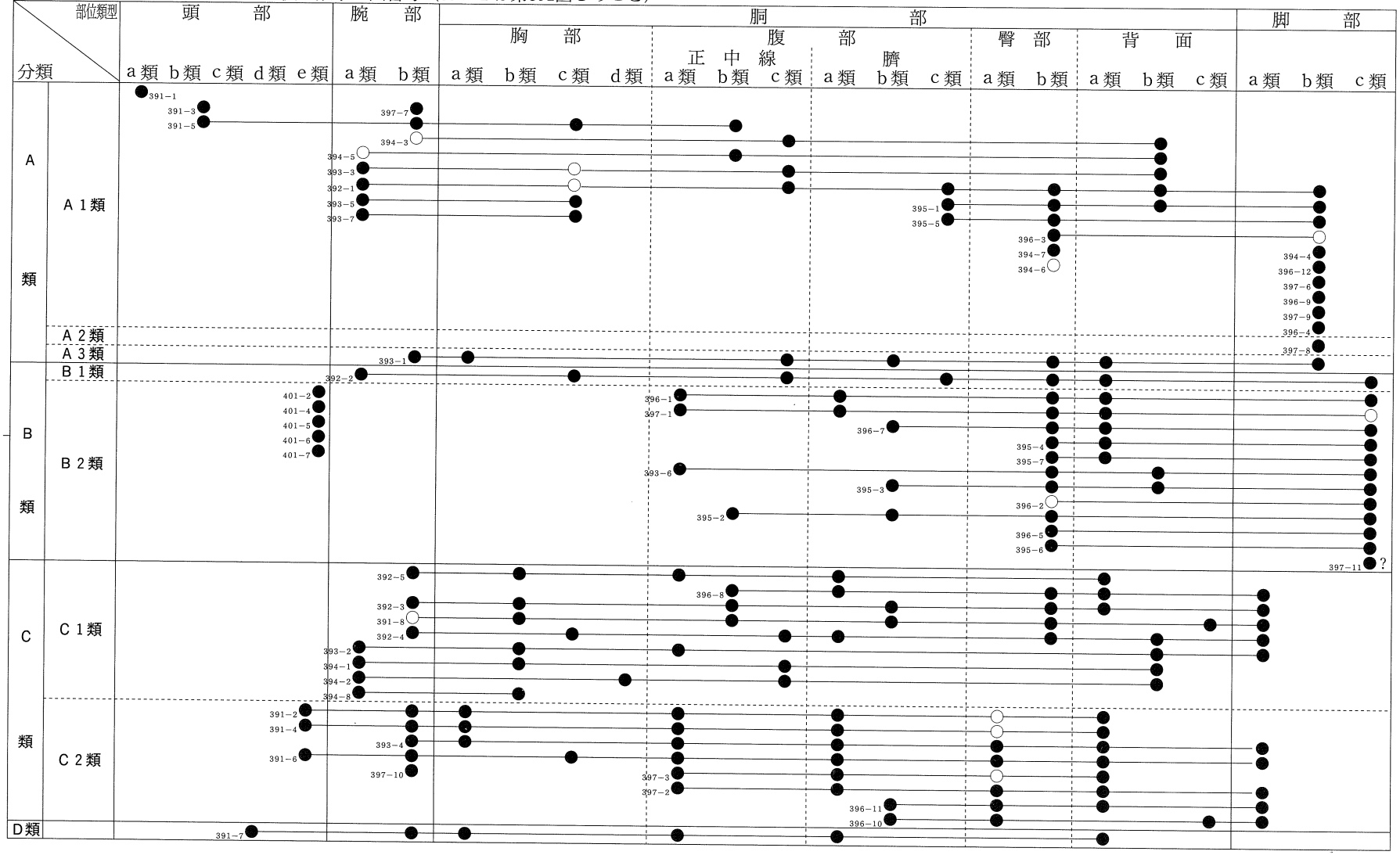
Ａ２類（397図８）

Ａ３類（393図１）

（頭　部）Ａ１類で頭部が判明するものはａ類［目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているもの］とｂ類

第13表　土偶残存部位・分類一覧表

●残存部位　○推定残存部位　●横の数字は図番号（391-１は第391図１のこと）



［目・鼻等の表現が簡略化し、後頭部がやや突出するもの］とがある。Ａ２・３類は不明。

（腕　部）Ａ１類はａ類［胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの］とｂ類［胸部と境界が明瞭なもの］とがある。Ａ３類はａ類［胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの］で、Ａ２類は不明。

（胸　部）Ａ１類で胸部が判明するものはいずれもｃ類［腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの］である。Ａ３類はａ類［乳房を表現していないもの］であるが、Ａ２類は不明。

（腹　部）Ａ１類の正中線はｂ類［胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの］とｃ類［胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの］とがある。Ａ３類はｃ類［胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの］である。Ａ２類は不明。Ａ１・３類の臍はｃ類［臍を沈線等で表現するもの］であるが、Ａ３類はｂ類［臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの］である。

（臀　部）Ａ１・３類の臀部が判明するものはいずれもｂ類［出尻形に表現しているもの］である。Ａ２類は不明。

（背　面）Ａ１類で背面が判明するものはいずれもｂ類［背すじを沈線で表現するもの］である。Ａ３類はａ類［背すじを表現しないもの］で、Ａ２類は不明。

（脚　部）Ａ１～３類とも、ｂ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚のもの］であるが、Ａ１類は脚部の基部が合体する。Ａ２とＡ３類は完全に二脚に分離している。

［土偶Ａ類全体像］

［土偶Ａ１類］

全体的な大きさは、Ａ２・Ｂ・Ｃ類と比較して大振りである。

（頭部）目・鼻等をリアルに表現し、全体的に整っているものと、目・鼻等の表現が簡略化し、後頭部がやや突出するものとがある。

（腕部）胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するものと、胸部と境界が明瞭なものとがある。

（胸部）腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもののみのようである。

（腹部）胸部から垂下する隆線を正中線として表現するものと、胸部から垂下する沈線を正中線として表現するものとがある。臍は沈線等で表現するものだけのようである。

（臀部）出尻形に表現しているものだけのようである。

（背面）背すじを沈線で表現するものだけのようである。

（脚部）腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、二脚の脚部で基部が合体するものだけである。

［土偶Ａ２類］

全体的な大きさは不明であるが、脚部の大きさから想定してＡ１類と同じくらいの大きさかと考えられる。

（頭部）不明である。

（腕部）不明である。

（胸部）不明である。

（腹部）不明である。

（臀部）不明である。
（背面）不明である。
（脚部）腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、完全に二脚に分離している。

［土偶Ａ３類］

全体的な大きさは、Ａ１より小さくＢ・Ｃ類と同じ位である。
（頭部）不明である。
（腕部）胸部と境界が明瞭なものとがある。
（胸部）乳房を表現していない。
（腹部）胸部から垂下する沈線を正中線として表現し、臍を丸い隆起で表現している。
（臀部）出尻形に表現している。
（背面）背すじを表現していない。
（脚部）腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、完全に二脚に分離している。

［土偶Ｂ類］Ｂ１類（392図２）
Ｂ２類（393図６，395図２・３・４・６，396図１・２・５・７，397図１・11，401図・２・４・５・６・７）

（頭　部）Ｂ１類は不明であるが、Ｂ２類はｅ類［目・鼻が表現されず、全体形が円盤状のもの］の可能性がある。
（腕　部）Ｂ１類はａ類［胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの］であるが、Ｂ２類は不明である。
（胸　部）Ｂ１類はｃ類［腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの］である。Ｂ２類は不明である。
（腹　部）Ｂ１類の正中線はｃ類［胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの］である。Ｂ２類はａ類［正中線を表現していないもの］と、ｂ類［胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの］とがある。Ｂ１類はｃ類［臍を沈線等で表現するもの］であるが、Ｂ２類はａ類［臍を表現しないもの］と、ｂ類［臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの］である。
（臀　部）Ｂ１・２類とも臀部が判明するものはいずれもｂ類［出尻形に表現しているものである］
（背　面）Ｂ１類はａ類［背すじを表現しないもの］である。Ｂ２類はａ類［背すじを表現しないもの］と、ｂ類［背すじを沈線で表現するもの］とがある。
（脚　部）Ｂ１・２類とも、Ｃ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので、一脚のもの］である。

［土偶Ｂ類全体像］

［土偶Ｂ１類］

全体的な大きさは、Ａ１類より小さく、Ｂ２・Ｃ１・２類より大きく、Ａ３類と同じ位の大きさと考えられる。
（頭部）判明するものがないため不明である。
（腕部）胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈している。

（胸部）腕部から延びる隆線で乳房を表現している。
（腹部）正中線が胸部から垂下する隆線を正中線として表現している。臍は沈線等で表現している。
（臀部）出尻形に表現している。
（背面）背すじを表現していない。
（脚部）腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一脚のものもある。

［土偶Ｂ２類］

全体的な大きさは、Ａ１・Ａ２・Ｂ１類より小さく、Ｃ１・Ｃ２類と同じ大きさと考えられる。
（頭部）目・鼻が表現されず、全体形が円盤状の可能性がある。
（腕部）不明である。
（胸部）不明である。
（腹部）正中線を表現していないものと胸部から垂下する隆線を正中線として表現するものがある。臍は、表現しないものと、臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するものとがある。
（臀部）すべて出尻形に表現している。
（背面）背すじを表現しないものと、背すじを沈線で表現するものとがある。
（脚部）すべて腹・臀部と脚部の境界が明瞭なもので一脚のものである。

［土偶Ｃ類］Ｃ１類（391図８，392図３・４・５，393図２，394図１・２・３，396図８）
Ｃ２類（391図２・４・６，393図４，396図10・11，397図２・３・10）

（頭　部）Ｃ１類で頭部が判明するものはなく不明であるが、Ｃ２類では３点残存しておりいずれも目・鼻が表現されず、全体が突出した山形状を呈している。
（腕　部）Ｃ１類はａ類［胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈するもの］と、ｂ類［胸部と境界が明瞭なもの］とがある。Ｃ２類はすべてｂ類［胸部と境界が明瞭なもの］である。
（胸　部）Ｃ１類はｂ類［丸い隆起で乳房を表現しているもの］が大部分であるが、ｃ類［腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの］・ｄ類［ｗ形の隆起で乳房を表現しているもの］もある。Ｃ２類はａ類［乳房を表現していないもの］が多いがｃ類［腕部から延びる隆線で乳房を表現しているもの］もある。
（腹　部）Ｃ１類の正中線はａ類［正中線を表現していないもの］・ｂ類［胸部から垂下する隆線を正中線として表現するもの］・ｃ類［胸部から垂下する沈線を正中線として表現するもの］とがある。Ｃ２類はａ類［正中線を表現していないもの］だけである。Ｃ１類の臍はａ類［臍を表現しないもの］と、ｂ類［臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの］とがあるが、Ｃ２類もａ類［臍を表現しないもの］とｂ類［臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するもの］とがある。
（臀　部）Ｃ１類で臀部が判明するものはいずれもｂ類［出尻形に表現しているもの］であるＣ２類は、ａ類［臀部を表現しないもの］だけである。
（背　面）Ｃ１類はａ類［背すじを表現しないもの］とｂ類［背すじを沈線で表現するもの］が大部分であるがｃ類［背すじ以外の沈線による文様をもつもの］もある。Ｃ２類はａ類［背すじを表現しないもの］が大部分であるが、ｃ類［背すじ以外の沈線による文様をもつもの］もある。
（脚　部）Ｃ１・２類ともすべて、ａ類［腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のもの］である。

［土偶Ｃ類全体像］

［土偶Ｃ１類］

全体的な大きさは、Ａ１・Ａ３・Ｂ１類より小さく、Ｂ２・Ｃ２類と同じ位の大きさと考えられる。

（頭部）不明である。

（腕部）胸部と境界が明瞭でなく、胸部から腕部全体が三角状を呈しているものと、胸部との境界が明瞭なものとがある。

（胸部）丸い隆起で乳房を表現しているものが大部分であるが、腕部から延びる隆線で乳房を表現しているものや、W形の隆起で乳房を表現しているものもある。

（腹部）正中線を表現していないものと、正中線が胸部から垂下する隆線を正中線として表現しているもの、胸部から垂下する沈線を正中線として表現するものとがある。臍を表現しないものと、沈線等で表現しているものとがある。

（臀部）出尻形に表現している。

（背面）背すじを表現していないもの、背すじを沈線で表現するもの、背すじ以外の沈線による文様をもつものとがある。

（脚部）腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のものである。

［土偶Ｃ２類］

全体的な大きさは、Ａ１・Ａ３・Ｂ１類より小さく、Ｂ２・Ｃ１類と同じ大きさと考えられる。

（頭部）判明するものが３点あるが、いずれも目･鼻が表現されず、全体が突出した山形状を呈している。

（腕部）胸部との境界が明瞭なものだけである。

（胸部）乳房を表現していないものが大部分であるが、腕部から延びる隆線で乳房を表現しているものもある。

（腹部）すべて正中線を表現していない。臍は、表現しないものと、臍を丸もしくは三日月状の隆起で表現するものとがある。

（臀部）すべて表現されていない。

（背面）すべて背すじを表現していない。

（脚部）すべて腹・臀部と脚部の境界が明瞭でない脚胴合体のものである。

［土偶Ｄ類全体像］

［土偶Ｄ類］

全体的な大きさは、Ａ１類より小さく、Ｂ２・Ｃ１・２類より大きく、Ａ３・Ｂ１類と同じ位の大きさと考えられる。

（頭部）目・鼻をリアルに表現した獣面状のものである。

（腕部）胸部と胸部の境界が明瞭なものである。

（胸部）乳房を表現していない。

（腹部）正中線や臍を表現していない。

（臀部）不明である。
（背面）背すじを表現していない。
（脚部）不明である。

⑵　土笛（第398図１・２）

２点出土している。398図１は完形品で長さが7.0cm、幅が3.3cmある。吹口は直系1.1cmで内部は中空になっている。両側面にはＲＬの縄文が施文されている。吹口の反対側にはわずかに３つの点があり、獣面状にも観察できる。側面からみると下部はふくらんでいるが、上面は平らになっている。

398図２は半分欠損しているが、全体の形状は398図１と同じで下部がふくらみ、上部が平らになると推定できる。398図１よりひとまわり大きく、長さは8.8cm、幅が5.0cm前後である。吹口の一部が残存しており、全体形状・成形技法とも398図１と同じと考えられる。398図１は内面を観察することができないが、398図２を観察すると、板状の粘土をはりあわせて作り、吹口の反対側を絞りこんでふさいでいる。内面には粘土を絞りこんだ時の皺が観察できる。

所属年代・類例・系譜等については、考察の項で述べる。

⑶　土製腕輪（第398図３）

１点出土している。直径7.8cmの環状の腕輪である。断面が「ハ」字状になっている。最小内径が4.9cmで最大内径は6.9cmである。上面に沈線２本を巡らしている。

⑷　土製耳飾（第398図７）

１点出土している。全体の形状は小鼓状で長さ3.0cm、幅2.5cmあり、中央に直径４ mmの貫通孔がある。

⑸　土製垂飾品（第398図４・５・６・８・９・10）

６点出土している。

398図４は円盤状の形状で、一部欠損しているが直径が4.7cmで、中央に直径６ mmの小孔を穿っている。表面には３重、裏面には４重の沈線を巡らしているが、裏面は４箇所で途切れている。

398図５は隋円盤状のもので、長さが4.6cm、幅が3.5cm、厚さが0.8cmある。中軸線からややはずれ左右１個づつ直径４ mmの貫通する小孔がある。

398図６は扁平な楕円形の形状で、長さが4.3cm、幅2.8cm、厚さ1.4cmあり長軸方向に貫通する小孔がある。表面には長軸方向に平行に７列の刺突による列点が配置され、裏面にも６列ほどの刺突による列点を配置している。

398図８は円盤状の形状で、一部欠損しているが直径3.1cmで、中央に直径８ mmの孔を穿っている。表裏面と側面にそれぞれ１本の沈線を巡らしている。側面には沈線の上下にそれぞれ刺突による列点を配している。

398図９は一部残存しているだけであるが、全体の形状は398図４と同じで、円盤状のものと考えられる。推定直径は8cm程で、398図４よりひとまわり大きい。中央に小孔を穿ち、表裏面に沈線を配しているが全体の構成は不明である。一部に小孔を配している。

398図10は全体形状がＣ字状に湾曲し勾玉状を呈しているが、尾部を欠損している。頭部に直径４ mmの貫通孔がある。

⑹　三角擣形土製品（第399図１・２）

２点出土している。399図１は完形のもので、長さが9.4cm、幅6.6cm、厚さが4.8cmあり、５面で構成されている。摩滅しているが各面にＲＬの縄文を施文している。表・裏面には沈線で同じ区画文を描いている。右側面は他面の沈線より細い細沈線で文様を描いている。左側面には、側面を縁取るように表・裏面と同じ太さの沈線で描いている。右側面から底面にかけて斜めに貫通する小孔がある。底面には縄文以外に文様はない。表面には、加熱に

よると思われる剝落痕が中央にあり、裏面には摩滅によると考えられる凹痕がある。

399図２は破片であるが、全体形状は399図１と同様に５面で構成されていると思われる。表・裏面とも無文と思われるが、側面には縁取るように３本１組の沈線がある。

⑺　男根形土製品（第399図３）

１点出土している。長さ12.5cm、幅4.1cm、厚さ4.5cm ある。先端部には刻目をいれている。基部下端に剝落痕が２ケ所ある。恐らく袋状のもの２個が剝落したものと思われる。基部に直径７ mm の貫通孔がある。

⑻　三角形土製品（第399図４・５・６・７）

４点出土している。「三脚形土製品」・「三脚状土製品」・「三角状土製品」と称されているものと同一のものである。いずれも全体的形状は三角形を基本にしている。

399図４は３辺が内側に湾曲し頂角部分がやや脚状になっている。表面が全体的にアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線と平行する沈線が２本ある。上辺には２本の沈線、左右側辺にはそれぞれ１本の沈線がある。裏面は無文である。基部が欠損しており、孔がある。

399図５の全体的形状は正三角形に近いが、３辺が内側にやや湾曲気味で３頂角とも丸みがある。表面は全体的にややアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線上に１本の沈線があり、これを囲むように左右側辺に平行にそれぞれ３本の沈線を配置している。上辺・左右側辺・裏面とも無文である。

399図６は２側辺が外側に張り出し丸みを持っているが、上辺はやや外側に張り出している。表面は全体的にややアーチ状に膨らんでいる。表面には中軸線に平行して２列の刺突による列点があり、それを囲むように側辺に平行に右側辺が３列、左側辺に２列の刺突による列点を配置している。上辺・左右側辺・裏面とも無文である。

399図７の全体形状は二等辺三角形状になっており、左右側辺はやや丸みを持って外側に張り出すが、上辺は直線状である。表面は全体的にアーチ状にわずかに膨らんでいる。表面には中軸線上に１列の刺突による列点があり、それを囲むように左右側辺に平行に２列づつの刺突による列点を配し、上辺に平行して１列の刺突による列点と１本の沈線がある。上辺には刺突による列点が１列あるが、左右側辺と裏面は無文である。

以上、三角形土製品の特徴をまとめると、全体的形状は三角形を基本としており正三角形状・二等辺三角形状のものがあるが、左右側辺が丸く張り出すものや、脚状に近いものもある。表面はアーチ状に膨らんでいる。表面と上辺に文様を配置するものが多い。文様には沈線のものと刺突による列点文とがある。文様の配置は基準線を中心にしている。

⑼　パイプ形土製品（第400図１～７）

パイプ形土製品としたものは、400図２のように全体の形状がパイプに類似したもので、長い中空で筒状の胴部とこれに直角もしくは斜めの角度で接続する短い中空の頭部からなっている。筒状の胴部の内部は竹管で粘土をえぐりだして中空に作りだしミガキ等の調整を加えていないものがほとんどで、差し込んだ竹管の痕跡がそのまま残っている。そのため、その他の土製品との判別が比較的容易である。全体形状が略判明するものを中心に７点を図示した。

400図１は、頭部全体と胴部の一部が残存している。頭部は胴部から斜めに立ち上がり、内外面とも丁寧にミガキ調整されている。

400図２は、胴部内面に竹管の痕跡がのこっている。頭部は胴部に略直角に接続しており、外面をミガキ調整している。

400図７は、胴部のみ残存しているが、剝落痕がありこの部分で頭部が接続していたと考えられる。

400図３・４・５・６はいずれも胴部破片である。

⑽　靴形土製品（第402図１）

１点出土している。全体の形状が靴に類似しており、底面に直径４ mm の貫通する小孔がある。表面はミガキ等の調整をしていないため、成形の際の粘土貼り合わせ痕が観察できる。

⑾　不明土製品（第400図８～10，第401図１～９，第402図１～10，第403図１～18）

上記土製品の一部の可能性のあるものや、その他のものを不明土製品として一括して説明する。

400図８～10は、いずれも中軸線上に貫通する小孔があり、裾のやや開く基部と筒状の胴部から構成されいてる。

401図１・３は、裾の大きく開き底面が凹む基部と、胴部から構成されている。胴部は判然としないが、401図２は剝落状況から２個、401図３は４個に別れたものが付くようである。

401図２・４～７は、裾の開く基部と略直立する胴部から構成されている。基部底面は、401図２・４・６のようにやや内側に凹むものと、401図７のように平坦のものとがある。401図４は１個、401図６は２個基部の裾に貫通する小孔があり、401図７は基部底面に４個の盲孔がある。胴部全体が判明するものがないが401図４のように若干膨らむものもある。

以上401図２・４～７は土偶の頭部の可能性が高い。

401図９は半分程欠損しているが、復元すると直径3.8cm の球形のものと考えられ、土鈴の可能性がある。

402図２も土偶の可能性が高いが、判然としないため不明土製品としておく。

402図４は人面状のものであるが、剝落の状況から人面状把手の可能性がある。

402図１・５・６・７・９・10，403図１～18，404図２は、一部の破片資料で全体の形状が判明しないため不明のものや、いずれかの土製品の小破片のため判然としないものである。

403図８，404図１・３・４・５は縄文土器の把手が剝落したものである可能性もある。しかし、縄文土器の把手に類例が見あたらないため、不明土製品としておく。

404図６・７・８・９・10，は粘土塊をそのまま焼成したもので、404図10のように丸いものや、404図８のように細長いものなど様々な形状であり、粘土をよじった時の皺が観察できるものもある。

⑿　円板状土製品（第405・406図）

「円盤状土製品」と称されているものと同一のものである。

包含層の各層から89点出土しているが、このうち75点を図示した。いずれも土器の破片を大きく打ち欠いて形を整え、周縁部を磨って仕上げたものである。

［素　材］

いずれも縄文土器の破片を利用している。土器の胴部破片を利用したものが大部分であるが、底部破片も少量ある。胴部破片を利用したものには文様のあるもの、地文だけのもの、無文のものがあるが、地文のものが多い。

［形　状］

楕円形のものや、隅丸方形のものもあるが大部分は円形である。

［大きさ］

８ cm 以上の大型のものや、３ cm 以下の小型のものもあるが、４～７ cm 位の大きさのものが大部分である。

［重　量］

10～20g の重量のものが大部分である。

C　剝片石器

遺物包含層を中心に合計19,104点の剝片石器・礫石器・磨製石器が出土している。点数の内訳は下に示した。ここではそれぞれの石器の属性の概要と、属性に基づいた分類について説明する。

石器の組成

<table>
<tr><td colspan="21">剝片石器・礫石器・磨製石器
19104点</td></tr>
<tr><td colspan="11">剝片石器とその素材
15564</td><td colspan="6" rowspan="3">礫石器
3451</td><td colspan="3" rowspan="3">磨製石器
89</td></tr>
<tr><td colspan="5">剝片石器
2045</td><td colspan="2" rowspan="2">加工・使用痕ある剝片
6860</td><td colspan="2" rowspan="2">素材
6659</td></tr>
<tr><td colspan="3">定形剝片石器
792</td></tr>
<tr><td>石鏃</td><td>石匙</td><td>石錐</td><td>石篦</td><td>尖頭器</td><td>不定形石器</td><td>楔形石器</td><td>二次加工剝片</td><td>微細剝離痕ある剝片</td><td>剝片</td><td>石核</td><td>凹石</td><td>敲凹石</td><td>敲石</td><td>敲磨</td><td>磨石</td><td>石皿</td><td>石棒</td><td>磨製石斧</td><td>石剣</td></tr>
<tr><td>265</td><td>252</td><td>159</td><td>89</td><td>27</td><td>1015</td><td>238</td><td>3004</td><td>3856</td><td>5904</td><td>755</td><td>532</td><td>1379</td><td>303</td><td>550</td><td>291</td><td>396</td><td>7</td><td>81</td><td>1</td></tr>
</table>

剝片石器には、石鏃（A）・石匙（B）・石錐（D）・右篦（D）・石槍（E）等のように従来の縄文時代石器研究に基づいた定形石器と、形態的には不定であるが入念に二次加工のある不定形石器（F）、両極剝離痕のある楔形石器（G）、これらの素材としての石核（H）・剝片（K）とがある。剝片には、部分的に二次加工のある剝片（J）と、使用痕としての微細な剝離痕を持つ剝片（I）とがある。これらの石器のうち、本遺跡剝片石器群の特色を示していると考えられる。定形石器を中心に図化した。以下、それぞれの石器の特徴の概略と、観察した属性および分類基準を記す。

(1)　石　鏃［A］

尖頭部と基部からなり、先端部が薄く扁平な小型の石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・長幅指数・ふくらみ度・えぐり度・石材）

長幅指数――基本的な平面形が、尖頭部先端と基部先端２点を結ぶ三角形で構成されている。長幅指数（幅／長さ）が平面形の基本となる三角形の度合いを知る手がかりとなるため計測した。その結果、長幅指数が120未満をａ類正三角形型、120以上170未満をｂ類二等辺三角形型、170以下を鋭角三角形型として３類型に細分した。

えぐり度――基部の形態には、平状・凸状・凹状のものが認められる。特に凹状の度合いを客観化するため、え

ぐり度（えぐり最大長／基部先端２点長）を計測した。えぐり度が10未満の平状のものを平基型、えぐり度が10以上のものを凹基型として分類し、凸基型を加えて３類型に細分した。

ふくらみ度――側縁形態も、平状・円状・凹状のものがある。ふくらみの度合いを客観化するため、ふくらみ度（ふくらみ最大長／尖頭部先端～基部先端長）を計測した。ふくらみ度が10未満の平状のものを平側型、ふくらみ度が10以上の円状のものを円側型、凹状のものを凹側型として３類型に細分した。

以上３つの属性を中心に具体的な分類を行うが、３つの属性中、基部形態は矢柄への着柄のあり方と関わると考えられ、平面形を構成する三角形の形状と側縁形態は、重量とともに対象物への破壊力・殺傷力に関わると考えられる。石鏃の機能を考えると最も重要なのが破壊力と殺傷力であり、様々な形態と大きさは対象物によっての使い分けも想定される。しかし、同時期の他遺跡との比較分析上から、従来の縄文時代石鏃の研究で時期的な変遷をある程度とらえられている、えぐり度を中心とする基部形態の分類を優先させ、これに重複指数を中心とする三角形の形状と、ふくらみ度を中心とする側縁部形態を加味して分類した。

Ａ類　平基（えぐり度が10未満の基部が平坦なもの）

- **ＡⅠ類**　平側（ふくらみ度10未満のもの）
  - **ＡⅠｃ類**　鋭角三角形型
- **ＡⅡ類**　平側（ふくらみ度10以上のもの）
  - **ＡⅡａ類**　正三角形型
  - **ＡⅡｂ類**　二等辺三角形型
  - **ＡⅡｃ類**　鋭角三角形型

Ｂ類　凹基（えぐり度が10以上の基部が凹状のもの）

- **ＢⅠ類**　平側（ふくらみ度10未満のもの）
  - **ＢⅠａ類**　正三角形型
  - **ＢⅠｂ類**　二等辺三角形型
  - **ＢⅠｃ類**　鋭角三角形型
- **ＢⅡ類**　円側（ふくらみ度10以上のもの）
  - **ＢⅡａ類**　正三角形型
  - **ＢⅡｂ類**　二等辺三角形型
  - **ＢⅡｃ類**　鋭角三角形型
- **ＢⅢ類**　凹側
  - **ＢⅢｂ類**　二等辺三角形型
  - **ＢⅢｃ類**　鋭角三角形型
- **ＢⅣ類**　先端が突出
  - **ＢⅣａ類**　正三角形型
  - **ＢⅣｂ類**　二等辺三角形型

Ｃ類　凸基（基部が凸状のもの）

- **ＣⅠ類**　平側（ふくらみ度10未満のもの）
  - **ＣⅠｂ類**　二等辺三角形型
  - **ＣⅠｃ類**　鋭角三角形型
- **ＣⅡ類**　円側（ふくらみ度10以上のもの）
  - **ＣⅡｂ類**　二等辺三角形型

第67図　石鏃分類

平面形態 基部形態	側縁形態	a類 正三角形型 （長幅指数120未満）	b類 二等辺三角形型 （長幅指数120以上170未満）	c類 鋭角三角形型 （長幅指数170以上）
A類 平基 （えぐり度10未満）	A Ⅰ類 平側（ふくらみ度10未満）			A Ⅰ c類
	A Ⅱ類 円側（ふくらみ度10以上）	A Ⅱ a類	A Ⅱ b類	A Ⅱ c類
B類 凹基 （えぐり度10以上）	B Ⅰ類 平側（ふくらみ度10未満）	B Ⅰ a類	B Ⅰ b類	B Ⅰ c類
	B Ⅱ類も円側（ふくらみ度10以上）	B Ⅱ a類	B Ⅱ b類	B Ⅱ c類
	B Ⅲ類 凹側		B Ⅲ b類	B Ⅲ c類
	B Ⅳ類 先端突出型	B Ⅳ a類	B Ⅳ b類	
C類 凸基	C Ⅰ類 平側（ふくらみ度10未満）		C Ⅰ b類	C Ⅰ c類
	C Ⅱ類 円側（ふくらみ度10以上）		C Ⅱ b類	

⑵　石　匙［Ｂ］

両側縁からえぐりを入れることによって作出されたつまみ部があり、刃部と判断できる縁辺をもつ石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・つまみ度・刃部角度・石材）

つまみ角度――――つまみ部と刃部の位置関係には縦状・横状・斜状のものが認められた。この位置関係を客観的に捉えるため、主要刃部の両端を結ぶ線と、つまみ部の軸線によってはさまれた角度を計測した。つまみ角度20未満のＡ類縦型と、20以上70未満をＢ類斜型、70以上をＣ類横型、の３類型に細分した。

刃部末端の形状――刃部末端の形状には尖るものＩ類と、尖らないでやや丸味をもつものII類とがある。

刃部加工の状況――刃部の二次加工の状況を観察すると、片面の周縁を加工したａ類と、両面の周縁を加工したｂ類、表裏面の周縁を加工したｃ類、片面全面を加工したｄ類、片面全面と裏面の周縁を加工したｅ類の５類型に細分した。

刃部とつまみ部の位置関係を示すつまみ角度を優先させ、これに刃部末端の形状と加工の状況を加味して19の類型に細分した。

Ａ類　縦型

ＡＩ類　刃部先端が尖るもの

ＡＩａ類　片面の周縁を加工したもの

ＡＩｂ類　両面の周縁を加工したもの

ＡＩｃ類　表裏面の周縁を加工したもの

ＡＩｄ類　片面の全面を加工したもの

ＡＩｅ類　片面全面と裏面の全面を加工したもの

ＡII類　刃部先端が尖らないもの

ＡIIａ類　片面の周縁を加工したもの

ＡIIｂ類　両面の周縁を加工したもの

ＡIIｄ類　片面の全面を加工したもの

ＡIIｅ類　片面全面と裏面の全面を加工したもの

Ｂ類　斜型

ＢＩ類　刃部先端が尖るもの

ＢＩａ類　片面の周縁を加工したもの

ＢＩｂ類　両面の周縁を加工したもの

ＢII類　刃部先端が尖らないもの

ＢIIａ類　片面の周縁を加工したもの

ＢIIｂ類　両面の周縁を加工したもの

ＢIIｄ類　片面の全面を加工したもの

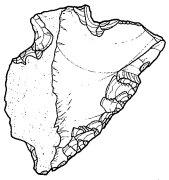
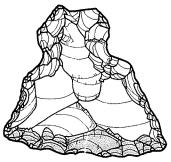
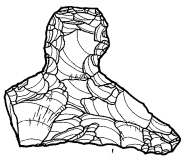
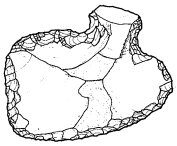
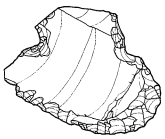
Ｃ類　横型

ＣＩ類　刃部先端が尖るもの

ＣＩａ類　片面の周縁を加工したもの

ＣＩｂ類　両面の周縁を加工したもの

第68図　石匙分類

刃部とつまみ部の関係	刃部末端の形状	加工の状況				
		a類 片面の周縁	b類 両面の周縁	c類 表裏面の周縁	d類 片面全面	e類 片面全面と裏面の周縁
A類 縦型 刃部がつまみ部に対して縦に付くもの（つまみ角度20未満）	A Ⅰ類 刃部末端が尖るもの	A Ⅰ a類 	A Ⅰ b類 	A Ⅰ c類 	A Ⅰ d類 	A Ⅰ e類
	A Ⅱ類 刃部末端が尖らないもの	A Ⅱ a類 	A Ⅱ b類 		A Ⅱ d類 	A Ⅱ e類
B類 斜型 刃部がつまみ部に対して斜に付くもの（つまみ角度20以上70未満のもの）	B Ⅰ類 刃部末端が尖るもの	B Ⅰ a類 	B Ⅰ b類 			
	B Ⅱ類 刃部末端が尖らないもの	B Ⅱ a類 	B Ⅱ b類 		B Ⅱ d類 	
C類 横型 刃部がつまみ部に対して横に付くもの（つまみ角度70以上のもの）	C Ⅰ類 刃部末端が尖るもの	C Ⅰ a類 	C Ⅰ b類 			C Ⅰ e類 
	C Ⅱ類 刃部末端が尖らないもの	C Ⅱ a類 	C Ⅱ b類 			

C Ⅰ e類　片面全面と裏面の全面を加工したもの

C Ⅱ類　刃部先端が尖らないもの

C Ⅱ a類　片面の周縁を加工したもの

C Ⅱ b類　両面の周縁を加工したもの

⑶ 石　錐［C］

尖頭状の錐部をもち、錐部の断面形が三角形もしくは菱形状を呈する石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材・錐部長・錐部角度）

つまみ部と錐部の境界――つまみ部と錐部の境界が明瞭なものA類と、不明瞭なものB類とがある。

錐部の形状――錐部が長いものⅠ類と、錐部が短いⅡ類とに分けられる。

つまみ部の加工状況――つまみ部のほぼ全周を加工しているものa類と、一部を加工しているものb類とに分けられる。

つまみ部と錐部の境界の状態を優先させ、これに錐部の形状とつまみ部の加工状態を加味して8類型に細分した。

A類　つまみ部と錐部の境界が明瞭なもの

A Ⅰ類　錐部が長いもの

A Ⅰ a類　つまみ部のほぼ全周を加工したもの

A Ⅰ b類　つまみ部の一部を加工したもの

A Ⅱ類　錐部が短いもの

A Ⅱ a類　つまみ部のほぼ全周を加工したもの

A Ⅱ b類　つまみ部の一部を加工したもの

B類　つまみ部と錐部の境界が不明瞭なもの

B Ⅰ類　錐部が長いもの

B Ⅰ a類　つまみ部のほぼ全周を加工したもの

B Ⅰ b類　つまみ部の一部を加工したもの

B Ⅱ類　錐部が短いもの

B Ⅱ a類　つまみ部のほぼ全周を加工したもの

B Ⅱ b類　つまみ部の一部を加工したもの

⑷ 石　篦［D］

全体形状が篦状を呈し、一端に長軸に直交する刃部を持つ石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

全体形状――全体の形状が篦状のものA類と、長幅指数が高く全体の形状が細味のものB類と、全体の形状が撥形のものC類がある。

刃部形態――刃部が角張るものⅠ類と、刃部が丸みを持つものⅡ類とに分けられる。

二次加工の状況――二次加工の状況が表裏の全面に及ぶものa類と、片面の全面のものb類、片面の周縁のものc類、片面全面と裏面の周縁のものd類、表裏面の周縁のものe類がある。

全体の形状を優先させ、刃部の形態と二次加工の状況を加味して分類した。

第69図　石錐の分類

つまみ部と錐部の境界の状態	錐部の形状	つまみ部の加工状態	
		a類 ほぼ全周を加工	b類 一部加工
A類 明瞭なもの	A Ⅰ類 長いもの	A Ⅰ a類	A Ⅰ b類
	A Ⅱ類 短いもの	A Ⅱ a類	A Ⅱ b類
B類 不明瞭なもの	B Ⅰ類 長いもの	B Ⅰ a類	B Ⅰ b類
	B Ⅱ類 短いもの	B Ⅱ a類	B Ⅱ b類

第70図　尖頭器分類

A類 尖頭部と基部が明瞭なもの	A Ⅰ類 基部にえぐりをいれるもの	A Ⅰ a類 小型のもの	
		A Ⅰ b類 大型のもの	
	A Ⅱ類 基部にえぐりをいれないもの		
B類 尖頭部と基部が不明瞭なもの	B Ⅰ類 細味のもの		
	B Ⅱ類 やや幅広のもの		

Ａ類　全体の形状が篦状のもの

Ａⅰ類

Ａⅰａ類　表裏面の全面を加工

Ａⅰｂ類　片面の全面を加工

Ａⅰｄ類　片面の全面と裏面の周縁

ＡⅡ類

ＡⅡａ類　表裏面の全面を加工

ＡⅡｂ類　片面の全面を加工

ＡⅡｃ類　片面の周縁を加工

ＡⅡｄ類　片面の全面と裏面の周縁

ＡⅡｅ類　表裏面の周縁

Ｂ類　全体の形状が細味のもの

Ｂⅰ類

Ｂⅰａ類　表裏面の全面を加工

Ｂⅰｄ類　片面の全面と裏面の周縁

ＢⅡ類

ＢⅡａ類　表裏面の全面を加工

ＢⅡｄ類　片面の全面と裏面の周縁

Ｃ類　全体の形状が撥形のもの

Ｃⅰ類

Ｃⅰｂ類　片面の全面を加工

ＣⅡ類

ＣⅡｂ類　片面の全面を加工

ＣⅡｄ類　片面の全面と裏面の周縁

⑸　尖頭器［Ｅ］

両側辺が直線的もしくは凸形の両面加工により一端が尖頭状の石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

尖頭部と基部の形状を中心に、基部のえぐりの有無などから５類型に分類した。

Ａ類　尖頭部と基部が明瞭なもの

Ａⅰ類　基部にえぐりをいれるもの

Ａⅰａ類　小型のもの

Ａⅰｂ類　大型のもの

ＡⅡ類　基部にえぐりをいれないもの

Ｂ類　尖頭部と基分が不明瞭なもの

Ｂⅰ類　細味のもの

ＢⅡ類　やや幅広のもの

第71図　石篦分類

全体の形状	刃部形態	二次加工の状況				
		a類 表裏面全面	b類 片面全面	c類 片面の周縁	d類 片面全面と裏面の周縁	e類 表裏面の周縁
A類 全体の形状が篦状のもの	A Ⅰ類 角張っているもの	A Ⅰ a類	A Ⅰ b類		A Ⅰ d類	
	A Ⅱ類 丸みを持つもの	A Ⅱ a類	A Ⅱ b類	A Ⅱ c類	A Ⅱ d類	A Ⅱ e類
B類 全体の形状が細味のもの	B Ⅰ類 角張っているもの	B Ⅰ a類			B Ⅰ d類	
	B Ⅱ類 丸みを持つもの	B Ⅱ a類			B Ⅱ d類	
C類 全体の形状が撥形のもの	C Ⅰ類 角張っているもの		C Ⅰ b類			
	C Ⅱ類 丸みを持つもの		C Ⅱ b類		C Ⅱ d類	

⑹　不定形石器［Ｆ］

二次加工の施された石器の中で定形的なものをのぞいた石器

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材）

Ａ類　スクレイパー・エッジを持つもの

- **ＡⅠ類**　刃部末端が尖るもの
  - **ＡⅠａ類**　直刃と直刃
  - **ＡⅠｂ類**　凸刃と凸刃
  - **ＡⅠｃ類**　凸刃と凹刃
  - **ＡⅠｄ類**　凹刃と凹刃
  - **ＡⅠｅ類**　直刃と凸刃
  - **ＡⅠｆ類**　直刃と凹刃
- **ＡⅡ類**　刃部末端が尖らないもの
  - **ＡⅡａ類**　凸刃
  - **ＡⅡｂ類**　凹刃
  - **ＡⅡｃ類**　直刃
  - **ＡⅡｄ類**　直刃と直刃
  - **ＡⅡｅ類**　直刃と凹刃
  - **ＡⅡｆ類**　凸刃と凹刃
  - **ＡⅡｇ類**　凸刃と凸刃
  - **ＡⅡｈ類**　直刃と凸刃

Ｂ類　円形状を呈する小型のもの

- **ＢⅠ類**　片面周縁二次加工のもの
- **ＢⅡ類**　両面周縁二次加工のもの
- **ＢⅢ類**　片面全面二次加工のもの
- **ＢⅣ類**　両面全面二次加工のもの

Ｃ類　尖頭器状を呈する小型のもの

- **ＣⅠ類**　片面周縁二次加工のもの
- **ＣⅡ類**　両面周縁二次加工のもの
- **ＣⅢ類**　片面全面二次加工のもの

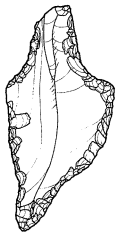
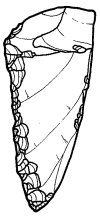
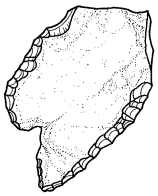
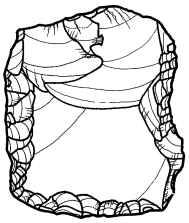
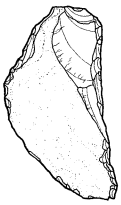
Ｄ類　粗い二次加工があるもの

- **ＤⅠ類**　ノッチを持つもの
- **ＤⅡ類**　鋸歯縁のもの
- **ＤⅢ類**　片面加工のもの
- **ＤⅣ類**　両面加工のもの

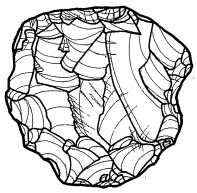
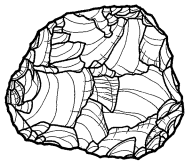
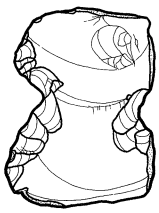
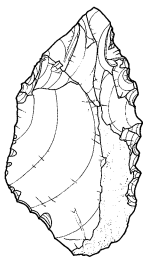
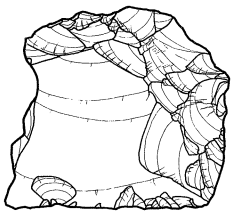
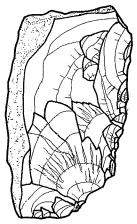
⑺　楔形石器［Ｇ］

対向する縁辺から、両極打法によったと思われる剥離面（両極剥離痕）が認められる石器

第72図　不定形石器分類（1）

A類 スクレイパー・エッジを持つもの	AⅠ類 刃部末端が尖るもの	AⅠa類 直刃と直刃		AⅠb類 凸刃と凸刃	
		AⅠc類 凸刃と凹刃		AⅠd類 凹刃と凹刃	
		AⅠe類 直刃と凸刃		AⅠf類 直刃と凹刃	
	AⅡ類 刃部末端が尖らないもの	AⅡa類 凸刃		AⅡb類 凹刃	
		AⅡc類 直刃		AⅡd類 直刃と直刃	
		AⅡe類 直刃と凹刃		AⅡf類 凸刃と凹刃	
		AⅡg類 凸刃と凸刃		AⅡh類 直刃と凸刃	

第73図　不定形石器分類（２）

B類 円形状を呈する小型のもの	B Ⅰ類 片面周縁二次加工のもの		B Ⅱ類 両面周縁二次加工のもの	
	B Ⅲ類 片面全面二次加工のもの		B Ⅳ類 両面全面二次加工のもの	
C類 尖頭器状を呈する小型のもの	C Ⅰ類 片面周縁二次加工のもの		C Ⅱ類 両面周縁二次加工のもの	
	C Ⅲ類 片面全面二次加工のもの			
D類 粗い二次加工があるもの	D Ⅰ類 ノッチを持つもの		D Ⅱ類 鋸歯縁のもの	
	D Ⅲ類 片面加工のもの		D Ⅳ類 両面加工のもの	

観察した属性（長さ・幅・厚さ・長幅指数・重量・石材）

Ａ類

ＡⅠ類　点状と点状

ＡⅡ類　点状と線状

ＡⅢ類　点状と平坦面

ＡⅣ類　線状と線状

ＡⅤ類　線状と平坦面

ＡⅥ類　平坦面と平坦面

Ｂ類

ＢⅠ類　線状と線状・線状と線状

ＢⅡ類　線状と線状・線状と平坦面

⑻　石　核［Ｈ］

剥片を剥離する目的で整形された礫もしくは剥片

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材）

Ａ類　打面作出型：平坦な打面を作出し、打面の周縁に沿って剥片剥離がなされたもの

ＡⅠ類　平坦打面のもの

ＡⅡ類　求心的に剥離を加えて打面を作出したもの

Ｂ類　求心型：作業面が表裏両面にだけ設定され、周縁から中心に向かって求心的に剥片剥離がなされたもの

ＢⅠ類　交互剥離によるためチョッピング・トゥル状を呈するもの

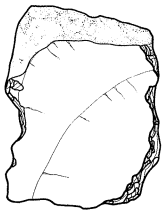
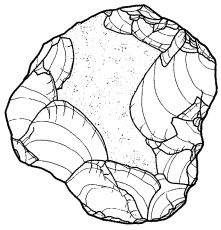
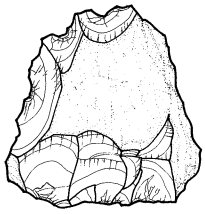
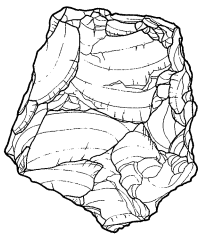
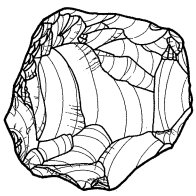
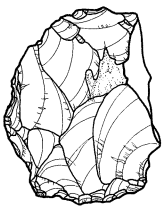
ＢⅡ類　剥片剥離が表裏の全面におよばないもの

ＢⅢ類　剥片剥離が表裏の全面におよぶもの

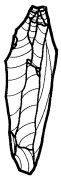
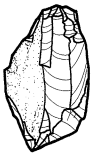
ＢⅣ類　剥片剥離が表裏全面におよび全体の形状が円盤状のもの

Ｃ類　多面体型：複数の作業面・打面から剥片剥離がなされたもので全体の形状が多面体となるもの

第74図　石核分類

A類 打面作出型 平坦な打面を作出し打面の周縁に沿って剥片剥離のなされたもの	A Ⅰ類 平坦打面のもの	
	A Ⅱ類 求心的に剥離を加え打面を作出したもの	
B類 求心型 作業面が表裏両面にだけ設定され、周縁から中心に向かって求心的に剥片剥離のなされたもの	B Ⅰ類 交互剥離によるためチョッピング・トゥール状を呈するもの	
	B Ⅱ類 剥片剥離が表裏の全面におよばないもの	
	B Ⅲ類 剥片剥離が表裏の全面におよぶもの	
	B Ⅳ類 剥片剥離が表裏全面および全体形状が円盤状のもの	
C類 多面体型 複数の作業面・打面から剥片剥離のなされたもの	C類 全体の形状が多面体となるもの	

第75図　楔形石器分類

	刃部の形状	
A類 一対の両極剥離痕を持つもの	A Ⅰ類 点状と点状	
	A Ⅱ類 点状と線状	
	A Ⅲ類 点状と平坦面	
	A Ⅳ類 線状と線状	
	A Ⅴ類 線状と平坦面	
	A Ⅵ類 平坦面と平坦面	
B類 二対の両極剥離痕を持つもの	B Ⅰ類 線状と線状、線状と線状	
	B Ⅱ類 線状と線状、線状と平坦面	

D　磨製石器

各種石材を敲打等によって形を整え、最終的に研磨して製作した石器を磨製石器として扱うこととする。合計89点出土しているが最も多いのは磨製石斧が81点で、石棒が７点、石剣１点が出土している。以下各々について分類する。

（１）磨製石斧（第492図～第500図）

磨製石斧は81点出土している。この内61点を図示した。いずれも遺物包含層から出土した。これらのなかには頭部・胴部・刃部がそろう完全なものは少なく、いずれかの部位を欠失したものがほとんどであった。したがってここでは、各々の部位を観察してその特徴を明らかにしながら、全体像を探りつつ分類することとする。

観察・計測した属性（長さ・幅・厚さ・石材・頭部形態・胴部形態・刃部形態）

[頭部形態]

頭部形態が判明するものが43点ある。頭部の平面形態と上面形態を観察した結果、それぞれを以下のように細分した。

（頭部平面形態）

a類　丸みをもち、胴部側縁との境界が不明瞭なもの
（495図３，498図３・６）

b類　丸みをもっているが、胴部側縁との境界が明瞭なもの
（492図１・２・７，493図１・９・13，496図４・５，497図５，498図４，499図７）

c類　平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの
（492図３・５・６，493図５・８・10・11・12，494図１・２・３・５・６，495図１・４・５，496図３・６・７，497図１・２・３・４・６，498図１・２，499図２・４，500図１・６）

（頭部上面形態）

a類　ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの
（494図２，497図２・４，500図１）

b類　ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの
（492図１・２・５・６，493図８・９・11・13，494図３・５，495図１・５，496図３・４・７，497図１・６，498図３，499図４・７）

c類　ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの
（492図７，495図３・５）

d類　ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの
（492図１・５・10・12，494図１・６，495図４，496図５・６，499図２）

e類　楕円気味のもの
（492図３，498図１・６，500図６）

f類　側縁との境界が明瞭でないもの
（498図４）

[胴部形態]

胴部形態が判明するものが62点ある。胴部の平面形態と横断面形態を観察した結果、それぞれ以下のように細分した。

（胴部平面形態）

a類　胴部側縁がほぼ並行なもの
（492図８，493図３・４・６・７・８・９・12，494図３・４・５，495図１・２，496図２，497図４・７，499図３・５・６・９，500図２・３・４）

b類　胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの
（492図１・２・３・４・５・６・７，493図１・５・10・11・13，494図１・２・６，495図３・４・５・６，496図３・４・５・６・７，497図１・２・３・５・６，498図１・２・３・４・６，499図２・４・７，500図１・６）

（胴部横断面形態）

a類　ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの
（492図１・２・５・６・８，493図１・３・４・８・11・13，494図１・２・３・４・５・６，495図１・２・４・５，496図２・３・４・５，497図１・２・３・４・５・６，498図１・２・３，499図３・４・５・６，500図１・２・３・４・６）

b類　ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの
（492図７，493図９，496図７，498図４，499図１）

c類　ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの
（493図５・６・７・10・12，496図６，499図２）

d類　楕円形気味で隅が丸いもの
（492図３，496図１，498図６，499図７）

e類　不定形で側縁との稜線が不明瞭なもの
（495図３・６）

［刃部形態］

刃部形態が判明するものが29点ある。刃部の平面形態と側面形態を観察した結果、それぞれ以下のように細分した。

（刃部平面形態）

a類　刃縁が全体的に丸みをもつもの
（492図６，493図１・２・３・４・７・８・10，495図２・５・６，496図１・２，497図１，498図５・８，499図３・４・５・６，500図２・３）

b類　刃縁が全体的に丸みをもつが、左右対称でないもの
（492図８）

c類　刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの
（494図３，495図７，500図４）

d類　刃縁が直線的なもの
（493図６・９）

（刃部側面形態）

a類　中心線が刃縁を通るもの
（492図１，493図１・２・３・４・６・７・８・10，494図３，495図２・５・６，496図１・２，497図１，498図５・８，499図３・５，500図２・３・４）
b類　中心線が刃縁を通らないもの
（493図９）

以上、磨製石斧の各部位の観察と細分をした結果、完形品の少ない磨製石斧の全体像があきらかになってきた。磨製石斧の機能を考える上で最も重要である刃部形態と胴部形態を基準とし、分類したのが第14表である。
長さが10cm 以上の中型（A～H類）のものと、長さが10cm 未満の小型（Ｉ類）の２つに大きく分類することができる。これらはそれぞれ更に、刃部の平面形態・側面形態と胴部の平面形態・横断面形態から、中型を８類、小型を４類に細分した。

以下、各類の刃部・胴部・頭部の特徴をまとめる。

（中型：A～H類）

［A　類］（493図４，494図４・５，495図１・２，496図２，497図４，499図３・５・６，500図２・３）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、いずれもｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）のみである
頭部上面形態が判明するものには、ａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）とｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）とがある。
（胴部）胴部平面形態は、いずれもａ類（胴部側縁がほぼ並行なもの）のみである。
胴部横断面形態もａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、いずれもａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［B類］（492図１・２・４・５・６，493図１・11・13，494図１・２・６，495図４・５，496図３・４・５，497図１・２・３・５・６，498図１・２・３，499図４，500図１・６）

（頭部）頭部平面形態には、ａ類(丸みをもち、胴部側縁との境界が不明瞭なもの)とｂ類(丸みをもっているが、胴部側縁との境界が明瞭なもの)ｃ類(平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの)とがある。
頭部上面形態が判明するものには、ａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）とｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）、ｃ類（ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの）、ｄ類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）、ｅ類（楕円気味のもの）とがある。
（胴部）胴部平面形態は、いずれもｂ類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）のみである。
胴部横横断形態もａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。

第14表　磨製石斧残存部位・分類一覧表

●残存部位　○推定残存部位　●横の数字は図番号

部位類型 / 分類	頭部									胴部							刃部					
	平面形態			上面形態						平面形態		横断面形態					平面形態				側面形態	
	a類	b類	c類	a類	b類	c類	d類	e類	f類	a類	b類	a類	b類	c類	d類	e類	a類	b類	c類	d類	a類	b類
A類	497−4		●	●						●		●										
	494−5		●		●					●		●										
	495−1		●		●					●		●										
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				●	
										●		●					●				○	
										●		●										
B類	498−3		●		●						●	●										
	492−1	●			●						●	●					○				●	
	492−2	●			●						●	●										
	493−13	●			●						●	●										
	496−4	●			●						●	●										
	497−5	●				●					●	●										
	493−1	●					●				●	●					●				●	
	496−5	●					●				●	●										
	497−2	●		●							●	●										
	500−1	●		●							●	●										
	494−2	●		●							●	●										
	499−4	●			●						●	●					●				○	
	492−5	●			●						●	●										
	492−6	●			●						●	●					●				○	
	493−11	●			●						●	●										
	495−5	●			●						●	●									●	
	496−3	●			●						●	●										
	497−1	●			●						●	●					●				●	
	497−6	●			●						●	●										
	497−3	●				●					●	●										
	494−1	●					●				●	●										
	494−6	●					●				●	●										
	495−4	●					●				●	●										
	498−1	●						●			●	●										
	500−6	●						●			●	●										
	498−2	●									●	●										
										492−4	●											
C類	496−7	●			●						●		●									
	492−7	●				●					●		●									
	498−4	●							●		●		●									
												499−1	●									
																	493−2				●	
																	498−5				●	
																	498−8				●	
D類	493−10	●					●				●			●			●				●	
	496−6	●					●				●			●								
	499−2	●					●				●			●								
E類	492−3	●						●			●				●							
	499−7	●			●						●				●							
	498−6	●						●			●				●							
										496−1	○				●		●				●	
F類										495−6	●					●	●				●	
	495−3	●									●					●						
G類										492−8	●	●						●			○	
H類																						
	494−3	●			●						●	●							●		●	
										500−4	●	●							●		●	
																			●		○	
I類 I1	493−8	●			●						●	●					●				●	
										493−3	●	●					●				●	
I類 I2	493−12	●					●				●			●								
										493−7	●			●			●				●	
	493−5	●					●					●		●								
I類 I3										493−6	●			●						●	●	
I類 I4	493−9	●			●						●		●							●		●

（刃部）刃部平面形態は、いずれもａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｃ類］（492図７，493図２，496図７，498図４・５，499図１）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、ｂ類（丸みをもっているが、胴部側縁との境界が明瞭なもの）とｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）とがある。
頭部上面形態が判明するものには、ｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）、ｃ類（ほぼ並行な長方形で隅が丸いもの）、ｆ類（側縁との境界が明瞭でないもの）とがある。
（胴部）胴部平面形態は、いずれもｂ類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）のみである。
胴部横断面形態もｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、いずれもａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｄ類］（493図10，496図６，498図８，499図２）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、いずれもｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）のみである。
頭部上面形態が判明するものには、ｄ類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。
（胴部）胴部平面形態は、いずれもｂ類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）のみである。
胴部横断面形態もｃ類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、いずれもａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｅ類］（492図３，496図１，498図６，499図７）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、ａ類（丸みをもち、胴部側縁との境界が不明瞭なもの）とｂ類（丸みをもっているが、胴部側縁との境界が明瞭なもの）、ｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）の３種類ある。
頭部上面形態が判明するものには、ｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）とｅ類（楕円気味のもの）がある。
（胴部）胴部平面形態は、ｂ類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）のみである。
胴部横断面形態もｄ類（楕円形気味で隅が丸いもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、ｃ類（刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｆ類］（495図３・６）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、ａ類（丸みをもち、胴部側縁との境界が不明瞭なもの）のみである。
頭部上面形態は不明である。
（胴部）胴部平面形態は、ｂ類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）のみである。
胴部横断面形態も、ｅ類（不定形で側縁との稜線が不明瞭なもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、ａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｇ類］（492図８）

（頭部）頭部平面・上面形態は不明である。
（胴部）胴部平面形態は、ａ類（胴部側縁がほぼ並行なもの）である。
胴部横断面形態もａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）である。
（刃部）刃部平面形態は、ｂ類（刃縁が全体的に丸みをもつが、左右対称でないもの）である。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）である。

［Ｈ類］（494図３，495図７，500図４）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、ｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）である。
頭部上面形態が判明するものには、ｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。
（胴部）胴部平面形態は、いずれもａ類（胴部側縁がほぼ並行なもの）のみである。
胴部横断面形態もａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、ｃ類（刃縁中央が直線的で両端に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

（小型：Ｉ類）

［Ｉ１類］（493図３・８）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、ｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）である。
頭部上面形態が判明するものには、ｂ類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。
（胴部）胴部平面形態は、ａ類（胴部側縁がほぼ並行なもの）のみである。
胴部横断面形態もａ類（ふくらみをもつ長方形で隅が角張るもの）のみである。
（刃部）刃部平面形態は、いずれもａ類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。
刃部側面形態もａ類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［Ｉ２類］（493図５・７・12）

（頭部）頭部平面形態が判明するものは、いずれもｃ類（平坦で胴部側縁との境界が明瞭なもの）のみである。

頭部上面形態が判明するものは、d類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）であった。

（胴部）胴部平面形態は、いずれもa類（胴部側縁がほぼ並行なもの）とb類（胴部上半より胴部下半の幅が大きいもの）とがある。

胴部横断面形態もc類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）のみである。

（刃部）刃部平面形態は、いずれもa類（刃縁が全体的に丸みをもつもの）のみである。

刃部側面形態もa類（中心線が刃縁を通るもの）のみである。

［I 3類］（493図－6）

（頭部）頭部平面・上面形態は不明である。

（胴部）胴部平面形態は、a類（胴部側縁がほぼ並行なもの）である。

胴部横断面形態は、c類（ほぼ並行な長方形で隅が角張るもの）である。

（刃部）刃部平面形態は、d類（刃縁が直線的なもの）である。

刃部側面形態は、a類（中心線が刃縁を通るもの）である。

［I 4類］（493図9）

（頭部）頭部平面形態は、b類（丸みをもっているが、胴部側縁との境界が明瞭なもの）である。

頭部上面形態は、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。

（胴部）胴部平面形態は、a類（胴部側縁がほぼ並行なもの）である。

胴部横断面形態は、b類（ふくらみをもつ長方形で隅が丸いもの）である。

（刃部）刃部平面形態は、d類（刃縁が直線的なもの）である。

刃部側面形態は、b類（中心線が刃縁を通らないもの）である。

各部類型 ＼ 分類		頭部									胴部						刃部					
		平面形態			上面形態						平面形態		横断面形態					平面形態				側面形態	
		a類	b類	c類	a類	b類	c類	d類	e類	f類	a類	b類	a類	b類	c類	d類	e類	a類	b類	c類	d類	a類	b類
A	類			●	●	●					●		●					●				●	
B	類	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●					●				●	
C	類		●	●		●	●			●		●		●				●				●	
D	類			●				●				●			●			●				●	
E	類	●	●	●		●			●			●				●		●				●	
F	類	●										●					●	●				●	
G	類										●		●						●			●	
H	類			●		●					●		●							●		●	
I類	I 1			●		●					●		●					●				●	
	I 2			●				●			●	●			●			●				●	
	I 3			●				●			●				●						●	●	
	I 4		●			●					●			●							●		●

（２）石棒（第501図１～４）

７点出土しているが、小破片をのぞいた４点を図示した。いずれも大型の石棒で、敲打によって素材の形態を整えた後、研磨によって表面全体を仕上げている。501図３・４はいずれも石棒の上下端部であるが、501図３は略兵隊に整えられている。503図４は中央部が凹んでいる。凹んでいる部分が上端で、平坦なものは下端と考えられる。

（３）石刀（第503図７）

１点出土している。断面を観察すると、明瞭な刃部を形成してはいないが、一側縁が他の側縁よりも稜線がやや丸味を持っているので石刀としておく。上下端部を欠損しているが、残存部から判断すると、反りのない直線的な形状のものと推定される。

Ｅ　石製品

（１）岩偶（第503図６）

１点出土している。石材は凝灰岩で表裏面に線刻による文様が描かれている。大きく欠損しているため全体の文様構成は不明であるが、渦巻文と上下・左右に延びる直線から成っている。線刻は極めて細く、断面はＶ字形なので剝片等の鋭利な縁辺で描いたと想像される。岩板の可能性もあるが、下端直上の両側が張り出し、くびれてさらに張り出すため岩偶とした。

（２）有孔石製品（第502図16，第503図４・８・９，第504図２）

５点出土している。いずれも孔を有するものである。

502図16は、長軸4.0 cm、短軸2.9 cm、厚さ1.4 cm の扁平な楕円形状のもので長軸上に表面から裏面に斜めに孔が貫通している。この孔は断面が長方形で８ mm×10mm の大きさである。断面の形状及び、この石材の硬度や孔の大きさから考えて人口的な孔とは認められない。孔周辺には擦痕などは認められないが、こうした石材は遺跡周辺では見あたらず、しかも４層出土ということから考えて、何らかに利用したことは十分に考えられるので有孔石製品としてとりあげた。

503図４もこの石材の硬度と孔の大きさから考えて人工的な孔とは考えがたく、ボーリングシェルによって穿孔されたものであろう。しかし、表面は礫面であるが裏面は節理面に沿って割れており、この節理面には擦った時の擦痕が観察できる。したがって502図16と同様、４層出土ということから何らかに利用したと想像されるため有孔石製品として扱った。

503図８・９，504図２はいずれも石材は安山岩であり、中央もしくは一端に孔を有するものである。石材の比重が軽いことから浮きとしての用途も考えられる。

（３）船形状石製品（第503図１）

１点出土している。

（４）石斧状有孔垂飾品（第503図３）

１点出土している。長さ3.3 cm･幅1.7 cm･厚さ0.7 cm あり、全体の形状が石斧状である。頭部直下に直径３ mm の貫通する小孔があり刃部を鋭く作り出している。ペンダント状の垂飾品と考えられる。

（５）軽石状石製品（第504図１・３・４・６・７，505図１～４・６）

いずれも石材は安山岩で、大部分のものは扁平な楕円状のものであるが、504図４のように大型のものや、505図２のような不整形のものもある。

（６）砥石状石製品（第504図５，505図５・８）

３点出土している。いずれも石材は安山岩で、504図５は片面に溝が２条、505図５も片面に10条程、505図７も片面に７条ありこれらは砥石と考えられる。

（7）箆状石製品（第506図1・2・5・6・9～13，507図2～4・6）

いずれも珪化木を素材としているものである。素材となる珪化木は計1863点と多量に出土しているが、珪化木という素材自体加工痕跡が判別しにくい面があるが、擦って形を箆状に整えた13点を図示した。いずれも板目に割れた素材を利用している。

いずれも全体の形状は箆状であるが、506図6のように下端付近が丸みをもつものや握り部をもつものもある。

（8）棒状石製品（第506図3・4・7・8・14，第507図1・5）

箆状石製品と同じように珪化木を素材とし、棒状に形を整えたもの7点を図示した。

全体の形状は棒状であるが、断面形態は506図7のように扁平なものや、506図3・4のように楕円状のもの、507図1・5のように角がまるい長方形状のものがある。板目に割れた素材を利用するものが多いが、506図4のように柾目を利用したものもある。

大きさは、506図3・7・8のように6 cm前後の比較的小型のものと、506図4，507図1のように10 cm以上の中型のもの、507図5のように17 cm以上の大型のものがある。

507図1の両端には上下両端に糸掛け状にわずかに抉ぐりをいれている。507図5も下端が欠損しているが、上端にはわずかに抉ぐりを入れており、恐らく下端にもあると考えられる。

F　礫石器

河原や段丘崖の礫層等で採集した礫を使用した結果、礫面上に様々な使用痕跡を持つ石器である。一部の石皿を除いた他の礫石器には整形・加工した痕跡は認められない。使用痕跡には、凹痕・敲痕・敲凹痕・磨痕・敲磨痕・ワレ痕・ヒビ痕が認められた。これら礫石器は多量に出土しているため、完形品を中心に666点を図化した。

観察した属性（長さ・幅・厚さ・重量・石材・礫素材の平・断面形態・使用痕跡）

［礫素材の平・断面形態］

平面形態 ― 長幅指数が1.2未満の円形基調のもの、長幅指数が1.2以上2.0未満の楕円形基調のもの、長幅指数が2.0以上の長楕円形のもの、これら以外の不定形のものの4種類が認められた。

断面形態 ― 幅厚指数が1.2未満の円形のもの、幅厚指数が1.2以上2.0未満の楕円形のもの、幅厚指数が2.0以上の扁平形のものとが認められた。幅厚指数が1.2以上2.0未満のものには、楕円形以外に変型楕円形と四面体形、不定形のものとがあり、形6種類が認められた。

これら礫素材の平面形態と断面形態の組み合わせは第15表のようにまとめられる。

［使用痕跡］

凹痕 ――― 凹部の深さが2 mm以上で凹部平面形が楕円ないしは円形で、V字・U字状の断面形態を呈している。また凹部の表面は、摩耗して光沢のあるものと、ザラザラしているものとがある。摩耗しているものの凹部平面形態は均整のとれた円形もしくは楕円形であるが、ザラザラしているものは、不整気味で小さな敲打痕の集合体のような様相を呈している。凹部は素材の礫の中心軸上に数個あるものが多い。

敲凹痕 ―― 凹部の深さが2 mm未満で、凹部平面形は楕円ないしは円形を基本としているが、不整形のものが多い。凹部表面はザラザラしているものと摩耗しているものとが認められた。

敲打痕 ―― 素材の礫の未端等にあるものが大部分である。表面はザラザラしていて凹部を形成していない。

磨痕 ――― 表面が摩耗している痕跡である。素材礫表面の広い面積にわたるものが多いが、局所的に見られるものもある。磨痕及び磨痕範囲とも明瞭なものと、磨痕は明瞭であるが磨痕範囲がやや不明瞭なもの、磨痕・磨痕範囲が明瞭さにやや欠けるものとがあった。石材の緻密度と使用頻度に関係するものと思われた。磨面は擦痕を伴うものもある。磨痕のある部分の断面形態には、凸面状・平坦面・凹状・凹凸面状の4種類が認められる。

敲磨痕――粗い磨面をもつもので、特殊磨石とか平坦磨石・ザラ面を持つ磨石と呼ばれてきたものである。
ワレ痕――強い打撃によって割れた結果生じた痕跡
ヒビ痕――打撃によって生じたヒビ割れ痕跡。凹痕・敲凹痕・敲打痕・敲磨痕から派生しているものが多い。

これら礫石器の大部分は、凹痕・敲凹痕・敲打痕・磨痕・敲磨痕が複合して存在している。これら複合関係を整理して分類したのが第16表である。使用痕跡と礫素材との関係に関しては分析まで至らなかった。

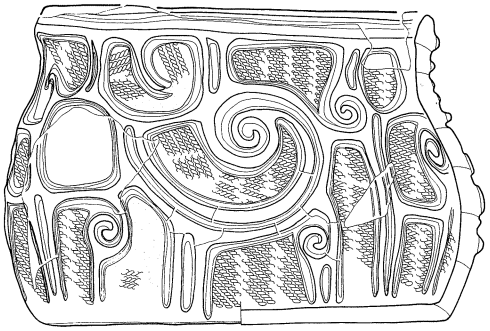
第15表　礫石器素材形態分類

平面形		断面形					
		A 円形	B1 楕円形	B2 変形楕円形	C 扁平形	D 四面体形	E 不定形
		幅/厚<1.2	1.2≦幅/厚<2.0		2.0≦幅/厚	1.2≦幅/厚<2.0	
円形基調 長/幅<1.2		円　A	円　B1	円　B2	円　C	円　D	円　E
楕円形基調 1.2≦長/幅<2.0		楕円　A	楕円B1	楕円　B2	楕円　C	楕円　D	楕円　E
長楕円形基調 2.0≦長/幅		長楕円A	長楕円B1	長楕円B2	長楕円C	長楕円D	長楕円E
不定形 円形・楕円形・長楕円形以外の不定の平面形態のもの		不定形A	不定形B1	不定形B2	不定形C	不定形D	不定形E

第16表　礫石器分類

		凹痕（A痕）	敲凹痕（B痕）	敲打痕（C痕）	敲磨痕（D痕）	磨痕（E痕）
A類凹石	AⅠ類（A）	○				
	AⅡ類（AB）	○	○			
	AⅢ類（AF）	○				○
	AⅣ類（ABF）	○	○			○
B類敲凹石	BⅠ類（D）		○			
	BⅡ（BF）		○			○
C類敲石	C類（C）			○		
D類敲磨石	DⅠ類（D）				○	
	DⅡ類（AD）	○			○	
	DⅢ類（BD）		○		○	
	DⅣ類（ABD）	○	○		○	
	DⅤ類（ABDF）	○	○		○	○
	DⅥ類（ADF）	○			○	○
	DⅦ類（BDF）		○		○	○
	DⅧ類（DF）				○	○
F類磨石	F類（F）					○
E類石皿	E類（ABF）	○	○			○

第Ⅴ章　古代以降の遺構と遺物



第Ⅴ章　古代以降の遺構と遺物

第１節　古代の遺構と遺物

１　竪穴遺構（ＳＩ）

３基の竪穴遺構を検出している。いずれも住居跡としての積極的な根拠がみいだせないので竪穴遺構とした。

SI １：長軸4.1m×短軸3.4m の方形の平面形である。SD ４・５と重複しているが、これらより古い。SI ２と重複するが新旧関係は不明である。底面で10個のピットを検出しているが、いずれも浅く配置も不規則で柱穴となるものはない。北西隅から方形の土壙を検出した。

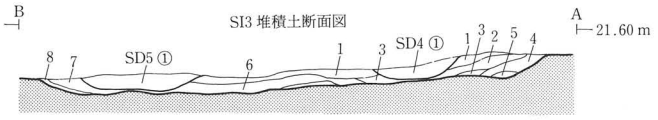
SI ２：長軸4.1m 以上×短軸3.2m の方形の平面形である。SD ４・５と重複しているが、これらより古い。SI ２と重複するが新旧関係は不明である。底面で６個のピットを検出しているが、いずれも浅く柱穴となるものはない。

SI ３：長軸3.5m 以上×短軸3.1m の方形の平面形である。SD ４・５と重複しているが、これらより古い。底面で８個のピットを検出しているが、いずれも浅く配置も不規則で柱穴となるものはない。

これら３基の竪穴遺構からの出土遺物は、いずれも細片のみであるが、土師器の特徴から平安時代のものと考えられる。

２　溝跡（ＳＤ）

５基検出している。SD ６・７・８はいずれも幅30～50cm で浅い小規模のものである。ＳＤ４・５は幅が1.0～1.5m 程あり規模も大きい。SD ４と SD ５はほぼ並行しているが、調査区東端で大きくカーブするように観察される。これら３基の竪穴遺構からの出土遺物は、いずれも細片のみであるが、土師器の特徴から平安時代のものと考えられる。



SI3 遺構層注記

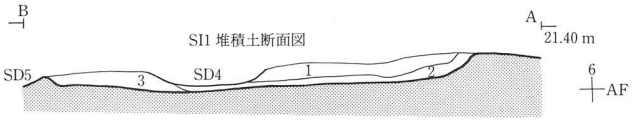
層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR3/1	シルト	しまり良・粘性普つう・ややグライ化・酸化鉄粒7.5YR2/3 多量に混入(SD04 埋土か？)
2	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性普つう・酸化鉄粒7.5YR2/3 多量に混入(SD04 埋土か？)
3	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性普つう・黄褐色土10YR5/6 ホブロック状に混入
4	黒褐色土層10YR3/2	シルト	しまり良・粘性普つう・炭化物粒子多量に混入
5	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう
6	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・黄褐色土10YR5/6 わずかにホブロック状に混入
7	黒褐色土10YR3/1とにぶい黄褐色土10YR5/4のブロック層	シルト	しまり良・粘性普つう
8	にぶい黄褐色土層10YR4/3	シルト	しまり良・粘性普つう

SD5 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　考
①	黒褐色土層10YR3/1	シルト	しまり良・粘性普つう・褐灰色土10YR4/1 グライ小ブロック状にまじる・酸化鉄粒7.5YR2/3 多量に混入

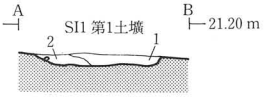
SD4 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　考
①	黒褐色土層10YR2/3	シルト	しまり良・粘性普つう・褐灰色土10YR4/1 グライ小ブロック状に入る・酸化鉄粒7.5YR2/3 多量に混入



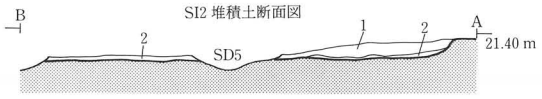
SI1 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・にぶい黄褐色土10YR5/4がブロック状に入る・炭化物粒子混入
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・にぶい黄褐色粒子10YR5/4混入
3	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・酸化鉄粒子7.5YR2/2が多量に混入・にぶい黄褐色粒子10YR5/4混入



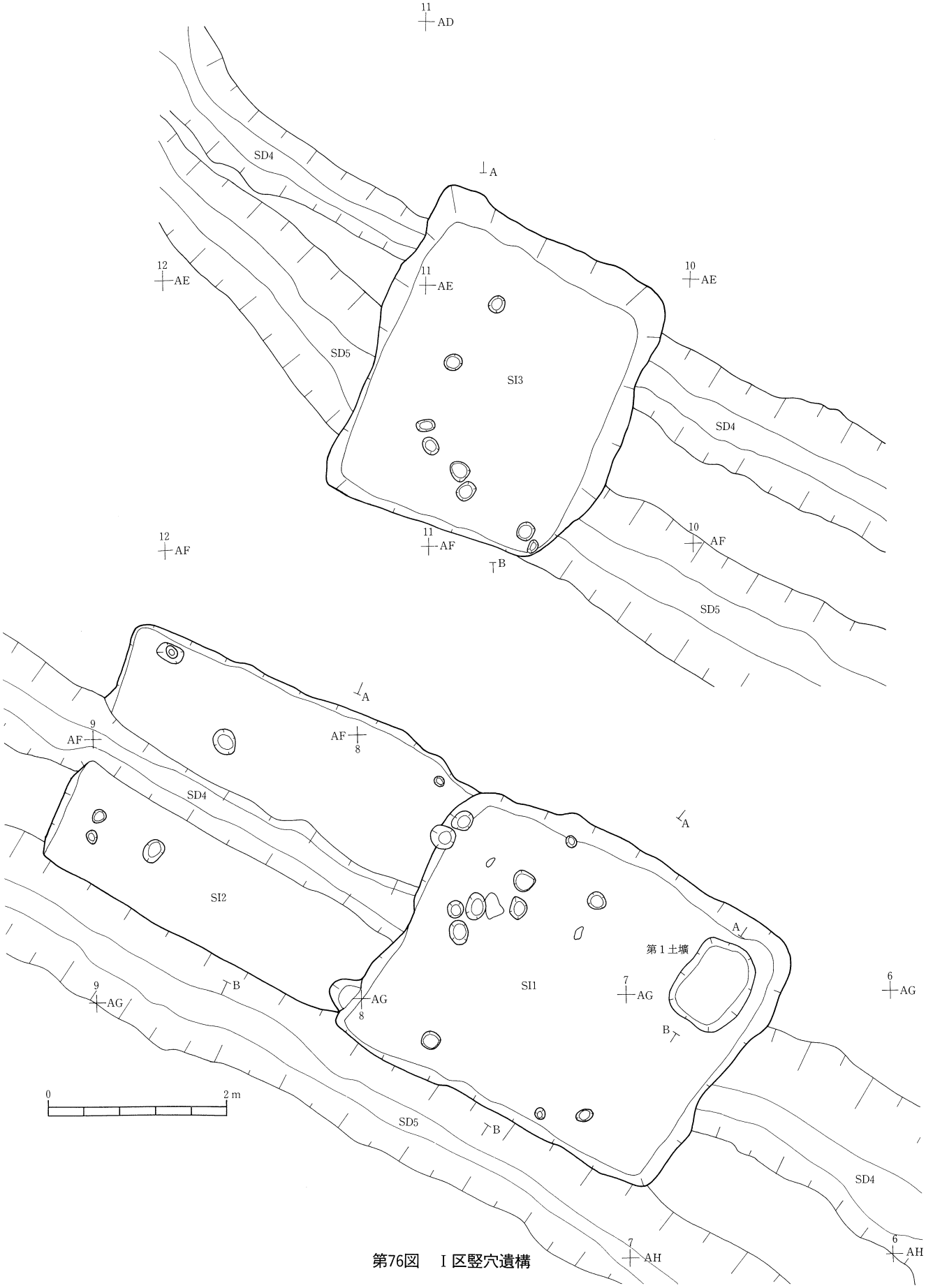
SI1 第１土壙遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・酸化鉄粒子7.5YR2/3 多量に混入
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性普つう・褐色土10YR4/6小ブロック状に混入・酸化鉄粒子7.5YR2/3多量に混入・炭化物わずかに混入



SI2 遺構層注記

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性ひくい・にぶい黄褐色土10YR4/3がブロック状にまじる（SI02埋土）
2	黒褐色土10YR2/2と黄褐色土10YR5/6のブロック層	シルト	しまり良・粘性ひくい(貼り床？)


11
AD
SD4
A
12
AE
11
AE
10
AE
SD5
SI3
SD4
12
AF
11
AF
B
10
AF
SD5
A
9
AF
AF
8
SD4
A
SI2
A
第１土壙
9
AG
B
AG
8
SI1
7
AG
6
AG
B
0
2 m
SD5
B
SD4
7
AH
6
AH

第76図　Ⅰ区竪穴遺構

第２節　近世の遺構と遺物

１　墓壙（ＳＭ）

II区南半から計34基の墓壙を検出している。個々の墓壙の特徴と出土遺物については、第17表にまとめた。ここでは墓壙群全体の特徴と遺物についてをまとめることにする。

［検出状況］

II区北半の表土剝離中に、表土中から多数の河原石を検出した。これら河原石の分布は調査前の墓地のあった場所の分布と略一致しており、墓に伴う石組と判断した。これら河原石を露出させ詳細に観察したところ、31組の小さい石組の集合体であることが判明した。この段階では石組を伴う墓壙の輪郭は判明しなかった。石組をはずして２層上面まで下げたところで墓壙上端の輪郭を検出することが出来た。

［墓壙の配置状況］

墓壙の全体の配列は幅９ m、長さ13m 以上の長方形と想定される。

［平面形］

方形と円形の２種類がある。方形が20基、円形が14基である。墓壙平面形態と棺の形状には密接な関係があるためこれらの関係を下にまとめた。

□棺底が残存もしくは堆積土中で判明しているもの

	棺　桶　計16基	棺　箱　計18基
円　形 計14基	SM6・SM7・SM10・SM13・SM14・SM19・SM22・SM26・SM32・SM33・SM35・SM36・SM38・SM41	
方　形 計20基	SM18・SM21	SM2・SM3・SM4・SM5・SM12・SM15・SM16・SM17・SM20・SM24・SM25・SM27・SM34・SM37・SM39・SM40・SM42・SM43

棺の形状が判明している14基中、墓壙平面形態が円形のもの８基はすべて棺桶であるが、方形のもの６基のうち４基は棺箱で、２基は棺桶である。墓壙の平面形は埋設する棺の形状と密接な関係にあり、棺箱を埋納する場合はすべて方形の墓壙を掘る、しかし棺桶の場合は円形の墓壙を掘るのが一般的であるが方形の場合もある。

［規　模］

34基のなかで最大のものは、SM21（墓壙底面 126×104 cm）で面積が約 1.3 m²程あり、最小は SM20（墓壙底面 50×58 cm）で面積が約 0.3 m²である。全体の形状が判明する31基の平均面積は0.6cm²である。

［棺の形状と規模］

棺が残存していたり、墓壙内堆積土の痕跡から棺の形状が判明したものは、34基の内14基である。棺には棺箱と棺桶の２種類がある。内訳は棺箱が４基、棺桶が10基である。

［出土遺物と出土状況］

墓壙内の堆積土中からは縄文土器や石器等の縄文時代の遺物も数多く出土している。墓壙を掘る際に下部にある縄文時代の包含層を掘り抜いて構築しており、掘った土をそのまま埋め戻したためと考えられる。縄文時代の遺物については第IV章で取扱こととし、ここでは、本墓壙群に伴う近世の遺物のみを取り上げることとする。

墓壙群から出土した遺物には、銭貨・煙管・鉄釘・和鏡・鋏・円形鉄製品・不明鉄製品・漆器・櫛・数珠玉・陶磁器がある。

個々の墓壙から出土した遺物をみてみると一様ではなく、副葬品としての組み合わせも様々である。棺材を止めるために使用されたと考えられる鉄釘を除いた副葬品の組み合わせを下にまとめた。

全く副葬品を伴わない墓壙が７基（21%）で、何らかの副葬品を伴うものが27基（79%）である。この27基中もっとも多いのが銭貨を副葬するもので24基（89%）ある。次が煙管を副葬するもので８基（30%）で漆器４基（15%）、陶磁器３基（11%）、櫛２基（７%）、和鏡２基（７%）、鋏１基（４%）、円形鉄製品１基（４%）、不明鉄製品１基（４%）、数珠玉と続く。銭貨はもっとも一般的な副葬品であった。

副葬品の組み合わせ一覧表

遺物無し	SM５・SM10 SM16・SM18 SM21・SM35 SM38
煙管のみ	SM10・SM39
陶磁器のみ	SM33
銭貨のみ	SM２・SM12 SM12・SM13 SM14・SM15 SM22・SM32 SM34・SM36 SM41・SM42

銭貨＋陶磁器	SM43
銭貨＋漆器	SM４・SM20
銭貨＋不明鉄製品	SM27
銭貨＋煙管	SM19・SM40
銭貨＋煙管＋不明鉄製品	SM？３
銭貨＋煙管＋漆器	SM６
銭貨＋煙管＋漆器＋円形鉄製品	SM37
銭貨＋煙管＋和鏡＋櫛	SM７
銭貨＋煙管＋和鏡＋鋏	SM17
銭貨＋煙管＋櫛＋陶磁器	SM24

次に個々の遺物の出土状況と特徴を見ていくことにする。

（銭貨）

銭貨が123点以上出土している。寛永通寶以外にはSM15から出土した１点のみである。銭貨の出土状態・枚数を下にまとめた。

銭貨の出土枚数と出土状態

	７枚	６枚	５枚	４枚	３枚	０枚
棺底板上もしくは底面付近	SM15 SM19	SM２・SM６ SM12・SM13 SM14・SM20 SM24・SM27 SM32・SM34 SM36・SM41 SM42	SM７ SM22	SM37 SM40	SM43	SM３・SM４ SM５・SM10 SM16・SM18 SM21・SM33 SM35・SM38 SM39
堆積土中		SM20		SM19		

SM25・26は出土しているが枚数不明

34基中、銭貨が出土しているものが22基（65%）、出土していないものが12基（35%）である。

大部分のものは棺底板上もしくは底面付近（棺底板が残存していないもの）から出土しているが、SM19 と SM20 は堆積土中から出土している。

（釘）

釘は合計126点出土している。釘の出土と棺の形態は密接な関係にあるため釘の出土点数と棺の形態を下にまとめた。

釘の出土点数と棺の形態

	棺　　箱	棺　桶
棺底板上もしくは底面付近	SM 2（1本）・SM37（14本）・SM39（2本）・SM40（19本）	
堆積土中	SM 3（11本）・SM 4（10本）・SM15（6本）・SM17（4本） SM20（5本）・SM27（18本）・SM40（19本）・SM42（15本）	SM18（1本） SM33（1本）

（煙管）

煙管は計８基の墓壙から計９点出土している。１本出土したものが７基、２本のものが１基である。いずれも棺底板上もしくは底面付近出土で、堆積土中出土のものはないので全て棺内に副葬したものと考えられる。全体の形状をすべてとどめているものはない。

（和鏡）

SM7 と SM17 からそれぞれ１面づつ計２面出土している。

第87図９は、SM7の棺桶底板上から銭貨５枚・煙管１本・櫛１個とともに出土したものである。鏡面を下にし、鏡背の上に籾殻をびっしりとのせた状態で出土した。外周の形が正円形の円鏡で直径が12cm、鏡胎は厚手で重量は483g ある。縁の断面は鏡面とほぼ直角で、縁が高い直角式高縁である。界圏を二重にまわす二重圏である。

鏡背の中心には紐緒を通す鈕がある。亀をかたどったやや高肉の亀形鈕で、背甲には亀甲紋を描いている。この亀形鈕を中心に亀鈕と双鶴の三者が接嘴している。

（鋏）

SM17 から１点出土している。第87図８の和鏡と癒着して出土している。石組直下、堆積土上面付近で出土しているので棺を埋納後、堆積土上面付近に副葬したものと考えられる。

全長11.6 cm の和鋏である。握部は全幅で2.5 cm で、楕円形である。刃部は全幅で2.8 cm、刃長3.5 cm ある。

（円形鉄製品）

SM37 の底面付近から１点出土している。

（不明鉄製品）

SM3 の底面付近から１点と、SM27 の堆積土中から４点の計５点出土している。

（漆器）

SM4・6・20・37 の４基から５点出土している。いずれも棺底板上もしくは底面付近出土のものである。保存状態が悪く、原形をとどめているものはなく図示できなかった。

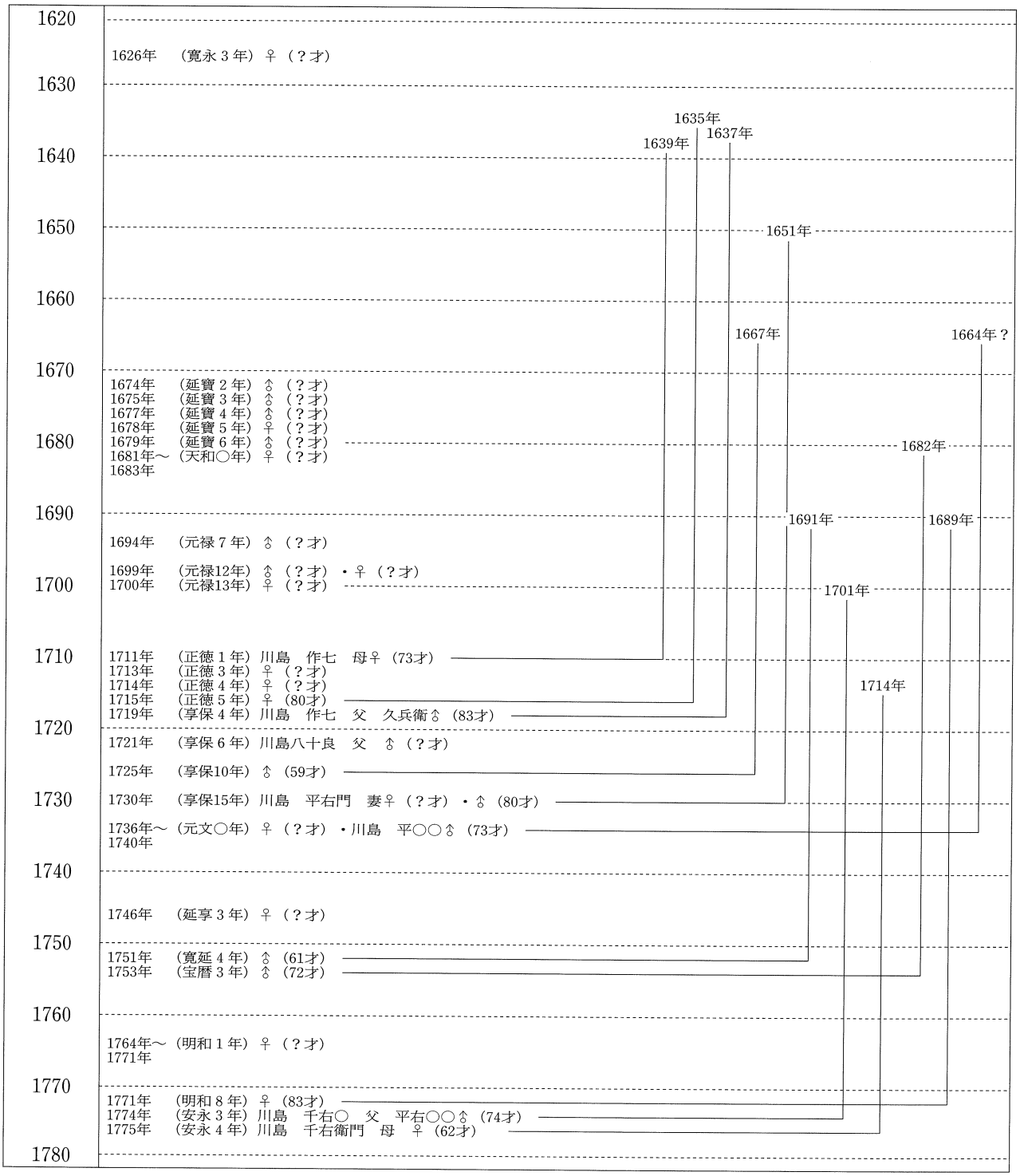
（櫛）

SM7・24 からそれぞれ１点づつ計２点出土している。いずれも保存状態が悪いため図示できなかった。

［墓壙の年代］

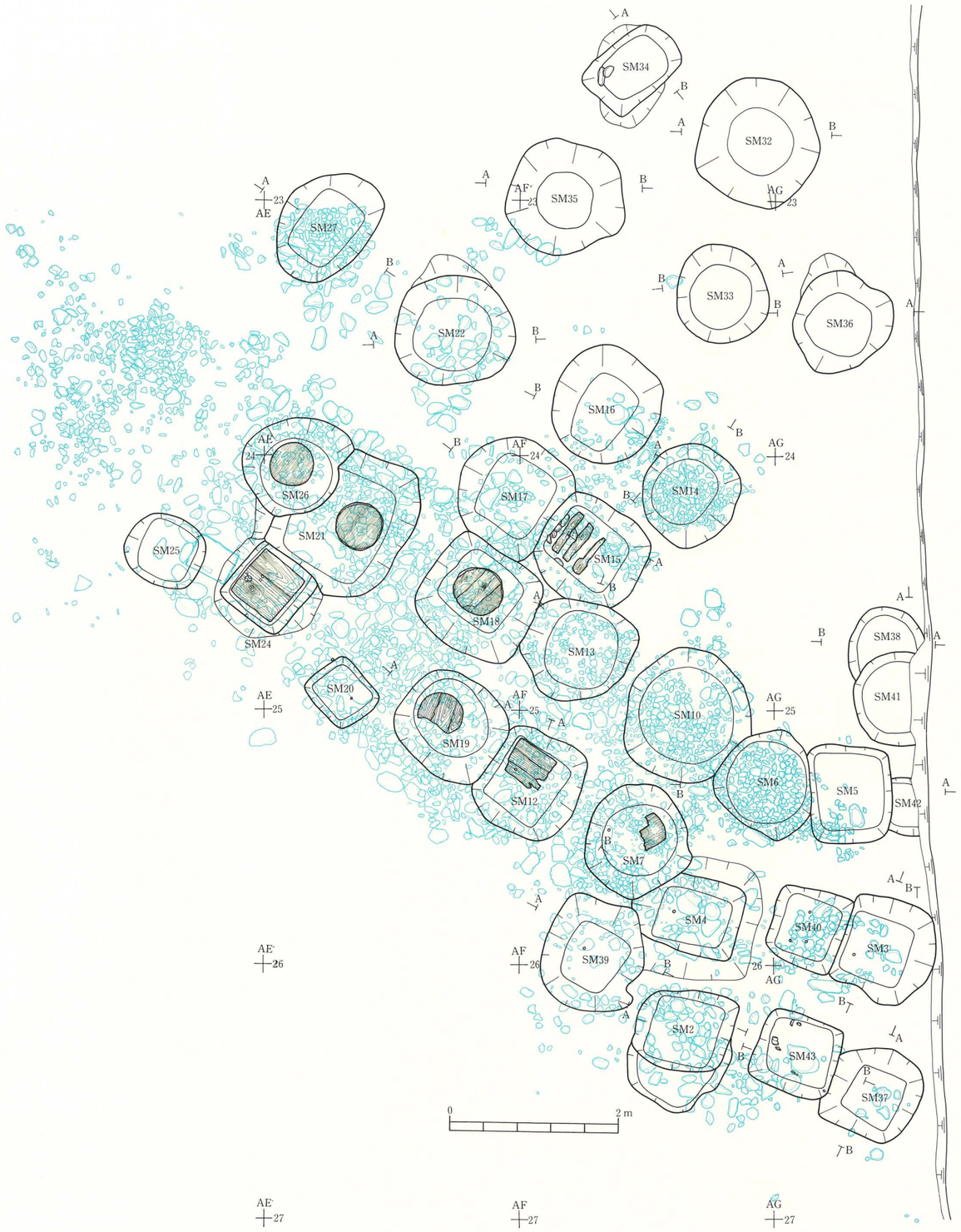
墓壙を検出した地点には、調査以前に墓石があり墓碑名の記録がされている。これら墓石は他の地点から運び込まれたり、調査以前に他に移動したものはない。墓碑名を年代順に整理して下にまとめた。これらのなかでもっとも古いものは、寛永３年（1626）のものが１基で、延寶２年以降のものが大半である。もっとも新しいものは安永４年（1775）である。出土遺物の年代とも矛盾はなく、この墓壙群の年代は17世紀後半から18世紀後半のものと考えられる。

墓碑名からみた被葬者

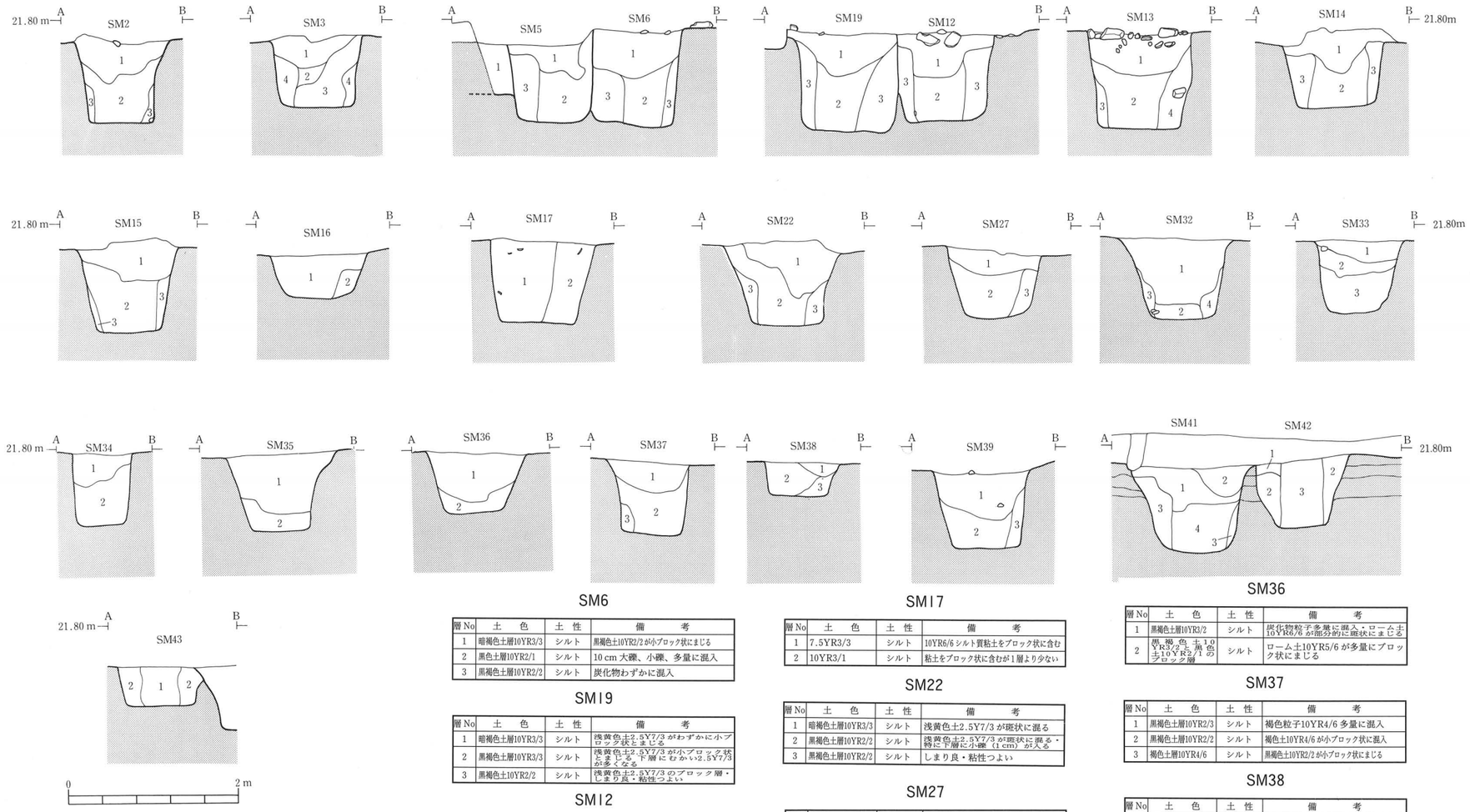


第17表　墓壙集成

SM 番号	平面形	規模（上面）	規模（下面）	深さ	重複関係	棺の形状と規模（底板）	出土遺物と出土状況
SM 1	欠番						
SM 2	方形	100×118 cm	80×80　cm	104 cm	重複無し	棺箱？（底板一部残存）	銭貨６枚（棺箱底板出土　内２枚癒着　布とモミガラ付着）・鉄釘１本（底面付近出土）
SM 3	方形	118×118 cm	76×74　cm	85 cm	SM40 と重複　新旧不明	棺箱？（残存せず）	鉄釘11本以上・煙管１本・金属製品１個
SM 4	方形	148×150 cm	64×82　cm	96 cm	SM 8・39と重複　新旧不明	棺箱？（残存せず）	漆器１点（底面付近出土）・鉄釘10本以上（堆積土中出土）
SM 5	方形	116×98　cm	90×78　cm	93 cm	SM 6より新・SM42 より新	棺桶？（底板一部残存）	
SM 6	円形	116×118 cm	100×96　cm	100 cm	SM 5より旧・SM10 より新	棺桶（底板一部残存）	銭貨６枚（棺桶底板上出土　内２枚癒着）・煙管１本（棺桶底板上出土）
SM 7	円形	128×128 cm	90×86　cm	94 cm	SM 4と重複　新旧不明	棺桶（底板一部残存）	５枚(棺桶底板上出土　５枚とも癒着　モミガラ付着)・煙管１本(棺桶底板上出土)・和鏡１面(棺桶底板上出土　モミガラ付着)
SM 8	欠番						
SM 9	欠番						
SM10	円形	156×142 cm	110×116 cm	104 cm	SM 6より旧	棺桶？（底板一部残存）	煙管１本（棺桶底板上出土）
SM11	欠番						
SM12	方形	125×114 cm	84×76　cm	100 cm	SM19 より新	棺箱（52 cm×44 cm）	銭貨６枚（棺桶底板上出土　内５枚癒着　モミガラ付着）
SM13	円形	120×128 cm	92×82　cm	102 cm	SM15・18 と重複　新旧不明	棺桶？（底板一部残存）	銭貨６枚（棺底板上出土）
SM14	円形	116×114 cm	80×70　cm	85 cm	重複無し	棺桶（堆積土中で棺桶痕検出）	銭貨６枚（棺桶底板上出土）
SM15	方形	116×122 cm	72×92　cm	102 cm	SM13 と新旧不明 SM17 より旧	棺箱（54 cm×47 cm）	銭貨７枚（棺桶底板上出土）・鉄釘６本以上（堆積土中出土）
SM16	方形	134×126 cm	88×62　cm	64 cm	重複無し	棺箱（堆積土中で棺桶痕検出）	
SM17	方形	132×122 cm	82×80　cm	94 cm	SM15 より新 SM18 と新旧不明	棺箱？（底板一部残存）	銭貨６枚(底板上出土　内２枚癒着)・煙管１本出土(底板上出土)・和鏡１面(堆積土中出土　ハサミと癒着)・ハサミ１個(堆積土中出土・手鏡と癒着)・鉄釘４本以上(堆積土出土)
SM18	方形	126×136 cm	78×88　cm	129 cm	SM13・17 と重複　新旧不明	棺桶（直径　58 cm）	鉄釘１本（堆積土中出土）
SM19	円形	116×128 cm	82×96　cm	103 cm	SM12 より旧	棺桶（直径　52 cm）	銭貨７枚（棺桶底板上出土　モミガラ付着　７枚に分かれて出土）・銭貨４枚（堆積土中出土　内２枚癒着）・煙管１本（棺桶底板上出土）
SM20	方形	66×74 cm	50×58　cm	107 cm	重複無し	棺箱？（底板一部残存）	銭貨６枚(棺底板上出土)・銭貨６枚(堆積土中出土　内２枚癒着)・鉄釘５本(堆積土中出土)
SM21	方形	174×146 cm	126×104 cm	93 cm	SM24 より新・SM26 より旧	棺桶（直径　54 cm）	
SM22	円形	142×140 cm	92×88　cm	95 cm	重複無し	棺桶（底板一部残存）	銭貨５枚（棺桶底板上　２つに分かれて出土）
SM23	欠番						
SM24	方形	108×122 cm	80×70　cm	109 cm	SM21 より旧	棺箱（65 cm×61 cm）	銭貨６枚(棺桶底板上出土　内２枚癒着)・陶器１点(棺箱底板下破損して出土)・煙管１本(棺桶底板上出土)
SM25	方形	86×94 cm	68×64　cm	35 cm	重複無し	棺箱？（底板一部残存）	銭貨？枚（棺底板上　３つに分かれて出土）
SM26	円形	128×114 cm	84×84　cm	102 cm	SM21 より新	棺桶（直径　32 cm）	銭貨？枚（棺桶底板上　２つに分かれて出土）
SM27	方形	142×106 cm	88×64　cm	76 cm	重複無し	棺箱？（底板一部残存）	銭貨６枚(棺底板上　２つに分かれて出土)・鉄釘18本以上(堆積土中出土)・不明鉄製品４個(堆積土中出土)
SM28	欠番						
SM29	欠番						
SM30	欠番						
SM31	欠番						
SM32	円形	146×144 cm	76×80　cm	96 cm	重複無し	棺桶？（残存せず）	銭貨６枚（底面付近出土）
SM33	円形	116×112 cm	76×70　cm	87 cm	重複無し	棺桶（堆積土中で棺桶痕検出）	鉄釘１本（堆積土中出土）
SM34	方形	112×73　cm	83×56　cm	89 cm	重複無し	棺箱？（残存せず）	銭貨６枚（底面付近出土　３つに分かれて出土）
SM35	円形	138×134 cm	70×68　cm	98 cm	重複無し	棺桶（堆積土中で棺桶痕検出）	
SM36	円形	118×112 cm	72×74　cm	72 cm	重複無し	棺桶？（残存せず）	銭貨６枚（底面付近出土　２つに分かれて出土）
SM37	方形	108×104 cm	62×64　cm	104 cm	SM43 より新	棺箱？（残存せず）	銭貨４枚以上(底面付近出土　風化著しい)・鉄釘14本以上(底面付近出土)・円形金属製品１個(底面付近出土)・煙管１本(底面付近出土)
SM38	円形	98×(76 cm)	74×(66 cm)	34 cm	SM41 より旧	棺桶？（残存せず）	
SM39	方形	138×118 cm	74×70　cm	96 cm	SM 4と重複　新旧不明	棺箱？（底板一部残存）	鉄釘２本（底面付近出土）・煙管２本（底面付近出土）
SM40	方形	96×86　cm	70×64　cm	80 cm	SM 3と重複　新旧不明	棺箱？（底板一部残存）	銭貨４枚（棺底板上出土）・鉄釘33本（内堆積土内出土　本、底面付近出土　本）
SM41	円形	(106)×(94 cm)	(88)×(64 cm)	84 cm	SM38 より新	棺桶？（残存せず）	銭貨６枚（底面付近出土　内２枚癒着　モミガラ付着）
SM42	方形	(36)×(44 cm)	(52)×(26 cm)	80 cm	SM 5より旧	棺箱？（残存せず）	銭貨６枚（底面付近出土　内２枚づつ２組癒着）・鉄釘15本以上（　）
SM43	方形	94×98 cm	30×40　cm	47 cm	SM37 より旧	棺箱？（残存せず）	銭貨12枚以上（底面付近出土）・陶器１点（底面付近出土）


SM34
SM32
SM35
SM27
SM33
SM36
SM22
SM16
SM26
SM17
SM14
SM21
SM25
SM15
SM18
SM24
SM13
SM38
SM20
SM10
SM41
SM19
SM6
SM5
SM12
SM42
SM7
SM4
SM40
SM3
SM39
SM2
SM43
SM37
0
2 m

第77図　墓壙群平面図



SM2

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3がわずかにまじる
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	1層土が小ブロック状にまじる・浅黄色±2.5Y7/3が多量に混入
3	浅黄色±2.5Y7/3と黒褐色土10YR2/2のブロック層	粘質シルト	しまりやや良・粘性かなりつよい
3′	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3がわずかに混る

SM3

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	10YR2/2がブロック状にまじる・にぶい黄褐色粒子10YR5/4がまじる（特に北かべ側）
2	黒褐色土10YR2/2	シルト	にぶい黄褐色±10YR5/4のブロック層
3	黒色土層10YR2/1	シルト	にぶい黄褐色±10YR5/4が斑状に混る・小礫含有（下層にいくにしたがい多くなる）
4	黒褐色土10YR2/3	シルト	にぶい黄褐色±10YR5/4のブロック層

SM5

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	炭化物粒子わずかに混入・黄褐色粒子10YR5/6多量に混入
1′	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性つよい
2	黒褐色土層10YR2/3	シルト	黄褐色粒子10YR5/6が多量に混入・炭化物粒子わずかに混入
3	黒褐色土10YR2/3と黄褐色土10YR5/6のブロック層	シルト	炭化物粒子わずかに混入・下層にかけて10YR5/6が主体となる

SM6

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	黒褐色土10YR2/2が小ブロック状にまじる
2	黒色土層10YR2/1	シルト	10 cm大礫、小礫、多量に混入
3	黒褐色土層10YR2/2	シルト	炭化物わずかに混入

SM19

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3がわずかに小ブロック状にまじる
2	黒褐色土層10YR3/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3が小ブロック状に多くまじる・下層にむかい2.5Y7/3が多くなる
3	黒褐色土10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3のブロック層・しまり良・粘性つよい

SM12

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	19号1層に比べ2.5Y7/3を含まない
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3が小ブロック状とまじる
3	黒褐色土10YR2/2と浅黄色±2.5Y7/3のブロック状	シルト	暗褐色土10YR3/4が小ブロック状にまじる

SM13

層No	土　色	土 性	備　考
1	10YR3/2		礫を多量に含む
2	10YR3/1	シルト	10YR4/4シルト質粘土をブロック状に含む
3	10YR3/1	シルト	10YR4/4シルト質粘土をブロック状に含む・2より多い
4	10YR3/1	シルト	10YR4/4シルト質粘土をブロック状に含む・2、3と同じ大きい礫を含む

SM14

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	黄褐色10YR5/6粘質シルトが1層上面特に北かべ側に斑状にまじる
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	炭化物粒子多量に混入・下層にかけて小礫が混入
3	黒褐色土10YR2/2と黄褐色土10YR5/6のブロック状	シルト	炭化物粒子多量に混入

SM15

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	小礫多量に含有
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3がかなり多量に斑状にまじる
3	黒褐色土10YR2/2と浅黄色±2.5Y7/3のブロック層	シルト	しまり良・粘性つよい・下層にかけて2.5Y7/3が主体となっていく

SM16

層No	土　色	土 性	備　考
1	7.5YR3/3	シルト	7.5YR4/4シルト質砂を僅かにブロック状に含む
2	7.5YR3/4	シルト	粘土質シルトをブロック状に含む

SM17

層No	土　色	土 性	備　考
1	7.5YR3/3	シルト	10YR6/6シルト質粘土をブロック状に含む
2	10YR3/1	シルト	粘土をブロック状に含むが1層より少ない

SM22

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3が斑状に混る
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3が斑状に混る・特に下層に小礫（1 cm）が入る
3	黒褐色土層10YR2/2	シルト	しまり良・粘性つよい

SM27

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3（粘質シルト）が小ブロック状に混る
2	黒褐色土10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3（粘質シルト）が小ブロック状に混る
3	黒褐色土10YR2/2	シルト	3層下部に浅黄色±2.5Y7/3（粘質シルト）がブロック状に混る

SM32

層No	土　色	土 性	備　考
1	黄褐色土層10YR4/3	シルト	黄褐色±10YR5/6粘質シルトがブロック状に入る
2	黒色土層10YR2/1	シルト	小砂粒が多量にまじる（2～3 mm大の小礫混入）
3	にぶい黄褐色土10YR4/3と黒色±10YR2/1のブロック層	シルト	小砂礫が多量にまじる（2～3 mm大の小礫混入）
4	黒色土層10YR2/1	シルト	小砂粒が多量にまじる（2～3 mm大の小礫混入）

SM33

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	炭化物粒子わずかにまじる・ローム±10YR5/6が小ブロック状にまじる
2	黒褐色土10YR2/3と黒色±10YR2/1のブロック層	シルト	炭化物が多量にまじる・ローム土粒10YR5/6がわずかに斑状にまじる
3	黒色土層10YR2/1	シルト	炭化物粒子が多量にまじる・黒褐色±10YR2/2がかなり多量に斑状にまじる

SM34

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	ローム±10YR5/4が小ブロック状にまじる
2	黒褐色土10YR2/2とローム±10YR5/4のブロック層	シルト	粘質シルト・粘性普通

SM35

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/2	シルト	黒褐色±10YR3/2がブロック状にまじる・1層下部に炭化物粒子がわずかに入る
2	黒色土層10YR2/1	シルト	2～3 cm大の小礫が多量にまじる

SM36

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	炭化物粒子多量に混入・ローム土10YR6/6が部分的に斑状にまじる
2	黒褐色±10YR3/2と黒色±10YR2/1のブロック層	シルト	ローム土10YR5/6が多量にブロック状にまじる

SM37

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	褐色粒子10YR4/6多量に混入
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	褐色±10YR4/6が小ブロック状に混入
3	褐色土層10YR4/6	シルト	黒褐色±10YR2/2が小ブロック状にまじる

SM38

層No	土　色	土 性	備　考
1	暗褐色土層10YR3/3	シルト	しまり良・粘性つよい
2	明褐色±10YR3/6と黄褐色±10YR5/6のブロック層	シルト	炭化物粒子多量に混入
3	黒褐色土層10YR2/3	シルト	炭化物粒子わずかに混入

SM39

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR2/3	シルト	浅黄色±2.5Y7/3が斑状にまじる・周かべ側についてはブロック状にまじる・1層下部にかけて3～5 mm大の小礫多量にまじる・10YR2/2がブロック状にまじる
2	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3粘質シルトがしま文様状に入る・2層下部にかけて2.5Y7/3が主体となっていく
3	黒褐色土層10YR2/2	シルト	浅黄色±2.5Y7/3粘質シルトが小ブロック状に入る・3層下部は10YR2/2がみられなくなり2.5Y7/3の単層粘質シルトになる

SM41

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土層10YR3/2	シルト	10YR6/6明黄褐色粒が多量に入る・炭化物粒子混入
2	黒褐色土層10YR	シルト	炭化物粒混入
3	黒褐色10YR6/6	シルト	炭化物粒混入・下層にかけて2～3 mm大の小礫が入る
4	黒褐色	シルト	

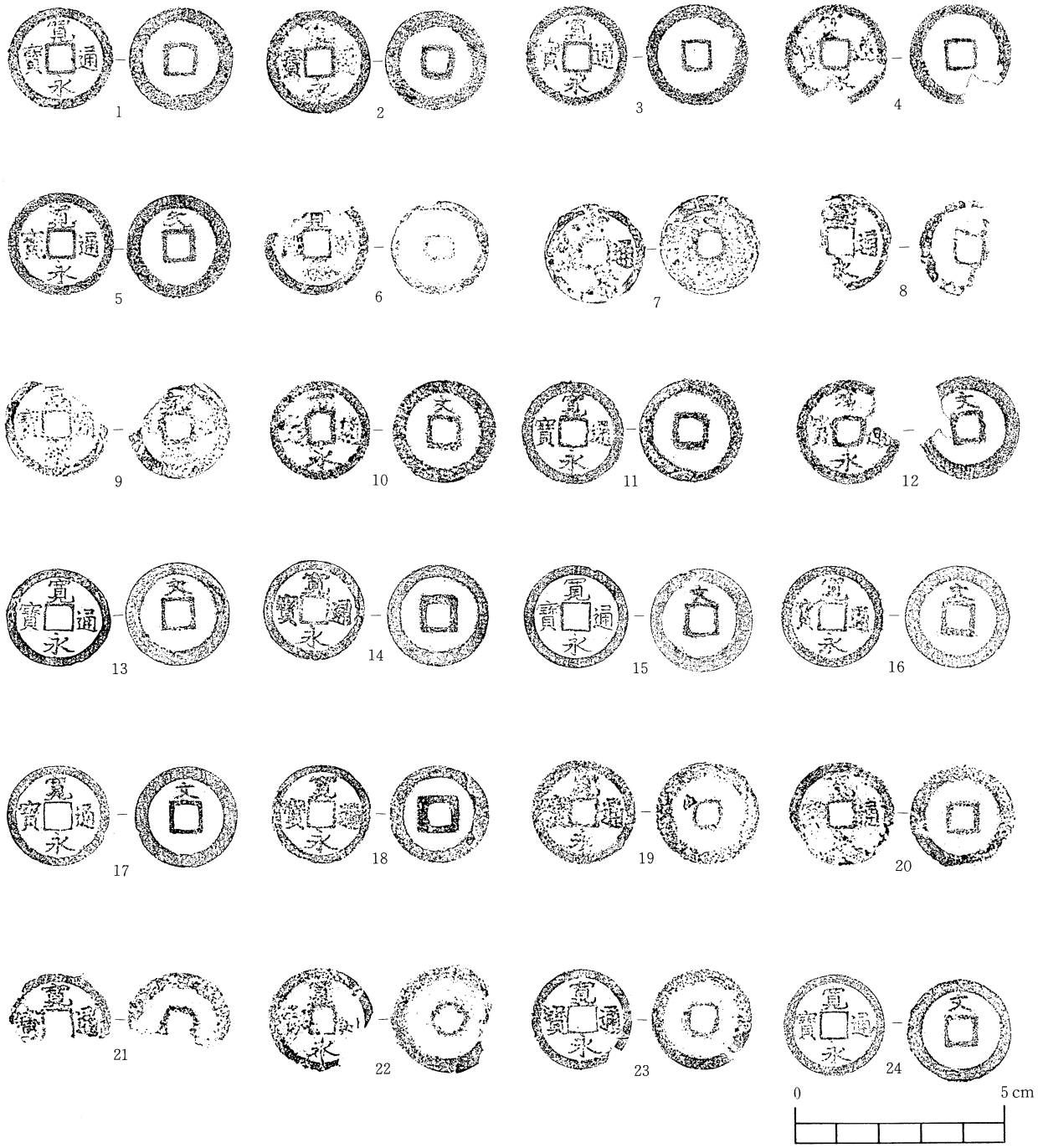
SM42

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色土10YR3/2	シルト	粘性普通
2	黒褐色10YR3/2	シルト	粘性普通
3	黒褐色10YR32/3	シルト	粘性普通・炭化物粒子混入

SM43

層No	土　色	土 性	備　考
1	黒褐色10YR2/3	シルト	
2	黒褐色10YR2/2	シルト	10YR4/4（褐色）シルト土・10YR5/8（黄褐色）シルト土混入

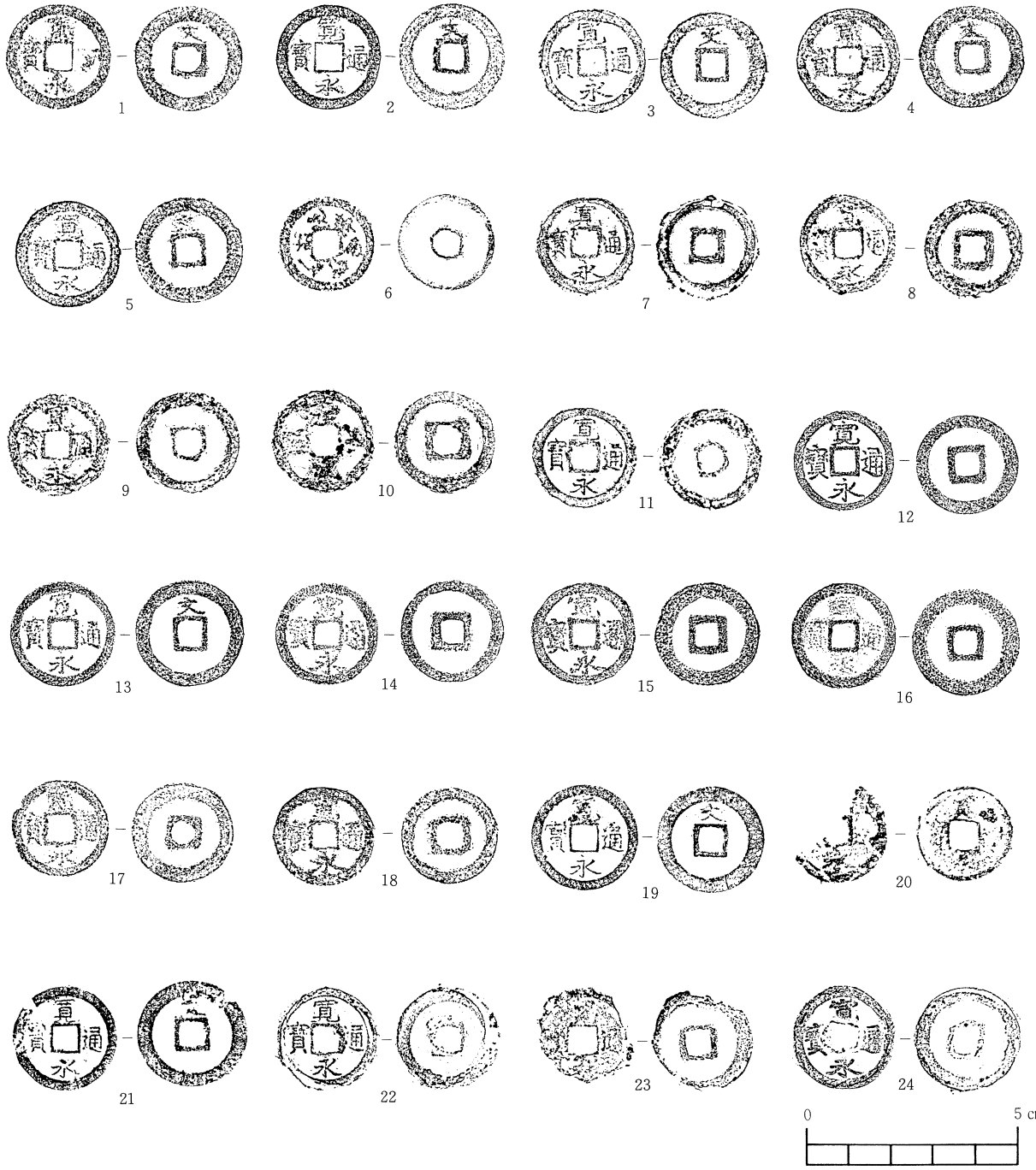
第78図　墓壙群断面図



番号	遺構名	層位	銭名	外径	穿径	厚さ	重量	備考
1	SM3	底面	寛永通宝	25.1	5.4	1.5	3.5	
2	SM3	底面	寛永通宝	25.2	6.0	－	－	
3	SM3	底面	寛永通宝	25.0	5.5	1.6	2.6	
4	SM3	底面	寛永通宝	24.8	6.2	1.9	2.5	
5	SM3	底面	寛永通宝	25.2	6.5	1.4	4.0	
6	SM6	底面	寛永通宝	25.1	6.3	3.0	－	
7	SM6	底面	寛永通宝	24.2	5.8	2.1	3.5	
8	SM6	底面	寛永通宝	－	6.4	1.1	(1.6)	
9	SM6	底面	寛永通宝	25.0	6.1	1.2	(2.6)	
10	SM7	底面	寛永通宝	25.1	5.5	－	－	
11	SM12	底面	寛永通宝	25.5	6.0	－	－	
12	SM12	底面	寛永通宝	25.4	5.2	1.8	(3.3)	

番号	遺構名	層位	銭名	外径	穿径	厚さ	重量	備考
13	SM13	底面	寛永通宝	25.2	6.2	1.1	3.4	
14	SM13	底面	寛永通宝	24.8	5.8	1.1	3.6	
15	SM13	底面	寛永通宝	25.1	6.0	1.3	3.6	
16	SM13	底面	寛永通宝	25.0	5.7	1.2	4.6	
17	SM13	底面	寛永通宝	24.8	6.2	1.3	3.2	
18	SM13	底面	寛永通宝	24.0	5.3	1.2	2.8	
19	SM14	底面	寛永通宝	25.2	5.5	1.8	3.7	
20	SM14	底面	寛永通宝	25.3	5.7	1.8	3.7	
21	SM14	底面	寛永通宝	24.3	－	1.5	(1.7)	
22	SM14	底面	寛永通宝	25.8	5.6	1.9	(2.0)	
23	SM14	底面	寛永通宝	25.3	7.5	1.6	1.5	
24	SM14	底面	寛永通宝	25.0	6.1	1.2	3.4	

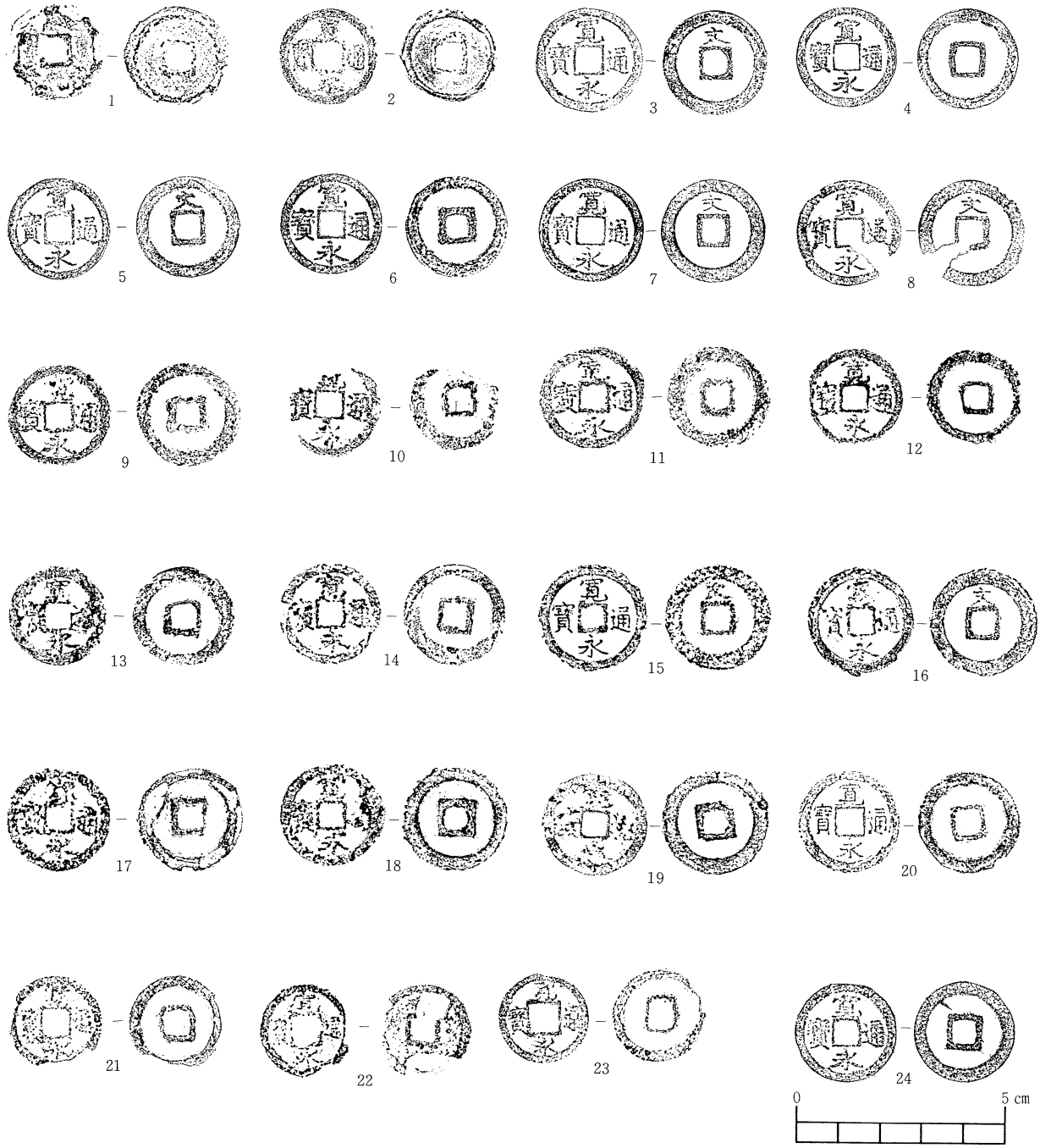
第79図　墓壙群出土遺物(1)



番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
1	SM15	底面	寛永通宝	25.3	6.2	1.1	3.8	
2	SM15	底面	寛永通宝	25.2	6.2	1.2	3.3	
3	SM15	底面	寛永通宝	25.3	6.1	1.5	3.7	
4	SM15	底面	寛永通宝	25.0	6.2	1.5	4.3	
5	SM15	底面	寛永通宝	23.0	6.1	1.5	3.9	
6	SM15	底面		25.1	6.1	1.4	3.8	
7	SM17	底面	寛永通宝	22.5	5.2	1.3	3.2	
8	SM17	底面	寛永通宝	23.0	6.2	1.2	2.3	
9	SM17	底面	寛永通宝	24.5	6.3	1.4	2.4	
10	SM17	底面	寛永通宝	24.8	6.9	1.5	3.5	
11	SM17	底面	寛永通宝	25.5	5.8	－	－	
12	SM19	底面	寛永通宝	24.0	6.0	1.3	3.2	

番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
13	SM19	底面	寛永通宝	25.3	6.0	1.5	3.9	
14	SM19	底面	寛永通宝	24.7	5.3	1.3	3.4	
15	SM19	底面	寛永通宝	24.8	5.4	1.5	4.3	
16	SM19	底面	寛永通宝	25.3	5.4	1.7	4.5	
17	SM19	底面	寛永通宝	23.9	5.2	1.6	4.2	
18	SM19	底面	寛永通宝	23.0	6.2	1.3	3.1	
19	SM19	底面	寛永通宝	25.2	6.1	1.1	2.4	
20	SM19	底面	寛永通宝	23.9	5.4	－	－	
21	SM19	底面	寛永通宝	25.6	6.8	1.3	1.9	
22	SM20	1層	寛永通宝	23.8	6.5	1.6	3.2	
23	SM20	1層	寛永通宝	23.2	6.3	1.1	1.7	
24	SM20	1層	寛永通宝	24.7	6.1	1.8	4.0	

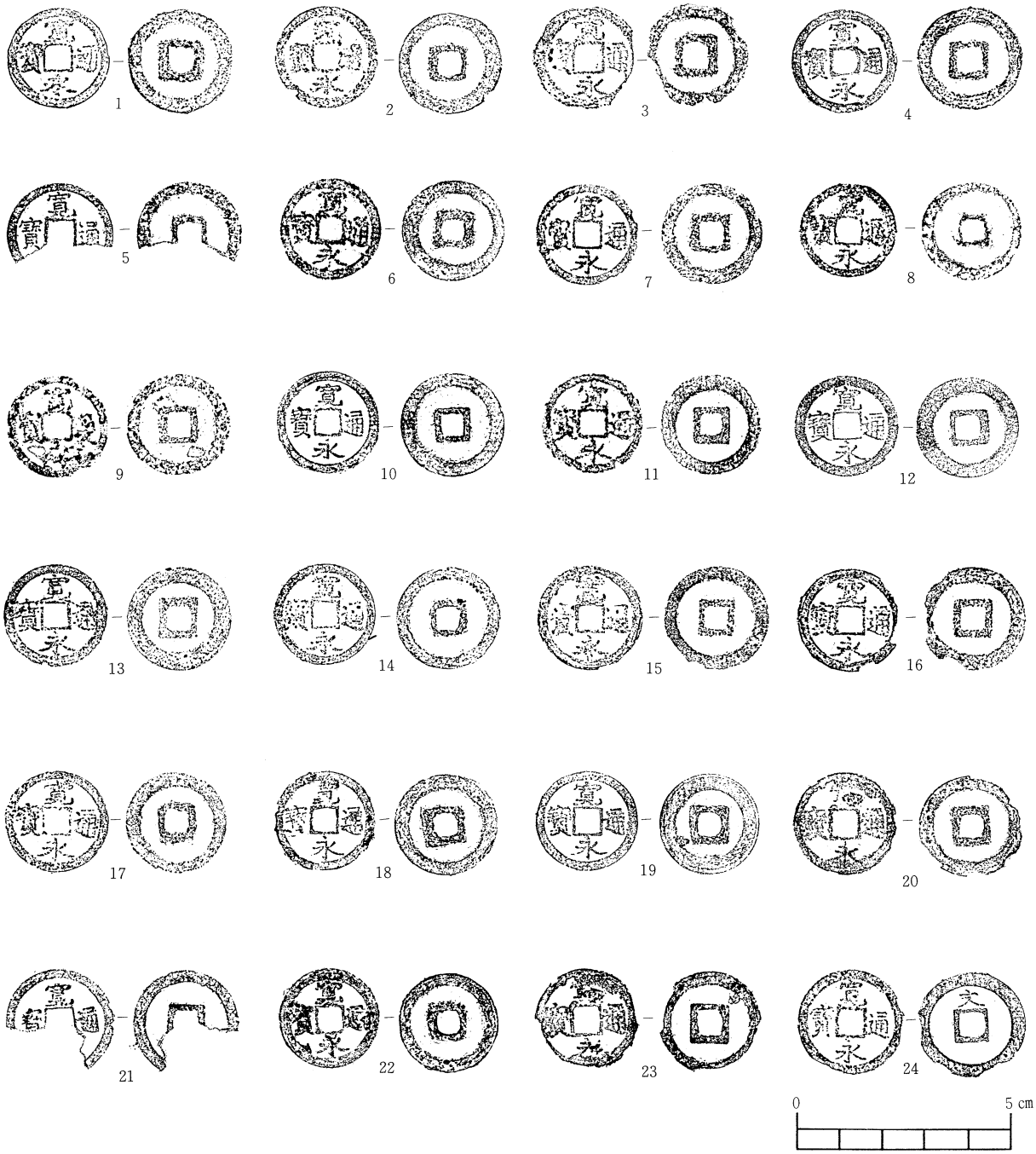
第80図　墓壙群出土遺物(2)



番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
1	SM20	1層	寛永通宝	24.5	6.2	－	－	
2	SM20	1層	寛永通宝	23.0	6.9	1.3	2.6	
3	SM20	底面	寛永通宝	25.0	6.4	1.3	3.7	
4	SM20	底面	寛永通宝	24.1	6.2	1.1	3.0	
5	SM20	底面	寛永通宝	24.6	6.2	1.5	3.6	
6	SM20	底面	寛永通宝	24.0	6.0	1.5	3.8	
7	SM20	底面	寛永通宝	25.0	7.0	1.1	2.8	
8	SM20	底面	寛永通宝	25.0	7.0	1.5	(2.2)	
9	AE21C		寛永通宝	25.0	5.9	1.5	4.2	
10	AE21C		寛永通宝	－	6.1	1.2	(2.0)	
11	AE21C		寛永通宝	25.1	5.8	1.4	3.9	
12	AE21C		寛永通宝	22.5	5.4	1.2	2.8	

番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
13	AE21C		寛永通宝	24.1	5.8	1.9	3.9	
14	AE21C		寛永通宝	24.4	5.5	1.9	4.0	
15	SM22	底面	寛永通宝	26.0	6.2	1.9	3.4	
16	SM22	底面	寛永通宝	25.6	6.6	1.8	3.6	
17	SM22	底面	寛永通宝	25.1	5.7	1.8	3.0	
18	SM22	底面	寛永通宝	24.9	5.2	1.7	3.2	
19	SM22	底面	寛永通宝	25.5	6.0	1.7	4.1	
20	SM24	底面	寛永通宝	24.2	6.1	1.6	4.3	
21	SM24	底面	寛永通宝	22.8	6.8	1.2	2.3	
22	SM24	底面	寛永通宝	22.2	6.9	－	－	
23	SM24	底面	寛永通宝	21.9	6.8	1.3	2.2	
24	SM24	底面	寛永通宝	23.2	6.1	1.6	1.9	

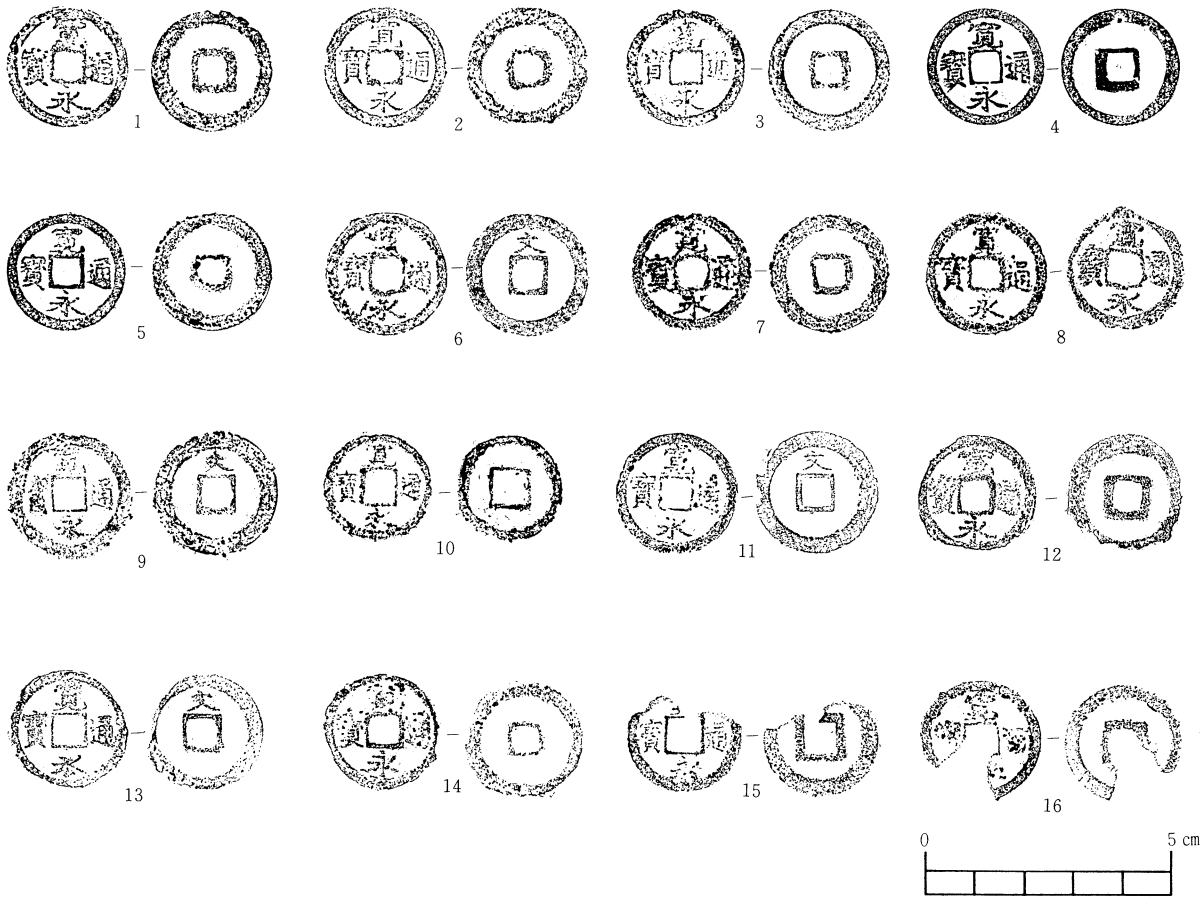
第81図　墓壙群出土遺物(3)



番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
1	SM27	底面	寛永通宝	24.2	5.2	1.1	3.9	
2	SM27	底面	寛永通宝	24.7	5.6	1.7	2.7	
3	SM27	底面	寛永通宝	25.2	6.9	1.4	2.8	
4	SM27	底面	寛永通宝	24.9	6.0	1.4	4.1	
5	SM27	底面	寛永通宝	24.8	6.0	1.6	(1.6)	
6	SM32	底面	寛永通宝	24.1	5.1	1.3	3.8	
7	SM32	底面	寛永通宝	24.4	6.0	1.3	3.8	
8	SM32	底面	寛永通宝	23.2	5.6	1.4	3.0	
9	SM32	底面	寛永通宝	24.8	6.0	1.3	2.6	
10	SM32	底面	寛永通宝	25.0	6.0	1.5	4.1	
11	SM32	底面	寛永通宝	24.0	5.6	1.3	3.5	
12	SM34	底面	寛永通宝	24.2	6.0	1.2	3.0	

番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
13	SM34	底面	寛永通宝	24.9	6.0	1.3	4.2	
14	SM34	底面	寛永通宝	24.5	5.7	1.5	4.1	
15	SM34	底面	寛永通宝	25.1	5.9	1.4	2.9	
16	SM34	底面	寛永通宝	24.9	6.0	1.4	3.4	
17	SM34	底面	寛永通宝	24.5	5.5	1.5	3.5	
18	SM36	最下層	寛永通宝	24.3	5.8	1.8	3.8	
19	SM36	最下層	寛永通宝	24.1	6.3	1.1	2.5	
20	SM36	最下層	寛永通宝	24.2	6.0	1.6	3.6	
21	SM36	最下層	寛永通宝	25.2	6.7	1.5	(1.5)	
22	SM36	最下層	寛永通宝	24.0	5.7	1.3	3.8	
23	SM36	最下層	寛永通宝	23.8	6.1	1.7	3.7	
24	SM40	底面	寛永通宝	25.2	6.8	1.4	3.0	

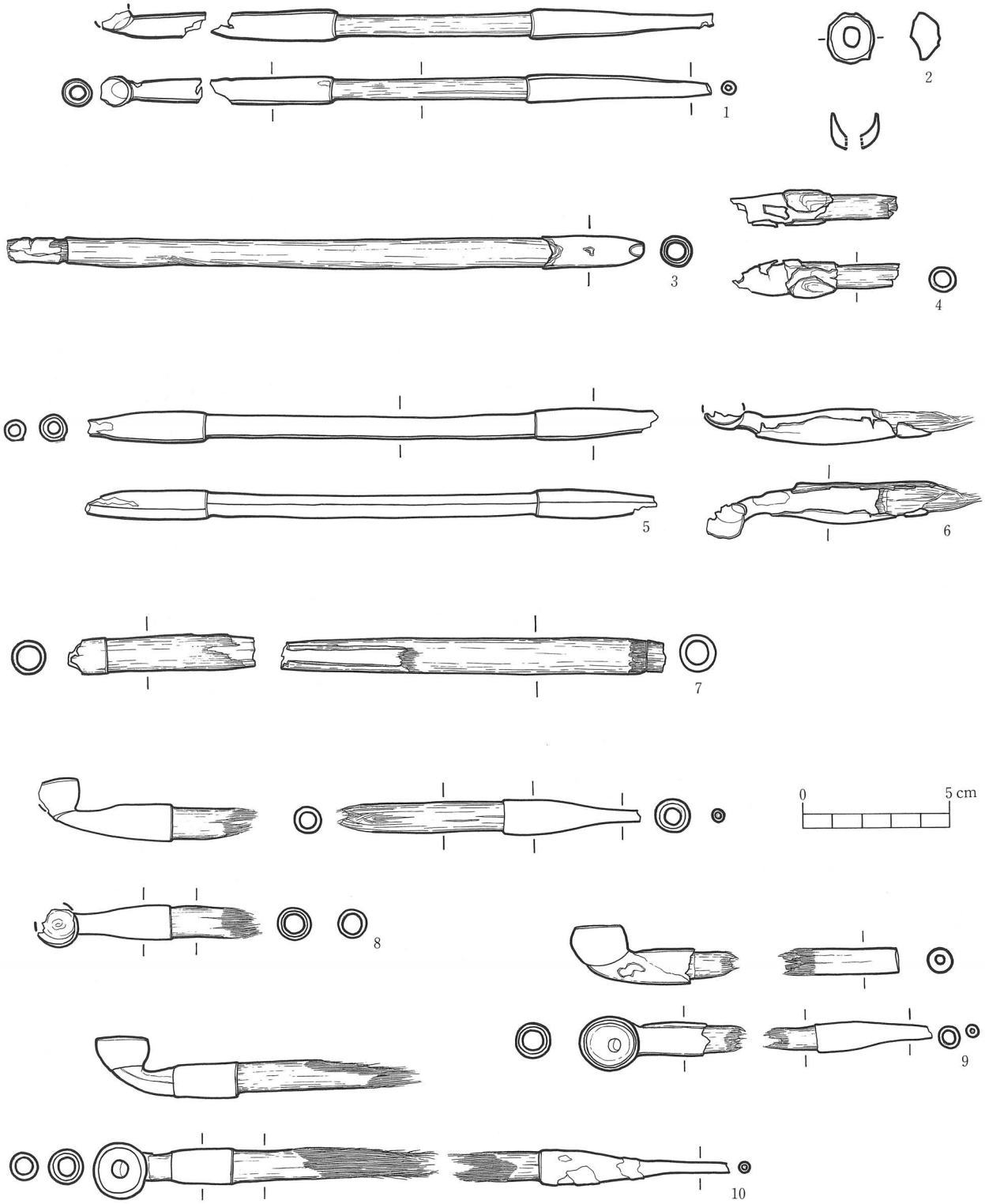
第82図　墓壙群出土遺物(4)



番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
1	SM40	底面	寛永通宝	24.9	5.9	1.8	3.7	
2	SM40	底面	寛永通宝	24.6	5.8	1.2	3.3	
3	SM40	底面	寛永通宝	24.8	6.0	1.5	3.3	
4	SM41	底面	寛永通宝	24.0	6.6	1.1	1.9	
5	SM41	底面	寛永通宝	24.0	5.8	1.2	2.9	
6	SM41	底面	寛永通宝	25.2	6.2	1.4	3.5	
7	SM41	底面	寛永通宝	24.1	5.8	1.3	2.8	
8	SM41	底面	寛永通宝	25.7	6.0	－	－	

番号	遺構名	層　位	銭　　名	外径	穿径	厚さ	重量	備　　考
9	SM42	底面	寛永通宝	25.8	7.0	1.4	3.0	
10	SM42	底面	寛永通宝	22.0	7.1	1.1	1.6	
11	SM44	墓底面	寛永通宝	25.0	6.0	1.5	2.8	
12	SM44	墓底面	寛永通宝	24.1	6.0	1.2	2.6	
13	SM44	墓底面	寛永通宝	24.0	6.9	1.4	3.6	
14	SM44	墓底面	寛永通宝	24.2	6.0	1.5	3.0	
15	SM44	墓底面	寛永通宝	23.2	6.5	1.9	(1.6)	
16	SM44	墓底面	寛永通宝	23.2	－	1.5	(1.4)	

第83図　墓壙群出土遺物(5)

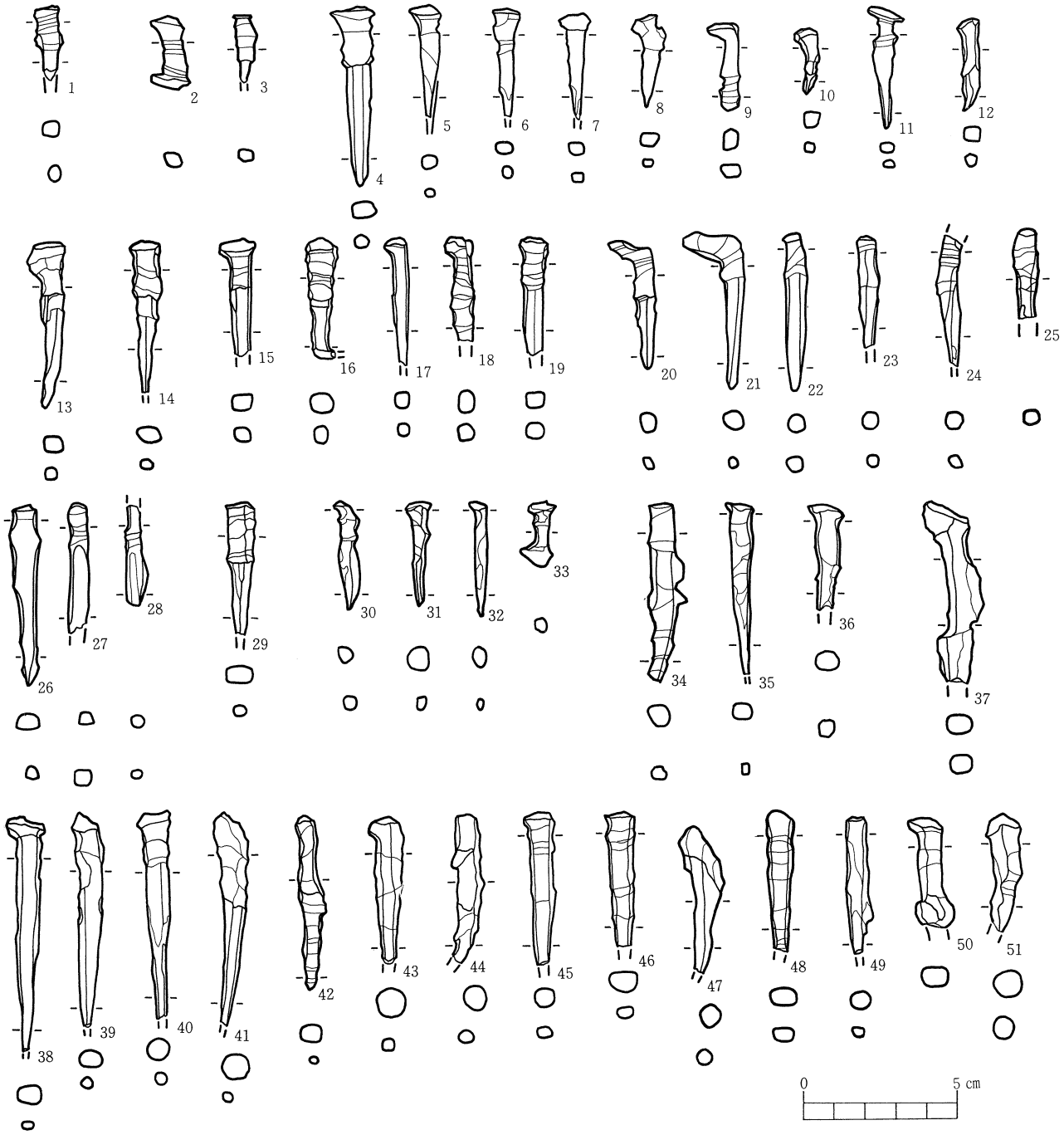


煙管観察表

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	火皿高	火皿径	重さ	備　　考	写真図版
1	SM6	－	20.0	0.7	(0.7)	(0.9)	(11.1)		343-12
2	SM3	1	－	－	(0.9)	(1.58)	(2.0)		
3	SM7	底面	21.3	1.0	－	－	(3.9)		
4	SM39	底面	(5.45)	(0.7)	－	－	(1.8)		343-9
5	SM10	底面	(19.1)	(0.7)	－	－	(31.0)		343-11

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	火皿高	火皿径	重さ	備　　考	写真図版
6	SM40	底面	(9.0)	(0.8)	(0.92)	－	(7.1)		343-10
7	SM17	底面	(18.2)	1.2	－	－	(5.2)		343-13
8	SM19	底面	(　)	1.0	(1.20)	(1.40)	(13.1)		343-14
9	SM37	底面	(　)	0.9	1.70	1.68	(6.2)		343-8
10	SM24	底面	(21.2)	1.0	1.1	1.78	(16.6)		343-15

第84図　墓壙群出土遺物(6)

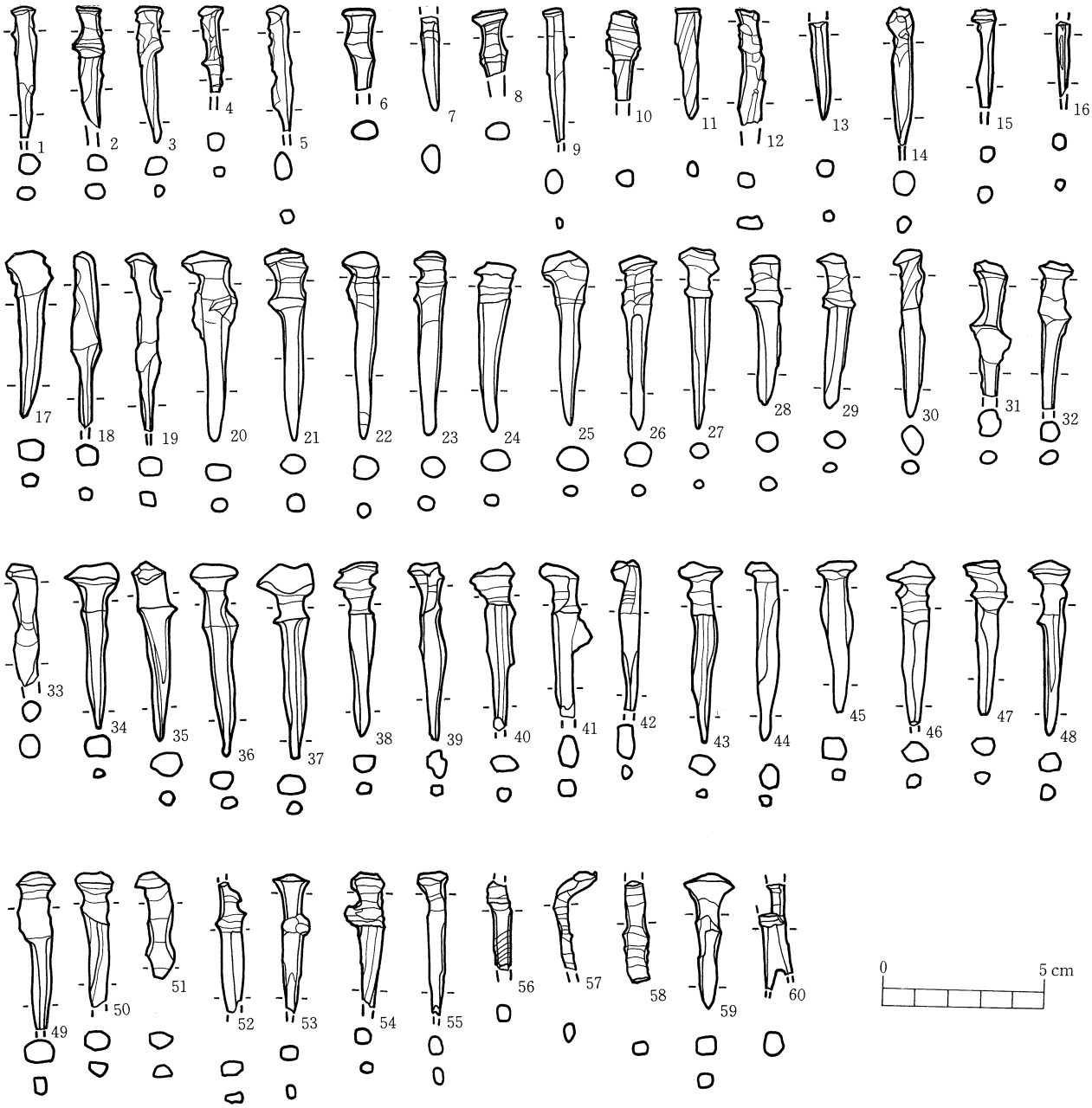


番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
1	SM2	底面	(24.2)	4.8	5.1	(1.2)	
2	SM3	底面	23.9	6.1	3.9	1.6	
3	SM3	底面	(20.8)	6.0	4.0	0.8	
4	SM3	1	57.1	7.2	7.1	4.0	
5	SM3	1	(35.4)	5.1	3.9	1.3	
6	SM3	1	(35.0)	4.5	4.5	1.4	
7	SM3	1	(33.5)	4.1	5.2	1.3	
8	SM3	1	30.0	4.8	4.0	1.0	
9	SM3	1	27.5	7.7	4.0	1.5	
10	SM3	1	19.2	3.2	3.7	0.9	
11	SM3	1	41.3	5.8	3.5	1.1	
12	SM3	1	29.8	6.2	5.0	1.4	
13	SM4	1	52.8	7.0	5.5	2.6	
14	SM4	1	(48.2)	7.6	5.4	2.0	
15	SM4	1	(36.3)	6.0	6.2	2.1	
16	SM4	1	(32.8)	7.1	6.0	2.3	
17	SM4	1	(40.8)	4.2	5.0	1.2	

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
18	SM4	1	(33.6)	6.5	6.1	2.5	
19	SM4	1	(31.7)	6.2	6.0	2.0	
20	SM15	1	41.2	6.9	6.6	2.6	
21	SM15	1	49.3	6.3	6.0	3.4	
22	SM15	1	50.5	7.1	6.8	2.4	
23	SM15	1	(35.5)	7.0	5.8	1.9	
24	SM15	1	(33.0)	6.8	5.5	1.5	
25	SM15	1	(28.2)	6.1	6.0	1.8	
26	SM17	1	52.2	7.8	7.0	2.9	
27	SM17	1	(41.5)	6.9	5.8	1.7	
28	SM17	1	(32.2)	6.8	5.4	1.2	
29	SM18	1	(41.2)	7.8	5.7	2.0	
30	SM20	1	34.8	5.8	5.5	1.3	
31	SM20	1	33.4	6.6	5.2	1.6	
32	SM20	1	36.5	5.2	4.1	1.1	
33	SM20	1	20.6	3.8	4.0	1.1	
34	SM27	1	57.1	7.8	5.0	4.4	

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
35	SM27	1	(54.5)	6.0	6.0	2.9	
36	SM27	1	(32.9)	7.0	6.5	2.7	
37	SM33	1	(58.7)	7.5	6.5	8.0	
38	SM27	1	(74.2)	7.7	6.0	4.2	
39	SM27	1	(68.5)	7.0	5.2	4.1	
40	SM27	1	(65.7)	7.0	7.0	3.3	
41	SM27	1	(67.8)	8.2	7.4	4.9	
42	SM27	1	54.0	6.6	5.1	2.7	
43	SM27	1	(46.7)	9.6	9.0	4.5	
44	SM27	1	(47.2)	7.1	7.0	3.7	
45	SM27	1	(48.6)	6.0	5.7	3.5	
46	SM27	1	(42.0)	8.3	6.2	2.7	
47	SM27	1	(46.1)	5.0	6.5	4.0	
48	SM27	1	(45.0)	8.2	9.1	2.5	
49	SM27	1	(42.4)	6.0	5.3	3.0	
50	SM27	1	(36.0)	8.0	5.8	3.9	
51	SM27	1	(36.9)	9.0	8.2	4.1	

第85図　墓壙群出土遺物(7)



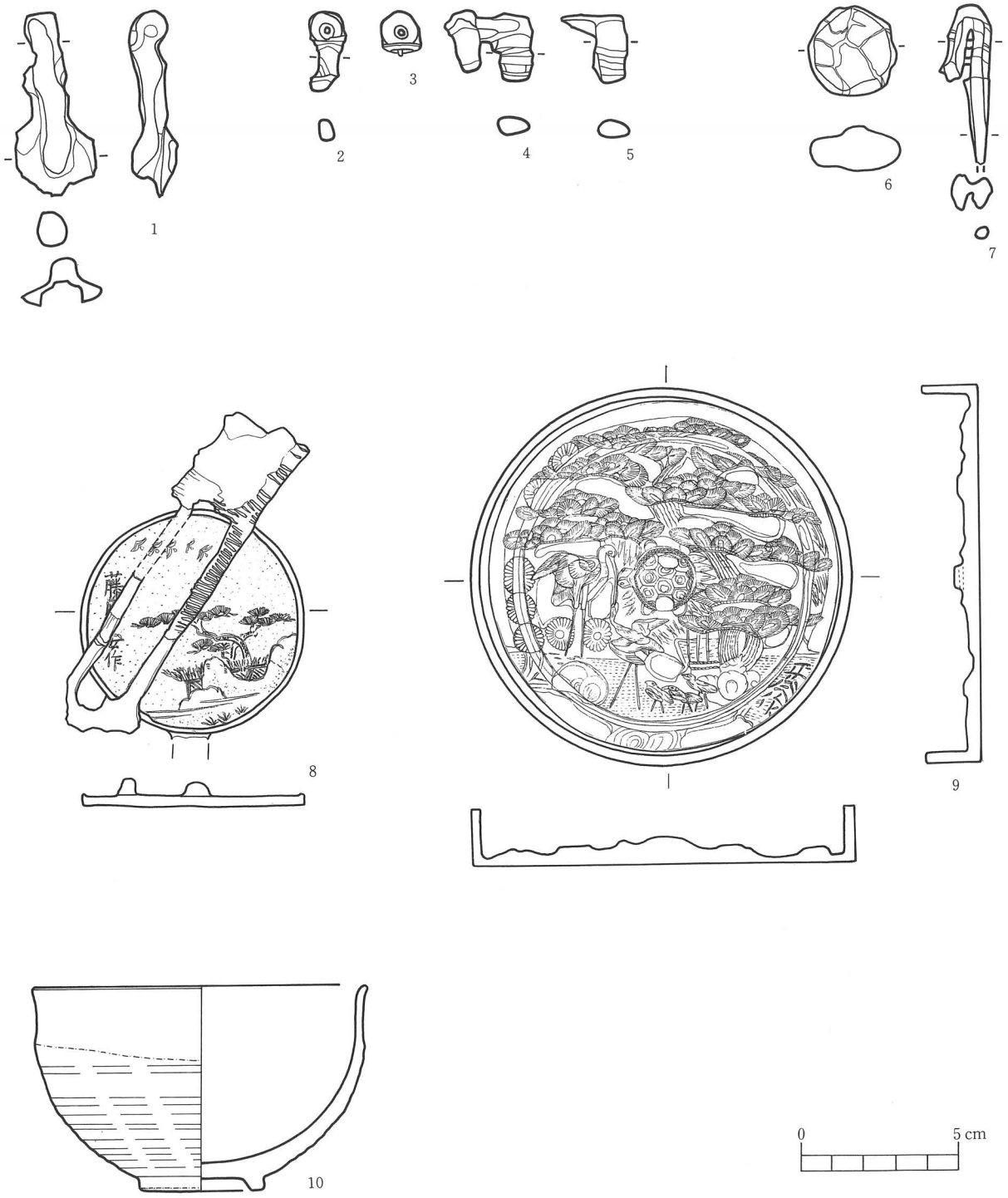
釘観察表

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
1	SM37	底面	(39.8)	6.6	6.1	1.8	
2	SM37	底面	(38.0)	6.8	4.5	1.7	
3	SM37	底面	41.1	7.8	4.9	1.9	
4	SM37	底面	(26.0)	5.0	5.2	1.2	
5	SM37	底面	(38.0)	5.8	5.0	1.4	
6	SM37	底面	(24.2)	7.2	5.0	1.4	
7	SM37	底面	(30.0)	6.5	8.1	1.4	
8	SM37	底面	(20.0)	7.0	4.7	1.4	
9	SM37	底面	(40.8)	4.9	6.8	1.7	
10	SM37	底面	(27.5)	4.6	4.5	1.5	
11	SM37	底面	33.5	5.3	4.2	1.4	
12	SM37	底面	(35.2)	7.2	3.7	1.6	
13	SM37	底面	(30.0)	4.8	4.0	0.9	
14	SM37	底面	(41.8)	6.8	5.7	2.2	
15	SM39	底面	(29.8)	4.1	4.6	1.0	
16	SM39	底面	(22.0)	4.3	4.6	1.0	
17	SM40	1	51.0	7.0	6.2	3.4	
18	SM40	1	(54.1)	6.2	5.3	2.8	
19	SM40	1	(54.0)	7.0	5.2	2.4	
20	SM40	1	51.7	5.8	6.1	4.1	

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
21	SM40	1	58.2	7.0	5.8	3.9	
22	SM40	1	55.2	6.2	4.9	3.4	
23	SM40	1	55.1	6.0	5.5	2.9	
24	SM40	1	52.0	5.6	4.2	2.9	
25	SM40	1	51.5	5.0	5.2	3.5	
26	SM40	1	51.8	7.5	5.5	2.8	
27	SM40	1	54.6	5.1	5.2	2.3	
28	SM40	1	45.0	6.1	5.9	2.5	
29	SM40	1	46.0	6.0	5.8	2.0	
30	SM40	1	50.6	7.0	5.8	2.9	
31	SM40	1	(40.4)	6.6	5.2	3.2	
32	SM40	1	(49.1)	6.2	4.5	2.7	
33	SM40	1	(36.2)	7.2	7.0	2.6	
34	SM40	底面	49.5	6.1	6.2	3.7	
35	SM40	底面	54.9	7.0	8.1	3.7	
36	SM40	底面	58.0	6.8	5.2	3.6	
37	SM40	底面	53.3	6.1	5.1	2.7	
38	SM40	底面	58.8	6.2	6.9	3.9	
39	SM40	底面	53.0	6.8	4.7	2.8	
40	SM40	底面	(50.0)	7.6	7.2	3.3	

番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考
41	SM40	底面	(45.5)	5.8	9.0	4.4	
42	SM40	底面	(44.8)	5.2	7.8	2.9	
43	SM40	底面	54.0	5.9	4.8	2.8	
44	SM40	底面	54.2	5.8	6.0	3.2	
45	SM40	底面	45.9	7.3	6.2	2.6	
46	SM40	底面	(49.0)	7.8	6.0	3.5	
47	SM40	底面	46.0	7.0	5.2	2.3	
48	SM40	底面	52.0	6.5	5.4	2.7	
49	SM40	底面	47.0	8.8	6.5	3.4	
50	SM40	底面	(41.0)	7.2	5.2	2.4	
51	SM40	底面	31.8	6.5	4.3	1.5	
52	SM40	底面	(38.9)	7.2	5.9	1.7	
53	SM42	1	(41.8)	6.1	6.2	2.4	
54	SM42	1	(41.0)	5.8	4.9	2.1	
55	SM42	1	(42.5)	4.7	4.5	1.7	
56	SM42	1	(27.4)	6.3	5.2	1.3	
57	SM42	1	(30.5)	7.0	3.2	1.5	
58	SM42	1	(30.4)	6.2	5.2	1.4	
59	SM42	1	40.2	5.5	5.2	2.4	
60	SM42	1	(32.0)	7.0	5.0	1.3	

第86図　墓壙群出土遺物(8)



番号	遺構名	層　位	長さ	幅	厚さ	重量	備　　考	写真番号
1	SM27	1	(5.9)	1.3	0.75	(10.3)		
2	SM27	1	(2.5)	(1.2)	(1.2)	(1.9)		
3	SM27	1	(1.2)	(1.2)	(0.8)	(1.1)		
4	SM27	1	−	−	−	(4.3)		
5	SM27	1				(2.8)		

番号	遺構名	層　位	直径	厚さ	重量	備　　考	写真番号
6	SM37	底面	−	2.8	1.4	11.3	
7	SM40	1	(5.1)	0.58	0.55	(4.6)	
8	SM17	1	7.1	0.15	44.6		342-1
9	SM7	底面	12.0	0.9	483.0		342-2
10	SM24	底面	10.5	0.3	172.4		344-18

第87図　墓壙群出土遺物(9)

2　井戸（ＳＥ）

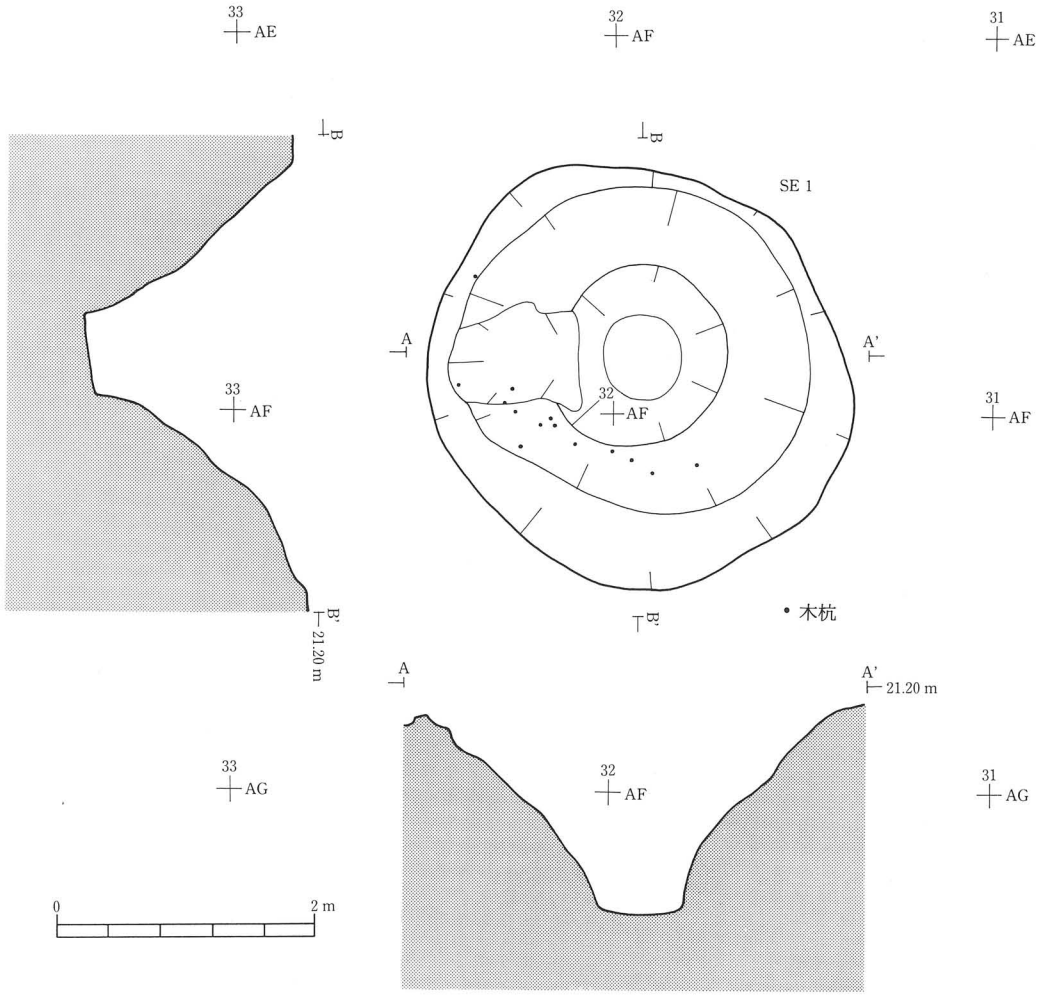
Ⅲ区 AF32 区で１基検出している。素掘井戸で平面形は略円形で、上端直径3.4m、底径0.7m、深さ1.6m の規模であり、断面形態は円錐形状を呈している。側壁に木杭14本検出しているが、用途等は不明である。出土遺物には、若干ではあるが、陶・磁器が出土しており、井戸（SE １）の年代は近世と考えられる。

3　掘立柱建物跡（ＳＢ）

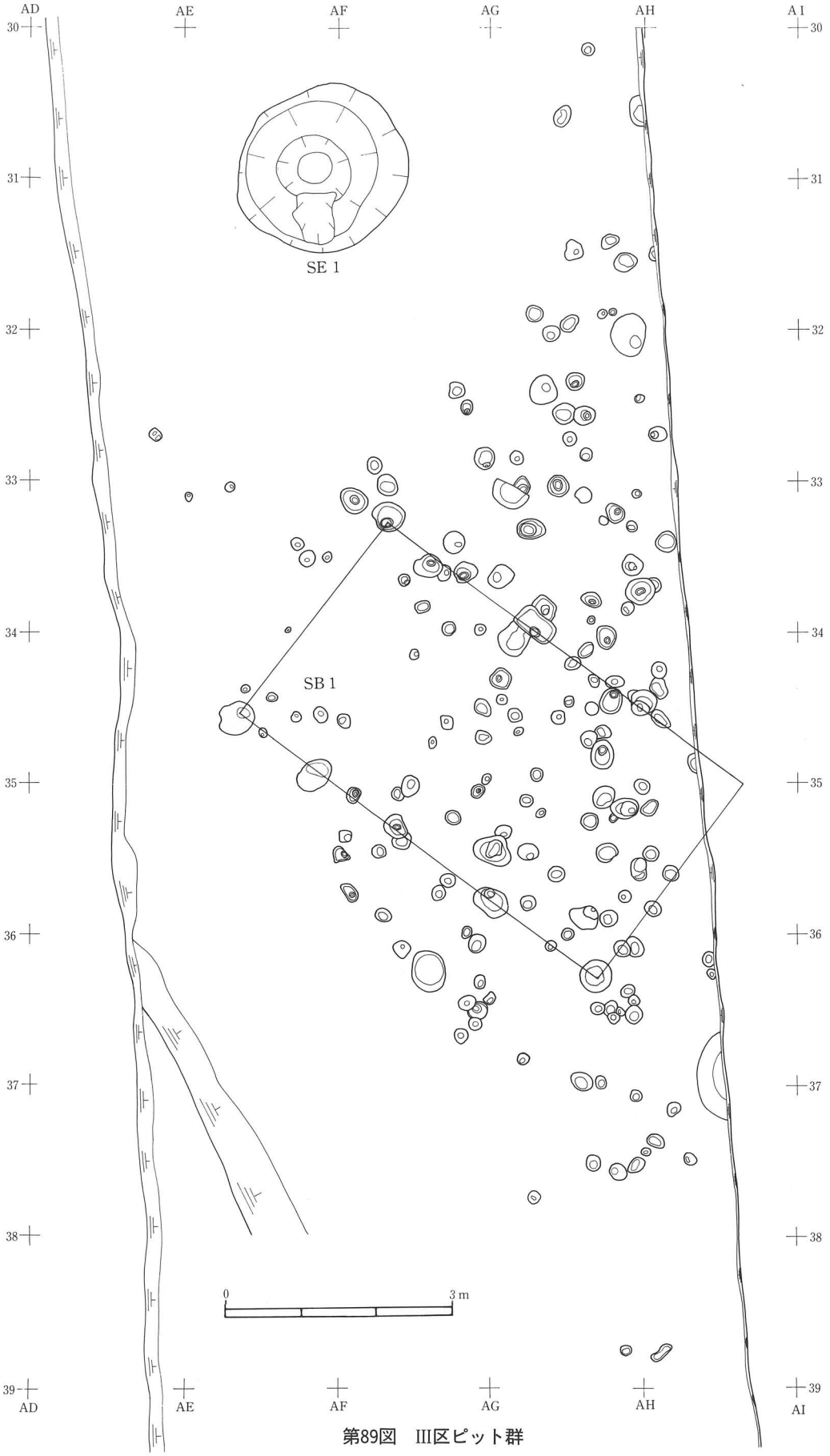
Ⅲ区の井戸（SE １）の南側に約170個程のピット群を検出した。これらのピット群のなかには柱痕跡を確認出来るものもあり、配置等を検討した結果、１棟確認することが出来た。この掘立柱建物跡（SB １）は、梁間１間（2.3 m）、桁間４間（4.4m）の建物である。出土遺物には、柱穴堀方から若干ではあるが、近世の陶･磁器が出土しており、掘立柱建物跡（SB １）の年代は近世と考えられる。

4　１・２層出土遺物

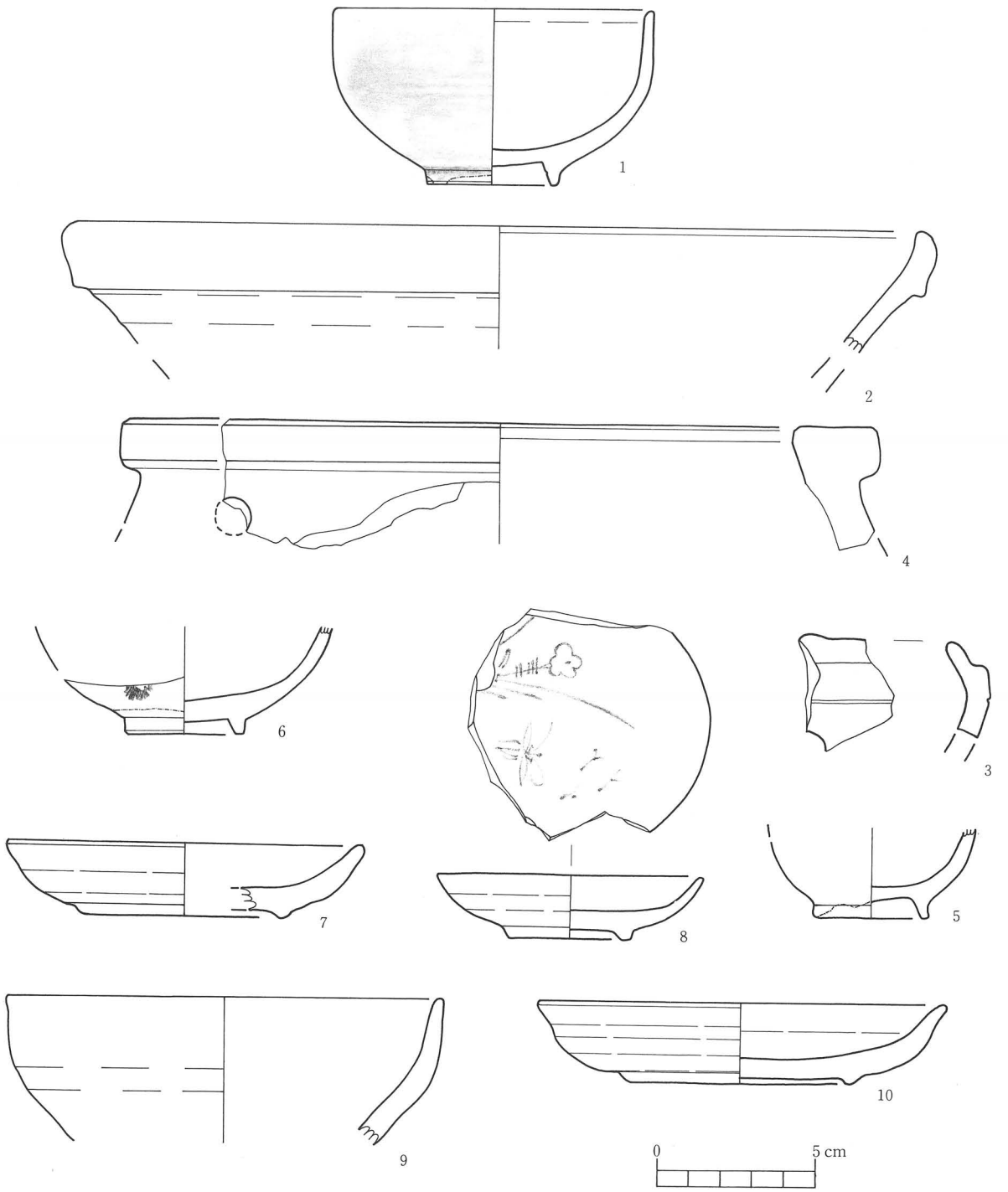
縄文土器以外の主な出土遺物である陶磁器について第90・91図に図示した。90図５は青磁の蓮弁文椀で中国龍泉窯系のもので、13世紀後半から14世紀前半のものである。図示していないが他に中世陶器の破片が数点出土している。調査区では中世の遺構を検出していないが周辺に中世に係わる遺構が存在する可能性がある。90図９は完形の尿瓶である。地元の堤焼で19世紀のものかと考えられる。これら近世の陶磁器は、本調査で検出した掘立柱建物・墓壙群・井戸に関わるものと考えられる。



第88図　井戸跡平・断面図



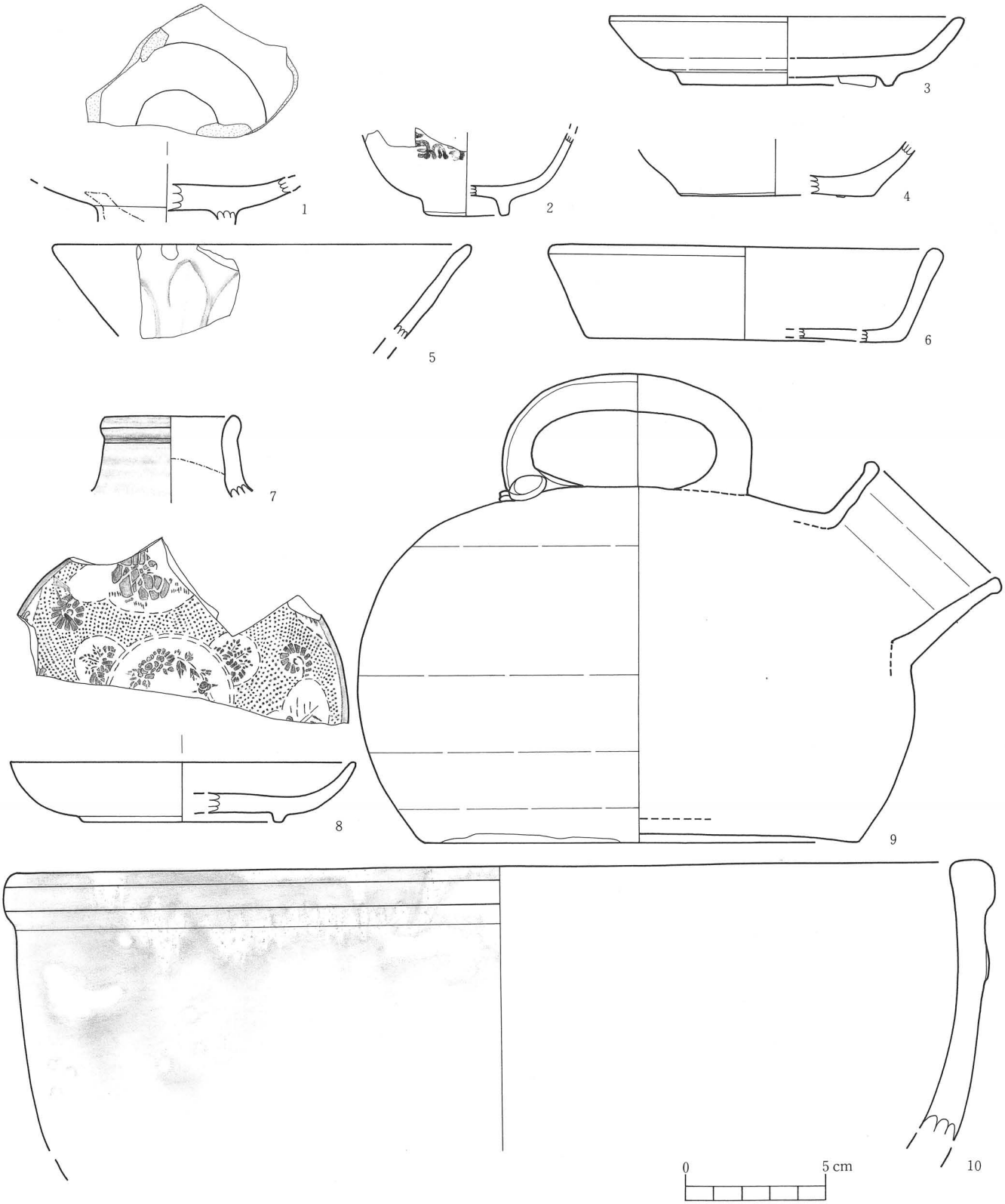
第89図　III区ピット群



番号	地区名	層位	器種	産地	製作年代	備考	写真番号
1	AD-28	1層	灰釉椀	大堀相馬	18世紀	貫入あり	344-2
2	AG-29	1層	鉄釉擂鉢	堤	18世紀	釉むらあり	
3	AF-30	1層	瓦質小型鍋（蓋付？）	在地か？	江戸～	口縁部に蓋受けの段あり	
4	AG-30	2層	甕か？	堤	19世紀？	有孔	
5	AG-30	1，2層	白濁釉椀	大堀相馬	18世紀～		

番号	地区名	層位	器種	産地	製作年代	備考	写真番号
6	AF-30 30ベルト		灰釉鉄釉流し椀	大堀相馬	18世紀～		
7	AG-35A SP-52		鼠志野丸皿	美濃	16世紀末～17世紀初	貫入あり	
8	AE-31	1，2層	呉須絵皿	瀬戸美濃	18世紀	草花文	
9	AE-37	1層	鉄釉天目茶碗	古瀬戸	16世紀か		
10	AE-37	1層	志野丸皿	美濃	16世紀末～17世紀初		

第90図　Ⅰ・2層　出土遺物(1)

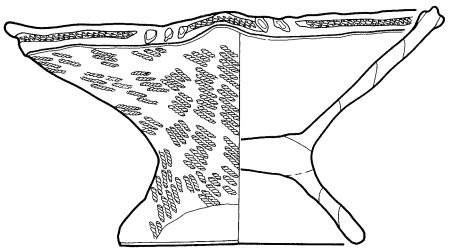


番号	地区名	層　位	器　種	産　地	製作年代	備　　考	写真番号
1	—	表土	染付皿	肥前	17世紀中葉	高台無釉・砂目積み・蛇の目痕有	
2	AG-7	2層	染付椀（源氏香文）	肥前かも	19世紀前半か		
3	AF-8	2層	志野丸皿	美濃	16世紀末～17世紀初	高台内に胎土目有・貫入有	
4	AE-22	2層	土節質土器	地元か	近世		
5	AG-27	1層	蓮弁文椀 青磁	中国龍泉窯系	13世紀後半～14世紀前半		

番号	地区名	層　位	器　種	産　地	製作年代	備　　考	写真番号
6	AF-26	1層		堤焼	19世紀か	鈍釉焙烙	
7	AG-22	1層	徳利（？）		18世紀～	飴釉	
8	AE-24	1層	染付皿		明治の前半		
9	AG-23A	2層	尿瓶	堤焼か	19世紀？	鉄釉・光沢あり	344-1
10	—	表採	鉢	堤焼	19世紀か	なまこ釉	

第91図　1・2層　出土遺物(2)

第Ⅵ章　考　　察



第VI章　考　察

第１節　第II群土器の編年的位置

1　県内出土土器群との比較

第Ｉ群土器についてはすでに編年的位置付けを第IV章で行った。ここでは遺物包含層から大量に出土した第II群土器の編年的位置付けについて検討してみたい。

県内で第II群土器と類似する土器群が出土しているのは、登米郡南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975）・同町長者原貝塚（南方町教委：1978）・同郡中田町浅部貝塚（東北大学文学部：1982）・遠田郡小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1977）・同郡涌谷町長根貝塚（宮城県教委：1969）・黒川郡大郷町大松沢貝塚（加藤孝：1956・東北大学文学部：1982・宮城県教委：1982）・同郡大和町勝負沢遺跡（宮城県教委：1982）・宮城郡七ヶ浜町大木囲貝塚（加藤孝：1956・宮城県教委：1982）・同郡松島町幡谷貝塚（東北大学文学部：1982）・塩釜市桂島貝塚（加藤・後藤：1966，宮城県教委：1982，丹羽：1989）・仙台市太白区山口遺跡（仙台市教委：1981）同市太白区上野遺跡（仙台市教委：1989）・柴田郡川崎町中ノ内Ｂ遺跡（宮城県教委：1987）・刈田郡七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教委：1987）等から出土している。これらのなかで比較的まとまって出土している遺跡のものを中心に検討してみたい。

［青島貝塚出土土器群］（加藤・後藤他：1975）

登米郡南方町の青島貝塚は、昭和44・45年に南方町史編纂事業の一環として調査がおこなわれ、中期中葉の土器群がまとまって出土した。中期中葉の第６類土器・第７類土器・第８類土器を中心に検討する。

第６類土器は、Ｅトレンチ３・４層、Ｆトレンチ Ｉ～III区４層、Ｖ～VII区５層から比較的まとまって出土している。深鉢形土器は、底部から口縁部にかけて直線状または、「く」の字状に外反するもの、胴部でわずかに膨らみ頚部でしまり口縁部が外反するもの、口縁部が原初的なキャリパー状のものがある。浅鉢形には、口縁部が直行するものと、外傾するものがあり、これら第６類は、大木8a 式としている。

第７類土器は、Ｆトレンチ Ｉ～III区から比較的特徴的に出土している。深鉢形土器のみであるが、胴部でわずかに膨らみ口縁部近くで直立もしくは外反する土器群である。第７類土器は、大木8a 式から大木8b 式の過渡的なものと位置付けている。

第８類土器の深鉢形土器は、ａキャリパーを呈する土器群と、ｂ胴部でおおきく膨らみ頚部でしまり口縁部が外反する土器群とがある。深鉢形土器は口縁部が内反している。これら第８類土器は、大木8b 式に位置付けられている。

青島貝塚第６類と高柳遺跡の深鉢形土器の器形・文様帯構成の分類と比較すると、口縁部が内彎し、キャリパー形（Ａ類）には、口縁部と胴部文様帯が単帯・頚部が地文帯（A3 類）のもの、口縁部文様帯が複帯・胴部が地文帯（A11 類）がある。口縁部が外傾するもの（Ｄ類）には、口縁部文様帯が単帯・頚部が地文帯・胴部が単帯（D3 類）のものと、口縁部文様帯が単帯・胴部地文帯（D5 類）のもの、口縁部文様帯が複帯・頚部無文帯・胴部文様帯が複帯（該当無し）のものとがある。

口縁部文様帯は、狭小な口縁部文様帯（Ａ群）で、押圧縄文系縦位押圧縄文（E）のものと、口縁部文様帯が複帯（Ｂ群）で、沈線系・押圧縄文系（Ｈ）のもの、口縁部文様帯が単帯（Ｄ群）で、隆線系直折隆線文（Ｎ）のものがある。

胴部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文（ａ）と横位区画内展開隆線文（ｄ）がある。浅鉢形土器は、口縁部がやや立ち上がる（B類）で、狭小な口縁部文様帯をもち、胴部が無文（B Ⅰ類）である。

第７類と比較すると、胴部から口縁部に大きく内彎する（G類）は、口縁部文様帯が単帯・胴部が複帯（該当無し）である。

口縁部文様帯は、狭小な口縁部文様帯（A群）で、胴部文様帯は縦・横位区画内展開隆線文（ｐ）である。

第８類と比較すると、口縁部が内彎し、キャリパー形（A類）には、口縁部文様帯が単帯・頸部が無文帯・胴部が単帯（A1類）と、口縁部文様帯・胴部文様帯とも単帯（A4類）のもの、口縁部文様帯が単帯・胴部地文帯のもの（A5類）がある。

口縁部文様帯は、隆線系単帯（D群）で波状連結横位渦巻隆線文（L）のものや、隆沈線系単帯（E群）で連結横位渦巻沈線（R）のもの、沈刻状隆沈線系単帯（F群）で横位沈刻状隆沈線文（V）のものがある。

胴部文様帯は、曲流横位渦巻沈線文（ａ）である。

鉢形土器は、口縁部が大きく内彎する（A類）で、口縁部文様帯を持ち胴部が無文（A Ⅰ類）である。

青島貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較の結果を下にまとめた。

青島貝塚	6類		7類	8類	
	深鉢	浅鉢	深鉢	深鉢	鉢
高柳遺跡分類	A群D 3類・A群D5類・B群－類 (Ea)　(E地)　(Hq) B群A11類・D群A3類 (H地)　(Nf)	B Ⅰ類	A群G－類 (Ap)	D群A5類・E群A4類 (L地)　(Ra) F群A1類・ (V－)	A Ⅰ類

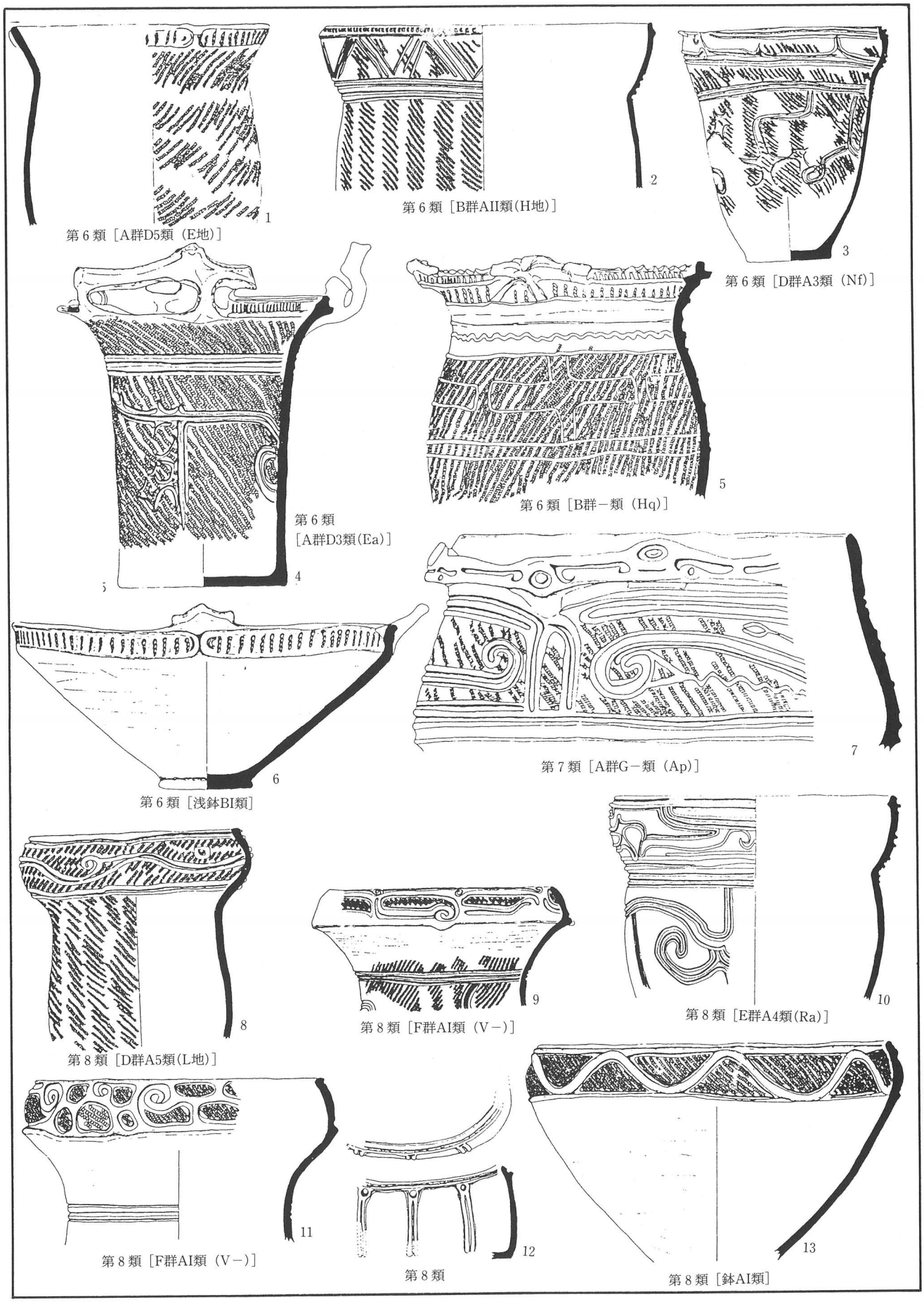
[長者原貝塚出土土器群]（南方町教委：1978）

登米郡南方町の長者原貝塚では第１号住居跡からまとまった資料が出土している。第１号住居跡の堆積土は第Ⅰ層と第Ⅱ層以下とに大別される。第Ⅱ層以下出土の土器群（第Ⅰ類）の深鉢形土器は、ａ.口唇部に文様帯を持つもの、ｂ.口縁部文様帯を持ち胴部が地文のみのもの、ｃ.口縁部と胴部に文様帯を持つもの、ｄ.地文だけのものとに細分され、浅鉢形土器はａ.口唇部に文様帯を持つもの、ｂ.口縁部に文様帯をもつもの、ｃ.口縁部と口縁部内面に文様帯を持つもの、ｄ.口縁部内面に文様帯を持つもの、ｅ.文様帯を持たない無文のものとに細分される。第Ⅰ層出土の土器は少量であるが、いずれも深鉢形土器で肥厚する口唇部に隆沈線によって横位渦巻文が施文されているもの（第Ⅱ類）とがある。第１号住居跡より古い第2a住居跡の床面からは口縁部文様帯を持ち胴部が地文のものと、口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ深鉢形土器と、文様帯を持たない無文の浅鉢形土器が出土している。第2a住居跡より古い、第2b住居跡の床面からは口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ土器が発見されている。

第１号住居跡の第Ⅰ類と第2a･b住居跡床面出土の第１群は、登米郡南方町青島貝塚第６類の土器群と類似しているので大木8a式としている。ただし青島貝塚第６類は口縁部に押圧縄文を多用し、胴部に隆線によって文様を施文するものが多いが、口縁部文様帯・胴部文様帯とも沈線による文様が多いことから、青島貝塚第６類より新しい要素をふくんでいるので、大木8a式の新しい段階のものとしている。

また第１号住居跡の第Ⅱ類と第４住居跡床面出土の第２群は、黒川郡大松沢貝塚出土土器群や青島貝塚第８類の土器群と類似しているので大木8b式としている。

資料としてのまとまりがある第１群（第１号住居跡第Ⅰ類のみ）と、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。深鉢形土器の器形・文様帯構成を比較すると、口縁部が内彎しキャリパー形（A類）には、口縁部文様帯と胴部文



第92図　青島貝塚出土土器群（加藤・後藤他：1975）

様帯とも単帯・頸部地文帯の（A3類）と、口縁部文様帯と胴部文様帯が単帯（A4類）のもの、単帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（A5類）のもの、口縁部～胴部が地文のみのもの（A18類）がある。口縁部が内彎し胴部の屈曲の緩やかな（B類）も、口縁部文様帯と胴部文様帯とも単帯・頸部地文帯の（B3類）と、単帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（B5類）と、口縁部文様帯と胴部文様帯がともに複帯（B10類）のもの、複帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（B11）がある。胴部から口縁部にかけて外傾するもの（E類）は、単帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（E5類）である。胴部から口縁部が大きく内彎する（G類）は、口縁部～胴部が地文のみのもの（A18類）である。

口縁部文様帯には、狭小な口縁部文様帯（A群）で、横位隆線文（D）・縦位押圧縄文（E）・刺突文（G）のものと、口縁部文様帯が複帯（B群）で、押圧縄文・刺突文系（H）のもの、口縁部文様帯が単帯（D群）で、直線状連結横位渦巻隆線文（K）・直折沈線文（N）・横位波状隆線文（O）のもの、口縁部文様帯が突起付無文のもの（I群）で、突起付無文帯（X）のもの、口縁部文様帯が地文（K群）のものがある。

胴部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文（a）・連結直折渦巻沈線文（d）・連結直折沈線文（f）・縦位区画内展開沈線文（h）・縦横位区画内展開沈線文（i）・横位区画沈線文のみ（k）のものがある。

浅鉢形土器には、口縁部が大きく内彎する（A類）で、幅の広い公園帯を持ち胴部地文のもの（A III類）と、口縁部がやや立ち上がる（B類）で、狭小な口縁部文様帯を持ち胴文が無文（B I類）と、狭小な口縁部文様帯を持ち胴部が地文（B II類）のもの、口縁部・胴部とも無文（B III類）のものがある。また、胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの（C類）は、狭小な口縁部文様帯を持ち胴部が無文（C I類）である。

これら長者原貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

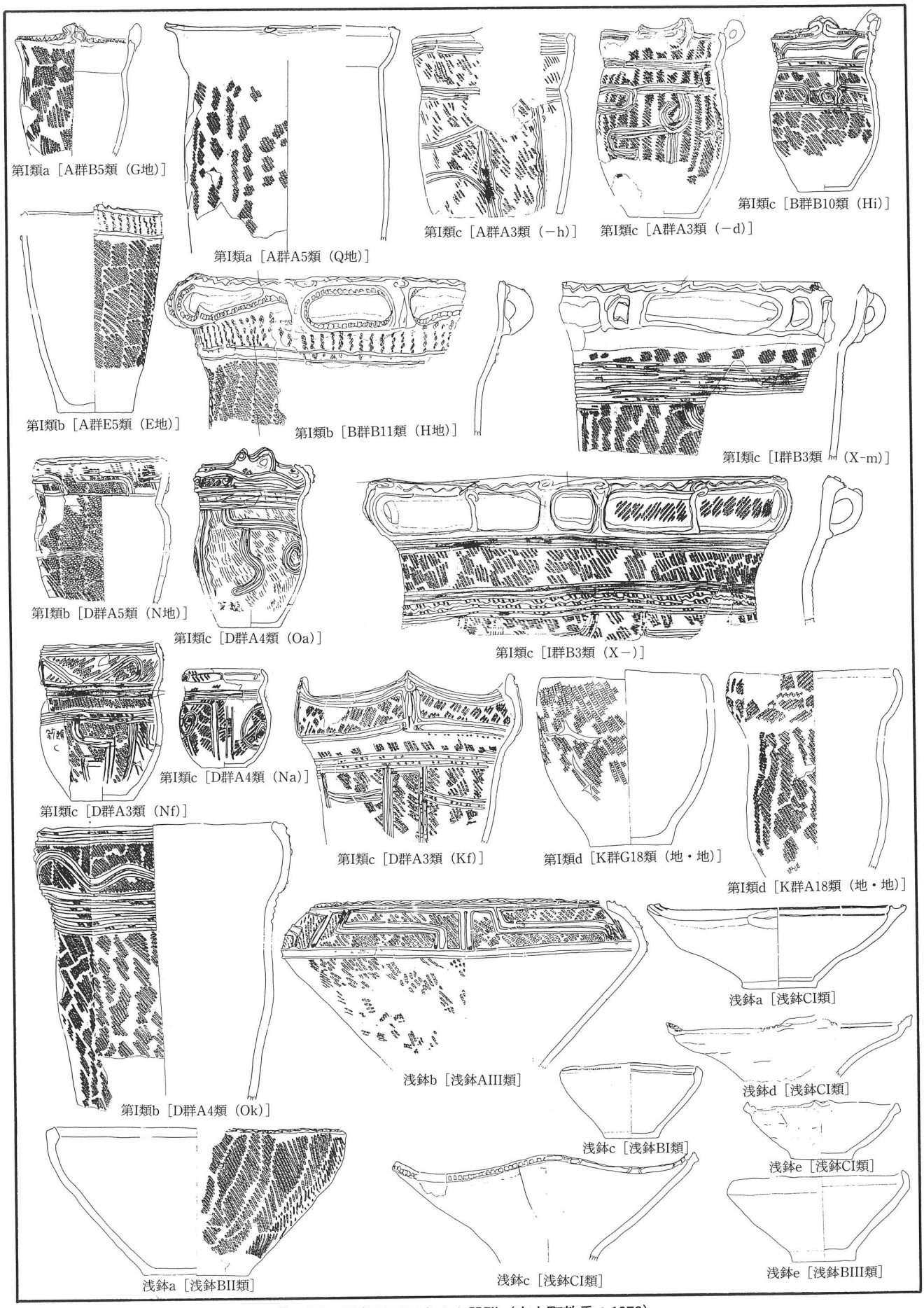
長者原貝塚	深鉢			
	第I a	第I b	第I類c	第I d
高柳遺跡分類	A群A5類 (D地) A群B5類 (G地)	A群E5類・D群A4類 (E地)　(Ok) B群B11群・D群A5類 (H地)　(N地)	A群A3類・D群A3類・D群A4類 (−h)　(Nf)　(Na) A群A3類・D群A3類・I群B3類 (−d)　(Kf)　(X−) B群B10類・D群A4類 (Hi)　(Oa)	K群A18類 (地地) K群G18類 (地地)

長者原貝塚	浅鉢				
	浅鉢a	浅鉢b	浅鉢c	浅鉢d	浅鉢e
高柳遺跡分類	B II類 C I類	A III類	B I類 C I類	C I類	C I類 B III類

［上野遺跡出土土器群］（仙台市教委：1989）

仙台市太白区の上野遺跡は、送電用鉄塔の改築工事のため、昭和62年調査が行われた。調査の結果、中期中葉の土壙23基と多数の遺物が発見された。各土壙の出土土器を、高柳遺跡の分類をあてはめてみることにする。

深鉢形土器の器形・文様帯構成では、口縁部が内彎しキャリパー形（A類）のものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胴部文様帯（A1類）のみである。口縁部が内彎するが、胴部の屈曲の緩やかなもの（B類）には、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胴部文様帯（B1類）と、単帯の口縁部文様帯・胴部無文帯（B6類）の



第93図　長者原貝塚出土土器群（南方町教委：1978）

もの、複帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胴部文様帯（B7類）のもの、複帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（B11類）のものがある。胴部が外傾し、口縁部がやや内彎（C類）のものには、単帯の口縁部文様帯・単帯の胴部文様帯（C4類）がある。口縁部が外傾（D類）するものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胴部文様帯（D1類）と、単帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（D5類）のものと、口縁部文様帯と胴部文様帯が接続する（D13類）ものがある。胴部から口縁部にかけて外傾（E類）するものには、口縁部文様帯と胴部文様帯が接続する（E13類）ものがある。口縁部が直立（F類）するものには、複帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（F11類）のものがある。胴部から口縁部が大きく内彎（G類）するものには、単帯の口縁部文様帯・胴部地文帯（G5類）のものと、地文のみ（G18類）がある。

口縁部文様帯には、狭小な口縁部文様帯（A群）で、横位沈刻状渦巻沈線文（A）・縦位短沈線文（B）のもの口縁部文様帯が複帯（B群）のもの、口縁部文様帯が単帯で沈刻状隆沈線系（F群）のもの、口縁部文様帯と胴部文様帯が連結（G群）するもの、横位連続楕円文（H群）のもの口縁部文様帯が地文・無文（K群）とがある。

胴部文様帯は、曲流横位渦巻沈線文（a）・曲流横位変形渦巻沈線文（b）・連結曲流渦巻隆沈線文（v）・口・胴部連結曲流渦巻沈線文（y）・口～胴部連結曲流横位渦巻隆沈線文（z）がある。

鉢形土器には、口縁部が大きく内彎する（A類）ものと、口縁部がやや立ち上がる（B類）ものとがあるが、A類は口縁部文様帯と胴部文様帯が接続して展開しており、B類も口縁部文様帯と胴部文様帯を持っておりいずれも高柳遺跡には類例が無い。

浅鉢形土器は、胴部から口縁部へとそのまま外傾する（C類）もので、狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文（C I類）である。

これら上野遺跡出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

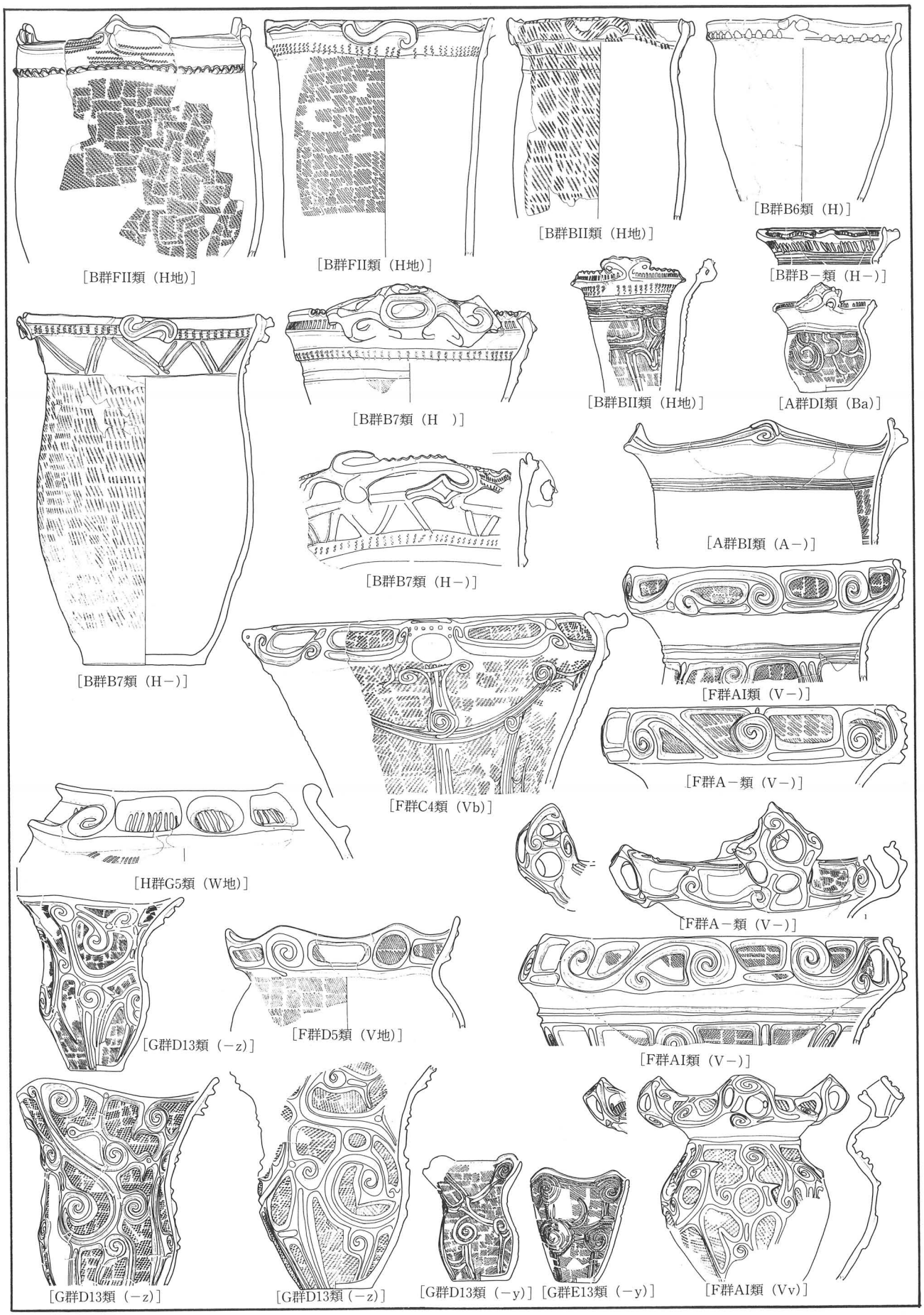
上野遺跡	深　鉢	鉢	浅鉢
高柳遺跡分類	A群B1類・B群B7類・F群A1類・F群C4類・G群D13類・K群G18類 （A－）　（H－）　（Vv）　（Vb）　（－y）　（地地） A群D1類・B群B11類・F群A1類・F群D5類・G群E13類・ （Ba）　（H地）　（V－）　（V地）　（－y） B群B6類・B群F11類・F群A－類・G群D13類・H群G5類・ （H無）　（H地）　（V－）　（－z）　（W地）	A－類 B－類	C I類

［大木囲貝塚出土土器群］（加藤孝：1956・宮城県教委：1982）

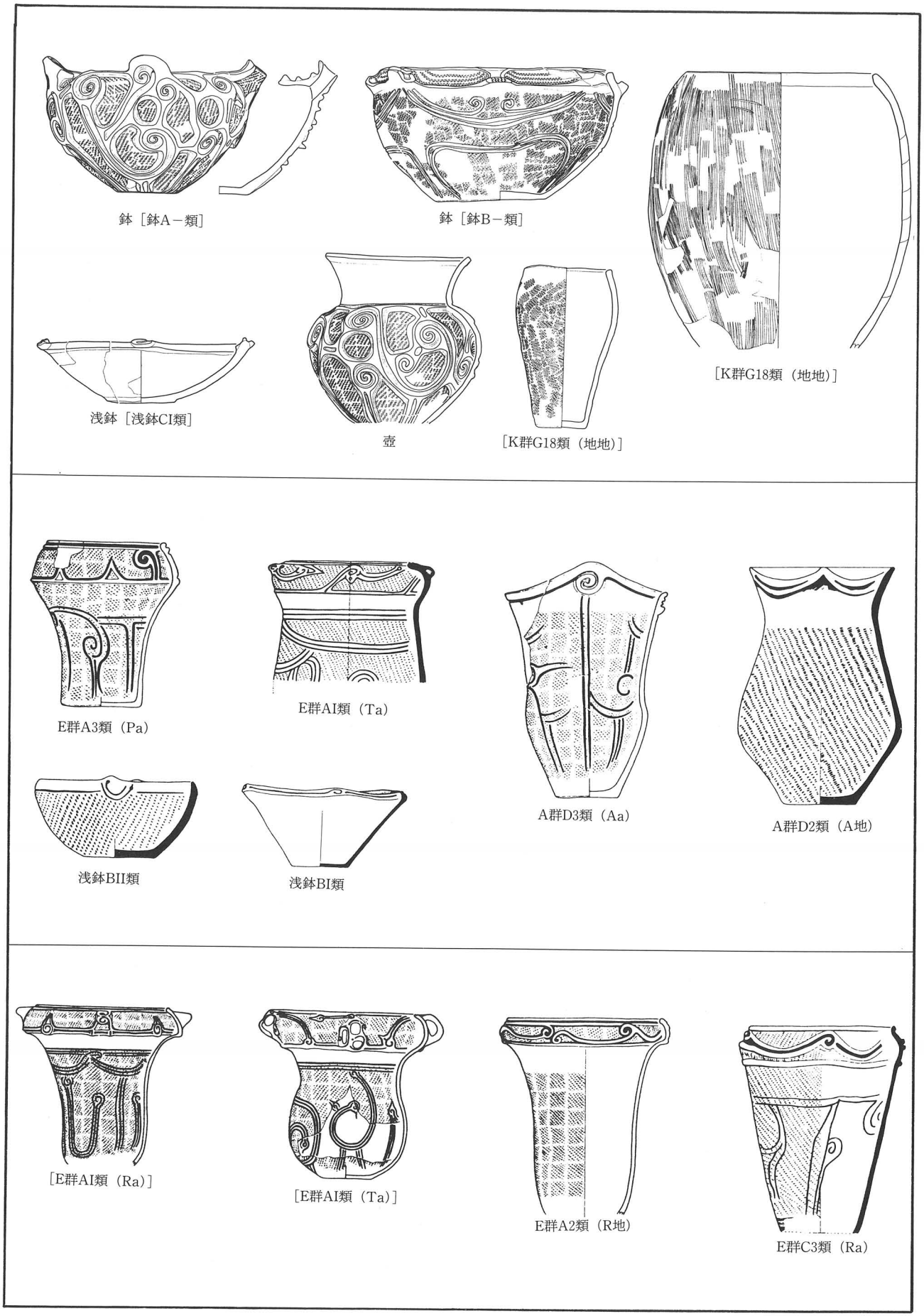
加藤孝氏の報告（加藤：1956）に基づき観察と検討を行った資料（宮教委：1982）を、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。

深鉢形土器の器形・文様帯構成では、口縁部が内彎しキャリパー形（A類）のものには、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・単帯の胴部文様帯（A1類）と、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胴部文様帯（A3類）とがある。口縁部が外傾する（D類）には、単帯の口縁部文様帯・頸部無文帯・胴部地文帯（D2類）のものと、単帯の口縁部文様帯・頸部地文帯・単帯の胴部文様帯（D3類）のものがある。口縁部文様帯は、狭小な口縁部文様帯（A群）で、横位沈刻状渦巻沈線文（A）のものと、口縁部文様帯が隆沈線系単帯（E群）で、独立横位渦巻隆沈線文（P）と、小単位連結横位渦巻隆沈線文（T）がある。胴部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文（a）がある。

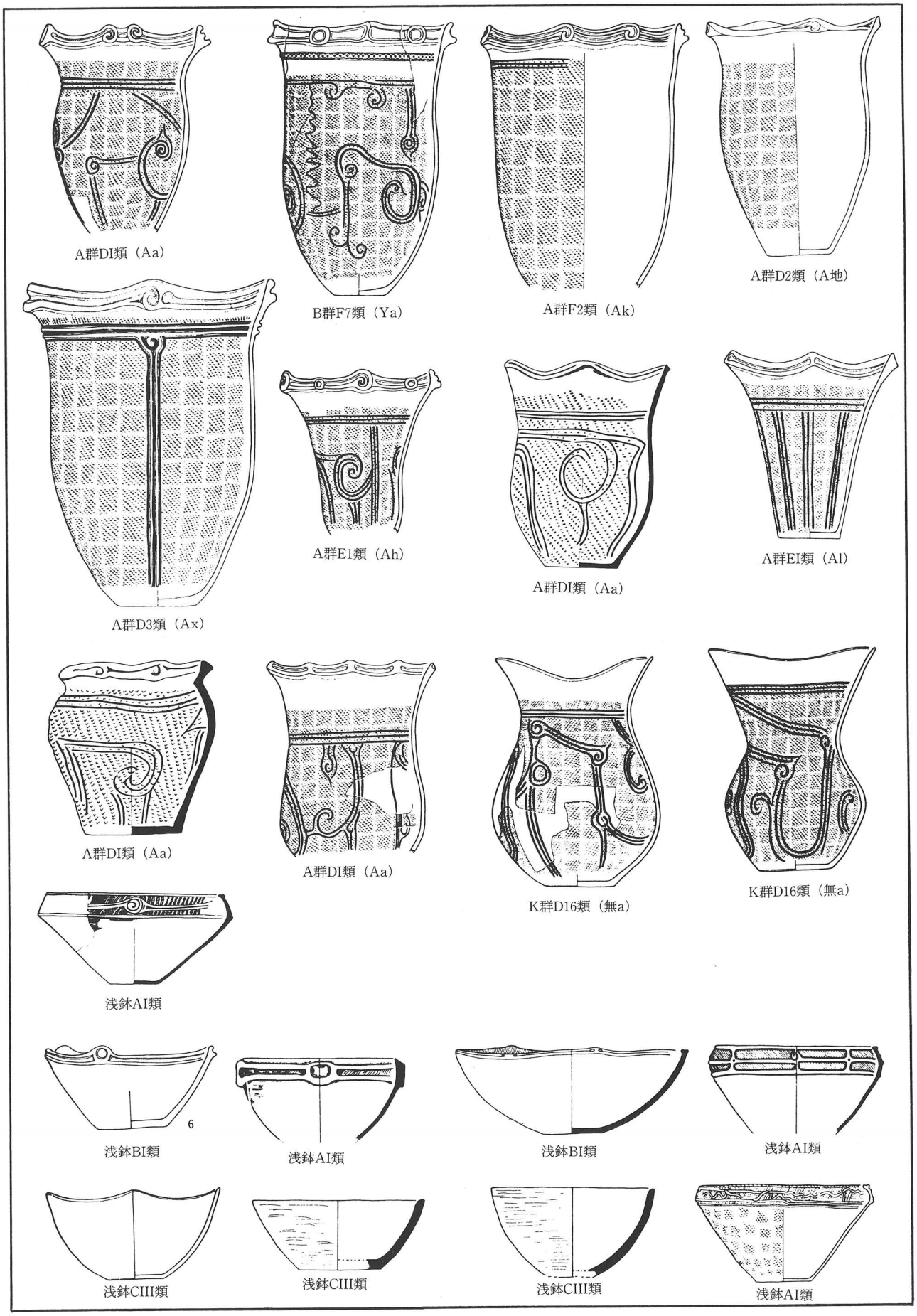
浅鉢形土器は、口縁部がやや立ち上がる（B類）で、狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文（B I類）と、狭小な口縁部文様帯をもち胴部が地文（B II類）がある。これらを下にまとめた。



第94図　上野遺跡出土土器群(1)（仙台市教委：1989）



第95図　上野遺跡出土土器群(2)・大木囲貝塚出土土器群・大松沢貝塚出土土器群(1)（宮城県教委：1982）



第96図　大松沢貝塚出土土器群(2)（宮城県教委：1982）

大木囲貝塚	深鉢	浅鉢
高柳遺跡 分類	A群D2類・A群D3類・E群A1類・E群A3類 (A地)　(Aa)　(Ta)　(Pa)	B I類・B II類

[大松沢貝塚出土土器群]（加藤孝：1956・東北大学文学部：1982・宮城県教委：1982）

加藤孝氏の報告（加藤：1956）に基づき観察と検討を行った資料（宮教委：1982）を、高柳遺跡出土土器群と比較検討してみる。

深鉢形土器の器形・文様帯構成では、口縁部が内彎しキャリパー形（A類）のものには、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・単帯の胴部文様帯（A1類）と、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・胴部地文帯（A2類）とがある。胴部が外傾し口縁部がやや内彎（C類）するものには、単帯の口縁部文様帯・頚部地文帯・単帯の胴部文様帯（C3類）のものがある。口縁部が外傾（D類）するものには、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・単帯の胴部文様帯（D1類）と、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・胴部地文帯（D2類）と、単帯の口縁部文様帯・頚部地文帯・単帯の胴部文様帯（D3類）のもの、口縁部無文帯・単帯の胴部文様帯（D16類）とがある。また、胴部から口縁部にかけて外傾（E類）するものには、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・単帯の胴部文様帯（E1類）がある。口縁部が直立（F類）するものには、単帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・胴部地文帯（F2類）と、複帯の口縁部文様帯・頚部無文帯・単帯の胴部文様帯（F7類）がある。

口縁部文様帯には、狭小な口縁部文様帯（A類）で、横位沈刻状渦巻沈線文（A）のものや、複帯の口縁部文様帯（B群）や、口縁部文様帯が単帯の隆沈線系（E群）で、連結横位渦巻隆沈線文（R）や小単位連結横位渦巻隆沈線文（T）のものがある。口縁部文様帯が無文（K群）のものもある。

胴部文様帯には、曲流横位渦巻沈線文（a）、縦位区画内展開沈線文（h）、横位区画沈線文のみのもの（k）、縦横位区画沈線文のみのもの（l）、縦横位区画隆沈線文のみのもの（x）がある。

浅鉢形土器は、口縁部が大きく内彎する（A類）もので、幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの（A I類）、幅の広い口縁部文様帯をもち胴部が地文のもの（A III類）と、口縁部がやや立ち上がる（B類）もので、狭小な口縁部文様帯をもち胴部が無文のもの（B I類）と、胴部から口縁部へとそのまま外傾するもの（C類）もので、口縁部と胴部が無文のもの（C III類）がある。

これら、大松沢貝塚出土土器群と高柳遺跡出土土器群との比較を下にまとめた。

大松沢 貝　塚	深鉢	浅鉢
高柳遺跡 分類	A群D1類・A群D3類・A群E1類・B群F7類・E群A1類・E群C3群 (Aa)　(Ax)　(Ah)　(Ya)　(Ta)　(Ra) A群D2類・A群E1類・A群F2類・E群A1類・E群A2類・K群D16類 (A地)　(Al)　(Ak)　(Ra)　(R地)　(無a)	A I類・B I類 A III類・C III類

[勝負沢遺跡出土土器群]（宮城県教委：1982）

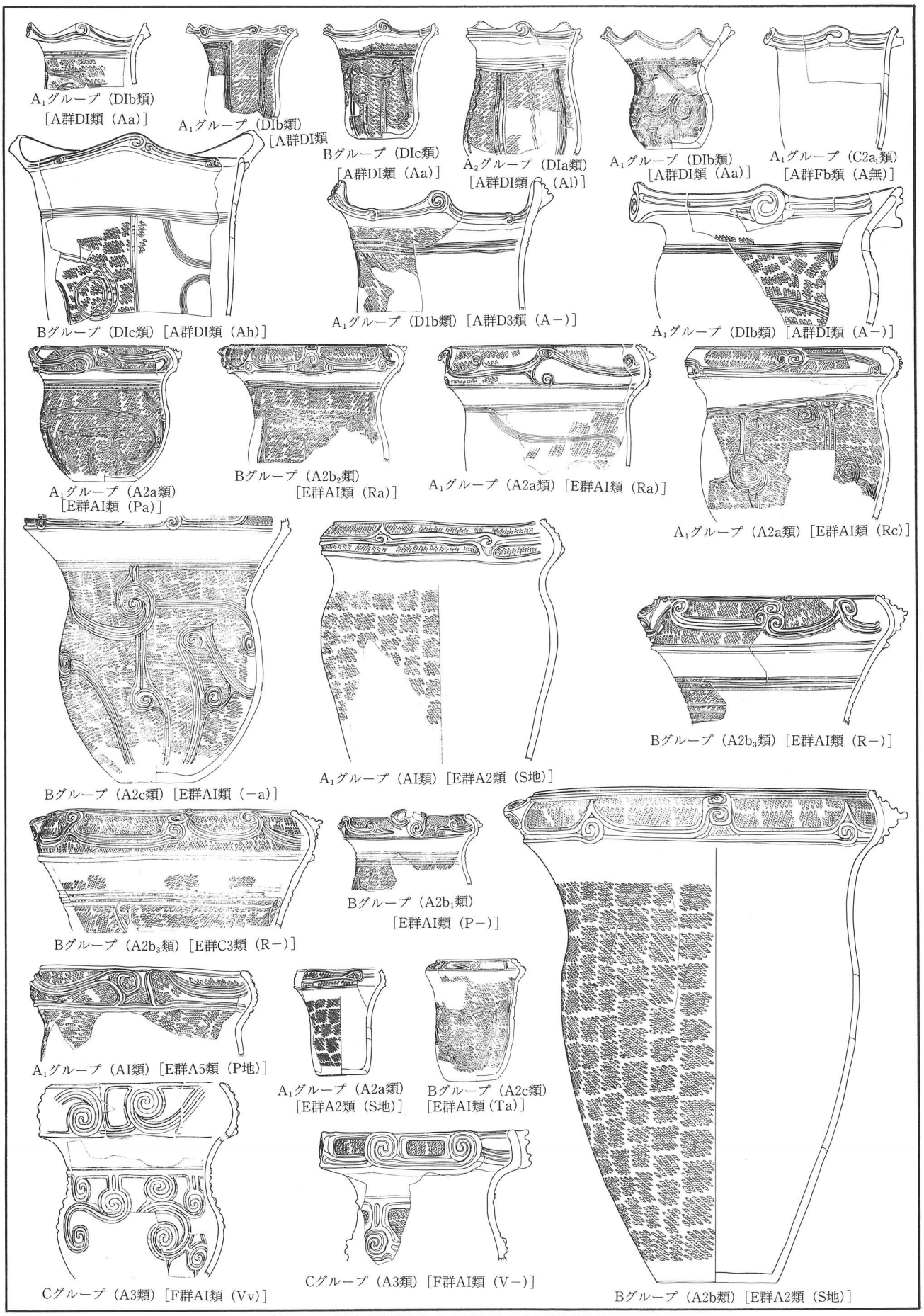
黒川郡大和町の勝負沢遺跡は、東北縦貫自動車道の建設に伴い昭和47年に宮城県教育委員会が調査をおこなった。調査の結果、縄文時代中期の大木8a式期の竪穴住居跡2軒と、遺物包含層、埋設土器遺構2基が発見されている。出土した遺物は少量の第I群土器と、遺物包含層から主体的な出土した第II群土器がある。第I群土器は大木8b式

に、第II群土器は大木8b式に位置付けられている。ここでは第II群土器を中心に比較検討してみることにする。第II群土器は、器形と文様帯の配置・文様の種類から以下のように分類されている。

［深鉢形土器］
深鉢Ａ：口縁部が内彎し、キャリパー形のもの
　第１類：口縁部の口唇部分が肥厚するもの
　第２類：口縁部が内傾するもの
　　ａ類：非連結・大単位連結文様
　　ｂ類：小単位一部連結文様
　　ｃ類：小単位各部分連結文様
　第３類：口縁部が直立気味のもの
深鉢Ｂ：口縁部が内彎し、胴部の屈曲が緩やかなもの
　第１類：口縁部から胴部へ連続する文様をもつもの
　　ａ類：下垂渦巻文様
　　ｂ類：各部分連結曲流渦巻文様
　第２類：口縁部地文帯と胴部文様帯をもつもの
深鉢Ｃ：口縁部が直立ないしは外傾するもの
　第１類：橋状把手を連結させているもの
　第２類：口縁部文様帯と胴部文様（地文・無文）帯からなるもの
　　ａ類：横位渦巻文様
　　ｂ類：変形横位渦巻文様
　第３類：口縁部地文帯と胴部文様帯からなるもの
　第４類：口縁部無文帯と胴部文様帯からなるもの
　　ａ類：縦位沈線文様
　　ｂ類：連結曲流渦巻文様
　第５類：口縁部から胴部に連続する文様帯をもつもの
　　ａ類：非連結・一部連結曲流渦巻文様
　　ｂ類：各部分連結曲流渦巻文様
深鉢Ｄ：口縁部が外反もの
　第１類：口縁部の口唇部分が強く肥厚するもの
　　ａ類：縦位沈線文様
　　ｂ類：非連結・大単位連結曲流渦巻文
　　ｃ類：小単位一部連結曲流渦巻文様
　第２類：口縁部が強く外反し、胴部が球形のもの
　第３類：口縁部が外反し、胴部が僅かに膨らむもの
深鉢Ｅ：地文のみのもの
　第１類：口縁部が直立ないしは外傾するもの
　　ａ類：口縁部が２段肥厚のもの
　　ｂ類：口縁部が１段肥厚のもの
　　ｃ類：口縁部が単純口縁のもの
　第２類：口縁部が外反するもの
　　ａ類：口縁部が単純外反のもの
　　ｂ類：口縁部が「く」の字状に外反するもの

［浅鉢形土器］
浅鉢Ａ：口縁部が内彎するもの
　第１類：口縁部が明確に内彎するもの
　　ａ類：非連結・大単位連結渦巻文様
　　ｂ類：各部分連結横位渦巻文様
　第２類：口縁部が外傾気味に内彎するもの
浅鉢Ｂ：口縁部が外傾するもの
　第１類：口縁部の口唇部が肥大しているもの
　第２類：口縁部の口唇部分が肥厚しているもの
　第３類：単純口縁のもの

これら各類型を、大木囲貝塚・大松沢貝塚と比較した結果、４つのグループからなることを明らかにした。
［A_1グループ］（大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するもの）
深鉢Ａ第１類・第2a類、深鉢Ｃ第2a類・第$2b_1$類、深鉢Ｄ第1b類・浅鉢Ａ第1a類
［A_2グループ］（大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するが文様表現技法が相違するもの）
深鉢Ｂ第２類、深鉢Ｃ第３類・第4a類・第5a類・深鉢Ｄ第1a類・第２類、深鉢Ｅ第１類・２類、浅鉢Ｂ第２類・第３類・樽・小把手付・脚台
［Ｂグループ］（大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様配置の点で共通するが、文様細部・文様表現技法等において相違するもの）



第97図　勝負沢遺跡出土土器群(1)（宮城県教委：1982）